絵本と創作

アルマジロ

クリエイターの宝島　遊び心のきっぷ売場

人物特集
谷川俊太郎

描きおろし創作絵本
スズキコージ

評論
A・リンドグレーン

私のヒーロー再発見
小林聡美

おおやちきの
あるまじろじろ見てある記

斎藤英治の映画今昔
「眠れない夜のために」



中国の民話
新人登場　津吉ゆうこ
読者投稿　創作おはなし
注目の翻訳家　金原瑞人
Comic Land ホラフキー男爵の花々しき御帰還

1月冬
2号

A R M A D I L L O

アルマジロ
特集 谷川俊太郎
創作描きおろし絵本 スズキコージ
1月冬
2
発行 ナート
発売 丸善

ヤマハ・ビデオ・ライブラリー

世界絵本箱

名作絵本がビデオになった！

『世界絵本箱』は、レオ・レオニ、トミー・アンゲラー、トミー・デ・パオラ、モーリス・センダックらの名作絵本をはじめとして、より選った名作のみを原作者の監修のもとに、原画・物語性に忠実にビデオ作品に再現。





スペシャル

モーリス・センダックのリアリー・ロージー

◉日本語は字幕スーパー／モノラルHi-Fi

『かいじゅうたちのいるところ』や『まよなかのだいどころ』などの作品でおなじみの、モーリス・センダックの代表作『ちいさなちいさなえほんばこ』から「アメリカワニです、こんにちは」や「チキンスープライス入り」などのかぞえ歌を、グラミー賞受賞歌手キャロル・キングの楽しい歌とともに展開するミュージカルビデオです。

★ストーリー
ブルックリンの街角を舞台に、魅力的で明るくチャーミングな少女・ロージーと、個性あふれるお友だち“ナットシェル・キッズ”たちとが、映画をつくるために大活躍するお話です。キャロル・キングの歌と子どもたちのネイティブな英会話も楽しんでいただくために、日本語は字幕スーパーとなっています。

こんなに素敵なお話がそろっています！



①レオ・レオニ 5つのお話

レオ・レオニの代表作『スイミー』を初め、『フレデリック』『コーネリアス』『ぼくのだ！わたしのよ！』『さかなはさかな』を収録。作／レオ・レオニ
◉日本語ナレーション／高木均・宮崎美子



④トミー・アンゲラーのミステリアス・ストーリー

代表作『すてきな三にんぐみ』を初め、『月おとこ』『ラシーヌおじさんとふしぎな動物』を収録。作／トミー・アンゲラー
◉日本語ナレーション／藤村俊二・穂積隆信・三谷昇



⑦ちいさなぼうけん

それぞれのちいさなぼうけんのお話3つ。音楽と映像のみで描くパット・ハッチンスの『チェンジズ・チェンジズ』と、ジャック・ケントの『ジョーイの家出』とヤーノシュの名作『パナマってすてきだな』を収録。
◉日本語ナレーション／工藤夕貴・水島裕・木内みどりほか



②くまのおはなし

くまが主人公の楽しいお話2つ。『くまのコールテンくん』『ハッピー・バースディ、ムーン』を収録。作／ドン・フリーマン／フランク・アッシュ
◉日本語ナレーション／宮崎美子・渕崎ゆり子ほか



⑤ふしぎワールド

ウィリアム・スタイグの『ものいうほね』、クロケット・ジョンソンの『ハロルドまほうのくにへ』、トミー・アンゲラーの『ぼうし』のふしぎなお話3つ。
◉日本語ナレーション／下條アトム・高木均・野沢那智



⑧ふゆものがたり

雪なんかに負けられない！ウィリアム・スタイグの『ゆうかんなアイリーン』と、ドン・フリーマンの描く素敵な『ドアマンのノーマン』のふゆのお話2つ。
◉日本語ナレーション／江守徹・宮崎美子



③とりのおはなし

とりにまつわるお話3つ。『ロージーのおさんぽ』『おばかさんのペチューニア』『世界でいちばんすてきなたまご』を収録。作／パット・ハッチンス／ロジャー・デュボアザン／ヘルメ・ハイネ
◉日本語ナレーション／高木均・野沢那智・石川寛美



⑥トミー・デ・パオラのせかい

トミー・デ・パオラのお話3つ。『まほうつかいのノナばあさん』『チャーリーの赤いマント』『神の道化師』を収録。
◉日本語ナレーション／江守徹・山本圭・高木均



⑨ホーリー・クリスマス

クリスマスや雪のお話5つ。『モリスのまほうのふくろ』『クリスマスの12にち＊』『ゆきのひ』『マックスのクリスマス』『リトル・ドラマー・ボーイ＊』を収録。作／ローズ・マリー・ウェルズ／ロバート・ブルームフィールド／エズラ・ジャック・キーツ
◉日本語ナレーション／岸田今日子・下條アトム・木内みどり・他
＊字幕／うた モノラルHi-Fi

＊『世界絵本箱・オリジナル・カラー小冊子』ができました。ハガキか☎でご請求下さい。

◉各巻¥3,980（税込み価格）
¥3,864（税抜き価格）

特製小冊子「キーブック」付き
各巻付属の「キーブック」には、原作者や作品紹介のほか、谷川俊太郎、五味太郎さんなどをゲストに楽しいおしゃべりや、英語と日本語のナレーション台本も見開き対訳で収録。

VHS
2ヵ国語Hi-Fi
カラー約30分（全巻）

▶お求めは、お近くの書店、又はヤマハ楽器特約店にてどうぞ。もし商品がない場合は、その書店・ヤマハ楽器特約店にご注文下さい。お取寄せいたします。
▶書店、ヤマハ楽器特約店でのお求めが困難な場合は、直接小社からもお求めいただけます。又、VISA・UCカードでもお求めいただけます。詳細は下記へ。

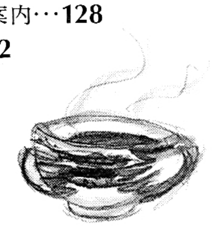
Yamaha Video Library
ヤマハ・ビデオ・ライブラリー
〒153 東京都目黒区下目黒3-24-22 ☎03(3719)3117 FAX03(3716)2120
0120(311)719 ＊全国どこからでも通話料は無料です。

CONTENTS











カバーイラストレーション 河井ノア

目次カット 川瀬裕子

人物特集

谷川俊太郎

ロング・インタビュー

レオ・レオニの絵本、スヌーピーのマンガ、劇、歌…
いろいろな場所でこの詩人の名前が見られます。
様ざまな形で発信してくる彼、どんな方なのでしょうか。



表現の出口の種類
表現の出口の範囲

天井の高い木の部屋で
詩人は優しく語ってくれました。

――谷川さんは、詩、散文、絵本やビデオ、写真など、いろいろな形でものを作っていますよね。作るとき、どんな風に形を選んできたのですか？

それはほとんどの場合、注文に応じて書いてきたんです。

ただ、ビデオの作品はだれから注文されたわけでもないんです。僕は昔から機械好きな少年でね、ビデオカメラを買っていじってみたかったのね。いじってるうちに作品が作ってみたくなって作ったんです。

それ以外は、ほとんど注文されたから作ったんです。僕はすごく若いころからものを書きだして、原稿料をもらうようになったんですね。他に手段を持ってなかったから、ものを書いて経済的に自立しなきゃならなかったわけ。だから、注文があって自分にできることなら雑文でもなんでもやってきた。今だって詩だけで生活していくのはとても無理でしょう。お金が必要だったことが、活動の媒体の範囲を広げたと言えるでしょうね。与えられた枠の中で、やれそうなことをやってきただけなんです。

――積極的にいろいろ広げていったわ



ヤンキー・ドゥードル　やってきた
こうまにのって　まちへきた
ぼうしに一ぽん　はねさして
イタリーじこみの　だておとこ

みどりずくめの　ヘクター・プロテクター
おきさきさまに　めされたけれど
おきさきさまに　きらわれて
おうさまにさえ　きらわれて
ヘクター・プロテクター　くびになった



おれさまはキュウのごてんの
やんごとないおかたのいぬだ
ところでおまえさんはだれのいぬだい？



「マザー・グースのうた第５集」訳／谷川俊太郎
イラストレイション／堀内誠一　草思社

けではないのですか？

うーん、僕が書きはじめたのは１９５０年代の半ばなんだけど、その頃、詩の世界がとても狭くるしく思えたんですね。詩人は同人雑誌の中に閉じこもっていて、新聞や雑誌など、マスコミなんかには書くべきではないという考え方が多かったの。

――詩人の方から範囲を制限していたんですか？

そう。詩というものは反体制であるべきであって、マスコミなど堕落したメディアに書いてはいけないってね。でも僕は詩人のそんな孤立した状況に不満があったんです。詩はもっとふつうの人がどんどん読めるようなものでなければいけないって思って。

それから、行わけの形のものだけが詩なのではなくて、テレビドラマやラジオドラマ、フォトストーリーにも、詩的なものをそこにこううまく出せるはずだって思ったの。詩というものをいろんなところに広げていきたいっていう風に思っていたんです。

だから僕は注文があればマスコミにも書いたし、詩以外のいろんな分野でも詩とあまり区別せずに仕事してきたんです。

――その、詩の広がったひとつが絵本や子どもの本の分野なのですね。アルマジロの姿勢も、児童文学はもっと普通の人が読んでもおもしろいものであるはずだ、児童文学の世界を広げたいというのが強いんです。

そうね。日本ではすぐ垣根を作ってお互い集団になる傾向があるけれど、ほんとはものを作る仕事に垣根はないはずなんですよね。

――ほんとにそうですね。

特に僕が若い頃って、日本の経済成長の前ね、ものを作る世界にもすごく活気があったんです。

いろんな世界、たとえば音楽や絵画、詩なんかの世界がごちゃごちゃ一緒になってたってとこがあるんですね。そういうごちゃごちゃしたグループがいっぱいあったし。作曲家や絵かきなんかのいろんな友だちと、しょっちゅう会っては議論したり、共同制作したり、そんな雰囲気があったんですね。

今は、若い頃の友人たちはえらくなりすぎちゃって、自分の仕事が忙しくなっちゃっているし、ものを作る活気自体も少なくなった気がしますね。

――そのごちゃごちゃの中で谷川さんは、主に言葉を使って作品を作ってきたのですね。

詩を作るインスピレーション

詩のかたち

そうです。完全に言葉が中心ですね。でもね、ものを書くときになにか言いたいことがあって、その伝達の手段として言葉を使うのかって言われると、詩の場合にはそうとは言いきれない。自分の中になにもなくても、からっぽでも、言葉の方が襲ってくることがあるわけですよ。

散文の場合には、言いたいことがあって、それをできるだけ正確に簡潔に伝えようと思って書くけれども、でも詩の場合は違うのね。なにも書きたくなくて、どんなテーマも考えていないときに、ふっと一行の言葉が心の中に浮かんでくることがある。

ほら、これは創刊号で東さんも言ってたインスピレーションっていう昔ながらの言葉が一番いいかな。詩というのは基本的にそういう風にして成立するものじゃないかな。

——インスピレーションを呼ぶ努力はするんですか。

全然しませんね。努力をして、くるようなものじゃないんだよね。トイレに座っていたり、ラッシュアワーの電車に乗ってたりしていてくることもあるしね。

ただ、たとえば五月の詩を30字25行で書いてくださいなんて注文を受けるでしょ。そうしたらその枠を頭にいれて、ある程度意識的に言葉を自分の頭の中で探すわけです。自分の思い出を思いうかべたり、与えられた写真があればそれを見たりする。あるいは俳句の季語みたいのを探したりね。そうやって人工的なことをして、書いていくこともあるんです。

でも、そんなときでも、詩は散文とはちがって、理詰めに書いていくことはできないんですね。どこかで、非常に希薄ではあってもインスピレーションに近いものが必要なんですね。最初の言葉がふわっとでてきたら、そこからつなげていくことはできるんだけど。最初の言葉は理詰めにはでてこないんです。

そうすると、できあがった詩はなにを伝えたいのかわからないものになる。人によっては五月の空気を伝えようとしたのかな、五月の花の美しさを伝えようとしたのかなって思うかもしれない。それはそれで正しいのね。でも、実際にはそれを伝えようとして作ったものではないんです。

——ちがった読み方ができちゃうんですね。

そう。つまり詩というのはただひとつの解釈はできない。ひとつの詩にいろんなものがこめられているのね。言葉の質感みたいなものや、リズムだとかもね。散文とちがうのは、意味で割り切ることはできないということですね。

——詩としてよまれたものではなくて、会話や、子どもがふと発した言葉などで、詩のように聞こえることがありますね。

ええ。それを詩の枠にいれてもちっともかまわない。でもそれだけが詩であるわけではないですね。詩の、すごく深く、豊かなかたまりの、ほんの片隅にあるものだと思います。

一篇の詩をとってみても、そのいい悪いってあるわけでしょ。いい詩というのは、ほんとに短い言葉の中に全宇宙があるような感じがすることがありますよね。芭蕉の俳句なんかでもね。一篇の詩にもそんな深い世界がある。

それから、古今東西、今までに作られた詩全体を考えるとね、それはすごくバラエティ豊かでいろんな違いがあるでしょ。全体で見ると、散文に対する、あるいは日常生活に対する、詩だという点ではひとつなんだけれどね。その詩のひとつひとつ、一篇一篇をとってみると、ほんとに抽象的で数学みたいな詩もあれば、日常生活の断片、小説の一節みたいな詩もある。物語になったすごく長い詩もあるわけだし、恋愛詩もあるでしょ。

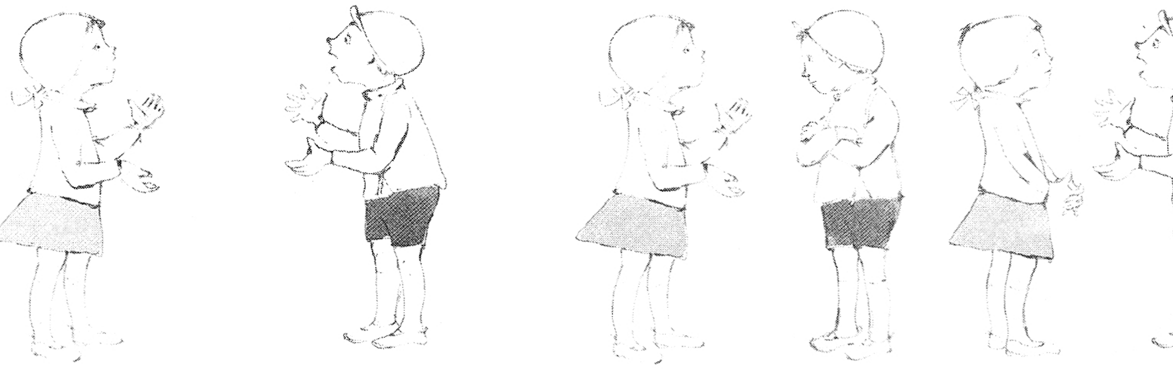
ふと聞こえた詩的に聞こえる言葉も、

《はなす・きく》

あきらが はなすと、
かずこが きく。

かずこが はなすと、
あきらが きく。

いちどに ふたりが はなしては
つうじないね。



「にほんご」安野光雅・大岡信・松居直・谷川俊太郎／共著　福音館書店

その豊かな詩の世界の片隅を占めるものだと思う。でも、子どもの発した詩的な言葉と、人生経験豊富な詩人が年とって書いた詩とは、やっぱり全くちがうものですよね。詩的伝統を継いで、微妙な技術を駆使して精緻に組み立てられた詩があるとすると、それには子どもの言葉とははるかにちがった素晴らしさがあると思うのね。

――谷川さんは小説は書かれていないんですね。同じ言葉でも、物語と詩とではすごくちがうと思いますか。

詩の中にも叙事詩というジャンルがあるでしょ。平家物語とかね。物語という点で切ると、詩の中にも物語詩の伝統はあるんです。小説がこんなに盛んになる以前は、叙事詩が小説の代わりに語られていたんじゃないかしら。

ただ、それが楽器に合わせて歌われたり、あるいは声にだしたときに調子のよい韻文だったり、口から耳へ口承で伝わってきたりしたものであれば、それは詩のジャンルにはいるでしょうね。だから、物語と詩は矛盾しないといえば矛盾しない。

でも、詩と物語というのはどうも対立しているような感じもしないでもない。これはあまりうまく説明できないんだけどね。

人間の一生、あるいは人類の歴史というのは、言ってみれば物語の連続みたいなものだと思うんです。歴史と物語とはすごく近いものだと言えますね。歴史は英語でhistory、物語はstory。フランス語なんかでは同じhistoire ですよね。たとえば王様がなにかしたことを部下が書きつける。というように、人間が生きてきた道程は、物語として捉えることができると思うんです。時間的な経過につれて、誕生から死までという風にね。だから今でも私史や自伝、伝記なんかを書く人がいますよね。それはフィクションではないけど、物語でしょ。

それに対して詩というのはね、物語の時間の流れを切った断面みたいな気がするの。その切り口を見せるのが、どうも基本的に僕にとっての詩だという気がするんです。

連続した、瞬間ではない時間の長さを語るのが物語だとすると、瞬間と永遠が一致してしまうような、時間の切断面を見せるのが詩だと。

これはきっと異論があると思うけど、僕はどうもそういうふうに捉えてるみたい。

――詩を書くとき、読み手を意識しま

読者の存在
自分と他人

受け継いだもの
受け継がれるもの

すか。

常に意識しますね。読む人がいなければ書く気になれない。

もちろん自分自身の満足ってものはあります。自分でいいと思う詩が書けるとうれしい。でも、詩というものも人間の営みのひとつであるわけだから、他の人とそれで結びつかないと、僕は人間としての役割を果たしていないように感じるんです。だから読者はひとりでも多くほしいと、わりと若い頃から思ってました。

——本として出版しても、読者の反応はなかなかわかりにくいですよね。

わかんないですね。

——読者の反応を感じるときはどういうときですか。

それは、読んだ人が手紙をくれたり、批評がでたり、友だちが感想を言ってくれたりすることがありますからね。

もうひとつ、自作朗読ってのが最近日本でも盛んになってきて、僕もときどき人前で自分の詩を読むんです。そこで人が笑ってくれたりとか、ふふんと感心してくれたりとかが体でわかるでしょう。それで自分の読者や聴衆の反応を、ある程度確かめられるわけです。

それからもちろん、よく売れたらうれしい。売れなかったからといって必ずしも失敗だとは思わないけど、評判がよくて増刷ってことになれば、やっぱりすごく手ごたえありますね。自分以外の人と結び付けたんだなあと感じますね。

——読者のイメージはどんな風に持っていますか。

ものすごく漠然としていますね。

読者というのはなにか、それは簡単にいうと、他人だと思うんですね。なにも詩を読む読者、聞いてくれる聴衆と考えなくても、自分じゃない他人を楽しませることができるか、感動させることができるか、もしかしたら嫌われるんじゃないか、なんですね。

詩を書くことも普通の人間関係と同じように、自分と他人の関係だと思うのね。ただそれをしゃべる言葉ではなく、書く詩というものでやっているだけで。

——読者といっても自分と他人との一対一の関係ということですね。

基本はそれだと思う。

けれどね、他人は必ずしも目の前にいる他の人だけではなくて、自分の中にも他人は住んでると思うんです。たとえば子どものための雑誌に書くなら、読者として子どもをイメージするでしょう。もちろんよく知ってる子どもを思い浮かべたりもするけれど、もっと深く考えれば、自分の中にいる現在の自分ではない過去の自分とか、子どものときの経験、それに現在の自分の中に隠されている幼児性みたいなものを相手にして考えるわけです。

目の前にいる他の人だけではなくて、自分の中にいて自分と対立しているものだとか、自分が隠しているものだとかもやっぱり僕は他人だと思うんですね。

——何人かで一緒に作る詩というのはどんなものなのですか。

普通、詩はひとりで作るものだというのが常識ですよね。でも、ひとりで書いていてもね、心の中には昨日読んだ本の一節だとか、奥さんとけんかしたときの言葉だとか、既に他人との交流がいっぱい含まれているわけでしょ。そういう経験が詩を書かせているのだとしたら、自分ひとりの言葉ってのはありえない。常に自分の言葉は、他人の言葉によって触発されてできているんだと、基本的には考えていいと思うのね。

そうすると、ひとりで書くのも、現実に目の前に仲間たちがいて彼らの書いた詩を読んで自分の詩を書く連詩も、それほど大きなちがいはないと思う。

——一緒に作るいいところはどんなところですか。

特に仲間と気持ちがよく合っていると



あきかんうた

かんからかんの
すっからかん
こーらのあきかん　けっとばせ
おひさま　かんかん
とんちんかん

かんからかんの
すっからかん
かんかんならせ　どらむかん
じかん　くうかん
ちんぷんかん

「わらべうた」詩／谷川俊太郎
絵／森村玲　集英社

き、人の詩を読むことで、ひとりで考えていたのでは思いつかなかったようなテーマやイメージがでてくる。お互いの刺激によってひとりでは書けないようなおもしろい詩が書ける可能性があるのが一番いいところですね。

――普段取り込んでいる言葉の刺激が凝縮される感じですか。

いや、凝縮というか、もっと露骨にあらわに目の前にでてくる感じですね。

単純にたとえていえば、こうやっておしゃべりしてるのと同じことですよ。ひとりで考えごとをしていると、だんだんじくじく根暗になってしまいがちでしょう。でもそばに友だちがいて、自分とちがう視点で意見を言ってくれたり、全く反対のことを言ってくれたりすると、自分の考えがそれによって変わっていくでしょう。

連詩、連歌というのはそれと同じ。言ってみれば詩人同士の対話なんですね。

それで僕は、どちらかというと人間はモノローグを発してるよりも、ダイアローグをかわした方が豊かになっていくと思っているのね。それで連詩というのはとても好きですね。

――連詩で失敗することはありますか。

それはもう常につきものなんじゃないかなあ。僕の経験では連詩ってのは、まだやってる当人の詩人たちが一番楽しくて、読者はあんまり楽しくないんじゃないかな。

――自分の言葉から相手の言葉がでてくるのは興味深いことですものね。

それでね、自分の詩を目の前の仲間が楽しんだらそれで満足してしまって、外にいる読者を忘れて自己完結してしまいがちなのね。仲間うちで楽しんじゃうわけ。ひとりよがりじゃなく、四人で書いてたら四人よがりになっちゃうのね。

――連詩もやっぱり外の読者が必要ですか。

もちろん。だってそれは詩作品なのだから、外の読者を楽しませられなくてはね。印刷されて、発表されることもあるわけだしね。

――仕事として詩を書いてきたことが、作品に影響していると思いますか。

僕の場合はそれしかなかったんじゃないですか。作品に影響するというより、作品の書き方を決定してきた要因というのかな。仕事として書いてきたから書けたんだともいえるでしょうね。

――でも、仕事じゃなくて書くこともあるのでしょう。

もちろん、自発的に書くことはあります。だけど必ず発表してしまいますね。雑誌に発表して、それから本にしますね。

――詩を書くとき、読者は必ずいるんですね。

と、僕は思っていますね。でもそれは唯一の考え方ではないでしょうけどね。

――制作する上で、自分の前にいた人たちから受け継いできたものを感じることはありますか。

あまり意識はしないけれど、もちろん感じますね。

一番それがはっきりした形で表れているのは、「わらべうた」っていう詩集です。あれは、日本の伝統的な童歌を自分なりに現代的に継承しようと意識して書いたものだから。伝統的な童歌を読んだりして替え歌を作ったりしてね、そこに流れている叙情の質も同じようなものにしようとしたものなんです。

また、詩を書いてるときに、あ、これは宮沢賢治のやり方だなあって意識しちゃうこともあるし。それから、たとえどんなに無意識でも、短歌とか俳句とか、漢詩とか、日本の詩歌の伝統を継がざるを得ない。そういうものと切り離された詩はかくことはできないと思いますね。

――若い頃からそう感じてたんですか。

いや、若い頃はあまりそんなことは思

絵本メディア
絵本ジャンル

わなかった。今までの詩はみんな古いんだと、自分が新しい詩を書いてやるぞって思いの方が強かったかもしれないね。

——それはどういう風に変わっていったのですか。

やはり日本語というものを使ってずっと詩を書いているうちに自然に、いやでもやっぱり自分たちの前の世代の人たちの詩が気になりだしたり、おもしろくなってきたり、古いと思っていたものが意外に新しかったりすることを発見してきたからじゃないかしら。

——これから続いていく人たち、子どもたちに受け継いでいってほしいと思うものはありますか。

その辺、僕は冷たくてね、全然なんにも考えたことはないですね。勝手にやればいいって思ってるのね。

ただ、形になったもので、「にほんご」という本がある。もし自分たちが小学校の国語の教科書を作るとしたらこんな風な作り方だってあるんだっていうひとつの試案みたいなものなんだけど。このときは、詩という狭い分野ではなく日本語を考えた場合に、日本語をどういう風に学び、どういう風に考えていくかということに関して、若い人たちに伝えたいという気持ちは確かにあったと思います。

——子どもの本を作りはじめられたのは、ご自身の子どもを持ってからですか。

いや、それはそれほど関係ないですね。自分の子の名前を使った「けんはへっちゃら」と「しのはきょろきょろ」というお話の本があって、あれはやっぱり自分の子どもを意識してたけどね。でもそれよりも、映像メディアとしての絵本に興味を持ってはいっていったんです。

——文字と、画面を組み合わせたメディアということですか。

そう。僕は絵本を児童文学というよりも映像メディアのひとつだと考えているんです。若い頃から写真が好きで自分で写真撮ったりしたし、また写真に詩をつけたフォトストーリーなんかの仕事もしてたんです。そのうちに自分で8ミリを撮ったり映画の脚本も書いたりもした。動くにしろ動かないにしろ、映像と言葉の組み合わせというのがすごく可能性を持っていると思っていたの。

印刷の分野でみると、映像と言葉の組み合わせとなると、絵本が一番自由に仕事ができる分野だったんですね。

——では、子どものためにこんな絵本を作ろうとはじめたんではないんですか。

メディアに対する興味の方が大きかったですね。

でも僕が子どもの絵本を作りはじめたときに考えたんだけどね。物語絵本はもういいものがたくさんある。物語絵本に対して、こう呼んでいいかわからないけど、認識絵本というジャンルがあるでしょ。たとえば科学の図鑑みたいな。そのなかでも図鑑絵本は結構あるのね。それに対して、文化人類学や社会学、心理学なんかの分野に相当する絵本が少ないと僕は思ってね。やるんだったらそういう絵本を作りたいと思ったわけです。

子どもも小さい大人なのだから、物語だけで大きくなるわけじゃない。いろんな分野でいろんな矛盾を感じたりしてるわけだから、人間の世界をただ物語の形としてだけじゃなく理解したいと思っているだろう。社会はどんどん複雑になってきているしね。経済のことだってわかったらいいだろうと。子どもの絵本の世界の中に、大人の社会に対応するぐらいの広い範囲のテーマだとか手法だとかを持ち込んだ方がいいと思ってね。

——それで実際に作ったんですね。

「わたし」「きもち」とかね。「こっぷ」はその一番はじめの頃の絵本だった。「いっぽんの鉛筆の向こうに」「しんすけくん」もそうだな。「うちのじどうしゃ」とかも広い意味ではそうかな。

ちいさなむすめがいたってさ
おでこのまんなかかわいいまきげ
いいこのときはとてもとてもいいこ
だけどわるいこのときはぞっとする



「マザー・グースのうた第４集」訳／谷川俊太郎
イラストレイション／堀内誠一　草思社

——経済学の絵本ってとてもおもしろそうですね。

十何年も前に考えていたんだけどね。アメリカの「レモンをお金にかえる方法」という子ども用の経済の本があって、これはなかなかうまくできてるなと思って。でも自分で作るのはとても難しくてね、これは挫折してしまいました。

——残念ですねえ。

それからね、子どもを相手にしてものを作るということにもすごく興味があったの。大人が相手だと、つい難しい漢語なんかを使っても通じちゃうでしょ。子どもには難しく言っても通じないわけだから、いやでもやさしい言葉を使わなくちゃいけない。子どもにわかるようなやさしい言葉を使うっていうのは、実は日本語のなかで最も難しいことなのね。

たとえば社会って言葉を小学一年生にもわかるようにひらがなで説明するにはどう言っていいかわかる？

——う…。

こんなね、普段わかってるつもりで何気なく使っている言葉が、実は全然わかっていない、身についていないんだってことに気がついたの。子ども相手に言葉を使おうとすると、ほんとに苦労しちゃうんですね。だから、その意味で子ども

本の形態

の本というのはいつだって自分に対するチャレンジですよ。

――「社会」を子どもに説明しようとすると、わかってない自分にむかわなくちゃいけませんもんね。

自分の認識のあいまいさ、それからヨーロッパから輸入してきた言葉を翻訳して使っている、その根無し草性みたいなものかな。日本人の暮らしに根付いていない翻訳語が氾濫していて、それが抽象的で難解な文章をいっぱい作っちゃっている。そのこわさを感じたのね。それがすごくよくわかったんです。

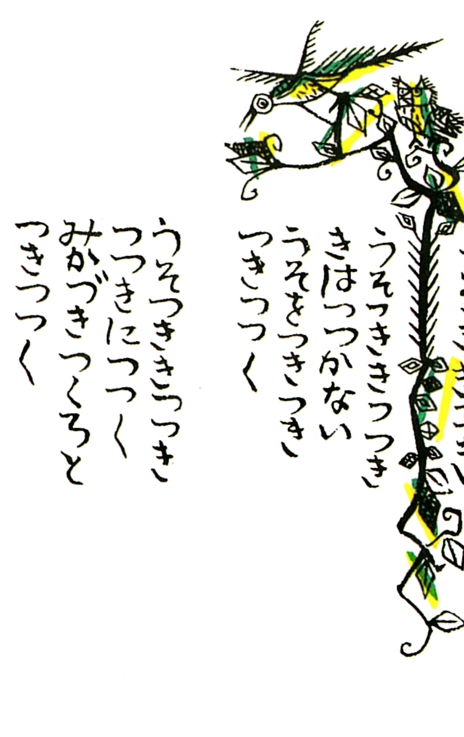
――それはほんとにこわいですね。

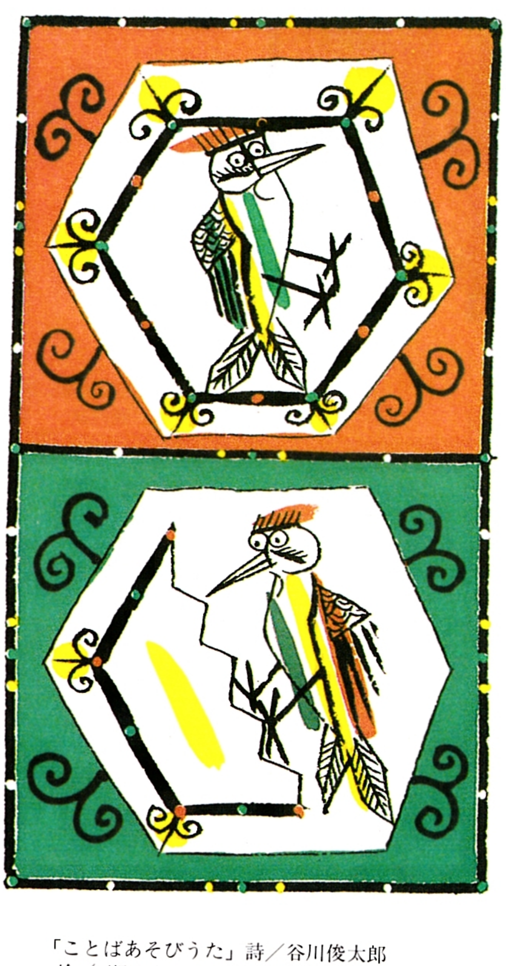
そうね。これは現代日本語の根本的な問題なんだけど、全然解決もできないし、いい方向にも進んでもいないような気もするのね。

――でも、それを改善しようとして動いているのではないのですか。

いや、そんなんじゃなくて、むしろやりはじめて気がついた、絵本を通して気がついたんです。自分が馬鹿だったってことがわかってね。それからは、ずいぶん自覚的に子どもの絵本というものを考えるようになりました。

「にほんご」はそういう自覚ができてから作った本なんです。だからあの本の





「ことばあそびうた」詩／谷川俊太郎
絵／ 瀬川康男　福音館書店



「わらべうた上」編／谷川俊太郎　絵／堀内誠一　冨山房（本文ででてくる本とは別。これは民間伝承のわらべうたを集めたものです。）

地の文なんかは、ずいぶんそのことを考えながら書いたんです。

——あれはすごくおもしろい本ですね。

ずいぶん長い間かけて、みんなで意見を出し合ったり、部分的に雑誌に掲載していろんな人の意見を聞いたりして作ったんですよ。

——これからの本の形はどう変わっていくと思いますか。

本という形はなくならないと思います。便利なものだし、楽しいものだし。ただ、印刷の形態は変わっていくでしょうね。

電子メディアによる出版にはすごく興味があって、その長所をうまく活かしてどんどん使っていくべきだと考えているんです。特にレーザーディスクと光ディスク、パソコンの組み合せにはすごく可能性があると思うの。たとえばカラーの画像で、音声が2チャンネル、日本語と外国語が使えて、文字が細かくきれいに出せればね、百科辞典なんかにすごく有効でしょう。

ただ日本はね、ハードが常に先行していて、ハードの技術は素晴らしいんだけど、ソフトの方が非常に立ちおくれているのね。ソフトを作るのはやはりわれわれに関係があるわけですから、機会があればそんなことに参加してみたいと思っています。

友人たちの語る谷川俊太郎の横顔

谷川アトム俊太郎

舟崎克彦

以前、谷川さんと絵本の共作をやりかけたことがある。

「よい子」という主題で、いいことばっかり行い積んでいる子が、こと志と違って、良いと信じてする事が、事態を悪い方へ、とんでもない展開へところがして行く破目になる皮肉なストーリィで、私は大変気に入っていたが時がたつうちに絵本化は沙汰やみになってしまった。

「でもぼくは悪くないよ、いい子だもん」

という、主人公の独白で終わるこの物語のそもそものきっかけは、谷川さんが、

「僕はいい子の標本みたいな少年時代を送って来た」

と、何かの時に述懐されたのが妙に可笑しくて、話がふくらんでいったのである。

「有意義なことをしなくちゃいけない、という義務感にもとらわれていた」

と、伺ったこともあった。

谷川少年は母上が入院された折り、お見舞いがてら他の患者さんたちの病室なども訪問して、待遇についての不満を取材して廻り、岳父徹三氏にいたく叱られたそうである。

「演歌の作詞なんかもやってみたんだけどサ、ネオン街に夜の雨を降らせたりしても、その雨がやがて水蒸気になって、とか、そんな発想につながっちゃって、これじゃ理科の教科書だよね」

とりとめもなく、心に残っているエピソードを綴ってみると、そこから浮かんでくる谷川俊太郎像はさながら正義と科学の子だ。鉄腕アトムである。

当然、進取の気性にも富んでおられて、先端技術などへの目配りもぬかりはない。我が家の生ぬるいクーラーを修繕するなど、赤子の手をひねるようなものであった。

もっとも谷川アトムは赤子の手をひねったりはしない。このアトムの武器は腕力ではなくて、多岐にわたる知識の宝庫から紡ぎ出す目もあやなレトリックである。

谷川さんの現実性、即物性、科学性と、形而上学へ到る言葉の飛翔力が、どこで連環しているのか凡百の身には考え及ばないが、以前、私のエッセイ集に寄せて下さった跋文の中で、ファンタジィについて述べられた一節が、谷川氏の裡なる現実性—非現実性のありかたを暗示しているかも知れない。

『ファンタジィはいわば現実の組みかえによって、より深い真実に達しようとする試みだ。それは現実の異化であって、現実の無化、ないし夢化ではないのである』

谷川さんは孵化はしても夢化はしない。天国と地獄について雑談したことがある。

「地獄の方が刺激的で面白そうですねぇ」

私が水を向けると、

「でも僕、八時間眠れないとダメなんだよね」

谷川アトムはどこに身を置こうが、八時間寝て闘う覚悟だ。

道化師の肖像

辻征夫

一九八三年十一月に創刊号が出た写真雑誌ＰＨＯＴＯ　ＪＡＰＯＮに、柿沼和夫氏撮影の谷川さんの肖像写真が載っている。蝙蝠傘を差して、右手に煙草をもって、ベンチ風にしつらえた丸太に腰掛けてレンズを正面から見据えている谷川さんのまわりは、いちめん散った桜の花びらである。差している蝙蝠傘にも、水滴と、花びらが二三、付着している。

七年前にはじめてこの写真を見たとき、私は軽い衝撃と共感を感じた。疲労と苦渋が、ごく自然に、素直に滲み出ているこんな表情は、めったに人目にさらさないものだと思うが、独りでいるときには、谷川さんはしばしばこういう顔をしているにちがいない、そう私は思ったのである。「軽い衝撃」は、それまでいかにもかろやかな、屈託のない谷川さんの写真ばかりを見慣れていたせいであろうし、共感は……、そうだこの共感のことをすこしかんがえてみようか。

てっとりばやくごく簡単にいえば、

かっぱらっぱかっぱらった
とってちってた

谷川俊太郎はこういう詩も書く人である。

かぎしめ　しめしめ
びじんの　ながしめ
おしめ　じめじめ
どろぼう　みじめ

またこういう詩も、書く人である。明るく、愉快で、思わず吹き出してしまうが、こういう詩を書く人間というものを、読者はいったいかんがえてみたことがあるだろうか。こういう詩とは、体験を文学作品にするという誠実な単純素朴派の詩ではなく、「うそでしかいえないほんとのことがある」ことを熟知した人間が書く、客観的な言葉の花である詩ということである。

こういう詩を書き、おそらく人間的なるもののすべてを根源的に感じ取りながら生きようとしている詩人のことをかんがえるとき、私は大きなサーカス小屋の、天井ちかくの細いロープでおどけている、綱渡りの道化師を思いうかべる。かれらはたしかに命綱を付けている。しかしあの命綱は、何だと思う?

あれは見物の子供たちを安心させたいがための道化師の優しさ、「善男善女」という幻へのサービス以外の意味はないのである。バランスを崩して落下すれば、ぺしゃんこになって死ぬ道化師の、化粧を落とした顔をさらして、ひとりの詩人が桜の木の下の丸太に腰掛けていた。

この写真の撮影は一九八三年春ということだが、この年、谷川さんは五十二才である。約八才年下の私も、いまやその年齢にちかづきつつある。そのせいだろうか、今日ひさしぶりに写真を見たが、べつだん衝撃は感じないで、ごく親しい隣人という感じがした。私の道化ぶりも、多少は板についてきたのだろうか。

いつも見事にキマッテいました

松居直

谷川俊太郎さんとの初めての出会いは、「母の友」の一九五八年七月号から翌一九五九年六月号までの一年間、毎月、童謡の連載をお願いしていた頃のことです。この連載は谷川さんの子どものためのお仕事の、ごく初期のものでしょう。毎回、服部公一さん作曲の楽譜を掲載していました。この企画をたてたのは、その頃「母の友」の編集を一手に引受けて活躍していた永畑道子さんだとおもいます。永畑さんは若い作家や詩人や歌人の作品を実によく読んでいました。

谷川さんは時々、三崎町の旧社屋——といっても普通の住居を改造した、およそ出版社らしくない事務所でしたが——へ立寄られました。あの独特の型をした五〇年代のフランスの小型車シトロエンが、若き日の谷川俊太郎さんの愛車でした。いまも小型のシトロエンを街でみかけますと、一瞬、谷川さんをおもいだします。一、二度同乗させていただいたことがありますが、シトロエンのハンドルを楽しそうに握って、軽快に運転される谷川さんの姿は、とてもキマッテいました。運転は上手だなと私はおもい、安心して乗せていただきました。

私も忙しい編集者でしたから、宣教師が長年使っていたイギリスのフォード製の中古のプリフェクトという小型車を譲ってもらって乗っていました。運転は嫌いではありませんでしたが、谷川さんの運転はリズミカルで楽しそうでした。〝あそび〟がありました。車の中では、もっぱら自動車の話をしたようにおもいます。

その後、谷川俊太郎さんには数々の絵本の創作をしていただくようになり、毎週その豊かな発想に驚嘆するとともに、楽しいことばの世界にあそばせていただきました。谷川さんのことばづかいの魔力は、若い日の運転のように、いつも見事にキマッテいました。『かがくのとも』の『わたし』(長新太え)、『こどものとも』の『あな』(和田誠え)、『よるのびょういん』(長野重一写真)、『なおみ』(沢渡朔写真)、『こどものとも少年版』の『ごつんふわふわ』(中野正隆え)、『めのまどあけろ』(長新太え)、それに『ことばあそびうた』『ことばあそびうた　また』(瀬川康男え)という傑作があります。特に『わたし』と『あな』はエポックメーキングな作品だとおもいますし、写真絵本としては世界的にみても美しい『なおみ』は、谷川さんの絵本の中でも出色のものです。

他に安野光雅さん、大岡信さんなどと共同編集された小学校一年生用の国語教科書私案『にほんご』があります。お読みになればわかりますように、この文章は全編谷川さんのことばと文体の世界です。谷川さんの明晰な思想と表現が、この一冊に見事に結晶しています。教科書という堅苦しい形をかりて、これほど自由に、楽しく詩的に論理を子どもに語りかけられる人は、類がないとおもいます。谷川俊太郎さんこそことばのマイスターと呼ぶにふさわしい人でしょう。

谷川俊太郎 著作リスト

1950——1990

○詩集

二十億光年の孤独……東京創元社……1952
六十二のソネット……東京創元社……1953
愛について……東京創元社……1955
絵本（写真＝著者）……的場書房……1956
谷川俊太郎詩集〈ポエム・ライブラリー〉
東京創元社……1958
あなたに……東京創元社……1960
21〈現代日本詩集5〉……思潮社……1964
落首九十九……朝日新聞社……1964
谷川俊太郎詩集……思潮社……1965
谷川俊太郎詩集〈日本の詩人17〉……河出書房……1968
谷川俊太郎詩集……角川書店……1968
空の青さをみつめていると・谷川俊太郎詩集I（大岡信編）
角川書店（文庫）……1985
谷川俊太郎詩集〈現代詩文庫27〉……思潮社……1969
旅（詩画集・絵＝香月泰男）……求龍堂……1970
うつむく青年……サンリオ出版……1971
谷川俊太郎詩集〈日本の詩集17〉……角川書店……1972
ことばあそびうた（絵＝瀬川康男）……福音館書店……1973
ひとりの部屋（絵＝渋川育由）……千趣会……1974
夜中に台所でぼくはきみに話しかけたかった
青土社……1975
定義……思潮社……1975
空に小鳥がいなくなった日……サンリオ出版……1976
誰もしらない……国土社……1976
新選谷川俊太郎詩集〈新選現代詩文庫107〉
思潮社……1977
由利の歌（詩画集・絵＝山口はるみ他）すばる書房……1977
タマライカ偽書残闕（特装98部限定版あり）
書肆山田……1978
質問集〈草子8〉……書肆山田……1978
谷川俊太郎詩集続……思潮社……1979
そのほかに……集英社……1979
櫂・連詩（櫂同人との共著）……思潮社……1979
コカコーラ・レッスン……思潮社……1980
地球へのピクニック……教育出版センター……1980
わらべうた（絵＝森村玲）〈集英社文庫〉集英社……1981／1985
（わらべうた続と合本）
ことばあそびうたまた（絵＝瀬川康男）福音館書店……1981
わらべうた続……集英社……1982
みみをすます……福音館書店……1982
日々の地図……集英社……1982
どきん〈詩の散歩道〉……理論社……1983
対詩（正津勉と共著）……書肆山田……1983
現代の詩人9 谷川俊太郎（鑑賞＝大岡信）
中央公論社……1983
手紙……集英社……1984
日本語のカタログ……思潮社……1984
詩めくり……マドラ出版……1984
よしなしうた……青土社……1985
朝のかたち・谷川俊太郎詩集II（北川透編）〈角川文庫〉
角川書店……1985
日本の詩・谷川俊太郎（藤富保男編）ほるぷ出版……1985
いちねんせい（絵＝和田誠）……小学館……1987
はだか（絵＝佐野洋子）……筑摩書房……1988
メランコリーの川下り／FLOATING THE RIVER IN MELANCHOLY（訳＝ウィリアム・I・エリオット＋川村和夫）
思潮社／プレスコット ストリート プレス……1988

○外国語訳詩集

WITH SILENCE MY COMPANION (trans. by W.I.Elliott & K.Kawamura)
Prescott Street Press－1975
AT MIDNIGHT IN THE KITCHEN I JUST WANTED TO TALK TO YOU (trans. by W.I.Elliott & K.Kawamura)……Prescott Street Press－1980
THE SELECTED POEMS OF SHUNTARO TANIKAWA (trans. by H.Wright)
North Point Press …－1983
COCA-COLA LESSONS (trans. by W.I.Elliott & K.Kawamura)
Prescott Street Press－1986
VIER SCHARNIERE MIT ZUNGE (H.C.Artman,Macoto Ooka,Oskar Passtiorとの連詩)……Verlag Kraus G.Renner
……－1988
FLOATING THE RIVER IN MELANCHOLY (trans. by W.I.Elliott & K. Kawamura)……Prescott Street Press/Sicho-sha
……－1988
SHUNTARÓ TANIKAWA POLUDNIE DUSE (trans. by Katarína Mikulová, Mila Hougova & Fumiko Kuwahara)……Kruh Milovníkov Poézie
……－1988
PICKNICK AUF DER ERDKUGEL (trans. by Eduard Klopfenstein)
Insel Verlag……－1990

○エッセイ集・対談集など

愛のパンセ……実業之日本社－1957／1971
新版／出帆新社－1981／三笠書房－1986〈知的生きかた文庫〉
世界へ！……弘文堂……1959
アダムとイブの対話……実業之日本社……1962
散文……晶文社……1972
対談（谷川徹三他との対談集）……すばる書房……1974
谷川俊太郎の33の質問(武満徹他との対話集) 出帆社－1975／出帆新社
－1980／筑摩書房－1986
三々五々（人物論集）……花神社……1977
詩の誕生（大岡信との対話）……読売新聞社……1977
批評の生理（大岡信との対話）……思潮社……1978
谷川俊太郎エトセテラ……大和書房……1979
魂にメスはいらない・ユング心理学講義（河合隼雄にきく）〈Lecture Books〉……朝日出版社……1979

現代詩相談室……角川書店……1980
アルファベット26講……出帆新社1981／中央公論社 1986〈中公文庫〉
自分の中の子ども（大江健三郎他との対談集）青土社……1981
やさしさを教えてほしい（中島みゆき他との対談集）朝日出版社……1981
ものみな光る（ナム・ジュン・パイク他との対談集）青土社……1982
ナンセンス・カタログ（絵＝和田誠）大和書房……1982
ONCE―1950〜1959……出帆新社……1982
詩と世界の間で（大岡信との往復書簡）思潮社……1984
ことばを中心に……草思社……1985
現代詩入門（大岡信との対談）……中央公論社……1985
「ん」まであるく……草思社……1985
日英対照リレーエッセイ World in Transit（ロジャー・パルバース他との共著）……大修館書店……1985
理想的な朝の様子 続谷川俊太郎の33の質問（野田秀樹他との対話集）……リブロポート……1986
日本語グラフィティ（多田道太郎との対談集）河出書房新社……1987
谷川俊太郎対談集①（吉本隆明他との対談集）冬芽社……1987
詩の授業（竹内敏晴他との討論記録）国土社……1988
「にほんご」の授業（竹内敏晴他との討論記録）国土社……1989
三角宇宙（吉本ばなな・高田宏との鼎談）青龍社……1989
谷川俊太郎対談集②（中沢新一他との対談集）冬芽社……1989

○ショートショート集

花の掟……理論社……1967
ぺ〈講談社文庫〉……講談社……1982

○劇脚本

十円玉（絵＝大野一興）……エルム……1976
おばけリンゴ……新水社……1982

○写真集

SOLO……ダゲレオ出版……1982

○分類不能の本

入場料八八〇円ドリンクつき（佐野洋子との共著）白泉社……1984
気晴らし神籤（クリス・モズデルとの共作・CD）ミディ……1988

○編著

愛の詩集……河出書房1968〈世界の詩人12〉／同I・II サンリオ出版 1974・1975／〈河出文庫〉1985
青春詩集・愛（朗読＝芥川比呂志他）ポニー・カセット文庫……1972
谷川俊太郎による谷川俊太郎の世界（ユリイカ増刊）青土社……1973
にほんご（安野光雅他との共著）……福音館書店……1979
ことばとあそぼう（ことばあそびの会編）フレーベル館……1979
住む〈カルチャーtoday3〉……平凡社……1979
ことば・詩・子ども〈叢書児童文学I〉世界思想社……1979
童謡・唱歌集〈日本の詩28〉……集英社……1979
暖炉棚上陳列品一覧〈日本のライト・ヴァースI〉書肆山田……1980
遊びの詩……筑摩書房……1981
祝婚歌……書肆山田……1981
日本まざあぐうす……毎日新聞社……1982
わらべうた上（絵＝堀内誠一）……冨山房……1982
わらべうた下（絵＝堀内誠一）……冨山房……1983
神様も大あくび（渡辺一考と共編）〈世界のライト・ヴァース5〉書肆山田……1983
世界なぞなぞ大事典（柴田武・矢川澄子と共編）大修館書店……1984
恋〈日本の名随筆29〉……作品社……1985
日本の恋歌その1恋すればわが身は影と 作品社……1985
世界のなぞなぞ・赤／白／黒（柴田武・矢川澄子と共編）大修館書店……1986
声で楽しむ美しい日本の詩・和歌俳句篇／近・現代詩篇（大岡信と共編・CD・朗読＝岸田今日子他）……岩波書店……1990

○外国語訳童話

KEN IM GLUCK……Cecilie Dressler Verlag-Berlin……1971

○翻訳

あしながおじさん ジーン・ウェブスター河出書房1967／サンリオ出版 1975／フォア文庫 1988
かみさまのほん フローレンス・メアリ・フィッチ／レオナード・ワイスガード……福音館書店……1969
スイミー レオ・レオニ……好学社……1969
フレデリック レオ・レオニ……好学社……1969
せかいいちおおきなうち レオ・レオニ 好学社……1969
みつばち フランクリン・ラッセル／コレット・ポータル 至光社……1973
みどりのしっぽのねずみ レオ・レオニ 好学社……1973
ぼくどこからきたの? ピーター・メイル／アーサー・ロビンス 河出書房新社……1974
まるのうた A・ラマチャンドラン…福音館書店……1975
ひとあしひとあし レオ・レオニ……好学社……1975
さかなはさかな レオ・レオニ……好学社……1975
アレクサンダとぜんまいねずみ レオ・レオニ 好学社……1975
あいうえおのき レオ・レオニ……好学社……1975
じぶんだけのいろ レオ・レオニ……好学社……1975
ペツェッティーノ レオ・レオニ……好学社……1975
うさぎたちのにわ レオ・レオニ……好学社……1975
かえってきたビップ マルセル・マルソー 冨山房……1976
ふしぎなバイオリン クェンティン・ブレイク 岩波書店……1976

マザー・グースのうた1〜5（絵＝堀内誠一）草思社……1976
バーニンガムのちいさいえほん ゆき／もうふ／がっこう／いぬ／とだな／ともだち／うさぎ／あかちゃん ジョン・バーニンガム 冨山房……1976
マザー・グースうたのほん（楽譜集）草思社……1977
かみさまへのてがみ E・マーシャル／S・ハンプル編 サンリオ出版……1977
シオドアとものいうきのこ レオ・レオニ ペンギン社……1977
ここにいたい！あっちへいきたい！ レオ・レオニ 好学社……1977
かみさまへのてがみもっと E・マーシャル／S・ハンプル編 サンリオ出版……1978
ストーリーナンバー1 ウージェーヌ・イヨネスコ／エチエンヌ・ドゥレセール……角川書店……1979
ストーリーナンバー2 ウージェーヌ・イヨネスコ／エチエンヌ・ドゥレセール……角川書店……1979
ストーリーナンバー3 ウージェーヌ・イヨネスコ／フィリップ・コランタン……角川書店……1979
ストーリーナンバー4 ウージェーヌ・イヨネスコ／ニコル・クラヴルー……角川書店……1979
おんがくねずみジェラルディン レオ・レオニ 好学社……1979
はまべにはいしがいっぱい レオ・レオニ ペンギン社……1979
そんなときなんていう？ セシル・ジョスリン／モーリス・センダック……岩波書店……1979
めであるく／かたちをきく／さわってみる マーシャ・ブラウン 佑学社……1980
こうえんのさんぽ アンソニー・ブラウン 佑学社……1980
おとなしいめんどり ロン・ロイ／ポール・ガルドン 瑞木書房……1980
ベンのトランペット レイチェル・イザドラ あかね書房……1981
あひるのさんぽ ロン・ロイ／ポール・ガルドン 瑞木書房……1981
はなにいろをぬるのはだれ？ レオ・レオニ 佑学社……1981
マザー・グース1〜4（絵＝和田誠・監修＝平野敬一）〈講談社文庫〉講談社……1981
うさぎをつくろう レオ・レオニ……好学社……1982
あかんぼ大作戦 ピーター・メイル／アーサー・ロビンス（たけむらみちこと共訳）……河出書房新社……1982
アルメット トミー・アンゲラー……集英社……1982
ねずみのつきめくり レオ・レオニ……佑学社……1983
ペンギンのペンギン デニス・トラウト／トム・カレンバーグ リブロポート……1983
なにがはじまるの？ ピーター・メイル／アーサー・ロビンス（たけむらみちこと共訳）……河出書房新社……1983
コーネリアス レオ・レオニ……好学社……1983
マグノリアおじさん クエンティン・ブレイク 佑学社……1984
いっとうのいぎりすのおうし ニコラ・ベイリー 冨山房……1984
くんくんこらっ／どしんばたん／よろよろぽん／こっこっこっめえ／とんでつまずく／がちゃがちゃぽろろん ジョン・バーニンガム ほるぷ出版……1985
おじいちゃん ジョン・バーニンガム ほるぷ出版……1985
画家 M・B・ゴフスタイン……ジー・シー・プレス 1986
作家 M・B・ゴフスタイン……ジー・シー・プレス 1986
ジュリアスはどこ？ ジョン・バーニンガム あかね書房……1987
ジョンのおでまし／テオはぺろぺろ／ジョンはおふろ ボブ・グレアム……岩波書店……1988
いつもちこくのおとこのこ―ジョン・パトリック・ノーマン・マクヘネシー ジョン・バーニンガム……あかね書房……1988
ニコラスどこにいってたの？ レオ・レオニ 佑学社……1988
ブルッキーのひつじ M・B・ゴフスタイン ジー・シー・プレス 1989
おとなりさん M・B・ゴフスタイン ジー・シー・プレス 1989
ぼくのだ！わたしのよ！ レオ・レオニ 好学社……1989
6わのからす レオ・レオニ……佑学社……1989
きたかぜとピオ アラン・バルトマン 福武書店……1989
ゆくゆくあるいてゆくとちゅう エチエンヌ・ドゥレセール ほるぷ出版……1989
生きとし生けるもの M・B・ゴフスタイン ジー・シー・プレス 1990

○絵本・童話

日本語のおけいこ（林光他の曲による楽譜集）理論社……1965
しりとり（絵＝和田誠）……私家版……1965
けんはへっちゃら（絵＝和田誠）……あかね書房1965／あかね文庫 1987
き（絵＝堀文子・曲＝諸井誠）……至光社……1968
しのはきょろきょろ（絵＝和田誠）…あかね書房1969／あかね文庫1987
ねこ（写真＝菅野喜勝）〈こどものせかい3〉至光社……1969
まるのおうさま（絵＝栗津潔）〈かがくのとも23〉福音館書店……1971
ワッハワッハハイのぼうけん（絵＝和田誠）講談社……1971
ことばのえほん・ぴよぴよ／かっきくっけこ／あっはっは（絵＝堀内誠一 声＝波瀬満子他）……ひかりのくに……1972
てとてとてとて／のってみたいな／いのち／かさこそどかん（絵＝佐野洋子他）〈幼児の学習1・4・6・7〉現代教育研究社……1971
こっぷ（写真＝今村昌昭）〈かがくのとも35〉福音館書店……1972
えをかく（絵＝長新太）……新進1973／講談社 1979
とき（絵＝太田大八）〈かがくのとも51〉福音館書店……1973
このえほん（絵＝和田誠）〈かがくのとも68〉福音館書店……1974
わたし（絵＝長新太）〈かがくのとも91〉福音館書店……1976
あな（絵＝和田誠）〈かがくのとも248〉福音館書店……1976
あけるな（絵＝安野光雅）……銀河社……1976
とおるがとおる（絵＝和田誠）……あかね書房1976／あかね文庫 1987
ごつんふわふわ（絵＝なかのまさたか）〈年少版こどものとも6〉福音館書店……1977
24にんのわらうひとともうひとり（絵＝堀内誠一）ポプラ社……1977

○カセットブック


トラック
コージ
ゴトゴト 走る おんぼろ トラック


おんぼろ
スズキ
ČESKOSLOVENSKO
ゴトゴト道を　みんなを　のせて


ČESKOSLOVENSKO



きゅうな　さかは

みんなで　あとおし

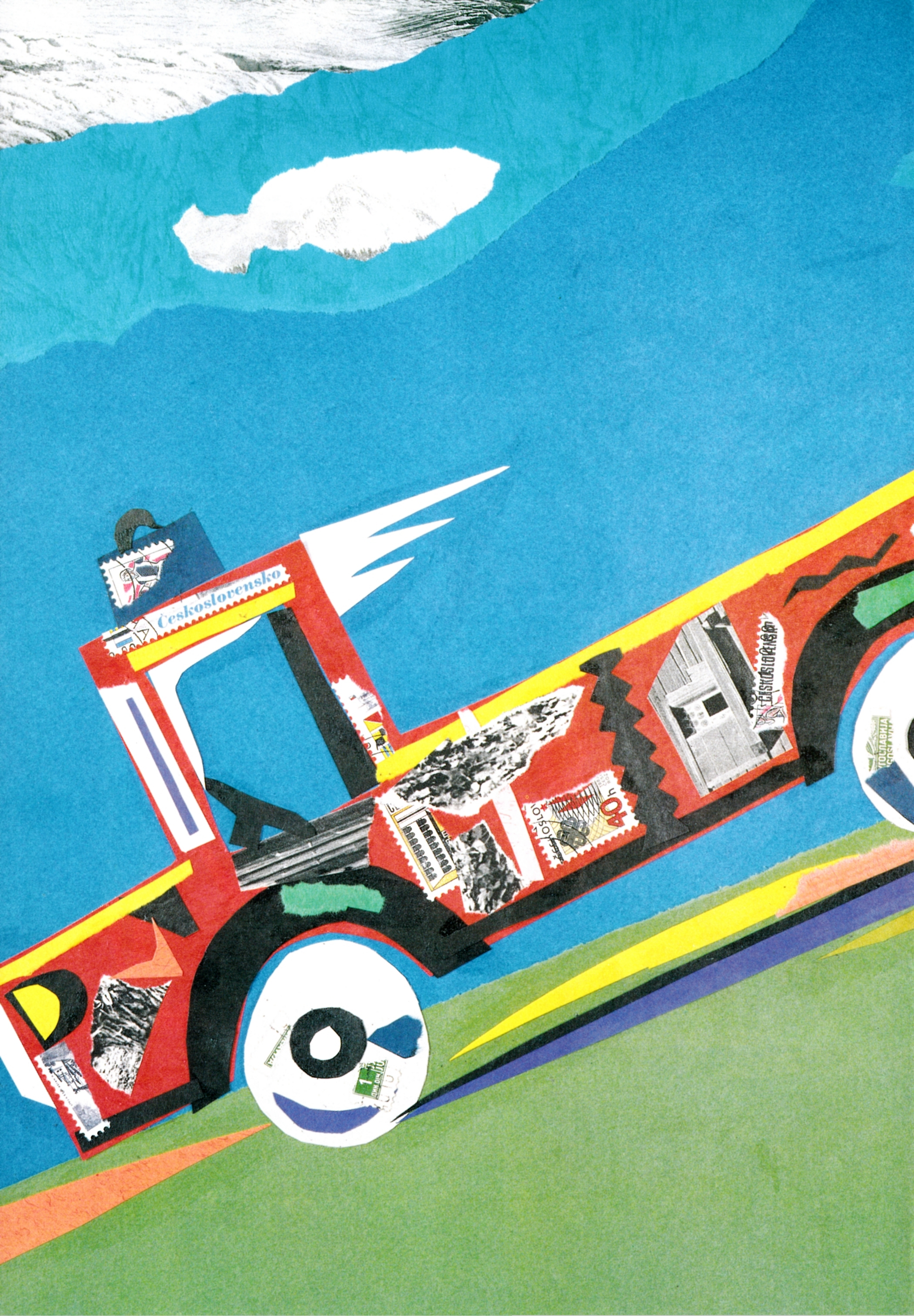
おんぼろ　トラック



いきおい　ついて

ドンドコ　走るよ

おんぼろ　トラック


Československo

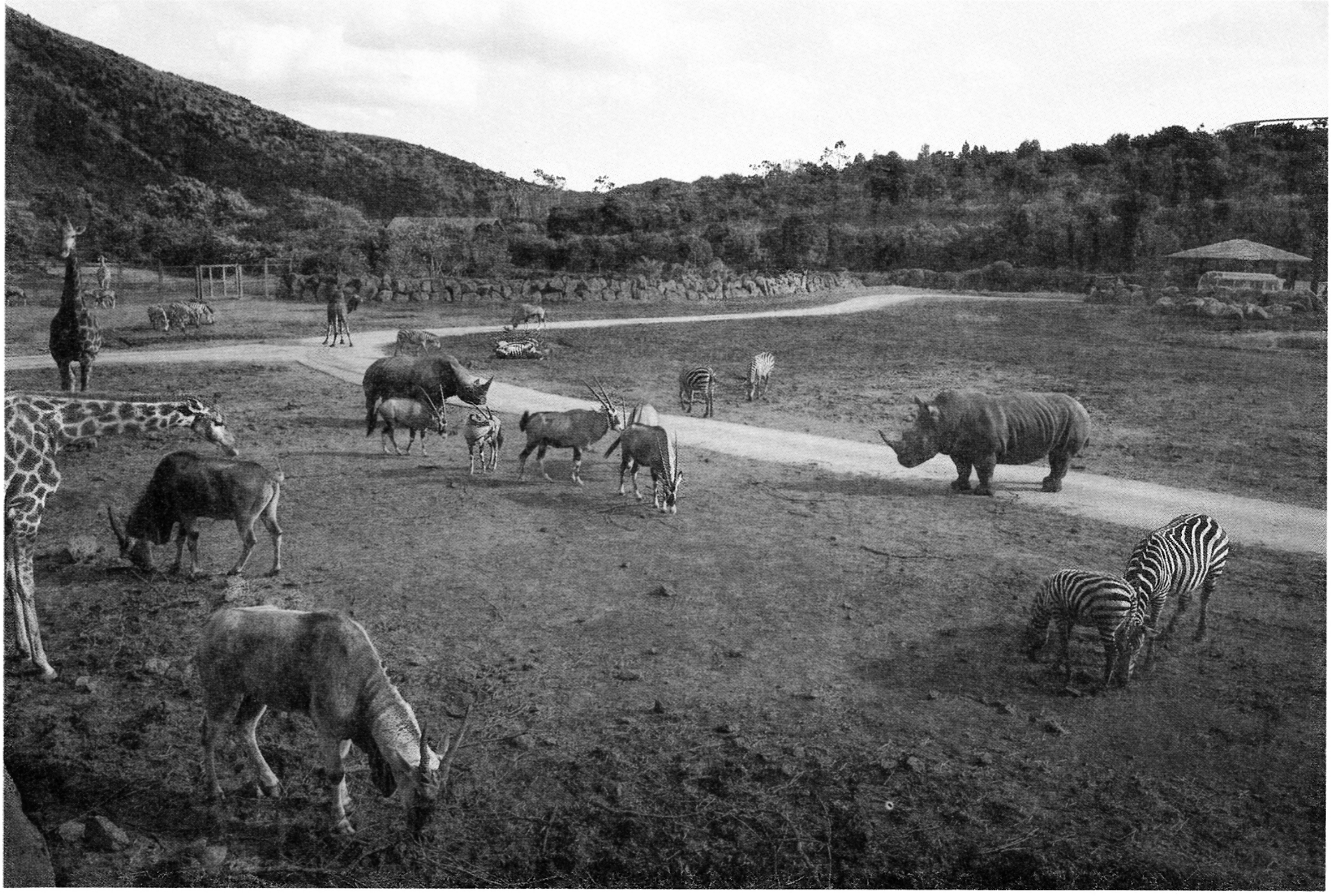


った　おんぼろ　トラック　やーい！



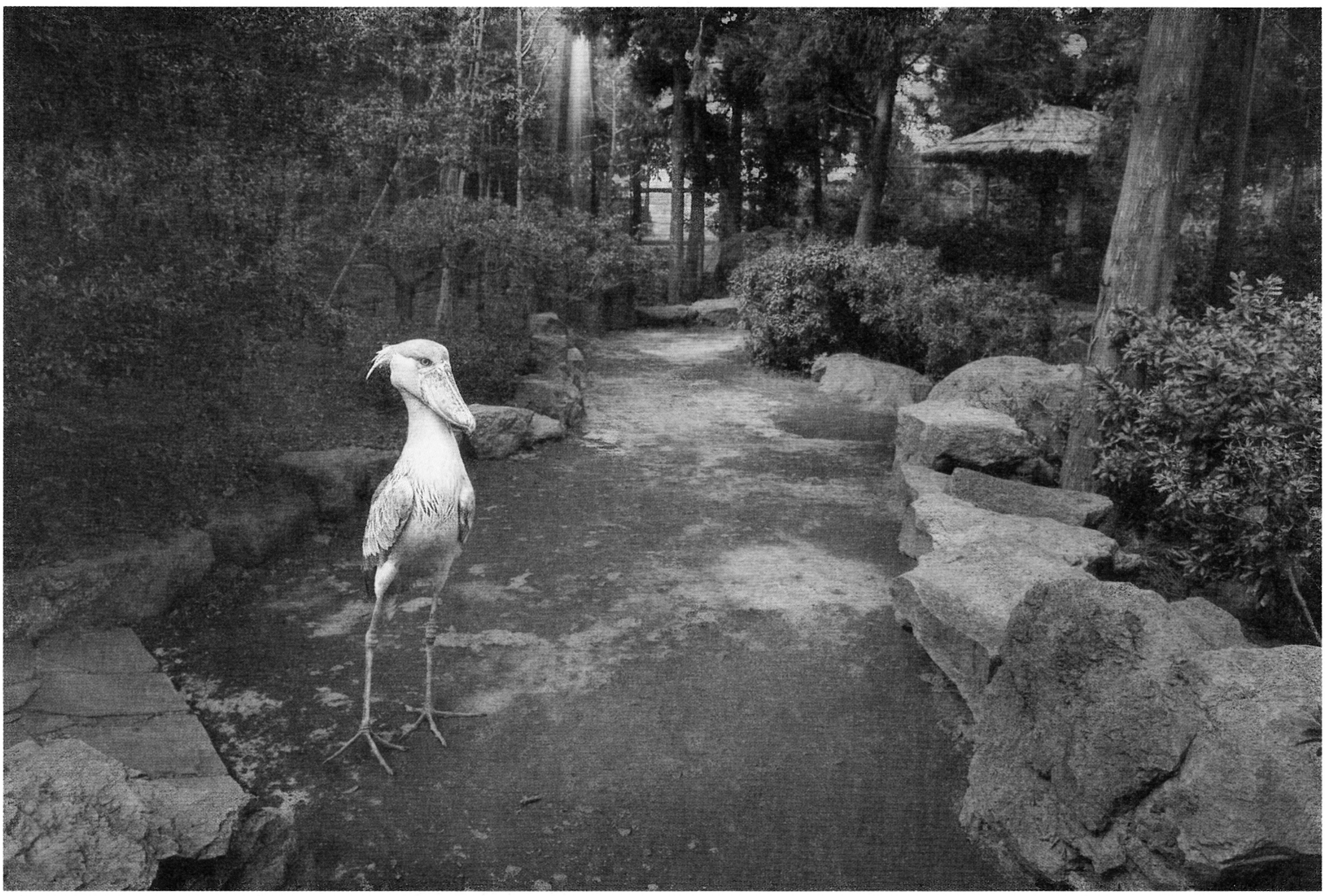
みんなを　おいて　どこかへ　いっちゃ

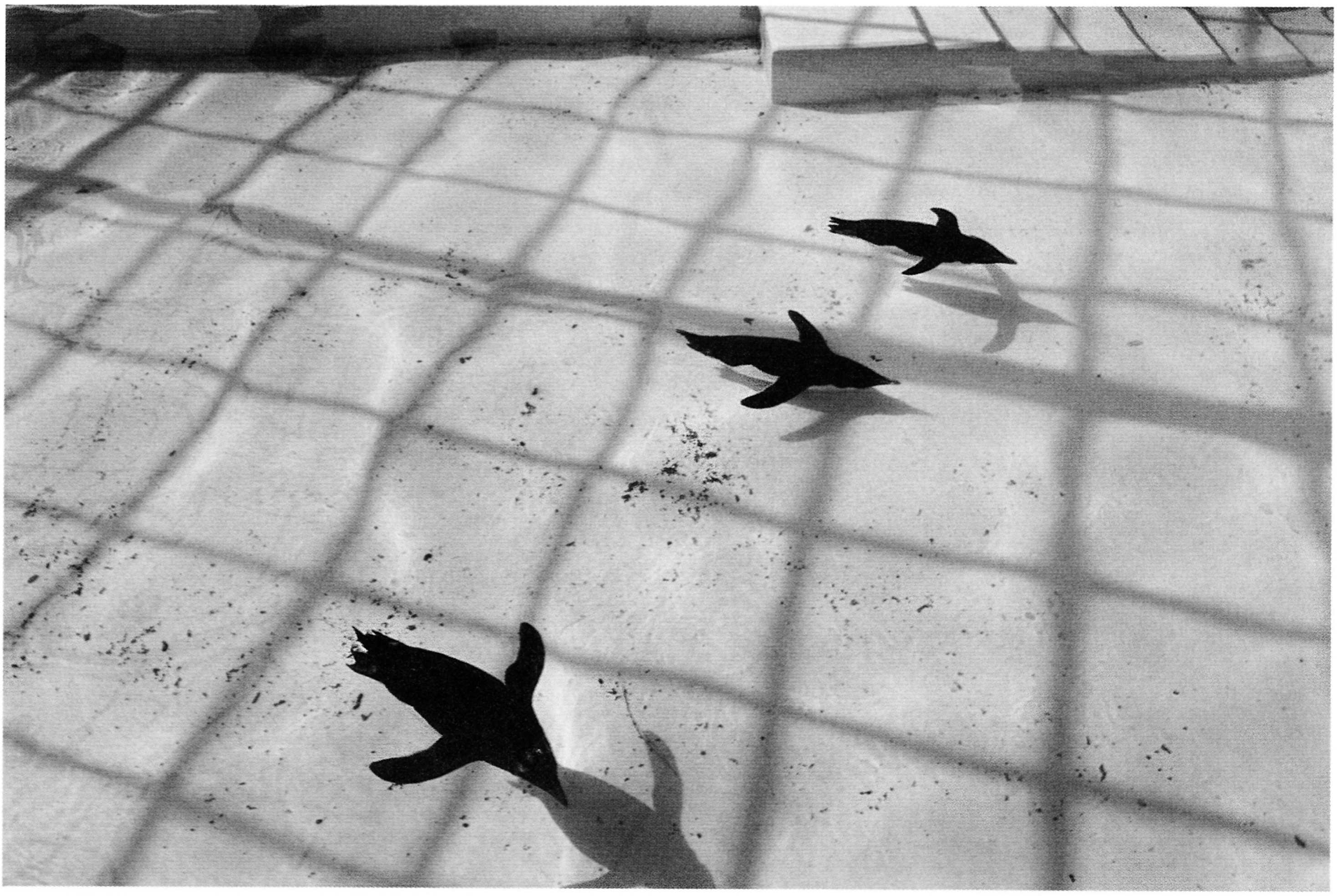
「動物園」



©TAKANOBU HAYASHI

林隆喜







はやし　たかのぶ　1946年中華人民共和国大連市生まれ　現在、東京綜合写真専門学校講師　個展「メヒコ」('85)「zoo&roof」('87)　写真集「zoo」('86)

このコーナーでは、これから写真家をめざす人の写真も募集しています。詳しくは、128ページをご覧ください。

新・人・登・場

津吉ゆうこ

Yuko Tsuyoshi

協力／Gallery House MAYA　撮影／川端　潔

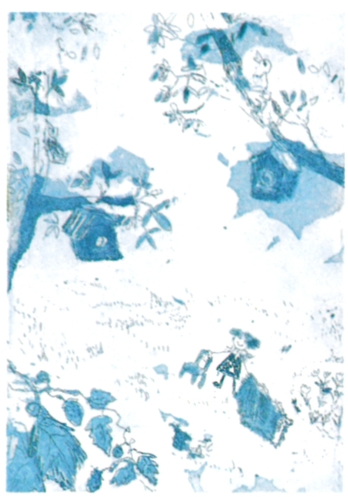
作品紹介

　東京・青山の、ギャラリーハウス・マヤ2で津吉ゆうこさんの作品に出会った時、やわらかなあわい色調にとてもなつかしいものを憶えました。それは古くささとは別の、こころがおだやかになっていくような、この絵の前では素直になってしまうような、不思議なぬくもりです。ゆったりと時が流れるギャラリーをひとまわりするうちに、私のこころはそのぬくもりでどんどん満たされてゆきました。こんな心地よさを、もっとたくさんの人に感じてもらえたら……そんな想いにかられて、津吉さんのアトリエを訪ねることにしたのです。

　初めてお会いした津吉さんは、彼女の作品を見た時の印象そのままの人。独特の雰囲気















'91カレンダー／上・額に入ったもの。中・右より順に1、2月、3、4月、5、6月。下・右より順に7、8月、9、10月、11、12月。絵6点に額つきで限定29個制作。1セット価格は2万2千円。御希望の方は、〒663兵庫県西宮市里中町3—11—23、津吉ゆうこさんまで。TEL 0798（40）6207





◀▼自分で製本した作品。
布張りの感じが暖かい。

津吉ゆうこ
1961年11月7日、兵庫県生まれ。1984年京都精華大学洋画科卒。小学校、養護学校の非常勤講師を経て、現在は自宅で幼児向けのお絵かき教室を開きながら制作活動を続けている。西宮市在住。



をかもしだしている線は、ソフトエッチング（銅版画）によるものでした。この手法は、いろいろある表現方法のなかで、線を生かした作品をと思って始めてみたら、たまたま自分に合っていたものだったとか。「エッチングなんて、薬品いっぱい使うから、体にはぜんぜん良くないのにね…好きだからやめられなくって」と苦笑します。

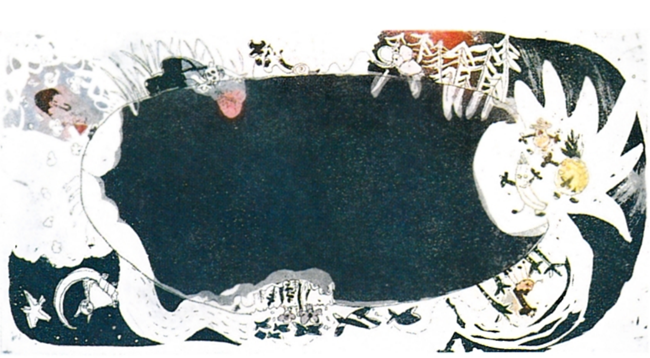
津吉さんは現在、″アーティスト″と″お絵かき教室の先生″の二足のわらじ。「子供の相手は体力勝負。でも、自分がやってみたい素材を使ったりと、いろいろ刺激もあります」と制作への意気も盛ん。「自然が好き。自然から感受したものを表現してみたい」そう目を輝かせます。来年には自作の絵本も出版される予定。「どんな人が見てくれて、どんな感想がくるか楽しみ」……期待と不安の入り混じった表情に、思わずこころの中でエールを送りたくなります。

「自分の好きな絵を好きなように描いていけたら、いちばん贅沢なことやと思います」柔らかな関西弁で語る口調からは、ひかえめな中にも作家としてやっていこうとする強い意志がうかがえました。（A）









上・右／ごーらんど
左／絵本『ひらけ風』より
下・右／ぞう
左／絵本『ひらけ風』より

ふとよむ詩

汲む
――Y・Yに――

茨木のり子

大人になるというのは
すれっからしになることだと
思い込んでいた少女の頃
立居振舞の美しい
発音の正確な
素敵な女のひとと会いました
そのひとは私の背のびを見すかしたように
なにげない話に言いました

初々しさが大切なの
人に対しても世の中に対しても
人を人とも思わなくなったとき
堕落が始るのね　堕ちてゆくのを
隠そうとしても　隠せなくなった人を何人も見ました

私はどきんとし
そして深く悟りました



大人になってもどぎまぎしたっていいんだな
ぎこちない挨拶　醜く赤くなる
失語症　なめらかでないしぐさ
子供の悪態にさえ傷ついてしまう
頼りない生牡蠣のような感受性
それらを鍛える必要は少しもなかったのだな
年老いても咲きたての薔薇　柔らかく
外にむかってひらかれるのこそ難しい
あらゆる仕事
すべてのいい仕事の核には
震える弱いアンテナが隠されている　きっと……
わたくしもかつてのあの人と同じくらいの年になりました
たちかえり
今もときどきその意味を
ひっそり汲むことがあるのです

絵　宮沢浩枝

クローズ・アップ

注目の翻訳家

第2回 金原端人さん

どうしても訳したい本がある。これを訳さないうちは死ねませんね。



初体験はハーレクイン

初めて子どもの本の翻訳をしたのは、今から5年前、僕が大学院を出た年です。僕の大学の先生が翻訳の勉強会っていうのをやってましてね、それに出てたんですよ。その先生が出版に関わってる人で、金原君も1冊やってみなさい、っていって題材をくれたんです。

オーストラリアのコリン・シールという作家の『さよならピンコー』という小説で、ペンギンがタンカー事故で流れ出た石油で死んじゃうっていう、シリアスな話でした。

その前も、大学院にいたころに、アルバイトのような感じでハーレクイン・ロマンスを3冊ほど訳したこともありました。でもこの時は、自分の名前を出すよりも女の名前の方がいいなって思ってペンネームにしたんで、金原瑞人(かねはらみずひと)という名前でやったのは『さよならピンコー』が最初です。

ハーレクインを訳したときのペンネームは、えーとね、鏡美香(かがみみか)っていうんですよ。僕のイニシャルがM・Kでしょ。だからそれにあわせて、あとはかわいい女の子のイメージが出ればいいなというだけで考えたんです。

こういうこと言っちゃっていいのかど

金原瑞人（かねはら・みずひと）
一九五四年岡山市生まれ。法政大学英文学専攻博士過程修了。現在、法政大学講師の職にあるほか、バベル翻訳学院でも教鞭をふるっている。訳書にC・シール『さよならピンコー』（ぬぷん児童図書出版）、P・マクラクラン『のっぽのサラ』C・ホープ『ブラック・スワン』、J・ハイウォーター『アンパオ』R・ウェストール『ブラッカムの爆撃機』（以上福武書店）など。趣味は陶器集め。

うか知りませんけど、ハーレクインの訳者の場合、女の名前だけど実は男っていうのがわりとあるんですよ。まあ女の人が訳してることの方が多いんですけどね。

それにあのシリーズは、ページ数と字詰めが最初から決められちゃってるから、翻訳してみて長すぎたり短かったりすると、翻訳の人が適当に文をカットしたり付け加えたりするんです。おもしろいシリーズですよね。

表現の幅を広げる

そのころのは別として、この前、今までに自分が訳した本を、15、6冊になるかな、全部読み返してみたんです。

そしたらね、自分では、訳すときにその作家の作風や文体によって翻訳も意識的に変えてるつもりだったんですけど、何かどれも同じだなって気がしてきてね、今それでちょっと困ってるんですよ。

表現の幅がせまいんですよね。どんな翻訳家でも、たとえば神宮輝夫さんみたいな人でもそうだと思うんですけど、自分が訳す文にはどうしても抜けられない部分があるんです。言ってみれば、お釈迦様のてのひらの上で「あっ、出られない」みたいなもんで。それを何とかしたいと思ってるんですよ。

翻訳をする人にもその人の文体ってのがあるから、作品によってはその文体がぴたりとはまる場合もあれば逆の場合もある。だから、自分の文体に合った作品ばかりを訳していればいいってことなんでしょうけど、僕は自分でどうしても訳したい作品というのがあって、文体が合ってる合ってないということより訳したいということが先に立ちますからね。

だから、こういう英語があってこれを訳すとしたらどういう文体がいいだろうか、といったときに表現の幅があればあった方がいいわけで、そろそろ僕もその辺の表現の幅をひろげなくちゃいけないなって思ったんです。

そのために、去年の11月に出た本から、なんですけどね、2人の共訳という形で出すことにしたんです。今、翻訳学院で毎週講師をやってるんですが、そこの教え子で、2、3人おもしろそうな人をピックアップして、いっしょにやるんです。

そうすると、自分では到底こういう表現方法は考えられないな、というのが簡単に出てきちゃうんです。表現の幅がずっと広がるわけですよ。その広がった中からどれを選ぶかってのは僕がやるわけなんですが、1人でやった本とくらべるとかなり文体が変わってますよ。

1人の方が能率はいいんですけど、何といっても勉強になるし、それに若い人に出てきてほしいなというのもあるんで、これからしばらくはそんな感じでやっていこうと思ってます。

今、一番注目する作家

今最も気になる作家というと、アメリカではジュマーク・ハイウォーター、イギリスではロバート・ウェストール、この2人です。2人とも福武書店のベスト・チョイス・シリーズから出てます。

ハイウォーターはインディアン出身の作家です。一見ファンタジー小説にみえるんだけど、ちょっと違うんです。我々が読めばファンタジックな世界に見えますが、そのファンタジーというのはインディアンの人たちにとっての現実なわけですから。ガルシア・マルケスなんかも好きでよく読んでたんですけど、あの世界にかなり似たものがありますね。

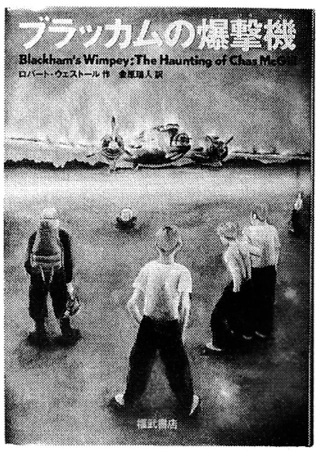
今までやった中でいちばん気に入ってるのがハイウォーターの『幻の馬』という小説で、3巻まで出ています。

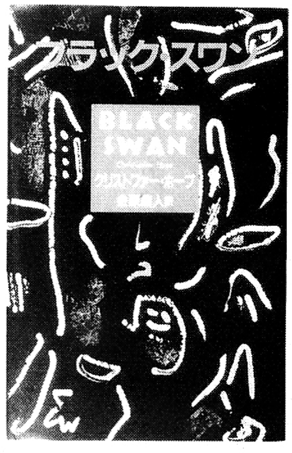


J・ハイウォーター作『幻の馬』シリーズの第1巻『伝説の日々』



左上：Ｐ・マクラクラン
『のっぽのサラ』
アメリカでニューベリー賞を受賞した愛の物語。
左下：Ｒ・ウェストール
『ブラッカムの爆撃機』
大戦下の少年たちの恐怖と友情を描く短編集。
右下：Ｃ・ホープ
『ブラック・スワン』
児童書ではないが、これも金原氏の強い希望により翻訳が実現した。





この話はインディアンが持ってるメンタリティの世界をベースに書かれていて、白人の侵略によってその世界が破壊されて、近代アメリカ社会にとって代わられるという展開になっています。それから、やがて主人公の少年が祖母の持っているインディアンのメンタリティを受け継いで、それをアメリカ社会の中でいかに生かしていくか、というような話になっていくんですけど、今、作者が4巻目を執筆中で、これを訳すまでは死ねないな、と思ってます。

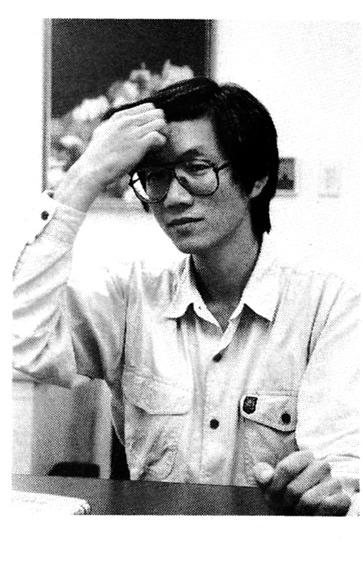
ただこういう本は、他の児童書の出版社ではなかなか出してもらえないみたいですよ。ウェストールにしても、たとえば「かかし」という作品があって、一応子どもの本なんですけど、話がきついんです。主人公の少年がとことんまで追いつめられるし、両親の寝るところをのぞく場面なんかもあったりして、とにかく日本人にはちょっときついかな、という感じはします。そのへんがいわゆる児童書の概念から外れてるのかもしれませんね。

どうして翻訳するのか

僕が子どもの本の翻訳に本腰入れるようになったのは福武書店のこのシリーズがあったからだとも言えます。翻訳という仕事自体、たまたま訳したい本があるからやっているというだけで、訳したい本がなくなったらやめてしまおうくらいに考えてるんです。児童書に関しては、翻訳のプロとしてやっていくのはかなり難しいことですしね。

だから、僕は「翻訳家になりたい」という気持ちがよくわからないんですよ。どうしても訳したい本があって、それを出してほしい、だから自分で訳しちゃう、というならわかるんですけど、そういうのがなくてただ翻訳家になりたい、というのは、何故なのかよくわからないんです。自分の場合と逆ですからね。

区別はしてません



それに、もともと子どもの本がそんなに好きってわけじゃないんですよ。感性的によくわからなくて。

自分が子どものころも、読んだ本といえば、『西遊記』『ジャングル・ブック』『十五少年漂流記』といった冒険ものとノンフィクションくらいのものでしたし。こういう仕事を始めてから勉強のために少しずつ読んでますけど、まだ『赤毛のアン』も読んでないくらいですから、児童書らしい児童書って、子どものころには読まなかったですね。

だから、たまたま見つけた訳したい本が、子ども向けの本であると出版社に判断されただけのことで、僕自身は子ども向けだとか大人向けだとかいう区別はしてません。好きな本だから訳してるというだけのことです。児童書をやってる人は、みんなそうだと思いますよ。

ご相談下さい!「本の110番」。

どうしてますか? こんなとき

物語を書いている途中に、ふと疑問が浮かんで、調べものをしたいと思った時、どうしてますか?

　手の届く範囲に資料がある時、その調べたいことに関して、とっても詳しい人が傍にいる時などは、その場で解決、スッキリ気分で次に進めます。でも、それでもどうしても解決できない時は、やっぱり〝書店〟や〝図書館〟などに行くことになりますね。

　ところで、自分の家(又は仕事場)の近くには、「ちゃんと調べものができる〝書店〟や〝図書館〟がある!」と、自信をもって言える方は、どれくらいいるでしょうか。大都市の中心地近くに住んでいる、仕事場があるという方は、それも可能かもしれません。でも、そんな恵まれた条件の方は、案外少ないのではないか……と思います。

　でも、とりあえず、電車なりバスなり、自家用車なり、自転車なりで、比較的大きな〝書店〟に向かいます。そこで店員さんに、

「○○について調べたいんですけど、載ってる本、こちらにありますか?」

と聞きます。その店員さんが、とても親切な方だったら、

「そうですねぇ」

と笑顔を浮かべながら、膨大な本の中から、目的の本を探すお手伝いをしてくれるかもしれません。或いは、自ら探し出して来て、うっすらと額に汗を浮かべて、

「これでよろしいでしょうか?」

と言ってくれるかもしれません。そうしたら、あなたは満足そうに頷いて、(少し高いなぁ)などと思いつつも、レジでお金を払って、家に帰ることができます。

　しかし、そう上手くいくことって、残念ながら稀ですね。大抵は、売り場をたらい回しにされた挙げ句、結局みつからなくて、それらしい本を取り寄せてみましょうか、ということになり、実際に手に入るのは、一、二週間後となる……。まあ、これもある意味では仕方のないことなのかもしれません。

諦めるのは まだ早い!

　でも、本当に「仕方のない」ことなのでしょうか。いいえ、諦めるのは、もう少し待ってからでも遅くはありません。

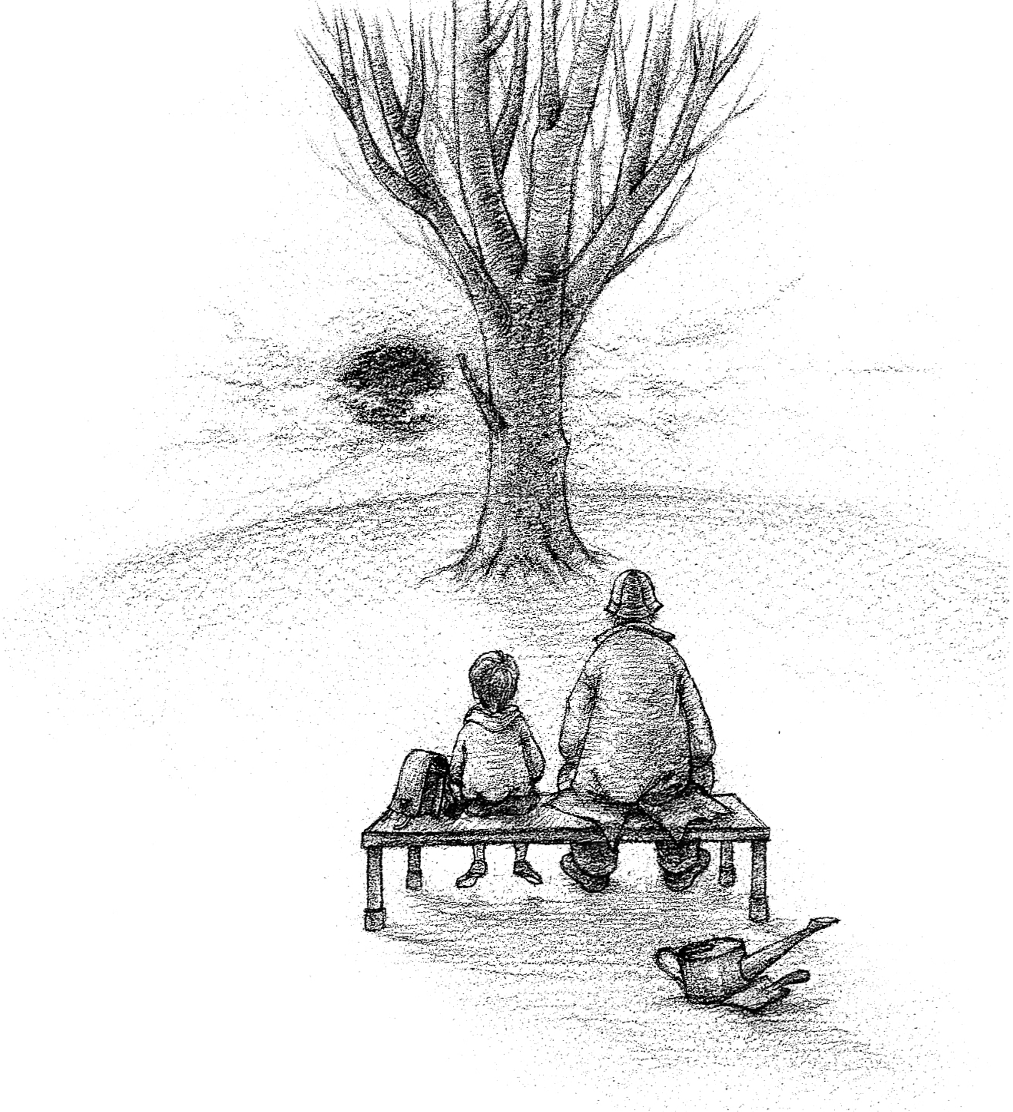
　こんな時便利なのが、会員制の本の通販システム「ゆう101(いちまるいち)クラブ」です。「なんだ、本の通販なら、他でもやってるゾ」という方もいるでしょう。その通りです。24時間、いつでも書籍・CD・カセットテープを受注できるシステムや、どこへでも、ご指定の場所に商品をお届けするシステムなどは、他でもやっているサービスですね。しかし、このクラブの最も優れた点は、電話一本、FAX一枚、ハガキ一枚で、本探しのお手伝いをしてくれる、という「本の110番」システムなのです。

　例えば、先程のように、物語を書いている途中に、調べものをしたいけれど、載ってる本が分からないような時も、電話で問い合わせれば、専任のブックアドバイザーが、可能な限り調査をして、関連本のリストを送ってくれます。その中から、必要なものがあれば、その場で注文することもできます。つまり、原稿執筆中に寒風吹きすさぶ中、自転車を飛ばして本屋さんに行くことも、店員に嫌な顔をされながら、売場をたらい回しにされることもない訳です。その他にも、例えば「息抜きにSFが読みたい」とか「○○というタイトルだけど著者が分からない」などというご注文にもお答えする、「ゆう101クラブ」は、有能な秘書代りとして、ご活用いただけるでしょう。



お問い合せ先

〒101−91 東京都千代田区神田郵便局
私書箱25号
㈱メディアブレーン内
ゆう101クラブ事務局
(03)3292−3539



読者投稿創作おはなし

チョコレートの木

文・高科正信　絵・齋藤はるみ

たかしがプロのおじさんに会ったのは、陽が落ちたのにまだほの明るい公園に、おきわすれたスーパーマリオをとりにもどったときだった。友だちにかしていたマリオのカセットをかえしてもらって、ベンチにおいたまま野球をしていたのだ。

夕飯どきがちかづくにつれ、ひとり、ふたりとぬけていった。陽の光はたっぷりのこっているのに、キャッチボールさえできなくなった。

それでもしばらくのあいだ、たかしはトイレのかべにボールを投げつけていたが、ひとりでするキャッチボールほどつまらないものはない。あきらめて家に帰ることにした。

これからの二時間あまり、たかしはほんとうのひとりきりになる。とうさんは月に一度、仕事先の仙台から帰ってくるだけだし、かあさんはおそうざいの店〈おいしんぼ〉で三時から八時まではたらいている。だから、たかしは首からさげた鍵を使ってマンションの部屋に入る。

きょうはなにをしてすごそうか……とドアノブに手をかけたとき、マリオをわすれてきたことに気づいた。あわててエレベーターに乗り、マンションをとびだし、公園までいっさんにかけた。走りながら、マリオはないかもしれないな……と思った。

息せききって公園についた。かたで呼吸をし、のどにつかえていたものを飲みくだした。気をしずめ、だれもいない公園に足をふみ入れた。

あそんでいたときにはわからなかったが、あまいかおりがたちこめている。まるで公園が、たかしに合わせて息をしているようだ。

たかしはマリオをおいたベンチに向かいながら、この公園を歩くのははじめてのような気がした。木も土も、遊具もベンチも、見なれた色とはちがっている。なにより、公園はあまい息でいっぱいだ。

ふじだなの下のベンチに、マリオはまだあった。かたの力がゆるゆるぬけた。

それはたかしの友だちではなくて、友だちを呼びよせるモノであった。とうさんはたかしがさびしくないようにと買ってくれたのだが、たかしはマリオを

もつことで友だちができた。そのマリオをなくすことは友だちを失うことでもあった。
ふと気がつくと、青いなかにもうっすらと赤みをおびていた空が、かわりはじめている。
たかしはマリオのカセットをにぎりしめ、公園をでようとした。
ジャッ　ジャッ
どきりとするような音がした。
ジャッ　ジャッ
音のする方をふり向くと、植えこみのあたりで黒いかたまりがうごいていた。こわいという気もちはおこらなかった。それどころか、音をだすかたまりがなになのかを知りたいと思っていた。
たかしはさし足で植えこみに向かった。
うごくかたまりはどうやら人のようだった。よく見ると、シャベルで穴をほっている。ジャッ、ジャッと穴をほっては、なにかを入れて土をかける。大切なものをうめているようなしぐさだ。
たかしがすぐそばまでちかよっているのに、その人は一心に穴をほっている。
「なに、してるんですか」
しぜんとことばがでた。
「ん？」
穴をほるよこ顔は五十くらいに見えたが、たかしに気づいてわらった顔ははたちそこそこにも思えた。
「種を植えてるのさ」
その人はジャッ、ジャッと音をたててからいい、種をひとつぶつまんで見せた。
「チョコレートの木だよ」
「チョコレートの木、ですか」
「ああ、わるいけど、そこのじょうろをとってくれないかい」
すこしはなれたところにあるじょうろをシャベルでさした。
「あ、はい」
たかしはマリオをポケットにおしこみ、じょうろをとりに走った。ブリキのじょうろにはたっぷり水が入っていた。歩くたびに水はたぷたぷ波立ち、先にある穴からシャワーのように水がでた。
はじめて会う人に自分から声をかけたことも、その人がチョコレートの木の種を植えていることも、たかしはへんだとは思わなかった。だれもいない部屋でかあさんの帰りを待つよりもいいと感じていた。
「きみにも種をまかせてあげよう」
たかしがじょうろをおじさんの足もとにおくと、おじさんは黒い上着のポケットから種をひとつぶとりだした。
「ほら、たかしくん。チョコレートの木の種だ。早く植えないとまに合わないぞ」
おじさんがたかしの手のひらにおいたのは、アーモンドチョコレートだった。はじめて会うおじさんはたかしの名を知っていて、チョコレートを土にうめるようすすめている。なぜ……とたずねることもできないまま、たかしは手のひらのチョコレートを穴にうめた。
「よし、これで全部植えたぞ」
おじさんはじょうろを手に立ち上がり、はしからひとつずつ、ていねいに水をまいていった。それから、
「たかしくんもしてごらん」
と、かるくなったじょうろをさしだした。
「いまの時間をのがしたら、チョコレートの木は育たないんだ。キンモクセイのひらくオーマガトキ」
「オーマガトキ？」
「ああ。たったいま、この色のこの時間、つまり、不思議の時間てこと。チョコレートの木は気むずかし屋でね、オーマガトキ、キンモクセイのかおりをすわせてやらないと、あまい実をつけないんだ」
「あ、あの」



「わかってる。わたしはプロ、種を植えるプロだ。そう呼んでくれ。あんパンの木も植えるし、わたがしの木も育てる。いちばんむずかしいのは消去草（きえさりそう）だ」

「キエサリソウ、ですか」

「ああ、こいつは四六時中見ていないと、あっというまにすがたを消しちまうんだ。消去草の種が見えなかったら、植えることもできないだろう」

プロと名のったおじさんは、さあて、と大きく伸びをした。ひょろりと伸びた木のように、おじさんは背が高かった。

「ひさびさの大仕事だったな。でも、たかしくんが手伝ってくれたんで、助かったよ」

おじさんのうしろに広がる夕空はすでに赤みを失い、ふかいなすび色にかわっている。公園には明かりがともり、あたりは夜の気配でいっぱいだ。

不思議の時間はもうおわったのだろうか………たかしがぼんやり考えていると、

「おれいといっちゃなんだけど、あした、夕飯にたかしくんを招待しよう」

プロのおじさんはくたびれた上着のえりをそろえてから、じょうろを受けとった。

「で、でも、ぼく………」



「わかってる。どうしてわたしがきみのことを知ってるのかって思ってるんだろう。こわいおじさんじゃないかって」

「そ、そういうわけじゃ」

「松野たかし、桜小学校四年生、おとうさんは仕事で月に一度しか帰らない、ことになってる。おかあさんはそうざい屋でパートタイマーだ。きみはさびしい子どもで、部屋のかべとキャッチボール。マリオはもうあきたけど、友だちをなくしたくはない」

プロのおじさんは、ブリキのじょうろでたかしのポケットをさし、そいつをくるくる回した。のこっていた水が上着にかかったが、平気のようだった。

「いいんだ、いいんだ。わたしはきみのマンションのハチマルマル号室に住んでいる。つまりきみの部屋の上ってわけだ。かべにボールのあたる音や、マリオのコインをとる音が、わたしにはとてもよく聞こえる」

そうだ、これをあげよう、とプロのおじさんがいった。

おじさんは上着のうちポケットをさぐった。それから親指とひとさし指でつまんで見せたのは、青いガラス玉のついた、オモチャのゆびわだった。

「こいつはいのちのゆびわだ。あした、ゆびわの色に赤と黄と群青色がまざる。そのときがオーマガトキだ。いいね、色がかわらないとわたしには会えない。

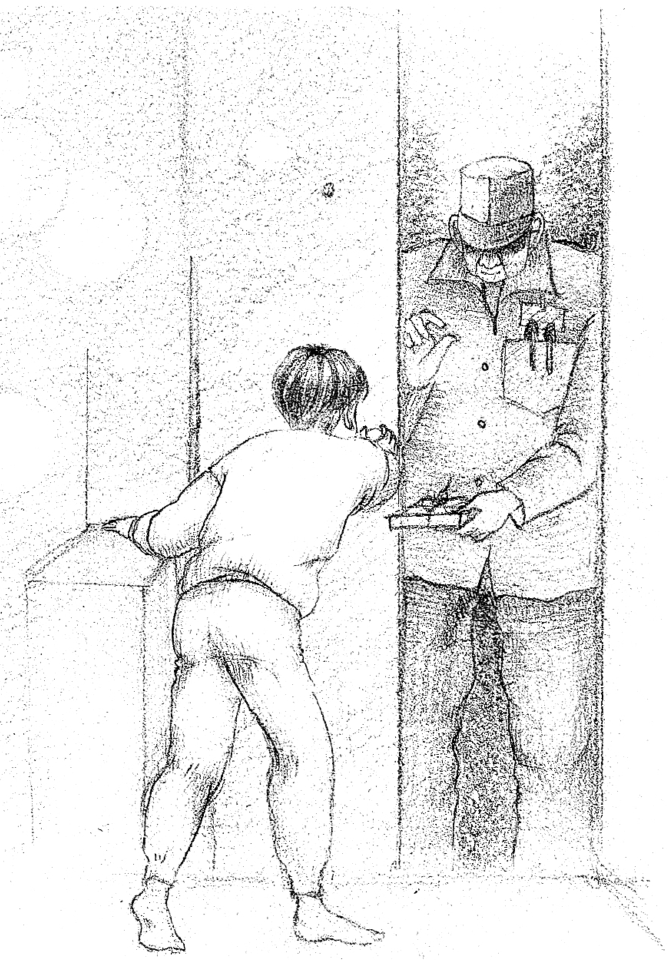
エレベーターにのって、〈8〉のボタンをおしなさい」
　プロのおじさんはそういって、いのちのゆびわをたかしににぎらせた。
「わたしはこれから、しあわせの種をさがしにいかなくちゃならない。しあわせの種は、ひとつ飲めばひとつしあわせになる。だからといって、百つぶも千つぶも、欲ばって飲んじゃいけない。もっとも、しあわせの種をひとつぶ手に入れるのもむずかしいがね」
　わかるね、とプロのおじさんは片目をつぶり、ひとさし指を顔のよこで立てた。
「いいかい。もしきみがわたしのことをだれかにしゃべったら、わたしはきみには会えなくなる。ゆびわも消えてなくなる」
　念をおすようにそれだけいうと、おじさんは、シャベルとじょうろを両手にもって、すっかり暖かくなった公園からすうっといなくなった。

　部屋に帰ってからも、たかしはプロのおじさんに会ったことが半分信じられなかった。アーモンドチョコレートがチョコレートの木の種で、オモチャのゆびわがいのちのゆびわだなんて。ぼくの住むマンションは七階建てで八階なんかない。エレベーターは〈7〉まで、さっきもちゃんとたしかめた。
　だけど……プロのおじさんに会ったのはゆめなんかじゃない。オモチャにしろ、ゆびわだってここにある。プロのおじさんはどうしてぼくの家のことを知っていたんだろう……。
　たかしはほおづえをつき、べんきょうづくえにおいたマリオのカセットと安っぽく青いゆびわをぼんやりながめる。そして上目づかいに天井を見る。
　プロのおじさんのさがしている〝しあわせの種〟って、どんなのだろう。もしそれがほんとうにあって、ひとつぶ食べればひとつしあわせになるのなら、ぼくは〝しあわせの種〟が欲しい。とうさんは毎日家に帰ってきて、かあさんはずっと家にいて、ぼくはひとりぼっちの時間はなくなる。
　たかしはいのちのゆびわをひとさし指にはめ、ベッドにねころんだ。早くあしたになって、ゆびわの色がかわればいいと思った。そしてハチマルマルに向かっていのちのゆびわをつきあげた。



　つぎの日。授業をなんとかやりすごし、放課後はだれともあそばなかった。つきあいわるいな、と文明にいわれた。マリオしようぜ、と新からさそわれた。
「大事な約束、あるんだ」
　たかしはいつになくきっぱりといった。これまで、だれかのさそいをことわることはなかった。友だちをなくすくらいなら、多少気がすすまなくてもその輪にくわわった。だけどきょうだけはちがっている。プロのおじさんに招待されているんだ。約束は守らなければいけない。おじさんのところへ行くことも、おじさんのことをだれにもしゃべっちゃいけないことも。
　たかしはまっすぐ家に帰った。いのちのゆびわをつくえにおき、色がかわるのをじっと待った。
　待つことは苦にならない。かあさんが帰るのを待つ。はじめのうちは、このまま帰ってこないんじゃないかとこわかった。でも、いつもきまった時間に帰ってくることがわかってからは、こわさだけはなくなった。
「ぼくにも妹か弟がいればよかったのにね」

仕事に行きだしたばかりのころ、立ちっぱなしはつかれるわ、と投げだした足をさするかあさんに、なにげなくいったことがあった。
そしたら、かあさんはさすっていた手をとめた。うつむき、下くちびるを小さくかみ、なにもいわなかった。しばらくして、
「そうね、会いたければ、会ってもいいわ」
と、気味のわるいことをいい、目をふせてわらった。
ゆびわは青い。
たかしはベッドにあおむけになり、天井にうすくついたしみを目でなぞった。
きのうの夜、この上にプロのおじさんがいて、かべとキャッチボールをする音や、マリオで気をまぎらわせる音を聞かれていたと思ったら、なかなか眠れなかった。気もちがひとりでにたかぶった。天井のしみをにらみつけ、耳をすまし、プロのおじさんの気配を感じとろうとつとめた。
目をこらせばこらすほど、耳をすませばすますほど、たかしはひとりきりで、上にも下にも、たかしのまわりにはだれもいないという思いがますばかりだった。

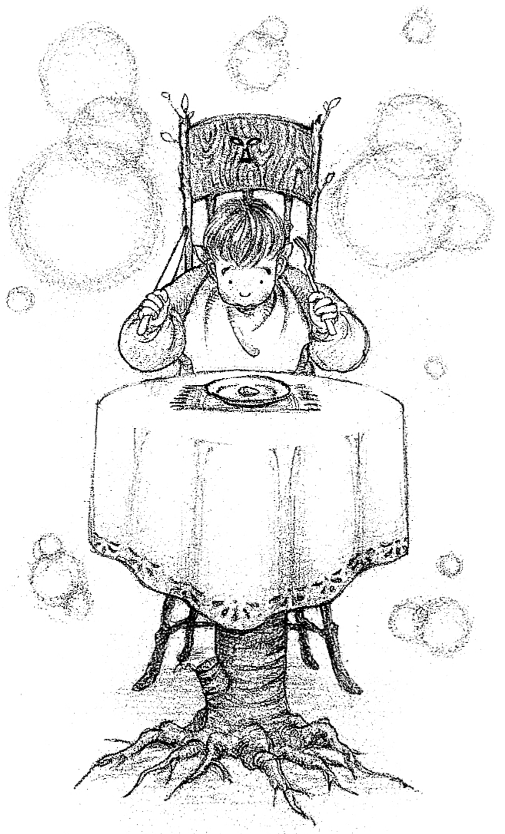


しんと静かな部屋に早い時間からいると、きのうの眠気がそろりとやってきた。すう、ぶらっときて、すとんと落ちる。からだの力がゆっくり抜けて、いきなりびくりとする。
いけない——と思ってまぶたをこじあける。天井がま下に見える。まっさかさまに落ちていきそうだ。ベッドの手すりをとっさにつかむ。
指にはめたいのちのゆびわを見る。ゆびわは青いガラス玉のままだ。
たかしはベッドからおきあがった。やけにのどがかわいていた。台所に向かい、れいぞうこをあけた。缶入りのウーロン茶がある。息もつかずに飲み干すと、いくらかからだがしゃんとした。
ドアチャイムが鳴った。
インタホンにでると「宅配便です」という声がした。
鍵をあけハンコをわたし、荷物を受けとった。手のひらよりすこし大きめのそれはたかしあてになっていた。
中を見なくても、たかしにはそれがなになのかわかる。とうさんがたかしのために送ってくれた、新しいマリオのカセットにきまっている。
たかしがほんとうに欲しいのは、新しいカセットなんかじゃない。そりゃあ、新しいのがあれば、しばらくは友だちをつなぎとめておくこともできる。
もっと小さな物でいい、もっと小さくてお金では買えないようなもの……。たとえば、たとえばプロのおじさんがさがしているという、〝しあわせの種〟だ。欲ばったりしないから、たったのひとつぶ〝しあわせの種〟が欲しい。
たかしはとうさんからのおくり物をベッドにほうり投げた。けっして欲しい物じゃないのに、かあさんが帰るまでの時間、それをするだろう。友だちにか

すだろう。そんな自分をわかっていることがたかしにはやりきれない。
ゆびわは青い。
こごえた手をあたためるように、いのちのゆびわに息を吹きかけた。親指に力をこめ、色がかわれと念じた。
ゆびわは青く安っぽいままだ。
プロのおじさんはいないんだ。この部屋の上になんかいるわけはない。チョコレートの木だなんて、いのちのゆびわだなんて、しあわせの種だなんて、みんなうそ八百なんだ……。
たかしはゆびわをはずし、新しいカセットと同じようにベッドにほうった。ゆびわは小さくはずみ、くるりと半回転してカセットのそばに並んだ。
そのゆびわに、心なしか明かりが灯ったような気がした。まさか、そんな……と思いつつベッドにはらばいになり、両手ですくいとるようにした。
たしかに光っている。オモチャのゆびわに、針の先に灯したほどの明かりがまぎれもなくまたたいている。
たかしはいのちのゆびわを軽くにぎりしめ、立ちあがった。いても立ってもいられない気もちで部屋をでた。
エレベーターに向かってろうかを歩く。手の中では灯りはじめていのちのゆびわがとくとく鳴っている。そいつはたかしとへその緒でつながっているような気さえする。
たかしはボタンを押した。1、2、3とエレベーターが登ってくる。だれも乗っていませんように……と、ゆびわをつよくにぎりしめた。
ドアがひらきだれもいないことがわかると、たかしは素早く乗りこみ〈閉〉のボタンを押した。
ほっとため息がでた。ゆるゆると手をひらいた。いのちのゆびわは手のひらで、プロのおじさんがいっていたとおり光っていた。青に赤と黄と群青色がまじりとけ合い、生きもののようにうごめいていた。
行かなくちゃ……たかしはかべに目を移した。すると、階を示すボタンにはまぎれもなく〈8〉がある。たかしはためらうことなく〈8〉を押した。

エレベーターのドアがあくと、そこは広びろとした部屋だった。いや部屋というよりもむしろ、マンションのかべをすべて打ちぬいてつくった倉庫という感じだった。
たかしはエレベーターの内側で自分の目が信じられない。一歩がふみだせない。
そこへプロのおじさんがすべるように現れた。おじさんはローラースケートをはき、顔には水中メガネとシュノーケルをつけている。
「そんな箱のなかにいつまでもいないで、こっちへおいで」
たかしがあっけにとられていると、プロのおじさんはシュノーケルをつけたまま、水中でしゃべるような声をだした。
「タマネギをきざんでいたんだ。かなしくもないのに涙がでるんで、いつもこいつを使うんだ」
おじさんは水中メガネとシュノーケルをはずしていい、たかしを招き入れるしぐさをした。
「さ」
たかしはだれかに背中を押されるようにハチマルマル号室へと入っていった。





「たかし……たかし」

かたを何度かゆすられて、たかしは自分の部屋のベッドにいることに気づいた。呼んでいたのはかあさんで、プロのおじさんではなかった。

「おじさん……は……」

「おじさん?」

「な、なんでもない」

たかしは半分うすぼんやりとした気分で、あとの半分はしっかりしなくちゃという気持ちで、ベッドからおきあがった。

「あら。オモチャのゆびわ」

かあさんはそういってベッドに手を伸ばした。たかしがしまったと思ったときには、かあさんはすでにゆびわを小指にはめていた。

「すぐに食事にするわね」

かたで風を切るように、かあさんは軽やかに部屋からでていった。いつものかあさんとはまるでちがって見えた。

プロのおじさんの部屋から気がつけば自分のベッドにいて、思いがけないかあさんの身のこなしにおどろいて、たかしはゆびわをかえしてもらうきっかけをなくした。ゆびわのことを聞かれるかもしれない。だけどおじさんとのことは話せない。約束だ。

でも……どうやって部屋にもどったんだろう。ハチマルマル号室に招待されておじさんの手料理を食べた。広い部屋いっぱいにゆったりと音楽が流れていた。ディーバ(女神)の歌うアリアだとおじさんはいった。パンにバターをぬりながら、この瞬間こそ〝無〟だともいった。

それから……本日のメインディッシュでずいぶん方々捜したといって、しあわせの種がひとつぶのった皿をたかしの前においた。そこまではっきりとおぼえている。たしかそのあと、緑色のその種を口もとまで運んだところで……

「たかし」と呼ばれたような気がする。しあわせの種は食べたのだろうか、それとも食べずに部屋へもどったのだろうか……。

「用意ができたわ」

かあさんがドアから首をのぞかせた。

そうざい店でかあさんがはたらきはじめてから、夜の食事は店の売れのこりがおかずになった。同じものがつづくこともあったが、たかしはそれがいやではなかった。たまらないのは、毎晩とうさんのぶんを用意して、毎晩それを食べるひとがいないことだった。かあさんは毎晩ため息をつき、毎晩流しに捨てた。

きょうのかあさんは色つやがいい。背すじもしゃんと伸びている。

「かあさんね、きめたの」

たかしのゆびわを自分の小指でくるくる回しながら、かあさんはきっぱりといった。

「きめたって?」

たかしは箸をもつ手をとめてたずねた。

「あきあきしたの、待つことに。月に一、二度、くつだけが帰ってくるっていうんじゃあ、わたしはなんのためにそのくつを待っているんだろう。とうさんにはね、かあさんのほかに女のひとがいるの。もちろん、結婚してるのはかあさんとだから、こっちが本物よ。でも、とうさんはあっちがいいみたい。子どもだっているっていうしね」

かあさんもいただこう、と茶わんをとり、ひじきの煮物に箸を伸ばした。それからもくもくと食べはじめた。五目豆にコロッケ、きんぴらごぼうにじゃがいものサラダ……と、いきおいよく口に運んだ。かあさんは気もちのいいほど食べっぷりがよかった。

穴のあくほどたかしが見つめていると、いつもとちがうかあさんは自分の食べっぷりに満足したのか箸をおき、

「どうしてわたしはこんな目に会うんだろ、かあさんはこのテーブルでいつもなげいていたわ。でもね、あるとききゅうに思ったの。極楽トンボでいこうって。ほほえみは勇気のあかし、かなしみは弱気のしるしってね」

そりゃあもちろん、とつづけていう。

「たかしは自分の思うようにすればいいの。きめたのはかあさんで、たかしにはたかしの選択があるものね。このままかあさんと暮らしてもいいし、とうさんのところに行くのもいい。ほら、前に、妹か弟がいればいいなっていってたじゃない」

かあさんは薬指にはめていた結婚ゆびわをねじるようにぬいた。そして左手ひとさし指でゆびわをテーブルに立て、右のひとさし指でそいつをいきおいよくはじいた。

ゆびわは小さな地球となって弧を描き、輪にかわり、ぐらぐらゆれだし、テーブルをはげしく打ち、やがてとまった。

「結婚ゆびわなんて、しあわせのゆびわなんかじゃなかった。十一年たってやっと気づいたわ。オモチャのゆびわでだって、しあわせはつかみとることができるのよ」

はい、これ、とたかしにいのちのゆびわを手わたした。かあさんの手が小きざみにふるえている。

「だからね、だから、一度だけ思いっきり泣かせてね」

いいおわらないうちに、かあさんの目から水晶玉のような涙がぽたぽたぽたぽた落ちはじめた。いっぱいに見ひらいたその目はかれることのない泉のようで、流れても流れてもまだ涙は流れつづけた。

なりふりかまわずに泣くかあさんがたかしのからだにしみこんでくる。たかしはどうすればいいのかなにをいえばいいのかわからない。わからないまま、いま目の前にいるかあさんがたまらなくすきだと感じていた。

かあさんはずいぶん長いあいだ泣いていたが、はいおしまい、といったふうにぴたりと泣きやんだ。それからひとさし指のつけ根で下まぶたをごしごしすると、はればれとした顔になった。

「一生ぶん泣いちゃったから、かあさん、もう泣かない。かなしみは弱気のしるし、ほほえみは勇気のあかし」

両手のひらで湯のみ茶わんをかかえこみ、かあさんは一息に飲み干した。

思いたったら早かった。三日後にはかあさんはとうさんと連絡を取り合い、一週間後には正式に別れた。

「ハンコひとつ押し合うだけだもの。いままでどうして気づかなかったのかしら」

とかあさんがいうだけあって、早送りビデオのようにことが運んだ。

養育費を受けとらないかわり、かあさんはマンションをそっくりそのままもらうことにした。住むところの心配をせずに、自分のかせいだお金で親子ふたりが暮らしたいと、かあさんは考えたからだ。

かあさんはそうざい店をやめた。以前つとめていたデザイン事務所に復職がきまったのだ。九時から五時までの仕事なので、たかしにさびしい思いをさせないですむというのがかあさんのいいぶんだった。

「自分の名前を取りもどしてから、かあさん、元気がでてきたわ」

かあさんは松野姓を捨て、結婚前の結城あかりにもどった。

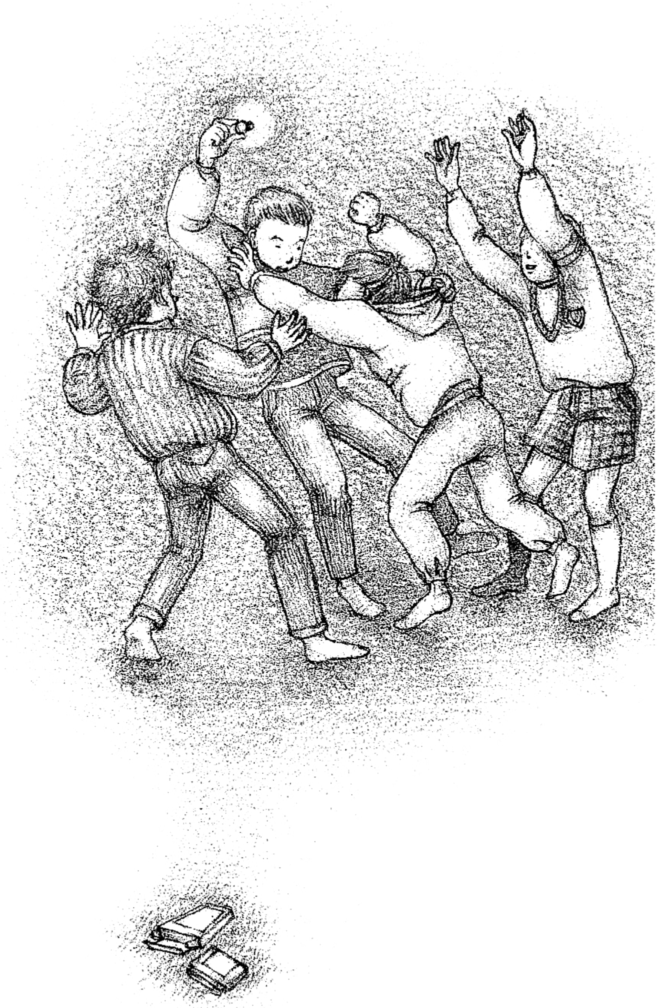
「これからは、自分のためにつくって、自分のために食べるわ。わたしの人生なんだものね」

というとおり、かあさんはよく食べるようになった。はたらいたぶんおなかがすき、おなかがすいたぶん自分でつくって食べたいと思うのだそうだ。

名前がかわったことについては、

「松野くんは事情があって、きょうから結城くんと名前がかわりました。みなさん、いままでいじょうに、結城くんと仲よくしてあげてくださいね」
と先生がいってたかしのかたに手をおき、わけもなくなみだがでそうになったときをのぞけば、たかしはそれほどわるい気はしていない。
それまで話したこともなかった女の子が、
「元気だしてね、結城くん」と声をかけてきたり、すれちがいざま、「おれんちもそうなんだ」とつぶやいていく子がいたりした。
「結城」という呪文のききめは、マリオをこえてはるかにつよかった。「結城くん」と呼ばれてとまどうのは、新しい姓になじめないからではなく、「ユーキクン」というひびきが自分に向けられていることを実感し、新しい友だちと新しい自分を発見したことにおどろいているからにほかならなかった。
たかしは、プロのおじさんにもらったいのちのゆびわを、マリオといっしょにつくえのひきだしにしまった。不思議の時間にはかあさんが家にいる。首から鍵をさげていても、待つだけの時間はなくなった。それに、ゆびわの色さえかわれば、いつだってプロのおじさんに会いにいけるという安心感があった。

秋もおわりにちかい日曜日、たかしは友だちを家に招いた。かあさんはもとの仕事にようやくなれ、気もちにゆとりができた。
「たまにはお友だちを連れてらっしゃいよ、ごちそうつくるから」
と、かあさんにすすめられたのだ。
友だちの家に招かれることも、友だちを家に呼ぶこともなかった。家をいききするのはマリオのカセットだけだった。
かあさんがうでをふるった昼食をガヤガヤと食べ、おやつのバナナパイもぺろりとたいらげてしまったあとにことはおこった。
することも話すこともない、手もちぶさたの時間がやってきた。
「ひさしぶりに、みんなでマリオしない？」
だれかがいった。
部屋の空気さえもてあましていたときだけに、みんな、やろうやろうと口ぐちにいいだした。
「おれ、うでをあげたよ」
新がいうと、
「うらワザおしえてやったからな」
文明が得意気につけたした。
「じゃあ」
と、たかしがひきだしをあけたそのかたごしに、
「あれえ。結城くん、オモチャのゆびわなんかもってるの」
とんきょうな声がした。
しまったと思ったときには、文明がゆびわをつまみあげていた。
「ふうん。たかしって、こんな趣味があったのか」
文明はゆびわをためつすがめつしてから、たかしににやりとわらいかけた。
「買ったのかよ、これ」
「女の子にもらったンじゃないのか」
「このごろ、女の子にモテてるからな」



「ユウキクーン、なんてね」
「ますますあやしいな」
文明たちにいらぬ詮索をされることは平気だった。けれど、かえしてもらえないとなるとことはちがう。二度とプロのおじさんに会えない、そんな気がつよくした。
「かえせよ」
いうより早くとびかかった。
と、文明は新にゆびわを投げた。ひょいひょいひょいと、ゆびわは回されていく。
「やめろ」
がむしゃらにぶつかった。ゆかにたおれこみもみ合いになった。
文明の指からとりかえそうとしたとき、青いガラス玉が台からぽろんと落ちた。
「ああっ」
思わず叫んだ。
「か、帰れ、みんな帰ってくれ」
はらばいのまま文明を見すえていった。
「ムキになるなよな」
「そうだよ、たかがオモチャのゆびわだろ」
「帰ってくれ！」
目の前にある足に向かって、たかしは声をはりあげた。いつまでも耳鳴りがしていた。
「おやおや。ずいぶんにぎやかだこと」
かあさんが部屋をのぞいていった。
「おじゃましました」
「ごちそうさまでした」
「それじゃ、失礼します」
みんな、早口でいって帰ってしまった。

「けんかしたのね」
かあさんはかべにもたれてうでを組んだ。
「けんかするのもいいわ。かあさんなんか、いつだってがまんしていたもの。けんかするっていうのは、あきらめないことだし、わかり合おうとすることなんだわ」
「でてってよ」
「えっ？」
「かあさんも、でてってよ」
はっとしたように、かあさんは口をつぐんだ。そして、
「ごめんなさい、わかったような口利いて」
ほんのいっしゅんかなしい顔になり、こういうことって自分でなんとかするものよね、と小さくつぶやいてドアを閉めた。
部屋はがらんとして、またいつもの部屋にもどった。
たかしはガラス玉とリングを拾いあげた。いのちのゆびわは、本物の、安っぽいただのオモチャのようだった。これじゃ、ゆびわの色はかわりっこない………。プロのおじさんなンてさいしょからいなかったンだ。しあわせの種は、しあわせの種はぼくの口に入らなかったンだ………。そう思ったら、たかしは無性にプロのおじさんに会いたくなった。
こわれたゆびわをかたくにぎり、たかしは部屋をとびだした。ろうかをつっ切った。階段を段抜かしで転がるように降りた。
どこへ？　ハチマルマル号室にはもういけない。こわれたゆびわでいくら待っても、不思議の時間はもうこない。
いく先はひとつしかなかった。プロのおじさんにはじめて会った、チョコレートの木の種が植わっているあの場所だ。
たかしはかけた。かけてかけて、かけた。
ふじだなの下のベンチにおじさんはいた。向こうむきにうでまくらをしていた。

たかしはベンチにちかづいた。ゆびわをこわしたことをあやまろうと思った。しばらく会いにこなかったことも。それから、いまはなにを育てているのかをたずねようと思った。

石だたみを歩くと枯れ葉が鳴った。

おじさんがむっくりとおきあがった。

おじ……といいかけて足がすくんだ。おじさんはプロのおじさんではなかった。

かみは鳥の巣のようにからみ合い、ひげは伸び放題だった。顔は油焼けし、目は充血していた。

おじさんは顔をゆがめ大あくびをした。歯が一本もなかった。おじさんはめんどくさそうによごれた首すじをかき、また向こうむきになってねそべった。

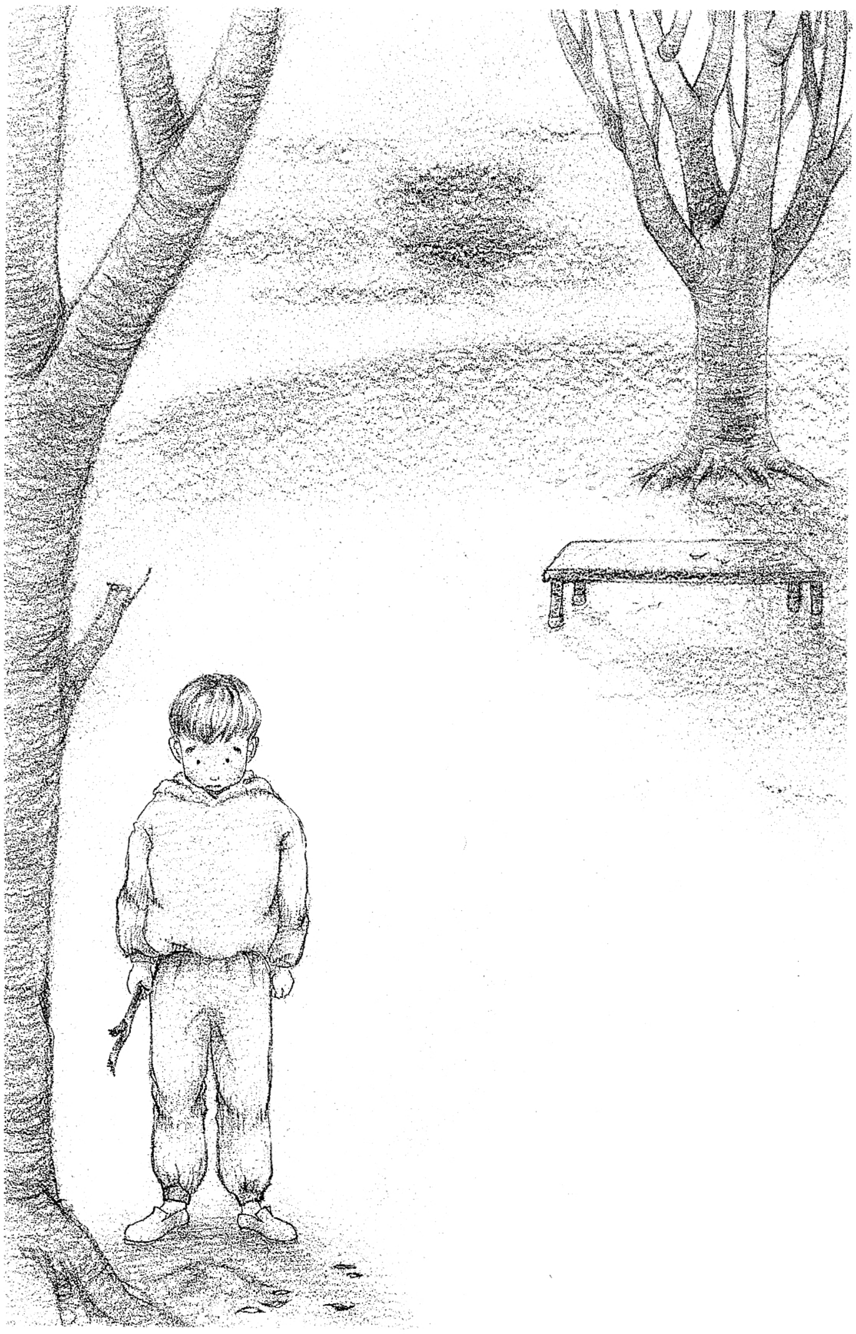
力が抜けた。ゆるんだ手のひらからいのちのゆびわが落ちた。

たかしはゆびわを拾い、プロのおじさんに会ったあの場所へと歩いた。チョコレートの木の種はどれも芽をだしていなかった。落ちていた枯れ枝で土をほり、こわれたゆびわをていねいにうめた。

―さようなら、プロのおじさん。

声にださずにいった。

―おわり―



著者略歴

高科正信……1953年１月11日、愛媛県に生まれる。

大阪で育ち、大阪教育大学を卒業後、小学校の教員となる。11年間の教員生活の後、児童文学を志し、執筆活動に入る。

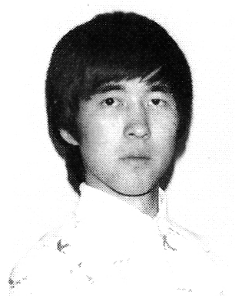
著書としては、「タンポポコーヒーは太陽のにおい」（理論社）が刊行されており、３月には教育画劇から、「ブンとエイととうちゃんと」が出版予定である。

齋藤はるみ……1969年、富山県に生まれる。高校卒業後、上京し、講談社フェーマススクールズで童画を学ぶ。

1990年の卒業展で、その作品が編集部の目にとまり、アルマジロ創刊号の「アラビアのおはなし」の挿絵を担当した。

創作倶楽部

第二回講師



星谷 仁さん

（童話作家）

アイディアについての一考察

僕はファンタジーやSF等を中心に描いているのだが、その作品の面白さを大きく左右する要素の一つに《アイディア》がある。

アイディア――読者の興味を引きつける、物語の《しかけ》としての工夫である。

『主人公が間違えてかけた電話にでたのは、なんとネコだった』（岩崎書店刊『ねこにかかったでんわ』）、『天井を飛び回るハナバチの軌跡が文字になっている⁉――ハナバチの空中文字がファンタジーの糸口となる物語』（岩崎書店刊『小さなまじょのさがしもの』）などは、僕が気に入っている作品の導入で使ったアイディアだが、導入部だけでなく、意外な展開、結末のどんでん返し（オチ）にいたるまで、一つの作品の中には色々なアイディアが盛り込まれる。

少なくとも僕の場合に限っていえば、創作の上で一番ウエイトを占めるのがアイディアの捕捉である。アイディア捕捉というのは、創作をする人であれば誰でも、ジャンルのいかんを問わず苦労する問題だと思う。

そこで今回は、このアイディアについて、僕なりに考えてきたことを書いてみたい。

●□▽ アイディアに公式はあるのか? ●□△

良いアイディアを得るための確かな方法というのはあるのだろうか?――創作を志している人なら、誰でも一度や二度は真剣に考えるテーマだろう。良いアイディアが量産できれば、描く作品の質・量は格段にアップすることは間違いない。

アイディアを絞り出す方法として、よく言われるのが次のような公式めいた思考法である。

◎異質なものを組み合わせる……例えば伝説と科学といったような本来異質なものを結びつける。『河童は実は宇宙人だった』とする設定などはこれである。

◎逆を考える……「犬が人を噛んだのではニュースにならないが、人が犬に噛みつけばニュースになる」と言われるように、当たり前の事象でも、立場や因果関係の逆転を考えることによって意外性を引き出そうというもの。

◎もし～～なら……を考えることによって、発想の転換をはかろうというもの。『もし、時間旅行ができたら……』『もし、自分そっくりの人物が出現したら……』『もし、人の心を読むことができたら……』等々。

確かに、面白い作品のアイディアを分析してみると、前記の図式に当てはまる――それなりに説得力のある思考方法のように思えるのだが……。

しかし、試してみればわかることだが、この方法を試みたからといってすぐに面白いアイディアが得られるとは限らない。思いつく異質なものを手当たりしだい組み合わせて考えたり、逆転できないか考えてみたり、もし～～の可能性を考え続ければ、確かにストーリーを生み出すきっかけにはなるだろう。しかし、そうして得たアイディアがどれだけの面白さを持っているのか――型通りの思考法で、そうやすやすと良いアイディアが得られるものかどうか――アイディアの質については大いに疑問がある。

良いアイディアが前記の図式に当てはまるからといって、それが前記の思考法から生まれたものだとは限らない。僕の経験から言えば、前記のような型通りの思考法によって面白いアイディアが生まれることは、まず無い。

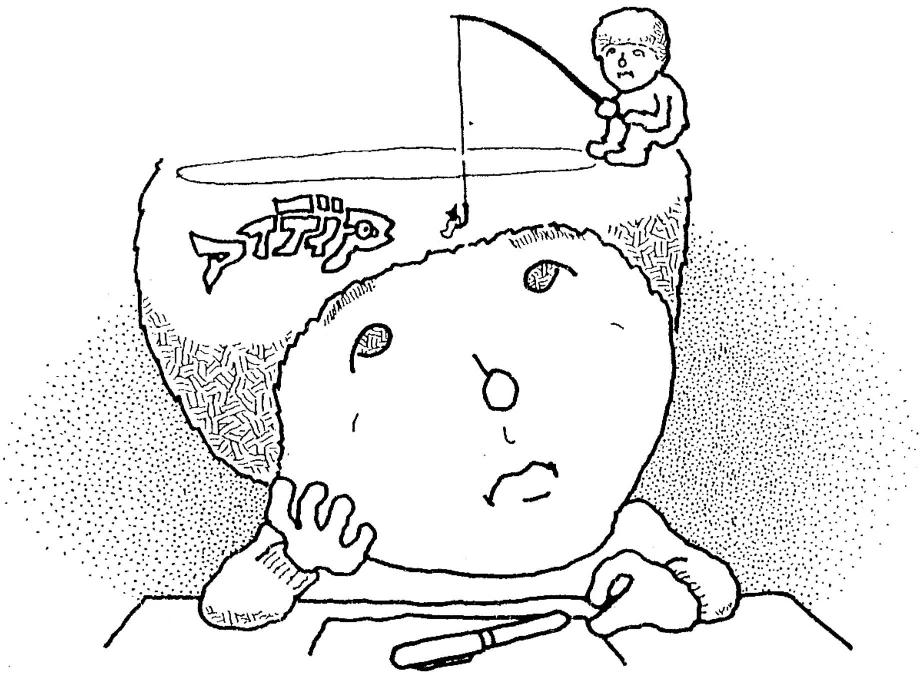
良いアイディアを分析・分類する公式はあっても、良いアイディアを導きだす公式といったものは存在しない――というのが本当のところだと思う。

しかしながら、世の中にはアイディアを釣り上げる

のがうまい人・ヘタな人というのは確かにいる。
では、アイディア捕捉に上手・下手があるというのは、どういうことか？
釣りに例えるなら、魚（アイディア）のいないところに糸を垂れて、いくら待っていても魚はかからない。魚（アイディア）のいそうな場所を見分ける目を持った釣り人（作家）が、より多くの獲物を釣り上げることができる——アイディア捕捉のうまい下手は、こうした釣り人の技術の差に例えることができる。確実ではないにしろ、魚のいそうなポイントはどの辺か・そのポイントでウキ下をどのくらいにしてどんなエサをつければ獲物がかかりそうか——そのあたりをかぎ分ける技術というのは、経験と工夫によって、ある程度習得することができるものである。
魚が釣れるのはどんなときか——アイディアが浮かぶのが、どんなときかを知るのが、まずその第一歩である。

●□▽　インスピレーション　●□△

さんざん考え抜いて得られなかったアイディアが、疲れ果て思考力がゆるみ、心を空白にしたとたん、突然にひらめくことがある——それがインスピレーションである。
アルキメデスが『アルキメデスの原理』を思いついたのは入浴時だというし、風呂やトイレなど、意識力がゆるむ場所で、すばらしいアイディアを得た——という話は少なくないようである。
インスピレーション——ひらめきによるアイディアは、意識力のゆるんだ、いわゆるボケ～ッとした状態のときに訪れるものらしい……。



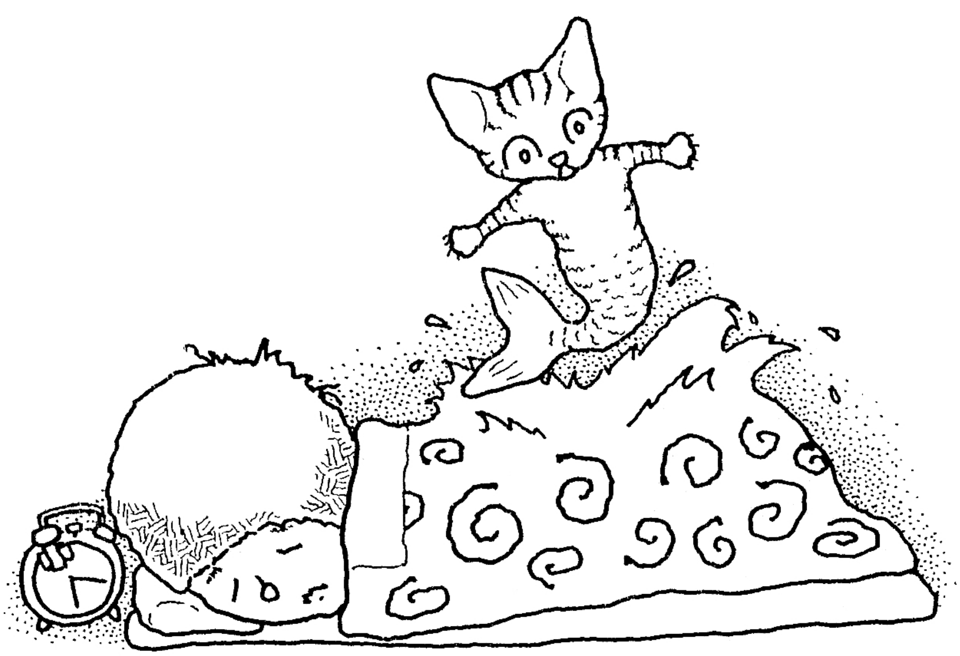
締め切り間ぎわまで書くものが決まらずにいた作家が、ギリギリの土壇場になって、突然素晴らしい着想を得る——という話はよく耳にする。これは『何かを書かねばならない』と意識力を総動員して力一杯（?）考えていたときには思いつきもしなかったアイディアが、いよいよせっぱ詰まって心の緊張が限界に達し、精神の疲労から意識力が退行しはじめて、はじめて出てきた。つまり意識力の退行が、インスピレーションが生まれやすい心理状態を作ったからだと考えられる。
では、さんざん考えて思いつかなかったアイディアが、なぜ意識力が弱まったときにひらめくのか？
意識の働いている人の頭の中では、様々な情報が、キチンと体系付けられて管理されている。書き手が興味を持っている素材についても、当然この拘束力は働いており、なんとかアイディアに発展できないものかと思案するのも、通常は体系をもった意識の中で行われることになる。前記の例でいえば、カッパというのは伝説の体系に取り込まれ、宇宙人というのは科学・SFの体系に取り込まれているため、通常の意識下では、別ワクにくくられたこの二つが結びつくのは困難だということである。
ところが、何らかの理由によって意識力が弱まると、情報を体系付けていたワクの拘束力が弱まり、いままで結びつかなかった情報がフリーになってワクを越えて出会い、混じり合うことが可能となる。その結果、意識力が働いていたときには思いつきもしなかった意外な組み合わせが生まれ、突飛な着想につながったりする——これが、インスピレーションの原理だと僕は考えている。
前記のアイディアの公式——『異質なものの組み合わせ』『逆を考える』『もし～ならば……を考える』という思考法は、ふだん意識力が働いているときには整然と分けられている情報の体系を崩すための意識的

イラスト／星谷仁

な試み——そう考えてみると納得できる。
しかし、意識的に意識のワク組を壊すというのは本来不自然な作業であり、意識力が退行したときに自然に訪れるインスピレーションに比べ、やはり意識の拘束を受けた中でのアイディアにしかなりえない——ということになる。

●□▽インスピレーションの捕捉●□△

アイディア捕捉の効率的な手段というのが、もしあるとすれば、それはインスピレーションが浮かびやすい心理状態を、いかに作るか・いかに持続するか——ということになるのだろうと思う。
しかし、ぼくがこのこと——インスピレーションは意識力の後退によって生まれやすくなるということに気がついたのは、創作を始めてだいぶ経ってからだった。
それまでは、何か一つアイディアが浮かぶと、懸命になって、そのアイディアをストーリー化できないものかと考え、結局うまくいかずにガッカリということが多かった。
インスピレーションが開放的な反意識的な作用によって生まれるのに対し、ストーリー構成というのは場面や人物・小道具・事件等を合理的に組み立てる意識的作業である。
アイディアが一つ浮かんだということは、インスピレーションが生まれやすい反意識的心理状態が訪れていたはずなのだが、ストーリー化を考え意識力を呼び覚ますことによって、せっかくのインスピレーションのチャンスを自らぶち壊していたわけである。
アイディアが一つ浮かぶたびにストーリー化を考え



るというやり方は、例えてみれば、魚を一匹釣り上げるたびに天ぷらを揚げているようなもので、大変効率の悪いやり方だったといえる。
魚が釣れだしたら、釣れるときに釣れるだけ釣っておいて、後にその中から良さそうなものを選んで料理した方が、はるかに効率が良いし、オイシイものできるはずである。
そう考えるようになってからは、インスピレーションが生まれそうな心理状態が訪れたときには、なるべくその状態をキープしてアイディアの捕捉につとめるようになった。
そうすることによって、アイディアの収穫量は格段にアップし、現在アイディア・メモの数は数百〜千程度にはなるはずである。
インスピレーションの捕捉の技術というのは——技術などというとおおげさだが、要するにボケ〜ッとした心理状態を作ること——特に目覚めのボ〜ッとした時間を大事にすることである。夢うつつの状態は、インスピレーションを得るための絶好の状態で、場合によっては夢そのものが素晴らしいヒントになることもある。
とはいっても、それではボケ〜ッとさえしていれば誰にでも良いアイディアが訪れるのかといえば、もちろん、それだけではダメである。科学者は科学的なインスピレーションを得、作家は小説のインスピレーションを得る——つまり、ふだんから探究心を向け、強く追い求めているもの——いってみればインスピレーションの核にあたるものが、心の中のあちこちにたくさん散らばっているからこそ、それらが反応しインスピレーションが生まれるわけで、科学的な興味も小説に対する情熱もない人が、いくらボケ〜ッとしていたところで、何も得ることができないことは容易に想像がつく。ふだんから、面白い作品を書こうという意識

・面白さに対する書き手としてのこだわりを持ち続け、心の中にインスピレーションの核をたくさん作っておくことが、良い着想を得るための大前提であり、書き手としての不可欠な心がけだといえるだろう。

●□▽プレゼンテーションとしてのアイディア●□△

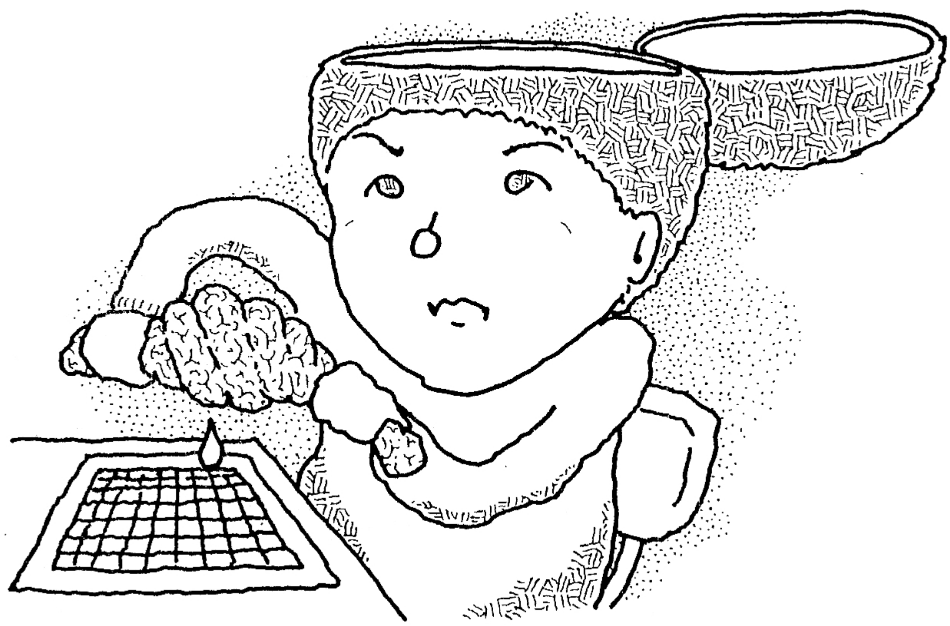
さて、インスピレーションで素晴らしいアイディアを得た――しかし、アイディアというのは創作プロセスのうちの一行程に過ぎない。インスピレーションによって得たアイディアから瞬時にストーリーまで見えてしまう――といったこともないではないが、それはごくごくまれなことで、実際はアイディアは得たものの、ストーリーに生かすためには、さらに工夫を要し、七転八倒の苦労をするのが普通である。

ストーリーの構築は意識的作業だということを前に述べたが、この意識的作業の中でひねり出すアイディアというのもある。インスピレーションに対してプレゼンテーション(演出)のアイディアとでもいったらよいだろうか。インスピレーションのアイディアが《ひらめく》といった形で生まれるのに対し、プレゼンテーションのアイディアは、書き手の技術や経験を総動員して《ひねり出す》といった感がなくもない。

プレゼンテーションのアイディアというのは、インスピレーションで捕捉したアイディアをどうすれば効果的にストーリー化できるか、あるいは、物語としてさらに面白くするための工夫はできないか――という利用・活用に関するものである。

物語づくりの技術・ドラマ性を高める効果・演出の手法と密接に関わるものである。

抽象的な話だけではわかりづらいので、具体的な例をあげよう。



例えば007シリーズでは、毎回、趣向をこらした秘密兵器が登場する。あっと驚く秘密兵器は一つのアイディアである。しかし、単に意外性のある秘密兵器というアイディアだけでは、小道具の面白さだけに終わってしまい、ストーリーとしてのアイディアには成りえない――その秘密兵器のアイディアをさらに意外な利用法で役立てるといったような複合型のアイディアに発展させ、ストーリーとしての工夫につなげることが望ましい。

あまり良いアイディアではないが、スパイ物の秘密兵器のアイディアとして、僕が思いついた例で話を進めてみよう。

> 相手を一時的に仮死状態にすることのできるガスの超小型発生装置。敵地に丸腰で乗り込まざるをえない状況で、主人公のスパイのために開発されたのが、指輪型の超小型ガス発生装置。装置の中には二つの物質が薄い膜で仕切られており、この膜に穴を開けるなりして二つの物質を混ぜ合わせることによってガスが発生。

これだけでは、あっと驚くというアイディアとはいえないかもしれないが、モノの例えとして勘弁してほしい。ガス発生装置の利用目的としては、某国のある人物を秘密裏に誘拐してくるため、事故を工作。目的の人物をガスを使って死亡したと周囲に思わせ、警戒網の解けたところで運び出す――とでもしておけば、少しは意外性のある設定になるかもしれない……。

設定についてはさておき、どんな目的で開発されたにせよ、主人公がその利用目的通りに秘密兵器を使ってピンチを乗り越え、事件を解決したのでは面白くない。指輪型のガス発生装置というアイディアは段階で

いえば、素材のままのアイディアである。

> ところが、主人公のスパイの前に現われた敵は、意外にも海中から出現。アクアラングを装着しているため、ガスを使うことができず……。

物語をスリリングに展開するための《意外性》である。《意外性》を持ち込んで物語ははじめて面白くなる。

> 主人公は敵の手にかかり、海岸の処刑台につながれてしまう。やがて潮が満ちてくれば、そこは海面下に没する――主人公を溺死させようというわけである。

絶体絶命のピンチ――《限界状況の設定》である。《限界状況の設定》は、緊迫感をもり上げ、読者を主人公と同化させる効果を持つ。

そして、こういう緊迫した場面にこそ、アイディアが生かされるべきなのである。

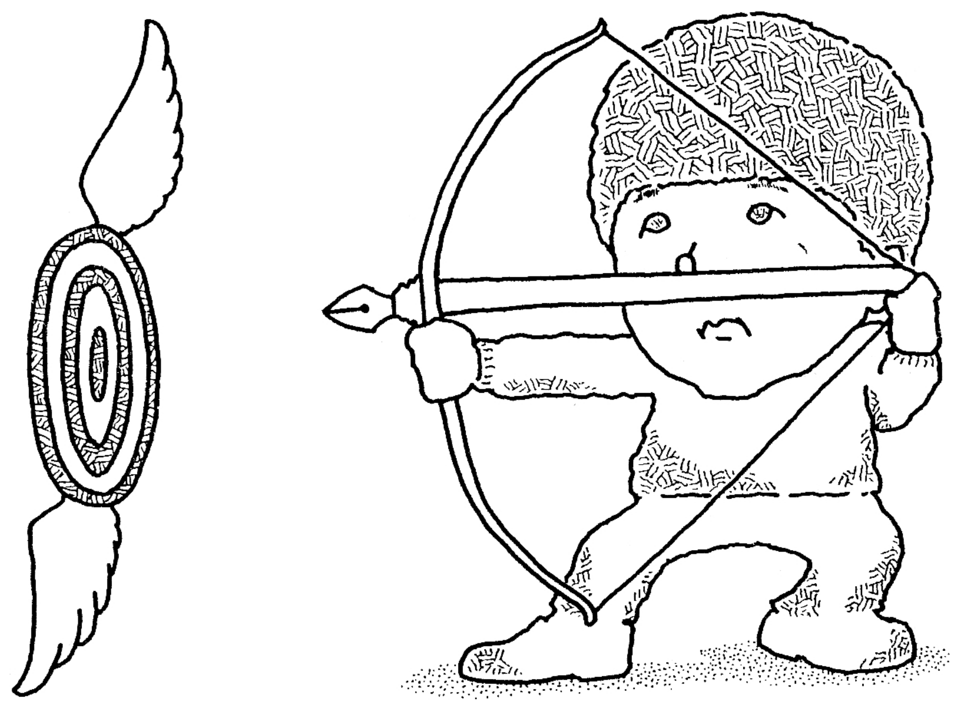
ここで先に別の意味をもって登場していたアイディアが形を変えて再利用される。

> 処刑台にひとり残された主人公は、指輪のガスを利用。自らがガスを吸い込み、仮死状態に。仮死状態になることによって、窒息死をのがれる。

敵に利用する目的で開発された秘密兵器を、自分に使う――という意外性がミソ。秘密兵器のアイディアを伏線に、さらに別のアイディアに発展させ利用する――こういうアイディアが、ストーリーを構成する段階でひねり出すことの多いプレゼンテーションのアイディアなのである。

着想のアイディアを原石に例えるなら、プレゼンテーションのアイディアは、カットの技術に例えることができる。素晴らしい原石を掘りあてても、カットの技術が悪ければ、美しい輝きは得られない。

物語のアイディアも、作品として美しく輝きあげる技術があってこそ、初めてその価値が認められるわけである。



▽アイディア捕捉は
●□あくまでも創作の一行程 ●□△

プレゼンテーションのアイディアに絡むストーリー構成の様々な技法について、具体的に述べる誌面がなくなってしまったが、要は、より面白い物語を描くためには、どんな効果や演出が考えられるか――より質の高い物語づくりを目指し・心がけ続けることである。

今回は、アイディアのことばかりで終わってしまうが、言うまでもなく、アイディアの捕捉は、創作プロセスの中のほんの一部にすぎない。アイディアだけを過大評価して、創作の本質とするものではないということを最後に一言、お断わりして筆を置きたい。

《講師紹介》　ほしたに　ひとし

１９５８年４月８日福島県生まれ。東京都東村山市在住。高校時代から同人誌で活躍。１９７９年、『クロカニ号の冒険』が金の星社第10回創作童話作品募集に入選。同作は１９８４年に金の星社から刊行。以降、『小さな島の大ぼうけん』『ねこにかかったでんわ』『小さなまじょのさがしもの』(以上、岩崎書店)と、独特のアイディアを生かしたＳＦ・ファンタジー色の濃い作品を次々発表。挿絵画家としても活動中で、現在はアマチュアアクション映画に情熱を燃やしている。

世界の児童書

連載第二回

長沢立子（日本ユニ・エージェンシー）

買収合併が相次ぐイギリスの出版界の中で孤軍奮闘するウォーカー・ブックス。その成功の要因は、新しい発想に基く経営、そして何よりもS・ウォーカーの情熱であった。

イギリス出版界ではこの数年間に出版社間の買収合併戦が続いた結果、巨大出版社グループがいくつか誕生し、寡占化現象が起きている。この「大きいことはいいことだ」の傾向の中、独立出版社として、また児童書専門出版社として確固とした地位を保っているのがウォーカー・ブックスである。

ウォーカー・ブックスは今から丁度十年前にセバスチャン・ウォーカーによって創立された。ウォーカーを含めて三人のスタッフで、彼の自宅の予備の寝室でスタートしたのである。一九八〇年に出版した作品は十七タイトル、現在は百人を越えるスタッフが、テムズ河の南岸のヴォクスホールにある広々としたロフト風のオフィスで働く。年間の出版点数は三百タイトルである。

これだけの急速な成長を遂げた要因は二つある。一つは幼児向けのボード・ブック[*1]である。それまでボード・ブックというとセンチなイラストを使ったつまらないタイプのものが多かった。「子供が出会う初めての本だから、子供の想像力と心に訴えるような本をつくりたい」と考えたウォーカーは、ヘレン・オクセンベリー[*2]に話をもちかけた。その結果が、〝ベビー・ボード・ブック〟シリーズである。この小型のボード・ブックは大成功で、ボード・ブックのイメージを変えただけでなく、ヘレン・オクセンベリーをベストセラー絵本作家の地位につけた。

もう一つは独自の販売方法である。一九八五年にスーパーマーケット・チェーンのセインズベリーと提携し、廉価でしかも質の高い独自の絵本五十点を企画し制作したのである。ニコラ・ベイリー[*3]やジョン・バーニンガム[*4]といったトップクラスの絵本作家の作品が、廉価でしかもスーパーマーケットで手に入るということから爆発的な人気を得た。

このウォーカー独特の出版方針と販売方法に当初は商業主義に徹した新興の児童書出版社だという批判の声もあがった。優れたイラストレーターや作家がウォーカー・ブックスに集まっていくのに脅威を感じた既成の出版社も少なくなかった。しかし、現在では確実な売上げと作品の質の高さを兼ねそなえた児童書出版社として認められている。

例えば一九八九年には、イギリスの児童書に与えられる主要な五つの賞のうちの四つを獲得している。最も優れた絵本に与えられるケイト・グリナウェイ賞―"Can't You Sleep Little Bear?"[*5]、子供自身が選ぶスマーティ賞―"We're Going on a Bear Hunt"[*6]、ウィットブレッド文学賞の中の最優秀児童小説賞―"Why Weeps the Brogan"[*7]、エミール・クルト・マシュラー賞―"The Park in the Dark"[*8]である。

ウォーカーは児童書の出版に人生をかけたいと自らの出版社を始めた。そしてウォーカー・ブックスにとって最も大切なのはイラストレーターと作家であり、彼らの創造力を引き出すのが編集者の役目であると言い切る。だから編集者は乳母か〝召使い〟のようだとも言う。

しかしウォーカーの〝召使い〟に対する配慮もなかなかのものである。明るいオフィスにはいつも花が生けてあり、専用のコックが毎日家庭的な昼食を全員に用意する。託児所も設けてあり（出版界では初めての試み！）安心して仕事が出来る環境がつくられている。

ウォーカーの児童書への信念に支えられたウォーカー・ブックスは、ユニークな性格の、イギリスで最も勢いのある児童書専門出版社といえるだろう。

＊1 厚紙で作られた絵本
＊2 『トムとピッポがほんをよむ』（リブロポート）他
＊3 近作 "The Mousehole Cat" ブックローン出版より刊行予定
＊4 『ABC』（あかね書房）他
＊5 by Martin Waddell, Barbara Firth 評論社より刊行予定
＊6 by Helen Oxenbury 評論社より刊行予定、邦題『きょうはみんなでクマがりだ』
＊7 by Hugh Scott
＊8 by Martin Waddell, Barbara Firth



創作シナリオ講座の第2回は、アニメーション編です。アニメーションの制作には、絵コンテ・作画・編集など、さまざまな過程があり、各パートにそれぞれのプロが関わっていますが、これらの作業はみなシナリオをもとに進行していきます。映像を作る手段として書かれたシナリオは、小説とも、完成した映画ともちがいます。そんなシナリオのあれこれを、実物を読んで楽しみながら、まずはスタイルから学んでみてはどうでしょう。

創作シナリオ講座

第2回 テレビアニメーション

脚本・解説……小山高生

タイムボカンシリーズ
逆転イッパツマン

第30話

シリーズ初！ 悪が勝つ

あらすじ

豪（ごう）、ラン、ハル坊の働くタイムリース社は、時間を越えて過去未来へ何でも届けるリース会社。運搬メカ・トッキューザウルスに乗るランとハル坊の行く先行く先、シャレコーベリース社のクリーン悪トリオが妨害にあらわれる。2人にピンチが訪れるとき、さっそう登場、われらがヒーロー・イッパツマン。その活躍で、クリーン悪トリオは連敗につぐ連敗……。

悪玉の1人コスイネンは、2週間の山ごもりの末、イッパツマン必殺の方法をあみだした。一方、ランはイッパツマンの正体が豪ではないかと疑いつつも、依頼を受けて18世紀のフランスへ。しかし、その依頼こそムンムンたち悪玉トリオの罠だった。さらに、スナイパー隠球四郎（かくれたましろう）も、イッパツマン打倒のダイヤモンド弾丸をもってひそかに現場へとむかう。タイムリース社のノドカ営業部員を人質にとられたランは、ついにイッパツマンに助けを求めるのだが……。

□原野
　対峙(たいじ)しているランたちとムンムンたち。
　コスイネン（以下コスイ）がしゃがみ込んで、
コスイ「イッパツマン、何やってんだよ、遅いぞー！」
ミンミン「（上空を指差し）あッ、来たみたいよ」
キョカンチン（以下キョカン）「（権兵衛を抱えたまま）あッ、鳥だ」
コスイ「カバの一つ覚えだねえ、今日はいいんだよ。さあ、早くバギーに乗って！　イッパツマンめ、覚悟しろ！」
　弾丸ヘッド号から飛び出して、滑空してくるイッパツマン。

×　×　×

　斜面の上の隠球四郎、喫っていた煙草をキザに投げ捨て、もみ消しながら、
球四郎「イッパツマンめ、地獄に送ってやる」

×　×　×

　舞いおりるイッパツマン。
　既にノドカは解放されている。
ラン「イッパツマン、何か変よ。もう大丈夫だから、帰って！」
　機銃の音がきこえる。

◇◇登場キャラクター◇◇

豪(ごう)　速九(そっきゅう)（イッパツマンか？）
放夢(ほうむ)ラン
ハル坊

ムンムン
コスイネン
キョカンチン
ミンミン
隠(かくれ)　球四郎(たましろう)

ツッパリ学生メカ
宣教師ブタ
オロカブ

ノドカ営業部員
ナレーター



イッパツマンの正体？　主人公・豪速九。

　脚本家にとって己の脚本というものは、いわばウンコみたいなもので、白日の下にさらしたりするものではないのです。もちろん、ウンコよりは愛着がありますよ。それでも、ウホン、とにかく恥ずかしいものなのですよ。
　しかも、八年前に書いたものとなれば、なおさらその思いが深いのです。
　しかし、奇しきご縁により、その羞恥心を多額のギャラと引き替えに売り渡した以上、仕方がないのですね。グスン。
　さぞかしカビくさくなっていたであろう脚本自体が、知らぬ間にいきなりテレビアニメとは異なる媒体に姿をさらされたのだから驚いているにちがいない。
　お気の毒なことであります。そこで全裸公開ではあまりにも可哀想と、後半部分（全体の三分の一）のみ、すなわちモザイク模様つき半裸公開になったことをお許しください。
　この拙作は1975（昭和50）年10月から八年間にわたってフジテレビ系で放送された『タイムボカンシリーズ』の第6作目（『タイムボカン』『ヤッターマン』『ゼンダマン』『オタスケマン』『ヤットデタマン』、そして『逆転イッパツマン』と続いて『イタダキマン』で終了）の第30話です（ちなみに、1982（昭和57）年9月4日、午

写真提供…タツノコプロ

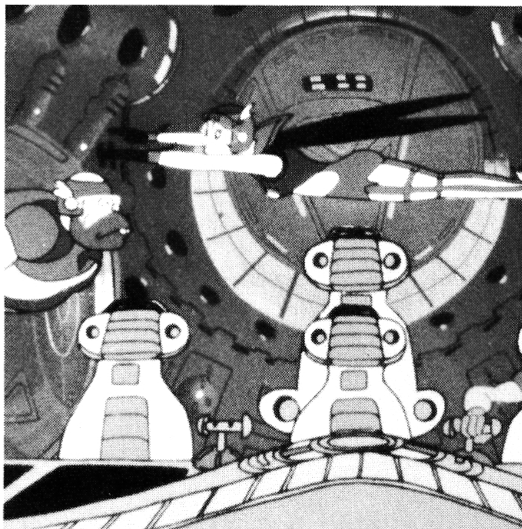
イッパツマン（以下イッパツ）「危ない!!　みんな、ふせるんだ!!」
　自分はそのままS・B（シャレコーベバギー）に突進する。
イッパツ「おりゃあー!」

×　×　×

ムンムン「来たよ、来たよ!　奴には銃弾もきかないだろう」
コスイ「お誘いしただけですよ」
ミンミン「さあ、早いとこ研究の成果を見せてよ」
ツッパリ学生メカ「よろしく!」
ムンムン「早いとこ巨大メカ、呼んどいた方がいいんじゃないか」
コスイ「長いつき合いでしょう、信じなさいよ」
宣教師ブタ「信じるブタは救われる、ブー!」
ムンムンたち「シュビビーン!」
　ひとり、コスイだけ、こけないで前方を睨みすえている。
ムンムン「今日はなんだかやりそうな雰囲気……」
コスイ「イッパツマン、覚悟!　瞬間硬化弾、発射、コスッと!」

×　×　×

　瞬間硬化弾が発射され、イッパツマンに見事、命中!
　破裂して中から乳白色の粘液が飛び散り、イ



ズッコケたときの〝シュビビ〜ン〟。だが、コスイネンだけがなぜかのってこない。

後6時30分から放送されました）。
　自他共に認めるテレビアニメ史上に燦然と輝く（オリジナルギャクアニメとしては頂点を極めたと自負しています）人気シリーズでしたので、ご記憶の方もいらっしゃることでしょう。
　色ボケ女ボスと貧乏マッド科学者（サイエンティスト）と低能関西弁怪力マンという三人組だけが、多少のキャラクターデザインの変更はあったものの八年間も通して悪役を演じ続けたという空前絶後のシリーズでした。
　その中でも、この『逆転イッパツマン』は一番ストーリー性に富んだ作品で、『善良なる悪役』＝クリーン悪（アク）トリオの役割は変わらず、善なるヒーロー、ヒロインに必ず敗れるというもの。
　それゆえ、彼らはシリーズ開始以来ほぼ七年間毎回敗れ続けてきたのです。
　そこで、「一度くらい勝利の美酒に酔わせてやろうか」ということで、錯覚にしても自分たちが勝ったと思わせる話を作ってやろうとして書いたものです。
　さて、そろそろ『創作シナリオ講座』と銘打っている以上、講座を開かなくては叱られそうです。咄を下げる高座ならお手の物なのですが……。しかし、『シナリオの書き方』くらい少々書いておかないと「詐欺師!」などと褒められそうなので

ツパツマンの体にふりかかる。
ラン「あッ!?」
　だが、イッパツマン、平然とS・Bに向かう。
　　×　　×　　×
ムンムン「なんだい、あれが新兵器かい？」
キョカン「三十連敗決定！」
ミンミン「一体なんなのよ!?」
コスイ「瞬間硬化弾、たちまちの内に体が硬くなって……」
ムンムン「歩いてくるじゃないか!?」
コスイ「予算が足りなかったからなあ……」
ムンムン「原料はなんなの!?」
コスイ「瞬間接着剤とセメント、それに塩、コショー、少々……」
ムンムン「ダメだこりゃ……」
ミンミン「大丈夫みたい……」
　スクリーンに映ったイッパツマン、石像のように立ちすくんでいる。
コスイ「成功です。あと少したてば、機銃を射ち込むだけでも奴の体はバラバラ……」
ムンムン「よく判んないけど、うまくいくといいねえ」
コスイ「コチコチに硬くなった物はもろくなるんです」



殺気におどろくイッパツマン。一体誰が狙っているのか…。

いってみますか。

ただし、与えられた紙数でシナリオの書き方など講義できるわけがありません。また、その程度のものを読んだからといってシナリオライターになれるわけもありません。

世の中そんなに甘くない！　プロ野球の選手になるより難しいのですから。

なぜなら、プロ野球には各チームに最低60人の支配下選手がいますので、12チームで720人はいる計算です。ところが、シナリオライターはそんなにいません。その半分もいないでしょう。

まず、そのことをお断りしておきます。

ですから、とりあえず原稿用紙への書き方ぐらいをお教えしましょう。

といっても、シナリオに決まった書き方などありません。要は、イメージをいかに文字を使って映像表現するかということですから、自分のイメージを、読む者に適確に伝達できるものであれば、どんな書き方でもかまいません。

それでも、決して文字を使うからといって、文章表現ではないのです。すべて具体的な映像が浮かばなくては失格、シナリオとは呼べないのです。

とりあえず、オーソドックスなものをご披露させていただきます。

さて、拙作をお読みください。ただし、うまい

イッパツ「な、なんだ、この殺気は……」
　硬化弾ではなく殺気に動きが止まっただけなのだ。

×　×　×

ハル坊「ラン姉ちゃん!?」
ラン「イッパツマン、どうしたの!?」
イッパツ「ウッ、体が硬くなってきた……」
　イッパツマンのヘルメットのV字が点滅し、O・L（オーバーラップ）して豪の顔が浮かぶ。
　T・Z（トッキューザウルス）から胴体部が分離し、逆転王の胴体となる。
　弾丸ヘッド号が飛来してきて、イッパツマンを収容し、胴体部に合体する。

×　×　×

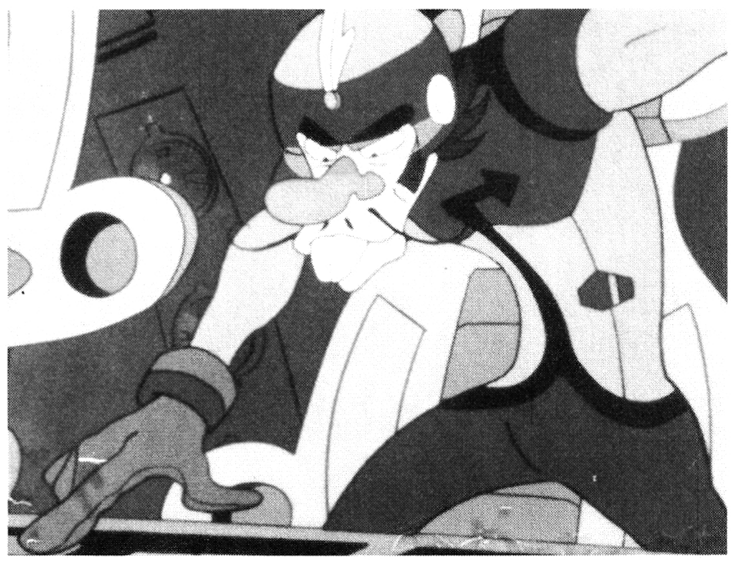
イッパツの声「逆転王、見参！」
コスイ「はい、どうぞ見参して、コスッと！」

×　×　×

　瞬間硬化弾が次々に発射され、逆転王に命中、破裂する。
　粘液におおわれる逆転王。

×　×　×

コスイ「あと少し待つだけです。どうぞ、寝てていいですよ」
ムンムン「最後にいつも逆転されてるからねえ、



いつもの発射ポーズ「コスッと」も、ついシリアスな表情になってしまう。

から載せてあるわけではありません。シナリオの形、体型（スタイル）がどういうものかまず知っていただきたいからです。念の為。
　よく見てみると、三つに分かれていませんか？
　これがわからないほど鈍感な頭の持ち主だったら、後は読まなくても結構です。時間の無駄ですから。
　ハッキリ言って、頭の悪い人間にはゼニのいただけるシナリオは書けません。もっとも頭が良ければ書けるというわけでもないのですが。
　大きく分けるとシナリオは『柱』『ト書（がき）』『台詞（せりふ）』の三つから構成されています。
　それぞれをより詳しく見てみますと、まず、場所や時を指定する『柱』というものがあります。
　拙作では「□原野」とあります。「ハラノ」ではなくて「ゲンヤ」です。原野の前の『□』は四角でも『○』丸でも構いません。印刷シナリオの段階ではこの□や○の中にシーンナンバーが入ります。
　いわゆる映画ではシナリオの順番通りに撮影していくわけではないので、便宜上すぐにどのシーンかわかるようにナンバーがふられているというだけです。ですから、中に数字が書かれてもいいくらいの大きさで□か○を書いてください。
　次に場所と時を指定します。

完全にやっつけるまでは安心できないよ」
コスイ「貧乏性ねえ……」

×　×　×

狙撃銃を構える球四郎。
球四郎のM「ダイヤモンド弾丸は二発だけだ、球四郎、落ち着け！」
スコープの中に逆転王の顔がアップでとらえられる。
照準をコクピットの中にいるであろうイッパツマンに合わせる。
唇をかみしめ、
球四郎「（心で）今だ」
引き金をひく。
発射音が背後の山々に谺する。

×　×　×

ハッとするランたち。

×　×　×

ムンムン「何、今の音は!?」
コスイ「猟師が熊でも射ったんだろう」

×　×　×

逆転王がドーンと前のめりに倒れる。

×　×　×

ラン「キャーッ!!」

×　×　×



イッパツマンの愛機・弾丸ヘッド号とトッキューザウルスが変形・合体して、スーパーロボット逆転王の完成。手前がシャレコーベ・バギーだ。

ただ「原野」とだけあれば時は昼間です。時刻によって太陽の位置が違います。すると明り（照明）の当り方が違います。影だって違うでしょう。時に関して何も明記されてなければすべて昼ということです。

早朝、朝、夕景（夕方）、夜、深更（真夜中）、払暁（夜明け前）などと、指定しなければいけない時だけ、場所の指定の後につけてください。

たとえば、『□原野（朝）』……こんな調子です。

さらに、柱では場所をより具体的に指定することもできます。

たとえば『□原野・俯瞰（朝）』などという具合にです。建物などの場合では、『□小山家・全景』とか、『□××小学校・正門からの眺め』とかです。もちろん『□小山家・玄関前』とか『□小山家・台所・外』などと特定もできます。

次に『ト書』です。

「〜〜」と言う……とか、「〜〜」と「〜〜」する……というように、仕草や表情など状況の説明をする際に「〜と」と書くから『ト書』です。

これは『カット割り』で書いていきます。

『カット』とは「一台のカメラで映し始めてから映し終わるまでの一つの場面」とでもいえばよいでしょうか。テレビや映画を見ていれば、映像

ムンムン「や、やった、やったじゃないか、コスイネン！」
コスイ「やったみたいです……」

× × ×

イッパツマン、左肩を押さえている。
イッパツ「な、なんだ、これは……お、俺の身体が……」
右手を離すとかすり傷がついている。
イッパツ「逆転王、どうした!?」
コントロールスイッチを次々に動かすが、逆転王、ビクとも動かない。
イッパツ「くそう、コンピューターをやられた！」

× × ×

倒れたままの逆転王から、イッパツマンがはい出てくる。

× × ×

コスイ「出てきた!!」

× × ×

イッパツ「ウオーッ!!」
仁王立ちになり、S・Bに突進するが、動きは硬い。

× × ×

コスイ「今だ!!」

× × ×



逆転王に一体何が…。見守るハル坊、ランとアシスタント・ロボットの2（ツー）—3（スリー）。

で「カメラが変わったな」と思う所があるでしょう。

同じAという人間を映していても、正面のアップが、次の瞬間、横からのロングの顔になったりする時です。一台のカメラでは連続して撮影はできません。

正面のアップを映し終えたら、次は横に……という具合にしなければ撮影は不可能です。それが1（ワン）カットなのです。『ト書』はカットごとに改行して書いていくものだと覚えてください。

『対峙（たいじ）しているランたちとムンムンたち』……これで1カットです。カメラが切り替わって次のカットが『コスイネンがしゃがみ込んで』という仕草の指定です。

そして、ト書で『〇〇する誰々』と固有名詞で止めた（体言止めといえましょうか）場合は、原則としてそのアップの映像指定になります。これは覚えておいて損はありません。

ト書も過不足なく描写するのが原則ですが、初心者は過剰ト書や過小ト書をつい書きがちです。たくさん書いたり、プロのシナリオを読んだりしてその感覚を摑むしかありません。

次に台詞です。

まず誰の台詞であるか指定し、「　」の中にその台詞を書きます。原則として、男性は姓を、女

S・Bの機銃が発射される。

×　　×　　×

球四郎「もらった!!」
　銃を発射する。

×　　×　　×

イッパツマン、機銃弾をはね返すが、別方向から飛んできたダイヤモンド弾丸をスローモーションで胸に受けてしまう。
瞬間、イッパツマンの体が絶叫と共に粉々に砕け散ってしまう。

×　　×　　×

ラン「（驚愕）アーッ!!」

×　　×　　×

「やった、やったあ！」と手を取り合うムンムンたち。
ムンムン「七年目にして、遂に主役をやっつけたんだよオ！」
コスイ「来週からは俺たちが主役だぜ」
ムンムン「人間やっててよかったー！」
コスイ「人間バンザイ！　バンザイ！」

×　　×　　×

呆然と立ち尽くすランたち。
ラン「イ、イッパツマンが……ご、豪さんが……ウーッ（号泣）」



腕ききのスナイパー・隠球四郎の銃口が、イッパツマンの命を狙う！

性は名前を書きますが、アニメシナリオの場合は姓を書く場合は少ないようです。ま、コスイネンやキョカンチンの姓は小生も知りませんので。球四郎は隠の方が一文字なので楽かも知れません。家族の食事のシーンなど名前で書かなくては判別できません。全員同じ姓ですからね。あくまでも原則です。

　さて、台詞の中身の問題ですが……まず話者のキャラクターを決め、それに相応しい台詞を書くことを心掛けたら良いでしょう。

　たとえば、一人称から決めます。

　男性の場合なら、『ぼく』『僕』『おれ』『オレ』『俺』『オイラ』『オラ』『おらあ』『おれっち』『わい』『儂（わし）』『わし』『ワシ』『わしゃ』『拙者』『麿（まろ）』『身供（みども）』『自分』『おいどん』『私（わたくし）』『私（わたし）』……と切りがありません。

　それでも、一人称が決まれば、必然的に語尾も決まるでしょう。

　たとえば、「おらあ三太だ」が「おらあ三太でございます」とはならないでしょう。一事が万事、この調子です。

　試しに「I love you」を和訳してみてください。

　ただ「私はあなたを愛しています」しか考えつかない人もシナリオライター向きではないでしょ

ハル坊「（ピンチ通信機に）豪さん、豪さん応答してよ！」

「ツー……」という音がきこえるだけである。

ラン「もう、人間なんてやめたい……」

×　×　×

斜面に球四郎の姿は既にない。

あるのは木々を揺らす風のみである。

×　×　×

ランたちを風が容赦なく叩きつけていく。

イッパツマンの肉片なのかシルエット風に吹き飛ばされていく。

□グレートホテル・全景（夜）

闇の中に浮かび上がる光の殿堂風のホテル。

□全（とう）・松の間

ドンチャン騒ぎをしているムンムンたち北部支社一同。

コスイ「（札束を揚げ）俺って、ビッグ!?」

ムンムンたち「イエーッ!!」

コスイ「グレイトだろう!?」

ムンムンたち「イエーッ!!」

大合唱が始まる。

♪ 人間やってってよかった



イッパツマン、散る！

う。

少なくとも百通りくらいの訳文を作ってみてください。単に一人称と二人称を入れ替えて組み合わせるだけでは駄目ですよ。ラヴをどう訳すかが勝負です。

「おまえなんか大嫌いだっ！」

これだって状況によっては立派にアイラヴユーでしょう？

紙数が尽きてしまいました。

最後にアニメのシナリオと実写のシナリオの違いに触れておきましょう。

それはアニメの場合は全て絵を描かなくては動かないということです。実写であるなら、カメラの前で演者が動けばそれでオーケーです。動いているものをカメラで撮影すれば良いからです。

たとえば、□グレートホテル・全景（夜）のシーンの前に『あるのは木々を揺らす風のみである』というト書がありますが、これもアニメの場合、描かないと木々も揺れないのです。ここでは、空しさを表わしたかったので必要なのですが、無駄に葉一枚揺らす描写をしてほしくないのです。

もしもアニメのシナリオを書こうとするなら、『アニメは描かなければ動かない』ということを肝に銘じておくべきでしょう。

とにかく、シナリオを書く時は、自分の頭の中

ホントにホントによかった
人間バンザイ、支社長バンザイ！
部長に課長もバンザイ！
社員のみんなもバンバンザイ！
　人間やっててよかった……♬
　踊りまくる一同を、入口から冷ややかに瞶(みつ)める球四郎。
球四郎「オチコボレ共にも、たまにはこんなことがないとな……」
N(ナレーター)「三十連敗をくいとめた、というより、くいとめてもらったムンムンたちの大騒ぎは夜が更けるのも忘れて、いつまでも続くのだった。粉々に砕け散ったイッパツマン、そして、豪は？一体、物語はこれからどうなるのであろうか……？　不安……」
ムンムン「私たちが主役ね」
コスイ&キョカン「よろしく!!」
オロカブ「あたしの出番がなーい」

（END）

にフレーム（枠）を作って、絶えずその中で映像を動かす訓練をしたらいいでしょう。
　そして、たくさん素晴らしいシナリオを読むことです。映画を見ることです。テレビを見ることです。本を読むことです。感動することです。書くことです。書き続けることです。「シナリオライターに絶対なる」と朝晩十回唱えることです。
　『才能とは意思の持続である』のだから。御健筆を祈ります。



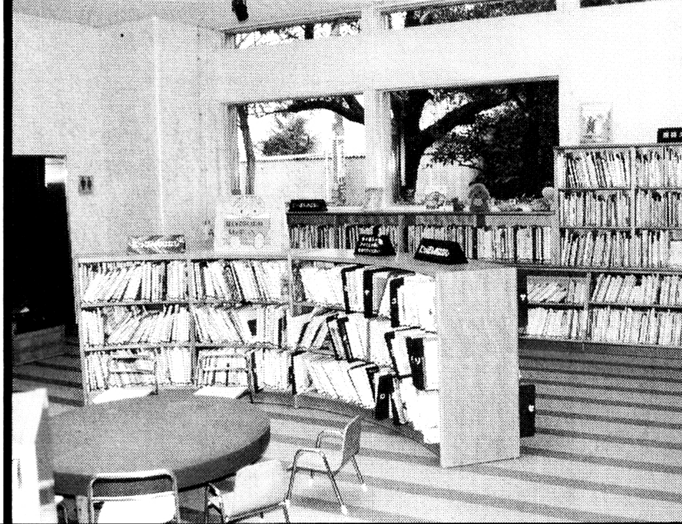
大よろこびのムンムン、コスイネン、キョカンチンの悪玉トリオ＋ミンミン。しかし、イッパツマンは本当に死んだのか…？

《執筆者紹介》　こやま　たかお
１９４８年東京都昭島市生まれ。
早稲田大学卒。
１９７２年『いなかっぺ大将』で脚本デビュー。
１９８５年第２回日本アニメ大賞脚本部門最優秀賞受賞。
おもな脚本作品：『タイムボカンシリーズ』『Ｄｒスランプ・アラレちゃん』『聖闘士(セイント)星矢(セイヤ)』『ハイスクール奇面組』『魔神英雄伝ワタル』『天空戦記シュラト』『ドラゴンボールＺ』ほか。
現在、企画創作集団『ぶらざあのっぽ』代表。
『ぶらざあのっぽ・アニメシナリオハウス』責任講師（来春第八期講座開講予定）。

※『逆転イッパツマン』第30話「シリーズ初！悪が勝つ」は、ポリドール株式会社から発売のビデオ「タイムボカン・シリーズ②」に収録されています。

図書館あそびガイド

東京都杉並区立中央図書館の上手なつかい方



お子さんをお持ちのお父さん・お母さん

おはなし会が週2回。(水：3時から 日：2時30分から)実験や工作を教える子ども会に、映画会や人形劇、子どもの本の講座や講演会なども行われています。親子で楽しめる行事ももりだくさん。



卒論・レポート・研究に

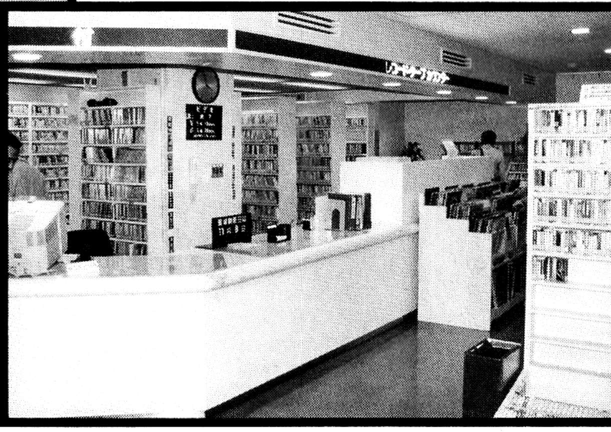
研究者向けの児童資料室は、研究書はもちろん、児童文学雑誌と科学読物が特に充実！ 古いものからとりそろえています。

活字にあきた人

地階の視聴覚コーナーには、レコード・カセットテープ・CD・ビデオテープなどが満載。ビデオもその場で視聴できます。

本棚をさがすと気の遠くなる人

オンライン検索システムは、子どものほうがつかいやすい(?)50音順タッチキー。4台のコンピューターは、いつもひっぱりだこ。



疲れたら…

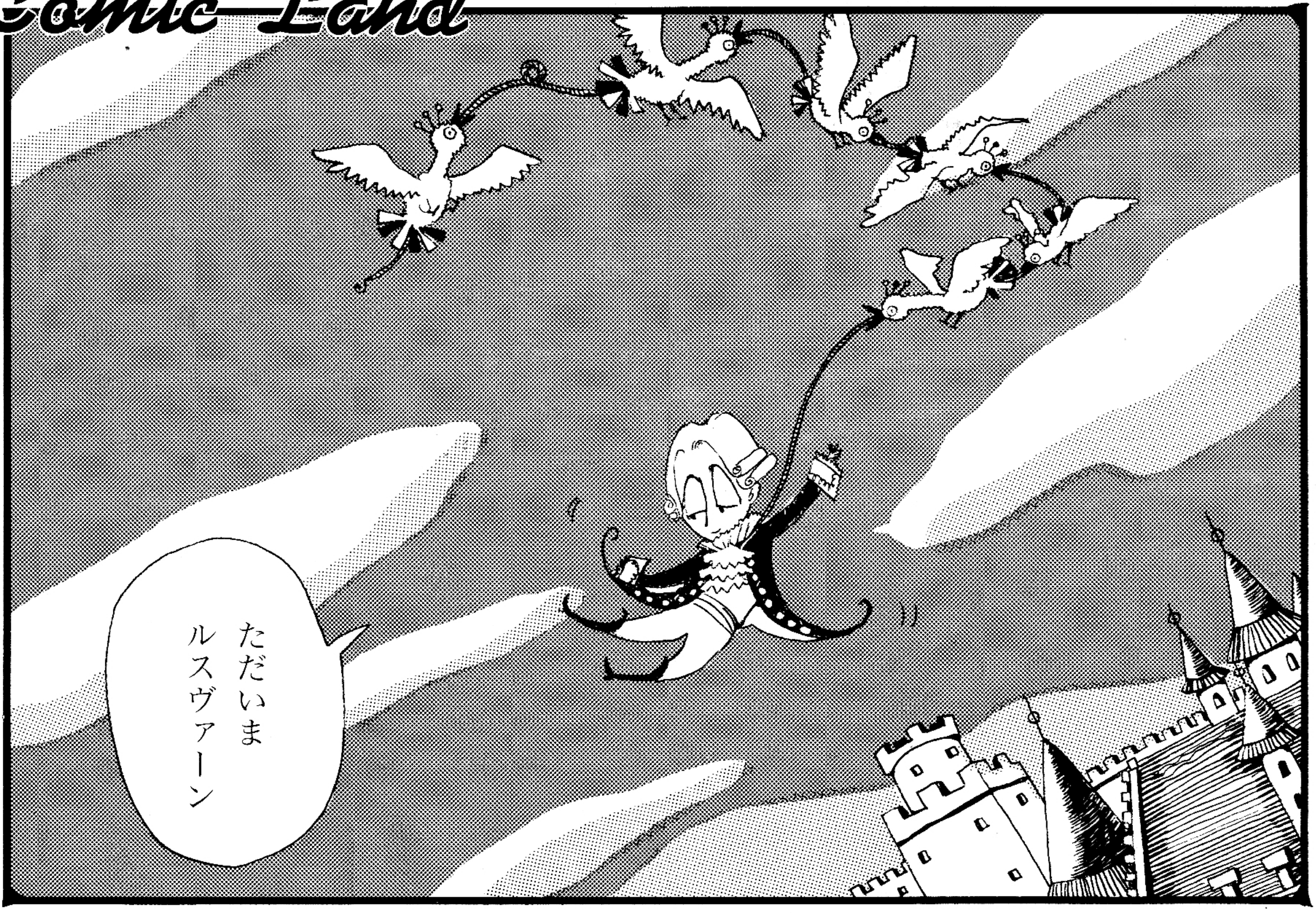
地階の喫茶ルームで一休み。なぜか文房具も売っているのです。

ここにあげたあそび方は、ほんの一例。あなたの町の図書館は、どんな楽しみ方ができますか？ 図書館であそぶより、図書館をあそんじゃう、そんな図書館あそび、自分で開発してみるのもまた楽し。



杉並区立中央図書館　利用案内

〒167 杉並区荻窪3―40―23
TEL　03(3391)5754
ＪＲ・地下鉄丸の内線荻窪駅から徒歩８分
開館時間…火〜土　午前９時〜午後８時
　　　　　日・祝　午前９時〜午後５時
休館日…毎週月曜日・毎月14日
※貸出の利用は、杉並区に在住・在勤・在学および隣接地区在住の方に限ります。



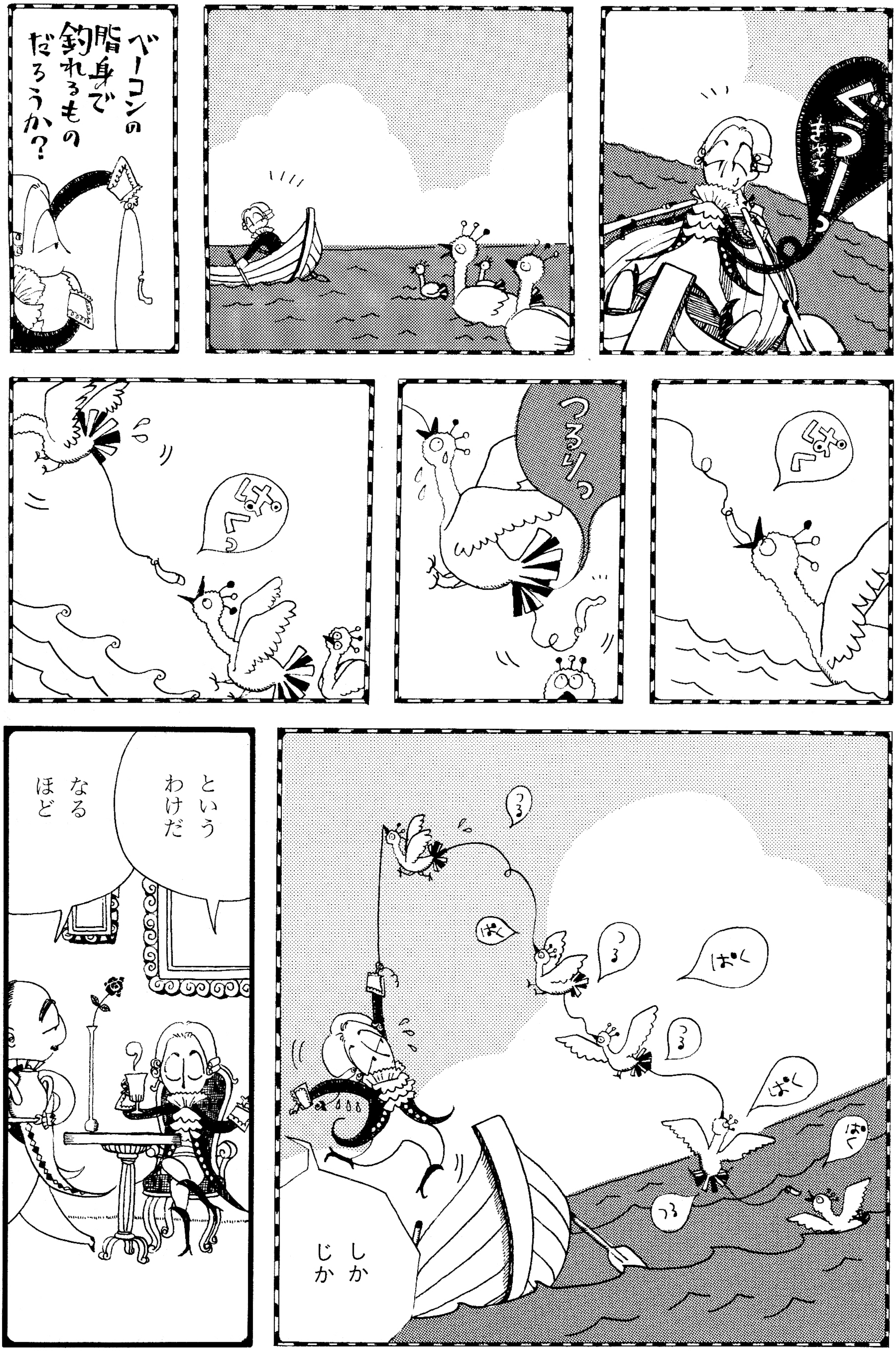
ホラフキー男爵の花々しき御帰還

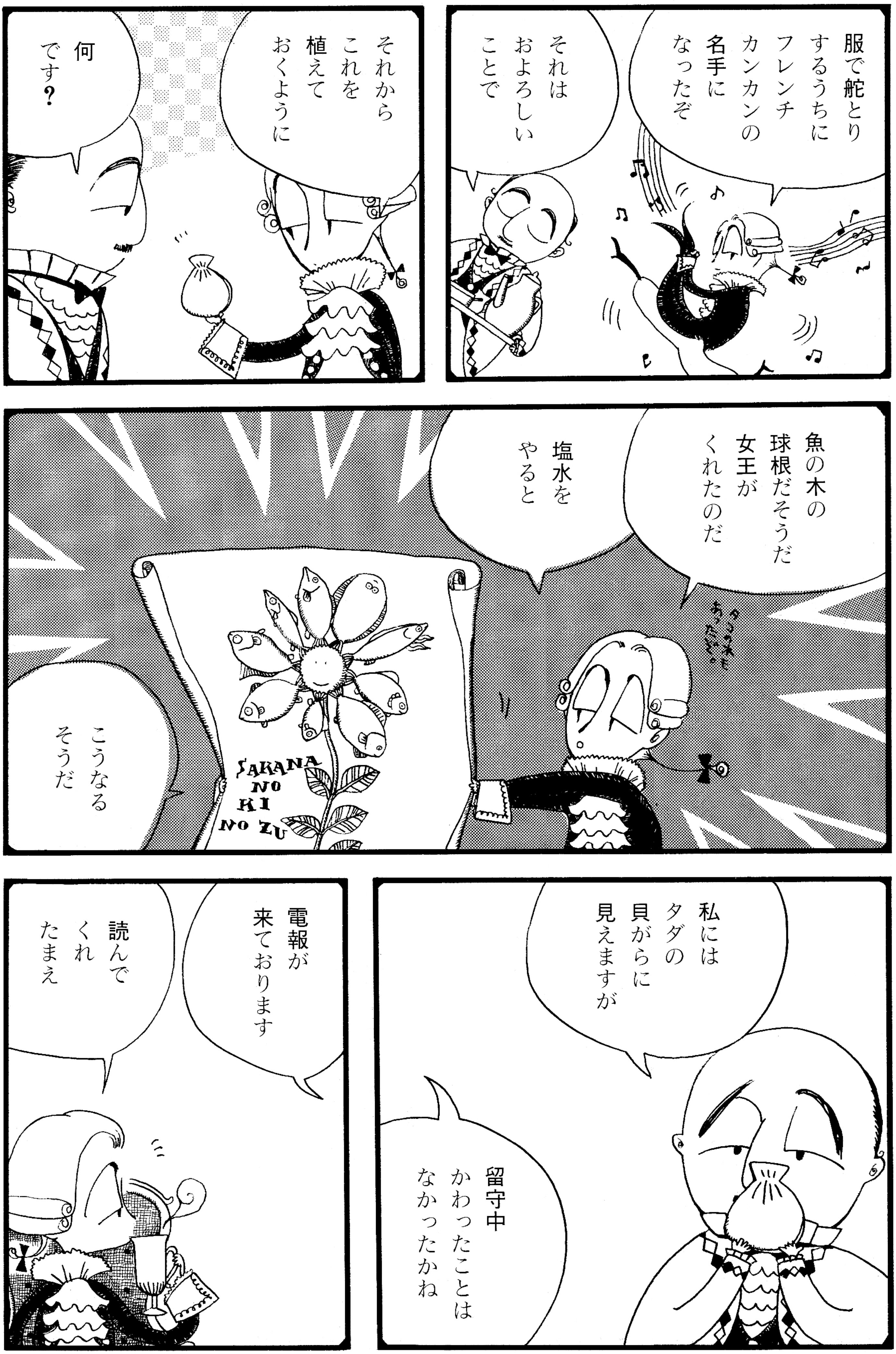
木月（きづき）すみよし



ビュルガー編『ほらふき男爵の冒険』より


南の国はいかがでしたか
ふー
うむ 女王がなかなか帰してくれなくて困ったよ
これはおみやげ
びろーん
わっ
こんなにどうなさいました
うむ これはつまり
かく かく


ぐつ！っ
きゅる
ベーコンの
脂身で
釣れるもの
だろうか？
ぱく
つるりっ
ぱくっ
というわけだ
なるほど
つる
ぱく
つる
ぱく
つる
ぱく
ぱく
つる
しかじか

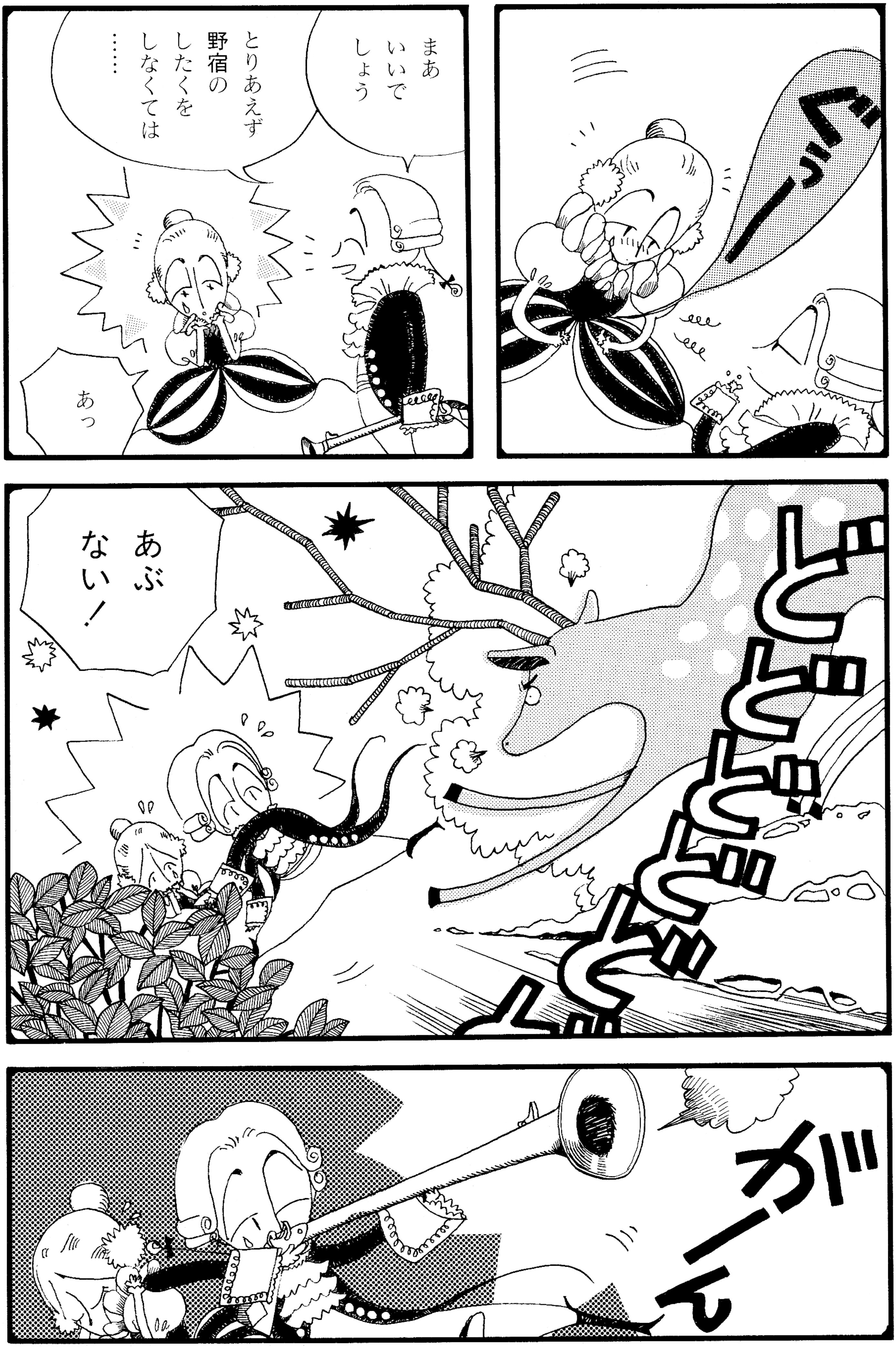

服で舵とりするうちにフレンチカンカンの名手になったぞ
それはおよろしいことで
それからこれを植えておくように
何です？
魚の木の球根だそうだ女王がくれたのだ
塩水をやると
タコの木もあったぞ。
SAKANA NO KI NO ZU
こうなるそうだ
私にはタダの貝がらに見えますが
留守中かわったことはなかったかね
電報が来ております
読んでくれたまえ


『今 竜に
おそわれて
います。
助けて下さい
キャアー
北の国
フルエル姫より』
たいへん
だ
早速
助けに
行こう
この火山から
地球の真ん中を
つっきるのが
最も近道と
存じます
ぼこ
ぼこ
ぼこ
ぼこ
ぼこ
うむ
では
行ってくる
ちょっと
あついな。
球根に
塩水をやるのを
忘れるなよ
かしこまりました。


ひゅーー
そろそろ地球の真ん中あたりかしら
コンパスが混乱してダンスしている！
ひゅー
ざ
がー
フルエル姫——！
ここよー
ここよー
がー
しまった遅かったらしい
たすけてーー
あっ
が


あわてて弾丸を忘れてしまった
火打ち石しかないぞ
ありゃー。
それっ
ぱしっ
伏せるのですフルエル姫!!
びくっ
ひゅっ
竜のおなかの中
きゃあっ!!
がちーん


どがーーん
フルエル姫 大丈夫ですか
ありがとう ホラフキー様
ごな ごな
サクランボを摘みに来たのですが道に迷ってしまったのです
サクランボですって ?
だってもう今は種ばかりになってしまうころでしょう ?
?
ええ でも…



ブゥーー
まあ いいでしょう
とりあえず野宿のしたくをしなくては……
あっ
どどどどどど
あぶない!
ガーん



弾丸はないはずじゃなかったんですの？
サクランボの種を使ったのです
むく！
ひゃ
……
やはり種ではムリか
ぽん


すくすくすくすく
ぱあーーっ
まあ
男爵と御一緒
するといつも
フシギなことが
おこりますのね
きっと我が輩が
フシギを愛するので
彼も我が輩を
愛してくれる
のでしょうな


実のなったところで
ごん
やっぱり花よりダンゴ
鹿肉のさくらんぼソースといきましょう
サクランボが手に入ってよかったですねフルエル姫
ありがとうホラフキー様
何とお礼を言ったらいいやら
ああこれでムーシェも助かります
ムーシェの病もこれさえあれば治るのですから
ムーシェとは誰です?
妹さんですか?


いいえ
私の いいなずけ ですの
フルエル姫 あなたは以前 我が輩を 愛していると…
あれは ウソだったと 言うのですか
ウソでは ありませんわ でも…
夫が 冒険家では 私は毎日心臓が 止まってしまう ことでしょう
わかって 下さいます わね…？


我が輩急用を思い出しました
そんな…お城にいらっしゃって下さいお礼をしなくては
すっく!
もう我が輩の役目はおわったのです
さようならフルエル姫
おしあわせに!
ざぶーん
ホラフキー様も…

きづき　すみよし……1967年、神奈川県生まれ。東京学芸大学教育学部特別教科美術学科卒。イラストなどの仕事をしながら、まんがを描き続けている。




……
さっ
さっ
さっ
さっ
聞いてはいけませんでしたか
まだ芽は出ないかね？
はあ
女王にだまされたようですな
やはりただの貝がらですよ
そんなことはあるはずがない
女王は我が輩のことを愛していると言ったんだから
気長にやることだルスヴァーン
あせらずに
かしこまりました

おわり

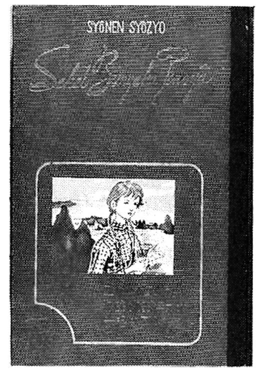
——さがします！

記憶の底のあの一冊——



カッパのクー　フレーベル館
絵・村上勉　文・宮沢章二

海をおそれる少年　講談社
Call It Courage (1940)
作・アームストロング=スペリー
＊少年少女世界文学全集
第17巻アメリカ編(7)に収録



あ：ねえ、たっくん、人間って、他人にとってはどうでもいいようなことを、いつまでも想っていたりするものね…。

た：どしたのあかねちゃん、大丈夫？

あ：このコーナーやってると、つくづく感じるのよ。だって、名作と言われてるわけでもないような本を、いつまでもさがしてる人がけっこういるんだもの。

た：なるほど…言われてみれば。でもそういうのって、なんだかいいね。

あ：たっくんもやっぱりそう思う？ 今回さがした「カッパのクー」なんかは、全然知らなかった絵本なんだけど、読んでみたらいいのよ、すごく。さし絵が村上勉さんで、きっと初期の作品だと思うんだけどね。

た：どんな人がさがしてたの？

あ：23歳のOLの人。小さい頃にお父さんが読んでくれたこの絵本が大好きだったんだって。大人になってから、題名を頼りにさがしてみたら、どこの書店にも置いてなかったらしくて。

た：へえー、そんな本どうやって見つけてきたのさ。

あ：これは題名がわかっていたから、それを頼りにひたすら古本屋巡り。図書館って手も考えたんだけど、やっぱり手に入れたいじゃない？

た：（笑）あかねちゃんらしいね。

あ：なんとかさがしだしたんだけど、ずいぶんなつかしい文字を発見しちゃった。ほら、〝トッパンのおはなしえほん〟！

た：？ 知らないなあ。

あ：えー、有名だよお。知らないのー。

た：ほっといてちょうだい。

あ：あ、それで「カッパのクー」なんだけど、不思議な絵本だった。アイルランドの民話がもとになったお話で、海に住むカッパと人間の交流を描いたものなの。

た：アイルランドにカッパがいるの？

あ：うるさいなあ。ほんとに心に残るお話なんだから。

た：それだったら、こっちのお話だって感動ものだよ。35歳の主婦からです。『海をおそれる少年』というポリネシア民話で、〝勇気〟という名の少年が冒険の旅に出る話です。文学全集のようなものに入っていたはずです。」

あ：すぐ見つかった？

た：うん。図書館でさがしたからね。

あ：ちぇっ、安易なやつ。

た：そんなことないよ。今回もそうなんだけど、さがしたい本の題名さえわかっていれば、図書館で簡単に見つかるんだ。その本が欲しい場合は別だけど、みんなもっと身近な図書館を上手に利用しようよ。

あ：それはそうだね。

た：「海をおそれる少年」は、講談社の少年少女世界文学全集の中に、「赤毛のアン」なんかと一緒に収録されていたよ。作者の名前は、スペリー。

あ：えっ、民話じゃなかったの？

た：うん、民話の形をとった冒険物語という感じだね。海をおそれていた少年マファツが、勇士に成長して帰ってくるまでを、実に巧みに描いている。

あ：またも〝かくれた名作〟ってやつだね。

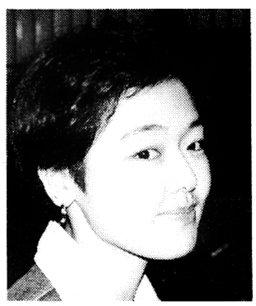
た：うん。この話は、学研の現代子ども図書館のシリーズでも、「それを勇気とよぼう」のタイトルで出ていたよ。

アルマジロ編集部では、みなさんの〝記憶の底の一冊〟を募集しています。断片的な情報からでもおさがししますので、記憶をたぐってどしどしお寄せ下さい。

私のヒーロー再発見

第2回

小林聡美さん



——子どもの頃、一番の楽しみだったことは何ですか。

うちの姉や近所の子どもたちとつるんで裏の空き地で基地を作って遊ぶ、という子どもらしい遊びをしていました。ままごともやったけど、長続きはしませんでしたね。

——外で遊べない時はどうでしたか。

幼少の時の記憶はあまりないんですけどねえ。家の中で遊んだ記憶ってないですよ。ご飯の時間まで外で遊んで、帰ってきてご飯食べてテレビ見て寝るとか、そういう感じでした。

——小さい頃に読んだ本で、印象に残ってるものはありますか。

小学校2年生くらいの時に、「ふらいぱんじいさん」っていう本があったんですけど。

——あっ、知ってる！

知ってます？　その本がすごく好きで、何回も読みかえしたし、自分で紙芝居を作ったりもしました。学校の課題でやったんですけどね。

——たしか、フライパンが旅に出るんですよね。

そうです。フライパンのおじさんが旅に出て、いろんな動物と出会いがあったりして、……最後はどうなるんだったかな。絵がすごく可愛かったんです。フライパンに顔がついてて、手足なんかもついてて……。

——うんうん。

でも、あんまり本とかは読まない子でしたけどね。絵本なんかでも、印象に残っているのはその中の1ページの絵とか。あと、憶えてるのは、日本昔話の一つで、引出しをあけると……。

——あ、田んぼがあってっていうやつ。

そうそうそう、あれなんだっけな。（思い出しながら）「この引出しは見ちゃいけないよ」とか言うんですよ。あ、うぐいすが出てくるんだ。

——男の人が山に入って、うぐいすの宿に行くんですよね。引出しが四つか五つあって、一つは見ちゃだめだって。

うぐいすに言われるんですよね。で、見ちゃって、最後はどうなるんだっけ。いつも最後は憶えてなくって。（笑）

——今の自分につながるような本ってありましたか。

んー、そういうのはないですねえ。自分で本を買いたくてはじめて買ったのは、伝記のシリーズでした。それまでは、うちの姉が本が好きだったから、姉のを適当に読んでましたけどね。

——はじめて買った伝記って何だったんですか。

（笑って）野口英世。なんか好きだったんですよ。記念館にも行っちゃったくらいなんだけど、それが、子ども用の伝記を買えばいいのに大人用のを買っちゃって、死ぬまで読めなかったっていうのがありましたね。（笑）

——まだ死んでないって。

漢字がいっぱいでぜんぜん読めなくて、やさしい本を買いなおしたりして。伝記のシリーズは好きでいろいろ揃えましたよ。「こんなにそろっちゃったあ」とか言ってよろこんでました。

——めずらしいですね。伝記なんて、誕生日に親が買ってくるものだと思ってたけど。

伝記は全部自分で買いましたね。

——好きだったのは、だれの伝記？

えーとね、一休さんとか、キュリー夫人とか、湯川秀樹さんとか、ヘレン＝ケラーとか……。

——定番ですねー。でも、おこづかいで買うなんてたいした子どもだったんですね。普通、ぬいぐるみとかそんなものに使っちゃいますよ。

ぬいぐるみには全然興味なくって、自分で買ったことないんですよ。あんまり無邪気な子どもじゃなかったんですかねえ。

——子どもの頃は、やっぱり本よりテレビでしたか？

どっちもあんまり見なかったなあ。テレビは弟が好きだったので、つられて見て

ましたけど。自分からはあんまり何もしない子でした。女優になったのも、まあ、出来心ですから。

――あまり物事に熱中しないタイプ？

うーん、でも、映画見て泣いたりすることはしょっちゅうありますよ。テレビ見ても泣くし。〝泣き〟は、ちょっと弱いですねー。

――映画はよく見ますか。

そうですね。暴力ものとか、戦争ものとかはダメですけど、そのほかはなんでも見ますね。子どもの頃は、あんまり見た記憶がありませんけど。最初に見たのはね、……ヘレン＝ケラーかもしれない。（笑）

――「奇跡の人」ですか。自分からこれが見たいと思って見に行ったんですか、ヘレン＝ケラーを。



こばやし・さとみ　1965年５月24日、東京都生まれ。「３年Ｂ組金八先生」の生徒役でデビュー。現在、フジテレビ系「やっぱり猫が好き」で活躍中。実生活でも猫を飼いたいそうな。



小林聡美さんの“記憶の底の一冊”
「ふらいぱんじいさん」は、あかね書房より現在も発売中。

そう。

――伝記が好きなのは、ほんとのことだからですか？

そうです。フィクションよりはやっぱり実話の方が好きですね。

――伝記を読んで、その人に憧れたりしてましたか。

というより、どういう人か知りたかったから、というだけです。精神構造とか、そういう部分に興味があるんです。

――子どもの頃は何になりたかったんですか。

いろいろあったけど、小学校高学年の頃は、カメラマンになりたいと思ってました。写真とるの好きでしたから。今でもとってますよ。自分では、けっこういい写真とると思ってるんですけどね。

――絵は描きますか。

絵は好きでしたね。今は描きませんけど、けっこう得意でした。見る方も、「この作家はどうのこうの」とかこまかいことは言いませんけど、見に行くことはありますね。「この画家が好きで、絶対見に行く！」なーんてのは……いますけど。（笑）

――誰ですか。

アレックス＝カッツっていう人物画を描く人。好きなんですけど、展覧会とかにも出ないし、画集もほとんど出てないんです。本物の絵は一度しか見てないんですよ。やさしい絵で好きですね。

――休みの日は何をしていますか。

ぼーっとしてますね。天気のいい日は、近くの川原や公園に行って本を読んだりもしてます。気がつくと一日中読んじゃってることもあります。でも、こういうふうにしようと思ってきめてするんじゃなくって、何となく気持ちのいいことばっかり求めて、その日その日を過ごしているみたいな…。今日は天気がいいけど、うちでぼーっとしてるのが気持ちいいからそうしよう、とか。「今日は何キロ走んなきゃいけない」「何時に起きなきゃ」とかいう決めごとは全然ないです。

――最近、本は読みました？

いま読んでるのが、キャサリン・ヘップバーンの、……伝記なんです。（笑）

――やっぱり伝記は尾をひいてるんですね。

人の人生には興味ありますね。自分の人生に役立つわけじゃないですけど。

「ポリシーのないやつですみませんねえ」などと言いながら、自分のことをしっかりわかってらっしゃる小林さん。彼女の自然体の生き方は、見ていて気持ちよく、またうらやましく思えます。忙しいながらも、マイペースの小林さんに、「がんばってください」なんて常套句は……いらないかな。

ぼく　この本が好き!!

がきんちょ通信

文／山口明

今回おじゃましたのは、東京・足立区の「めだかの会」。2歳から4歳までの、幼稚園・保育園に入る前の子どもたちとお母さんがいっしょに遊んでいます。

どんな絵本を読んでいるのか、どんな絵本が好きなのか、生の声を聞くために、お願いしてお気に入りの絵本を持ってきてもらいました。さて、フタを開けてみると……。



がきんちょ12人に聞きました

まずひでなおくん（3歳）は、『**のりものちえあそび**』を持ってきてくれました。いろんな乗り物の絵や写真が載っていて、クイズ形式で読んでいく本です。お母さんが消防車を指して「この乗り物はどの人が乗ってるのかな？」と聞くと、ひでなおくんが「これ！」と消防士さんを指します。なるほど、こうやって遊ぶのか。

続いてはまさひとくん（2歳）です。『**まわるまわるやまのてせん**』という本を持ってきてくれました。JR山の手線を写真で紹介している本です。「絵はいや！　写真がいい！」ということでした。でも別に電車が好きというわけではなくて、生活と密着した身近なものが題材になっていれば、という感じ。だから感じ方も生活に密着しています。「雨が降ると電車がぬれてかわいそう！」だって。



次に話を聞いたのは、まさとくん（2歳）。まさとくんのお気に入りは『**3びきのこぶた**』でした。「いろんな動物を登場させて、自分で勝手に物語をつくっちゃってます」（お母さん）それから、この話の中のぶたさんが大好きなんだそうです。どうして？　と聞いたら、「ぶたさん、マーくん（自分のこと）みたい！」だって。

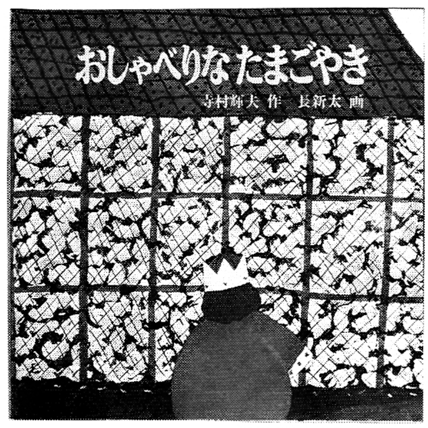
かなえちゃん（4歳）が持ってきてくれたのは、『**くるくるえほんでんわ**』。いわゆるしかけ絵本です。表紙からぶち抜きで丸く穴が開いています。最後のページだけ電話のダイヤルがついていて、それが回るようになっているのです。それで、各ページにあるいろんな電話番号（110とか、おじいちゃんのうちとか）に電話して遊ぶんですね。他には『**のせてのせて**』『**プーたんおばけだよ**』『**アンパンマン**』が好きだそうです。

次はまいこちゃん（4歳）です。本人のお気に入りは『**おっぱい**』。字が読めないのに、「自分で読まな

きゃ納得しない性格」だそうで、毎晩寝る前に自分でお話を作りながら読んでる（?）とか。だから、こういうわかりやすい絵で単純な展開の本が好きなんですね。お母さんがお気に入りの『**とりかえっこ**』なんかは、描いてある内容が絵だけでは読めなくて、おもしろさがわからないみたいです。

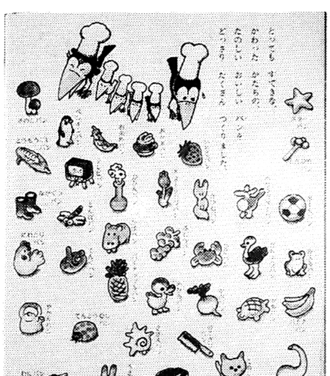


りゅうすけくん（3歳）は、『**ウルトラ怪獣大百科**』を持ってきてくれました。あー、やっぱり男の子だねぇ。もう1冊、好きなのは『**ワンダーブック**』という月刊の配本もの。短いお話や絵がいろいろのってて、1つ1つが短いから、あっちこっち行ったり来たりできるのがいいんです、とのこと。



『**おしゃべりなたまごやき**』を持ってきてくれたのは、たかのりくん（3歳）。けっこう長いお話なんだけどいつもちゃんと最後まで聞いてるし、絵も見ていて、「すごくすき！」だそうです。「他には古典童話やアンパンマンも好きです」（お母さん）とのこと。夜寝るときに読んでもらうのは、長いお話が主で、お気に入りは6〜7冊。昼間に読んでるのはディズニー絵本や電車ものらしいです。

よしずみくん（3歳）の持ってきてくれた『**からすのパンやさん**』はボロボロ。毎晩寝る前に読むそうです。からすが本の中で擬人化されているのが親しみやすいんでしょうね。いろいろな形に焼かれたパンがたくさん描かれているページは、とっても夢があっておいしそうで、いつもそこのページで止まってじーっと見てるんだそうです。ぜんぜん飽きないんですね。その他には『**おおきなおいも**』。これには「おいしそう！」という感想がまず出てきました。あと、図鑑や汽車の写真集も好きだそうです。お父さんの影響かな。



みさとちゃん（3歳）の場合はお母さんも大の絵本好き。特に『**はじめてのおつかい**』は2人とも大ファンなんだそうです。みさとちゃんは自分でときどき『**ダンボ**』なんかも読んでるそうです。ビデオがあるから、入りやすいんですね。それから、『**ぐりとぐら**』『**ぞうのババール**』も大好き。



えいたろうくん（3歳）は、『**でんしゃがいっぱい**』『**はやいぞしんかんせん**』がお気に入り。子どもって、どうしてこんなに電車が好きなんでしょう。それから『**ノンタン**』のシリーズも好きなんだそうです。

たかひろくん（2歳）。「この子はぜんぜん本を読まない子なんです。上の子（おねえちゃん）はよく読んでたんですけどねぇ」ということ。あーよかった。たまにはこういう子がいないと、何か変ですよね。たかひろくんは、話すそばからその辺を走り回っていました。すっごく元気な子です。

最後に、てんぺいくん（4歳）です。持ってきた本はいずれもボロボロ。中でも『**ねないこだあれ**』。とてもきれいな絵です。単調な展開なので、読んでもらっているうちにあくびが出てきて、寝る前には最適だとか。

大人の基準 子どもの基準

　今回は12人のがきんちょとお母さんに話を聞くことができました。ごらんになったように、12人の好みはおおむねバラバラで、何人かが電車の本を持ってきてくれたのを除くと、1つとして共通のものはありませんでした。でもそこには何らかの共通項があるのでは？

　私（筆者）の個人的な印象では、思ったよりも柔らか目のものが多かったなあ、というところでした。

　ふだんから、やれ絵本だ、児童文学だ、という生活を送っていると、良きにつけ悪しきにつけ目が肥えてきて、自分の好みというものがどうしても出てきます。当然自分の好きな作家や作品が出てくる、これは人情というもの。そうすると、子どもにも自分と同じ好みを期待してしまう、これもまた人情というものです。

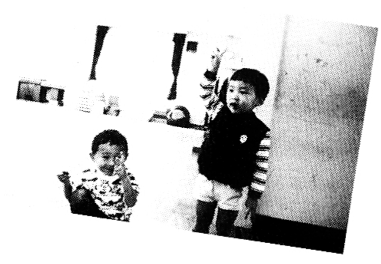
　でも、薄々感づいてはいたものの、実際に子どもに会ってみて、彼らの「これが好き！」という絵本を見せてもらったら、やっぱり意外の念は隠せませんでした。

　要するに、私の好きなものはあくまでも大人の目で見たすぐれものだったわけです。実際に子どもが夢中になる絵本……それは、芸術性がどうのこうのというのは二の次で、それとはまったく違ったところに基準があるようです。

　そこのところを、今回集まっていただいたお母さん方に、ちょっと聞いてみました。何もこれがすべてではありませんが、毎日飽きるほど生の子どもと接している人たちの、貴重な意見です。

「うちの子の好きな本」お母さんたちの意見

「子どもの好きなものって、すぐ変わるんですよ。どんなものでもそれなりに好きだし、また大人がつまんないって思うものでも子どもはおもしろがるしね。例えばページをめくると、ただいろんなものが出てきて同じことを繰り返すっていうパターン。あれなんか、単調ですけど子どもはすごく喜びますもんね。でも基本的には何が好きになるかってわかりませんよ（キッパリ）」



「爬虫類や昆虫が出てくるものは好き嫌いがはげしいです。例えばバッタが出てくるだけで気持ち悪いといって嫌う子もいるし……」

「シンプルですぐわかるものが好きですよね。ドラえもんとかアンパンマンみたいな。色もあんまりないほうがいいんじゃないかな。リアルで緻密な絵っていうんですか、いわゆるアートっぽいやつ、ああいうのは子どもは怖がるんですよね。ほら、フランス人形やマネキンの怖さってありますよね。ああいうのが暗闇に置いてあったりするとぶきみでしょ。あれと同じじゃないかしら」

「空想の余地があると、子どもは自分で想像力を膨らませてそれで遊べるから、喜びますよね」

「はっきりわかるものが好きだと思う。自分の身の回りにあるもの、見たことのあるものが題材になってるとわかりやすいですよね。だから、汽車よりも山の手線」

「親の立場から言うと、しつけに役立つ本がもっとあってもいいんじゃないかと思います。夢のある本もいいけど、現実的・具体的なものを題材にした本もほしいですね。例えばおふろとか、好き嫌いをしないとか、道徳を押しつけるんじゃなくて、子どもの立場にたって、いろんなことのおもしろさの発見につながるような本です」

「オバケやオオカミってうけますよね。怖いもの見たさでしょうね。ほら、もったいないオバケってあったでしょ、テレビのCMで。ああいうのって、子どもは意外と影響受けやすいんですよ」

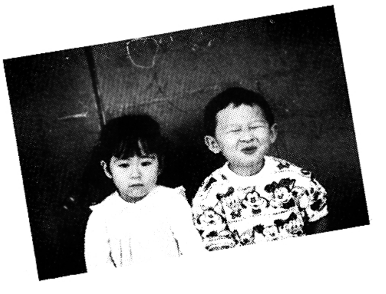
大人の楽しみ方 子どもの楽しみ方

　今回の取材で強く感じたことは、子どもにとって絵本というのはと

今回登場した本のリスト

のりものちえあそび（幼児のがくしゅう百科絵本）　ひかりのくに
まわるまわるやまのてせん（砂田弘・文）　小峰書店
3びきのこぶた（平田昭吾・文）　ポプラ社
でんわ（くるくるえほん　1）　MOE出版
のせてのせて（松谷みよ子・文　東光寺啓・絵）　童心社
プーたんおばけだよ（ならさかともこ・絵　わだよしおみ・文）　JULA出版局
おっぱい（みやにしたつや）　鈴木出版
とりかえっこ（さとうわきこ・作　二俣英五郎・絵）　ポプラ社
ウルトラ怪獣大百科　講談社
ワンダーブック　世界文化社
おしゃべりなたまごやき（寺村輝夫・作　長新太・絵）　福音館書店
からすのパンやさん（かこさとし）　偕成社
おおきなおいも（赤羽末吉）　福音館書店
はじめてのおつかい（筒井頼子・作　林明子・絵）　福音館書店
ぐりとぐら（なかがわりえこ・作　おおむらゆりこ・絵）　福音館書店
ぞうのババール（ブリュノフ）　評論社
でんしゃがいっぱい（安井庸浩・絵）　小学館
はやいぞしんかんせん（育児絵本）　小学館
「ノンタン」シリーズ（おおともさちこ）　偕成社
ねないこだあれ（松谷みよ子・文　さとうわきこ・絵）　講談社





どのつまりがおもちゃの一種でしかないのではないかということ。とかく大人になってまで子どものための絵本を読みたいとか作りたいとか思ってる人というのは、絵本というものを神聖化してしまい、特別な魔力を持った「賢者の石」みたいなものと見なしてしまう傾向がないでしょうか。

でも、子どもは絵本を「鑑賞」しているのではなくて、あくまでも絵本で「遊んで」いるのです。だから、彼らにとっては、絵本にっぽん賞もボローニャのグラフィック賞もまったく関係ありません。

それから忘れてはいけないのは、子どもは絵本というおもちゃを、大人の読者がするのとは違った使い方で楽しむということ。

今回の取材で話を聞いた人たちもそのほとんど全員が、絵本を寝る前の読み聞かせ用として考えていました。言ってみれば、大人にとっては一種の芸術品でありうるものも、子どもにとってはお母さんとのコミュニケーションの手段に過ぎないのです。

また、小さな子どもというのは、親から受ける影響がものすごく大きいということも顕著でした。絵本に限らず、お母さんやお父さんが好きなものって、子どもも好きになるものでしょう。第一、絵本を選ぶのは、大体の場合子どもではなくて親ですもんね。子どもはお母さんが好きだから、お母さんの好きなものや選んでくれたものも好きになるのは当然。

でも、だからといって作り手の方がお母さんに媚びる必要はぜんぜんありません。もちろん、子どもにだって。本当によいものを作れば、必ず誰かが認めてくれるだろうし、作ってても充実してるはず。大切なのは本当によいものを見抜く感性、結局これに尽きます。

めだかの会

東京都足立区、梅田住地区のお母さんたちの集まり、発足して4年目です。火曜日・水曜日の2班に分かれて、クリスマス会などをはじめとして週1回（月に3回）、住地区センターの児童館で活動しています。参加しているお母さんは幼稚園や保育園に入る前の子どもをお持ちの方たちで、ふだん他のお母さんとふれあう機会がないのでこの会の人たちといっしょに楽しみ、リラックスするのが主旨。

子ども世界のメディアを探る①

「絵本」の巻

砂田弘

古典名作絵本の魅力

イギリスのグリーナウェイやポターが子どもの絵本の歴史を切りひらいてから約百年、欧米を中心に数多くの絵本の傑作が生みだされてきました。なかでも、古典名作ともいえる『**げんきなマドレーヌ**』（ベーメルマンス・一九三九）、『**かもさんおとおり**』（マックロスキー・一九四〇）、『**ちいさいおうち**』（バートン・一九四一）、『**こねこのピッチ**』（フィッシャー・一九四八）、『**しろいうさぎとくろいうさぎ**』（ガース＝ウィリアムズ・一九五八）などは、わが国の子どもたちにも広く読みつがれています。

好奇心いっぱいの子どもたちを生き生きと描いた『げんきなマドレーヌ』、かも一家の引っ越しを通して人間と動物の心のふれあいを描いた『かもさんおとおり』。『ちいさいおうち』では、小さな家の運命に託して人生そのものが語られるとともに、人間と自然の調和のありかたが問われ、『しろいうさぎとくろいうさぎ』では、理想的な愛のかたちが描かれています。そしてどの作品でも、生きることのすばらしさがうたわれています。

興味深いのは、古典名作といわれる絵本の多くが、一九四〇年代から五〇年代にかけてのアメリカで生まれていることです。その背景には、第一次大戦後ヨーロッパからすぐれた画家がおおぜいアメリカに移住し

『しろいうさぎとくろいうさぎ』（福音館書店刊）





『げんきなマドレーヌ』（福音館書店刊）

たこと、アメリカの児童図書出版がさかんだったこともありますが、もっとも大きな理由は、当時のアメリカが未来をバラ色で描けるような、精神的にも経済的にもゆとりのあるよき時代だったからでしょう。

これらの絵本の多くが、起承転結のととのったストーリーを持っていることにも注目する必要があります。ストーリーを柱にしているという意味では、これらの絵本は文学作品にたいへん近いといえます。

わが国で本格的な創作絵本が生まれるようになったのは、一九六〇年代にはいったころからです。それまでは戦前の「講談社の絵本」に代表されるような、昔話や偉人伝に絵をつけたものがほとんどで、オリジナリティはまったく見られませんでした。

『きかんしゃやえもん』（文／阿川弘之　絵／岡部冬彦・一九五九）、**『ぐりとぐら』**（文／なかがわりえこ　絵／おおむらゆりこ・一九六三）、**『ぐるんぱのようちえん』**（文／西内みなみ　絵／堀内誠一・一九六五）**『11ぴきのねこ』**（馬場のぼる・一九六七）、**『とこちゃんはどこ』**（文／松岡享子　絵／加古里子）などが、この時期の創作絵本の代表作です。みなさんもきっと、子どものころ出会われたことがあると思います。

欧米と違って、わが国の創作絵本は画家と作家が協力して作ることが多いのですが、その特徴はすでにこの時期から見られます。しかし、スケールは小さいものの、ストーリーに重点がおかれていること、また生きることのすばらしさを語っている点では、欧米の古典名作絵本とほぼ共通しています。高度成長の坂を登りつつあったこの時期の日本の子どもたちの世界には明るさとエネルギーがみなぎっていたのです。

絵本は児童文学か

ここで、はっきりさせておかねばならぬ問題があります。絵本は児童文学の一ジャンルであるかどうかという問題です。

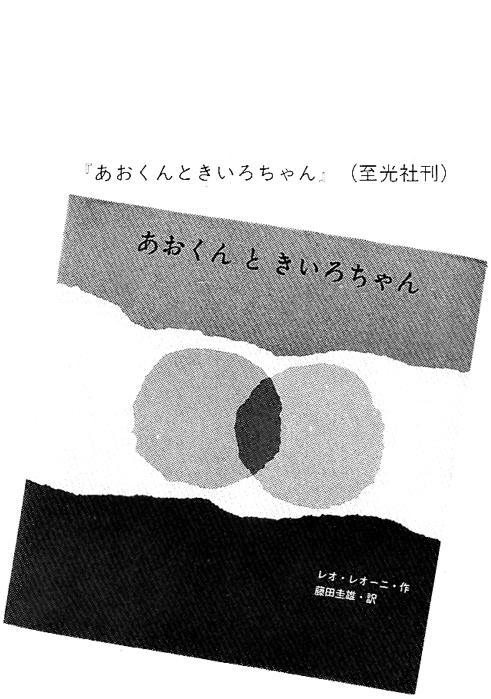
結論をいえば、絵本は児童文学の一ジャンルではありません。文学は原則としてコトバだけから成り立つ世界ですが、絵本は絵とコトバによって作りだされる世界だからです。

それにもかかわらず、絵本はしばしば児童文学のワクの中で論じられます。児童文学の入門書のほとんどは、絵本のために一章をさいています。なぜでしょうか。

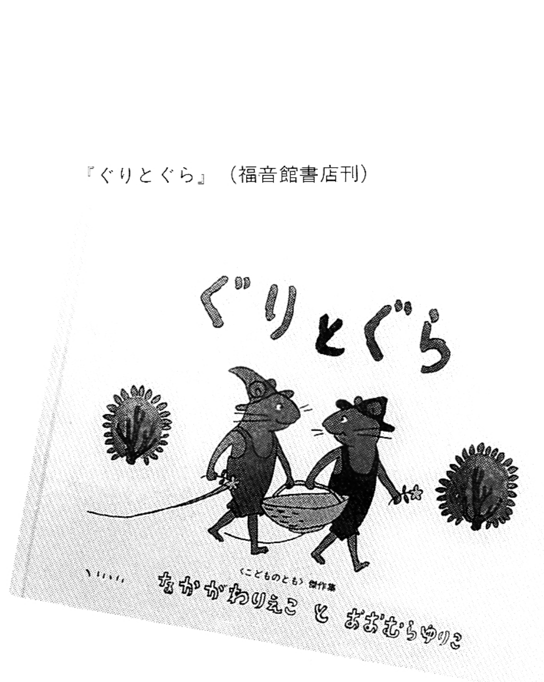
子どもはふつう、絵本によって初めて書きことば（文章）に出会います。そして絵本でコトバに親しんでから、子ども向けの文学作品（児童文学）に移っていきます。絵本は児童文学の扉であるといわれるゆえんですが、それほど両者は密接に結びついているのです。先にのべたように、創作絵本の多くはストーリーを柱としていることでも、児童文学と共通しています。

グリム童話をはじめ、昔話の絵本も数多く出版されていますし、アンデルセンや宮沢賢治の童話にも絵本化されたものが少なくありません。これらは絵本なのか、それとも児童文学なのか。また、最近差別問題で

『あおくんときいろちゃん』（至光社刊）



『ぐりとぐら』（福音館書店刊）



クローズアップされている『ちびくろさんぼ』（バンナーマン・一八九九）のように、文学作品か絵本かの区別がつけにくい作品もあります。

児童文学と絵本が親子のような固い絆で結ばれている以上、児童文学を論じるとき、絵本を無視することはできません。しかし、それを理由に絵本を児童文学のワクの中に取りこんではなりません。くり返しますが、絵本は児童文学とは異なる独立したジャンルのメディアなのです。

映像志向絵本の登場

すぐれた絵本とはどのようなものか。このことについても、これまでいろいろと論じられてきました。

絵本はその制作手法によって、①文章主導型　②絵画主導型　③文・絵統一型の三つに大別することができますが、③のタイプ、文（コトバ）と絵がそれぞれを補いあい、融合・統一されて〝絵本〟という独自の世界をつくりだすことが理想であるという考えが、長いあいだ支配的でした。

文と絵をテニスのプレイヤーにたとえれば、実力のほぼ等しいふたりのプレイヤーが、レンドル対ベッカーの一戦さながらに、たがいに一歩もゆずらぬゲームを展開するということになるでしょうか。その代表とされたのが『かもさんおとおり』や『ちいさいおうち』など、古典名作といわれる絵本でした。

ところが一九六〇年前後から、まず欧米でこの定説が崩れはじめ、②の絵画主導型の絵本に注目すべき作品が生まれてくるようになります。たとえばスイスのペーター・ベーツェルの『かわいいことり』（一九六四）は、タイトル以外はコトバが一つもない〝文字なし絵本〟です。読者はページをめくりながら、想像力をはたらかせて自分なりのストーリーを楽しむというしくみになっています。

レオ・レオーニの『あおくんときいろちゃん』（一九五五）は、そうした試みの一つの到達点を示すものでした。ちぎり紙の青い小さな丸があおくん、黄色い丸がきいろちゃん。顔も手足もない、単純で抽象的な図形だけで構成されているこの絵本は、必要最小限のコトバは使われていますが、読者が自由なイメージをくりひろげ、ストーリーづくりに参加できる余地を十分に残しています。この絵本のアイディアは、祖父と孫との遊びの過程で生まれたといわれています。

このようないわば映像志向絵本の傑作が生まれる背景には、テレビを中心とする映像文化の急速な発達と普及がありました。画像と音声から成るテレビもまた、広い意味では絵とコトバでつくられるメディアといえます。アニメーションについても同じことがいえます。

その視点に立つとき、絵本のオリジナリティはどこにあるのか。『かわいいことり』や『あおくんときいろちゃん』は、その問いへの一つの答えでした。ベーツェルとレオーニがともにグラフィック・デザイナーであることも興味深いことです。

わが国の映像志向絵本の代表作としては、安野光雅

『はらぺこあおむし』（偕成社刊）





『旅の絵本』（福音館書店刊）

の『**ふしぎなえ**』（一九六八）、『**旅の絵本**』（一九七七）などをあげることができます。いずれも読者が絵を読むしくみの〝文字なし絵本〟ですが、ことに『旅の絵本』では多くの場面に絵のまやかしや名画をひそかに挿入し、読者を二重にたのしませてくれるユニークな絵本となっています。安野光雅もまた、グラフィック・デザイナー出身の画家です。

マンガのコマ割りの手法をいかした『**さむがりやのサンタ**』（ブリッグス・一九七三）も映像志向の強い絵本です。このブリッグス特有の世界は、映画のモンタージュの手法も取り入れて、核のおそろしさを描く『**風が吹くとき**』（一九八二）に発展していきます。

さまざまなくふうをこらした仕かけ絵本が次々と登場したのも、この時期でした。それらは映像全盛時代における絵本の可能性をさぐる貴重な試みの一つでしたが、立体絵本とよばれるものがよく示しているように、その多くは、おもちゃ化された絵本のワクを出るものではありませんでした。可能性をさぐるという意味では、全体をコラージュ（はり絵）で構成し、簡単な仕かけを使うことで、子どもの読者が昆虫とともに成長をたのしむことのできる『**はらぺこあおむし**』（エリック＝カール・一九六九）などは、成功作といえますが、そうした例はごくわずかです。

新しい絵本の試み

テーマや内容から見ても、欧米では一九六〇年代から、わが国では七〇年代から、絵本は大きくさま変わりしていきます。ひとことでいえば、それまではもっぱら明るくたのしい世界を描いてきた絵本が、悲しくてさびしい世界にも目を向けはじめたのです。人生や人間の光の部分だけではなく、影の部分をもとらえはじめたといってもいいでしょう。

『まよなかのだいどころ』（冨山房刊）





『おおきな木』（篠崎書林刊）

たとえば『**おおきな木**』（シルヴァスタイン・一九六四）は、〝無償の愛〟をテーマにしています。原題を「与える木」といい、登場するのはリンゴの木とひとりの男だけです。男はちびっこのころから老いさらばえるまで、次から次へと木に勝手な要求をしますが、木はそれをすべてやさしく受け入れ、さいごには切り株だけになってしまいます。このリンゴの木は無限の母性愛を象徴しているともいわれていますが、それよりもむしろ私たちがここに見るのは、多少の差はあれ、だれもが持っている身勝手さ、〝人間の業〟とでもいうべきものです。リンゴの木の技の形を場面ごとに変化させて、木の心情を表現している技法なども、絵本でなければできなかったでしょう。

センダックの『**まよなかのだいどころ**』（一九七〇）も話題をよんだ絵本です。ミッキーという小さな男の子が、真夜中、階下の物音で目をさまし、両親の寝室の前を過ぎ、パジャマがぬげ、月と星の光で明るい夜の台所の、ケーキを焼くねり粉の器の中に落ちていきます。台所では顔も姿もまったく同じ三人のパン焼き職人が、ねり粉の中にミッキーをまぜこんでしまいますが、やっとのことで逃げだし、ねり粉で作った飛行

機に乗って夜の台所の銀河の空を飛びます。そしてパン焼き職人のためにミルクを手に入れてやり、ぶじベッドにもどってきます。「ミッキー、どうもありがとう。これですっかりわかったよ。ぼくらが毎朝欠かさずにケーキが食べられるわけが」という場面で、物語はめでたく幕をとじます。

　だれもが幼児期に体験したであろう、夢の中での冒険を描いていますが、それを幼児の不安や恐怖とともにとらえているところに、この絵本のユニークさがあります。作者自身が「これは二層でこだましています」と語っているように『まよなかのだいどころ』には読者の深層心理にはたらきかけるものが少なくありません。心理学者によれば、これは母親の胎内に帰りたいという幼児の願望を描いたものであるとか、ねり粉とともに焼かれそうになるミッキーには、ユダヤ人のセンダックのアウシュヴィッツの記憶が重なっているとかいった解釈もあります。なるほどそういわれてみれば、三人のパン焼き職人はヒットラーそっくりです。

　この物語を作りだすには「地獄の苦しみ」に耐え、その苦しみは「分娩の痛さに通ずるものだと思う」とセンダックはのべています。緻密な計算のもとに作られたであろうことは、文字の大小や配置をふくめてのレイアウト一つを見てもよくわかります。そうした努力があってはじめて、二重三重の構造を持つ絵本が生まれたのです。

　わが国でも七〇年代以降、人生や人間を光と影の両面から描いた絵本が生まれるようになります。**『やっぱりおおかみ』**（ささきまき・一九七三）の主人公は、仲間を求めてさまよいますが、目的をはたせず、「やっぱり、おれは　おおかみだもんな。おおかみとして　いきるしかないよ。そうおもうと　なんだかふしぎに　ゆかいなきもちに　なってきました」という結論を得ます。孤独であることの悲しさとともに、孤独であることの尊さを語っているともいえます。六〇年代後半から七〇年代初めにかけて、反乱する若者たちの先頭に立った全共闘がかかげた「連帯を求めて孤立をおそれず」というスローガンを思い起こさせます。

　作者のささきまきは、実験的な作品を描くマンガ家としても知られていますが、この絵本でもマンガの手法をいかしながらさまざまな試みを行っています。主人公のおおかみは、荒いタッチのペン画でシルエットとして描かれ、しかもいつも横顔しか見せません。孤独をおそれないおおかみの面目躍如というところです。また大人の読者は、街を描いた場面に『第三の男』や『素晴らしい風船旅行』などの古きよき時代の映画の一シーンがさりげなく取り入れられていることに気づき、心がなごむことでしょう。

『はせがわくんきらいや』（長谷川集平・一九七七）にもふれておく必要があります。赤ちゃん時代にヒ素の入ったミルクを飲んだためにいまなお障害のあるはせがわくんは、何をやってもドジをふんでばかり、遊び仲間たちは、足手まといになるはせがわくんを「きらいや」とつっぱねますが、そのくり返しの中で、両者の間には新しい連帯感が生まれてきます。ほんものの

『おばあちゃん』（ほるぷ出版刊）





『はせがわくんきらいや』（すばる書房刊）

友情は、感傷や同情を拒む立場から生まれるのだということを作者は訴えているように思われます。

子どものいたずら書きのようなタッチで書かれたモノクロの絵、広角レンズでとらえたような異色の構図、毛筆で書きこまれた文によって構成されたこの絵本は、いたるところにメッセージがあふれ、読者を圧倒する力強さにみちています。関西弁は生活に根ざしたホンネを語るコトバだといわれますが、その関西弁による一人称の語りを用いたことも、この作品世界にゆるぎないリアリティを与えているといえるでしょう。

『**おばあちゃん**』(大森真貴乃・一九八七)は、人間の死を取りあつかった絵本です。働き者だったおばあちゃんが、八十歳をすぎてボケはじめ、寝たきりになり、心もからだもまるで赤ちゃんのようになって、やがてなくなるまでを、子どもの目を通して描いたものです。父親から人間はだれもが必ず死ぬこと、赤ちゃん時代に帰って天国に行くのだということを聞かされた子どもたちは、満天の星空をあおぎ「おばあちゃん、いまごろ　天国で　なに　してるかな」と、そっとつぶやきます。絵についていえば、曲線と遠近法をたくみにいかした構図が、あたたかい世界をつくりだしているのが印象的です。

子どもを見つめ直そう

ところで、絵本が生きることの悲しさやさびしさ、つらさなどをテーマに取り入れるようになったのはなぜでしょうか。これまたひとことでいえば、わが国をふくめていわゆる先進諸国では、いまや子どもと大人のあいだの垣根が半ば崩れてしまったからです。

いったい、何がそうさせたのか。その要因としては、社会構造の変化、家庭の崩壊・解体の進行、子どもの肉体的早熟などがあげられますが、もっとも大きな要因は、テレビを中心とする映像文化の発達と普及が高度情報社会を生みだし、大人も子どももそのしくみの中に区別なく取りこまれてしまったことです。

その結果、それまで子どもは知らなくてもよいとされていたいわば人間や人生の影の側面——死や差別や孤独や不安、憎悪や嫉妬といった問題にも立ち向かわなければならなくなりました。絵本が取りあつかう題材やテーマがひろがったのは、いわば必然でした。絵本だけではありません。児童文学もまた、同じ問題に直面しています。

こうした動きを、絵本の発展ないし多様化ととらえ、肯定的に評価することもできます。しかしその一方で、この動きは絵本にとってたいへん危険であるという見方もできます。

絵本の歴史が示しているように、絵本の主な読者は、いうまでもなく子どもです。ところが、七〇年代以降、大人の読者が目立ってふえてきました。私はそのことを非難しているのではありません。大人と子どもが文化を共有するという、いわゆるボーダーレス現象が進んでいる現在、大人が絵本や児童文学に関心を示すのはごく自然の成り行きです。

問題は、すぐれた絵本として評価されたものが、私の知る限り、ごく一部を除いて、肝心の子どもたちには必ずしも支持されていないということです。子どもたちにはソッポを向かれていることに気づかず、大人同士でほめあっている絵本のなんと多いことでしょう。それは絵本の作り手である大人たちが、大人と子どもとのあいだの垣根が半ばなくなったということをカクレミノ（免罪符といってもいいでしょう）に、子どもの現状を見きわめることなしに、大人の目でことがらをとらえようとしているからではないかと私は考えます。

いまいちど、光と影の問題に立ちかえってみましょう。たしかに現在の子どもたちは、いやでも人生の影の部分を見つめなければならなくなりました。しかし、それでもなお、子どもは大人にくらべれば、行動力、想像力、純真さ、正義感など、人間として光り輝くものをゆたかに備えています。古典名作絵本でいえば、『げんきなマドレーヌ』で描かれた子どもの好奇心や『こねこのピッチ』で描かれた子どものエネルギーは、現在の子どもたちの中にも生きつづけているのです。私たちは、子どもの変わった部分だけではなく、変わらない部分もきちんと見つめなければなりません。

私の見るところ、九〇年代を迎えたいま、絵本は不振にあえいでいるような気がします。もし突破口があるとすれば、それは子どもを見つめ直し、子どもの読者にターゲットをしぼって、つまり原点に立ちもどって、絵本づくりをはじめることではないでしょうか。

シリーズ・作家とその風土②

アストリッド・リンドグレーン

埼玉大学教養学部教授
安達忠夫

大きい夏のかたまり

北欧は冬が長くて厳しいだけに、夏の透明な輝きと、人々のやさしい微笑はわすれがたい。

むさぼるように人々は全身で光を吸収し、太陽電池のように冬にそなえてエネルギーをたくわえておこうとする。町なかの公園も、森も、海岸も、いたるところビキニやトップレスやショートパンツ姿で日光浴を楽しんでいる姿にでくわす。休日の公園などに一歩足をふみいれると、芝生のうえは見わたすかぎり日焼けオイルを塗った半裸――ときには全裸さえある――がひしめいており、まるでマグロをならべた魚市場のようなありさまだ。

日光浴をおこたれば、あとで必ずしっぺ返しをうけることになる。低くたれこめた雲と冷たい雨にとじこめられた秋にうんざりし、待ちに待ったクリスマスもすぎて、ようやく年があけても、天候は日増しに陰鬱に、気持もしだいに重く沈んでくる。だれもが心の底でひたすら春の到来を待ちかまえているのだが、一月、二月、三月……いっせいに花が咲きそろう五月まであともう一息、ほんのわずかの辛抱だ、でもここらでマヨルカ島かどこか保養にでかけた方が精神衛生上いいのかな、そろそろ南の太陽が恋しくなってきたことだし……あれこれ迷っているうちに、とうとう本物のノイローゼになってしまう。社会福祉が発達しているだけに、二月から三月、四月にかけて、入院患者や休職者、退職者がふえるそうだ。

一般に北欧文学では、太陽や光ということばがじつに頻繁にでてくる。単にでてくるだけでなく、その作品のなかで重要なはたらきをしていることが多い。たとえばイプセンの戯曲『幽霊』のなかでは、主人公のオスヴァルドという青年が父親ゆずりの梅毒に脳をおかされ、最後にいくたびも「太陽！ 太陽！」とさけびながら母親の腕のなかで正気を失っていく。光にたいするこうした憧れは、日本の雪国の人々とも共通したものがあるのではなかろうか。

リンドグレーンの作品では、山賊の娘ローニャが、やがて過酷な冬がやってくることにおびえつつ、仲よしの少年ビルクに語っている。

「わたしは、野のハチが蜜をすうみたいに、夏をすいこんでいるのよ。そして、わたし、それをあつめて、大きい夏のかたまりにしといて、それで……それで、もう夏じゃなくなったときに、くらしていくの。あなた、そのかたまりのなかになにがあるか、わかる？

それは、一つの大きいかたまりに焼きあげたものでね、それにはいっているのは、日の出と、コケモモがいっぱい実っているコケモモの小枝と、あなたの両腕にあるそばかすと、晩に川をてらす月の光と、星空と、太陽が松の木々をてらしつけるときの真昼の暑い森と、ちょっとした夕方の雨とか、そんなものと、(……)

ほら、聞いてても、それが、夏にあるものみんなで、りっぱに焼きあげたものだって、わかるでしょう！」

「きみは、夏を焼きあげる名人だよ」と、ビルクがいいました。

（『山賊の娘ローニャ』大塚勇三訳）

「野のハチ」と「大きい夏のかたまり」――わたしには、アストリッド・リンドグレーンの文学の秘密が、まさにこのふたつのことばにこめられているように思われる。子どものころのありあまる自然体験のなかから、彼女は野のハチのようにせっせとエキスを集めてきて、ふんだんに想像力の酵母

リンドグレーンは『長くつ下のピッピ』の作者としてよく知られているが、その作品は多様性と陰影に富み、驚くほどさまざまな傾向をしめしている。一方では、日常的な子どものすがたを明るくユーモラスに語り、他方では、病気の子や孤児を主人公にした心にしみる物語もある。探偵小説や、幻想的な物語もある。

こうした深い感受性と、観察力、豊かな想像力は、いったいどこからどのようにしてつちかわれたのであろうか。



写真提供・毎日新聞社

をまじえる。そうして鮮明な記憶のなかで丹念にこねかえすことにより、森羅万象のすがたや野の香りをやどした、ライ麦パンのような「大きい夏のかたまり」を焼きあげていく。彼女の手にふれると、すべてがなんとも言えない自然の温かみと輝きをおびはじめるのである。

野そだちの農夫の娘

アストリッド・アンナ・エミーリア・リンドグレーン（旧姓エリックソン）は、一九〇七年十一月十四日、スウェーデン南部スモーランドのネースという村で生まれた。ネースというのは鼻、つまり岬の意味である。

スモーランドはスウェーデンの最南端にあるもっとも乏しい土地のひとつです。森にかこまれ、荒々しい美しさをもち、小さな湖や、木立や、石ころだらけのやせた畑が散在しています。人々がよく言っていることですが、スモーランドの人間はヤギ一匹だけつれて、たったひとりで絶海の岩礁に漂着したとしても、きっとうまくやっていくでしょう。

……わたしの血管を流れているのは農夫の血だけです。

父の名はサムエル・アウグスト・エリックソン、代々農夫の家柄である。母はハンナ・ヨンソン。前年に兄のグンナルが生まれており、アストリッドは長女で、一九一一年に次女のスティーナ、一九一六年に三女のインゲゲルドとつづく。この一男三女のきょうだいのほかに、ちかくの町ヴィンメルヴューに住む教師の娘グンヒルド・ノルマン（兄と同年生まれで後にふたりは結婚する）が加わって、五人は毎日のように農場やそのまわりの森や野原で遊びくらした。

第一次世界大戦前のネースにはまだ、自動車も電話も電気



『やかまし村の子どもたち』（岩波書店刊）より
絵／イロン・ヴィークランド

もなく、馬や馬車が走っている時代であった。朝おきると子どもたちはひとしきり自分のみた夢の話をしあい、たがいに自分の番が待ちきれなくて大騒ぎになる。当時の農家は家のまわりに納屋がいくつもならんでいた。冬のさなかや雨ふりの日でも、はしごで納屋の屋根裏にのぼっていけば、そこには別天地が待ちかまえている。子どもたちは自分たちの遊び場を工夫し、時間をわすれてさまざまの「ごっこ遊び」にひたることができた。

　アストリッドの幼年時代の思い出のなかから、つねに新たな鮮明さをもってよみがえるのは豊かな自然のすがたである。自然環境が子どもたちの空想と感受性をつちかい、逆にまた、言い伝えや、本で読んだり空想で考えだしたあらゆるものを、自然のなかに投影して遊ぶことができた。自然こそ、彼女にとっては、想像力の尽きざる泉にほかならない。

　わたしたちは遊んで、遊んで、遊びくらし、遊びすぎて死んでしまわないのが不思議なくらいでした。猿のように木々や屋根によじのぼり、板や干し草をつみかさねた山のうえから飛びおりたので、内臓がしくしくしました。危険このうえない地下の通路ぞいに巨大なおがくずの山のあいだを這って横断したり、まるで泳げもしないうちから川で泳いだりしました。

　農村の子どもたちが日々の遊びに没頭している姿は、たとえば『やかまし村』シリーズの三冊のなかでユーモラスに生き生きとえがかれている。

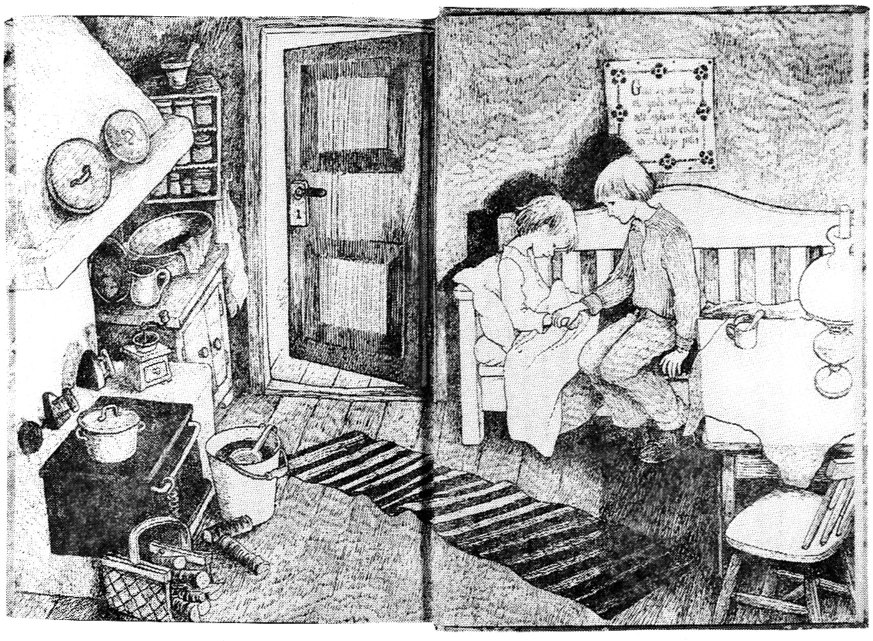
　農作業や家事のしごとで目がまわるほどいそがしかったにもかかわらず、両親は子どもたちのためにいつでも時間をさいてくれた。子どもたちのすることにはけっして干渉せず、完全に「遊びの自由」をゆるして、遠くからあたたかく見まもってくれたのである。しかし、仕事と遊びのけじめだけはきちんとしていた。子どもたちが収穫の手つだいをしなければならないときは、たとえ町から友だちがさそいにきても、絶対に許可されることはない。

　小学校は家から一、二キロ離れたヴィンメルヴューにあった。人口五千のこの田舎町は、名探偵カッレくんが住む町のモデルになっている。ちいさくても町の生活に必要な建物はいちおうそろっていて、そこには泥棒や、詐欺師や、ならず者もいるし、殺人事件その他、日常のいざこざもけっこうあった。

本の世界の魅力

　当時、祖父のサムエル・ユーハン・エリックソンもおなじ屋根の下に住んでおり、子どもたちが部屋に遊びにいくと、いつも引き出しから飴をだしてくれた。飴がないときは、宗教刊行物だったが、これはあまり子どもたちのお気に召さない。しかし、子どもたちになにかあげたくてうずうずしている祖父の気持ちをくんで、みんなで大喜びすることになっていたのである。祖母のイーダは、アストリッドたちの叔父でまだ独身だったアルビーンのところに手つだいに行っていた。滞在が長びくにつれ、祖父もやがてそちらに移ったので、子どもたちは訪問を楽しみにしていた。行くたびに祖母はさまざまな贈り物を用意して待っていたのである。

　一九一六年、祖母は兄のグンナルにギターを、妹のアストリッドにはぶあつい『イードゥン』という雑誌（おそらく一九〇二年の一年分をとじたもの）をくれた。兄のほうはギターを弾いてはしゃいでいたが、八歳のアストリッドはふうふういいながらこの重たい本をかかえて歩きまわり、寝るころには疲れきってしまった。彼女はしかし、自分の本を所有していることにしあわせを感じ、意味はさっぱりわからなくて



『はるかな国の兄弟』（岩波書店刊）のさし絵に描かれた台所　絵／イロン・ヴィークランド

も、一語一語、なぞめいた響きに酔いしれたのである。「あのぶあつい本をやっかい払いできて、おばあちゃんはさぞかしほっとしたことでしょう」とアストリッドは書いている。

　家族のほかにも、農場や家事の手つだいをする作男や雇い女がつねになん人かいた。そのなかでも、おさないアストリッドの魂にふかい痕跡をのこしたのは、エーディトという女の子とその母親のクリスティンである。エーディトは兄の同級生で、「遊ぶことと物語をすることの名人」であった。エーディトはアストリッドに妖精や大男の話を読んでくれた。

　その物語を聞くことによってわたしのおさない魂は振動し、今日にいたるまで完全に鳴りやむことはありません。とっくの昔になくなってしまった、あのみすぼらしい小さな小作人の台所でこの奇跡がおきたのです。その日からというもの、わたしにとって世界中にこれ以外の台所は存在しません。わたしが台所について書かれたものを読んだり、台所でおこることをわたし自身が書いているとき、それは永久不変に、クリスティンのところでおこっていることなのです。

　おてんば娘のアストリッドは、ピッピのように屋根や体育館の配管などにのぼってみんなをはらはらさせたりしている。だが学校も勉強も大好きで、人一倍旺盛な好奇心と知識欲のせいか成績もよかった。幼稚園と小学校のあと、当時、農民の子としてはかなり稀なことであったが、両親の賛成と本人の同意により兄のグンナルと同時に実業中高等学校に進学している。

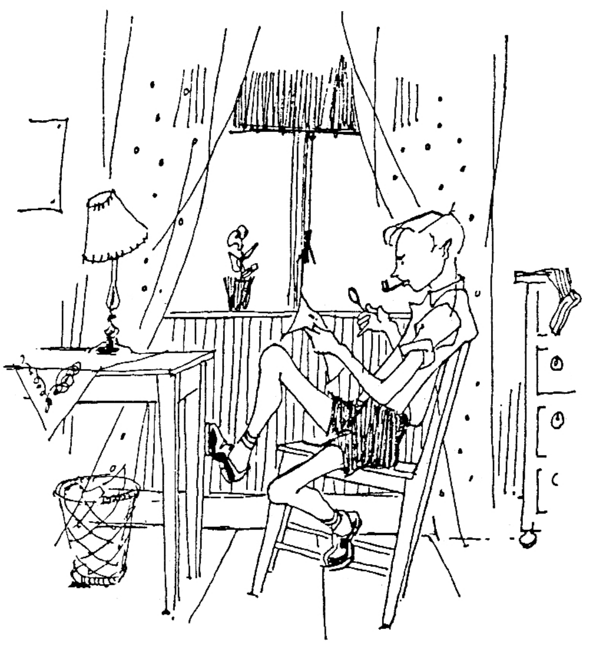
　けれども母は、娘たちが大きくなるにつれて雇い女を手ばなしたので、どんなに勉強がいそがしくても子どもたちに農作業や家事の手つだいをさせた。子どもを甘やかさないこうした厳しい子育てについて、後年アストリッドは述べている。

　自分にまかされたことは、しなければなりませんでした。どんなに無味乾燥な仕事でも、やたらにうめいたり、愚痴をこぼしたりせずにやりとげること。これは後々の人生において役にたつ有益な教えだったと思います。「気をとりなおして、つづけなさい」わたしたちが洗い桶のかたわらで空想にふけっていると、母がいましめに言ったことばです……そういうことは一生わすれません。気をとりなおして、つづけなさい、いくたびわたしは自分自身にこう言いきかせてきたことでしょう。

　実業中高等学校の六年間にアストリッドは、ドイツ語、フランス語、英語の三か国語をマスターし、どのことばも不自由なく話せるようになった。学校図書館の本を手あたり次第に読みふけるようになったのもこの時期である。『ロビンソン・クルーソー』からはじまって、『三銃士』、ジュール・ヴェルヌ、マーク・トウェーン、ウォルター・スコット、そしてさまざまな少女小説などがふくまれる。作文を書くたびにほめられ、大人になったらセルマ・ラーゲルレーフのような女流詩人になるにちがいないと言われたが、彼女自身はむしろ、けっして本など書くまいと心にきめていたのである。

試行錯誤の時代

　自然や家族との一体感につつまれ、まるで魔法にかかったように、みちたりた幸福な子ども時代をすごしてきたアストリッドは、思春期をむかえて深い幻滅におそわれる。おりしも第一次世界大戦後の農村社会は大きく変貌をとげつつあり、馬や、馬車、ポンプ、石油ランプ、作男、雇い女など



岩波少年文庫『名探偵カッレくん』より
絵／エーヴァ・ラウレル

が、急速に身のまわりから消えていった。

過去にわかれを告げて大人になることが悲しく、自分の将来がどうなるのか、なにをしたらよいのか、五里霧中でまったく指針がとれない。自分の容貌がやたら気になり、人より醜くて誰からも愛されないのではないかと思いこむ。ただひとつのなぐさめは、本の世界にひたりきることであった。

けれども十七歳にちかいころ、アストリッドは作戦のたてなおしをはかる。男性にもてたい一心で大胆な変身をこころみ、一九二〇年代にはやった「ジャズ娘」風に、髪の毛を短くしてしまったのである。ボーイッシュな髪型では彼女がヴィンメルヴューの町の先頭をきっており、保守的な両親の度胆をぬく。一方では、あいかわらず分厚い本を読みつづけ、ニーチェ、ショーペンハウアー、ディッケンズ、ドストエフスキーなど、つぎつぎに読みあさっていたが、すべての関心事はけっきょく自分であった。娯楽の乏しい狭い町のなかで、映画や芝居にうつつをぬかし、両親のいいつけを無視して夜おそくまでダンスホールで踊ったりした。後年アストリッドは、「確かにジャズ時代のわたしは頭がどうかしていました」と述べている。

実業中高等学校を卒業後、アストリッドは母のもとで半年ほど料理をならっていたが、たまたま『ヴィンメルヴュー新聞』の編集者が見習いをさがしており、アストリッドの父をとおして彼女の意向を打診してきた。アストリッドはふたつ返事でひきうけ、月六十クローネでジャーナリストとしての仕事をならうため、ネースから町まで徒歩や自転車で通った。

編集担当者はこのふたりだけという小さな地方紙なので、広告から、催し物、葬儀、結婚式の案内、町の話題など、なにからなにまで自分たちの手でやらなければならない。旅まわりの一座がやってくると、アストリッドは「作劇法についてまるで知らないにもかかわらず」劇評を書いた。プロとして、決められた短い時間内にいくつもの記事を仕上げていく修行は、のちの著作活動において底力を発揮することになる。

このころアストリッドは初恋を経験し、すぐに破綻する。家にいることがたえられなくなり、十九歳のころ、秘書としての教育を受けるためにストックホルムに出ていった。彼女はすでに妊娠しており、独立して一人前の、自分の頭で考える人間になりたいという欲求が日増しにつのっていたのである。

実際的な性格もそなえている彼女は、ストックホルムの商業学校で語学にみがきをかけ、そのほか、商業英語、スウェーデン語および英語の速記とタイプライターを習得している。コース修了後、ある事務所で職につき、食事を倹約してがむしゃらに働いていたが、つねに厭世的・絶望的な気持と隣合わせであった。やがて別の若い娘と共同で部屋を借り、ひまさえあればふたりで深刻な世界観の問題を話しあうようになる。

わたしたちは、人間は本来生きていくことが不可能なのだという結論に達しました。じっさい、ほとんど毎日、わたしたちは自殺をくわだてました。でも、そのたびに、つぎの日まで延期することにしたのです。

職業ー結婚ー育児ー戦争

一九二六年十二月に、アストリッドは息子のラルス（愛称ラッセ）を出産し、コペンハーゲンの里親にあずけた。翌年、ストックホルムで、スウェーデン書籍販売センターに就職する。



『さすらいの孤児ラスムス』（岩波書店刊）より
絵／エーリク・パルムクヴィスト

いそがしい仕事のあいまをぬって、できるだけ頻繁にアストリッドはコペンハーゲンの息子をたずねるようにしていた。里親のもとでラッセはなに不自由なくしあわせに暮らしており、のちに「僕にはふたりの母さんがいる」と語っている。けれども、そこで知り合ったある娘が自分の子どもをスモーランドの孤児院に入れたまま、ほとんどかまってやらないのを見て、アストリッドはひそかに心を痛め、自分がかわりにその孤児院をたずねることを申しでた。そこで受けた印象は強烈であった。病院のように尿のにおいがたちこめ、閉じこめられた子どもたちは、愛情に飢え、慰めようもないほど絶望していた。

国際アンデルセン賞大賞を受けた『さすらいの孤児ラスムス』や『小さいきょうだい』など、リンドグレーンの作品においては孤児を主人公にした物語がいくたびもくり返されている。

一九二八年、さらに収入のいい職をもとめてアストリッドは王立自動車クラブに移り、片手間にクラブのための旅行案内書を書く仕事もひきうけた。この職場で、のちに結婚することになるステューレ・リンドグレーンとも知りあっている。下宿も前よりいくらかましなところに移ることができた。

一九二九年にレマルクの『西部戦線異常なし』を読んだことは、彼女の読書歴のなかで大きな意味をもっている。戦争の悲惨さに魂を震撼され、「二度とふたたび戦争がおこらないようにするには、わたしはなにをしたらいいのだろうか」と絶えず自分に問いつづけるようになったのである。

この年、それまで同居していた女友だちが結婚し、ちょうどラッセの里親が病気になったので、息子をコペンハーゲンから自分のもとに引きとることにした。ラッセは百日咳で幾晩も苦しみ、母にとっても子にとっても惨憺たる状態がつづく。幸いなことに近くに住むステューレ・リンドグレーンが献身的に彼女を助けてくれた。

翌年の春、アストリッドはネースに住む自分の両親のところにラッセをつれていった。ラッセはその土地がすっかり気にいり、両親もこの初孫をとても可愛がってくれた。一方アストリッドの方はステューレと結婚することになったので、母は半年間アストリッドを手もとにおいて花嫁修行させることにした。そんなわけで、アストリッドは一夏、両親やきょうだいや、自分の息子といっしょにすごすことができたのである。

結婚後、ふたりはヴルカーヌス通りの住まいでくらしはじめ、ラッセも呼びよせた。しかし後にアストリッドの執筆活動に重要な役割を演じているのはこの家ではなく、ステューレの両親がストックホルムの近くのフルスンド島に見つけた古い家屋である。義母が一九四七年に亡くなったあと、ふたりはこの家を修繕して毎夏ここですごすようになった。この島の生活は、『わたしたちの島で』という物語のなかに取り入れられている。

主婦になったアストリッドは、自動車クラブのために家で旅行案内書を書く内職をつづけ、時には家計の足しに童話を書いて週刊新聞にでも買ってもらおうかと思うこともあったが、女流詩人にはなるまいという原則はなおつらぬいていたのである。夫のステューレはユーモアに富み、社交的かつ陽気な性格なので、いつもパーティーがたえなかった。妻のアストリッドもそうした集まりがきらいではなかったが、どちらかといえば家で本を読んでいるほうが性にあっていた。

一九三四年、娘のカーリンが生まれた。アストリッドは、子どもが小さいときは、父か母か、どちらかが家にいてやらなければいけないと考えており、母親として家にのこる道をえらんだ。けっきょくラッセが十一歳になるまでの四年間、



『わたしたちの島で』（岩波書店刊）より
絵／ロバート・ヘイルズ

彼女は家庭の主婦に専念したのである。

　女性は自分の職業をもって独立し、金をかせぐ権利をもっています。しかし子どもができたら、子どもを可愛がり、少なくとも最初の数年間はよろこんで子どもといっしょにすごすべきではないでしょうか。子どもに縛りつけられるなんて、しゃくだわ――そんなふうに考えるべきではないと思います。

毎日、アストリッドは子どもたちといっしょに散歩にでかけ、野原であそび、木々や岩によじのぼり、物語を聞かせ、たっぷり本を読んであげた。かつての子ども時代をそのまま反復するかのように、充実した時間をともにすごしたのである。

しあわせな結婚生活をとおして、徐々にあのはげしい不安と絶望もおさまりかけ、アストリッドは人生もなかなか捨てたものではないと考えるようになってきた。しかし、折しもベルリンではナチスによる焚書がおこなわれ、暗い時代に突入するきざしがはっきりと見えはじめていた。

一九三七年、アストリッドはストックホルム大学の講師で犯罪学者であるハリー・セーデルマンのもとで、会議の速記者として働くことになった。そこではドイツの強制収容所で殺された人々の情報なども入ってきて、彼女は心からナチスを憎むようになる。毎晩、新聞で読んだり、聞いたりしたことを、自分の感情をまじえずに日記に書きとめておく習慣がついたのもこのころのことである。

一九四〇年まで働くあいだに、アストリッドはセーデルマン氏の信用を得て、その紹介で情報機関における書簡検閲の秘密任務につく。ヨーロッパ各国の秘密情報がひっきりなしに入ってくるだけに、守秘義務はきびしいが、手紙をもちかえって家庭で仕事をすることもできた。口をつぐんでいなければならない分だけ、日記が唯一のはけぐちになった。このころの日記のなかで、ヒットラーをヨハネ黙示録にでてくる怪獣になぞらえている。

娘の病床から母の病床に

一九四一年秋、リンドグレーン夫妻の七歳になる娘カーリンが肺炎にかかり、当時の風習として家で看病されていた。ようやく峠を越えて回復期にむかいはじめると、カーリンは退屈でたまらなくなってきた。

「ねえ、ママ、なにかお話してちょうだい！」

「どんなお話がいいの？」

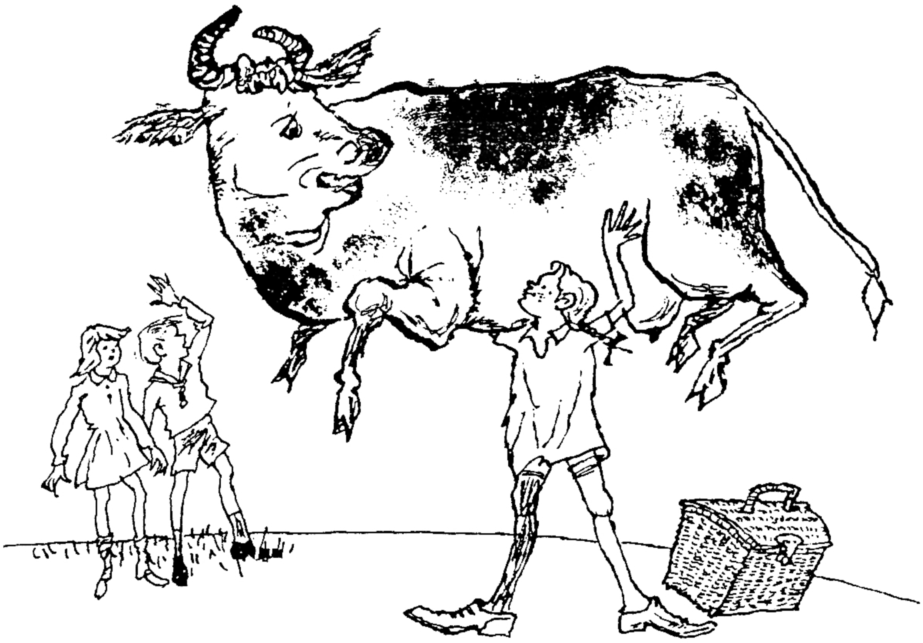
「長くつ下のピッピの話して！」

こうして、のちに世界中の子どもたちをとりこにする『長くつ下のピッピ』が、毎晩、娘の枕元で語りつがれていくことになったのである。

アストリッド・リンドグレーンは『わたしの伝記』のなかで書いている。

　この名前をカーリンはそのとき考えだしたのです。だがわたしは、長くつ下のピッピってどんな子なのかたずねることをせず、そのまま語りはじめました。だれでもこの名前を聞けば、それが一風かわった女の子だとわかりますし、じっさい、わたしの物語のなかでも一風かわった女の子になったのです。わたしの娘ははじめからこの女の子が大好きで、娘のあそび友だちもみなおなじでした。

スウェーデン語だと、長くつ下のピッピという名は「ピッピ・ロングストルンプ」で、あしながおじさんの「パッパ・ロングベーン」から思いついたとのこと。



『長くつ下のピッピ』（岩波書店刊）より
絵／桜井誠

火のような赤毛でそばかすだらけ、色違いの長くつ下と、道化のようなどた靴をはいた女の子ピッピは、小さくてもスーパーマンのように力持ちで、こわいもの知らず、めっぽう脚が速いだけでなく、曲芸や空を飛ぶことだってできる。しかも子どもたちにとってとくにうらやましいのは、ピッピが町はずれの「ごたごた荘」に——猿のニルソン氏や馬は別として——たったひとりでくらしていることである。寝る時間やら、お風呂やら、食事のマナーやら、なにもかも規則ずくめ指図ずくめの大人たちがそばにいないので、ピッピは学校に行かなくてすむし、飴やチョコレートやアイスクリームなど食べたい放題、したいときにしたいことがなんでも自由にできる。ごたごた荘のとなりにすむトミーとアンニカはこの不思議な女の子に夢中になり、三人で大人たちの度胆をぬく空想的な冒険やいたずらに乗りだしていく。

娘や友だちばかりでなく、思いつきで話をすすめていく母親のアストリッド自身も興にのり、いつしかピッピのすがたは家族のなかで息づきはじめていた。

それから二年半後の一九四四年三月二十八日、大雪でストックホルムの道路がスケートリンクのように凍りつき、今度は、外出しようとしていたアストリッドが、公園ぞいの道で滑って脚を怪我した。親切な人々に家まで運びこんでもらったが、数週間、ベッドでじっと寝ているしかない。

わたしにとって退屈をふせぐ唯一の武器は、鉛筆と速記用メモ用紙でした。速記となれば、じつに熱心だったのです。わたしは長くつ下のピッピの風がわりな物語を速記でしるしはじめました。この注目すべき赤毛の女の子は、すでにわたしの家族全員のおなじみでしたから……。なぜピッピがこんなに人気があるのか、わたしには合点がいかなかったのですが、とにかくベッドにしばりつけられているあいだにピッピの冒険を書きまとめておくつもりだったのです。出版のことなど念頭になく、娘の十歳の誕生日（五月二十一日）の贈り物にするつもりでした。

これこそまさに、母親としてのアストリッドが娘のために焼きあげた特製の「大きい夏のかたまり」だったのである。

『ピッピ』の大活躍

かくして堰をきったような勢いで、アストリッド・リンドグレーンの創作活動が開始された。

清書ができあがった段階で、アストリッドは試みにやはりその原稿のコピーを出版社の人に読んでもらおうと思いなおし、手紙をそえて送ってみたところ、たちまち突っ返されてきた。しかしそれまで作家になることなど夢にも思いつかず、主婦としての生きかたをなにより大切にしてきたアストリッドは、この具体的な経験をとおして書くことの楽しさに「味をしめた」のである。ある新聞で少女向けの本の懸賞募集広告を見つけ、一九四四年の夏、『ブリット・マリー』を書いて二位に入選する。

審査員のひとりエルサ・オレーニウス女史は、いちはやくアストリッド・リンドグレーンの才能に気がついて、作者との面会を求めてきた。二人の親密な話し合いのなかで、やがて前に書きあげた『ピッピ』のことも話題にのぼり、ついにこの処女作が日の目を見ることになる。

翌年ふたたび同社（ラベーン＆シェーグレーン社）の懸賞に『ピッピ』で応募し、今度こそ一位の座を獲得する。

この本が出版されたことは、児童文学の世界においてひとつの画期的な事件であった。子どもたちは大よろこびで『ピッピ』をむかえいれた。だが大人たち、とくに世の教育者や批評家と称する人々は真っ向から反対し、いちはやく警鐘を



『ミオよ　わたしのミオ』(岩波書店刊)より
絵／イロン・ヴィークランド

鳴らしはじめたのである。いわく、ピッピは大人を馬鹿にする、まるで大人の言うことに耳をかさず、警官や学校の先生を手玉にとる。大戦後の混乱のなかから今ようやく復興しつつある社会にとって有害かつ危険な異端者であり、良俗の敵である。勝手きままなひとり暮らしで世の中をひっかきまわす。教育的配慮を欠き、無邪気な子どもたちにこのうえなく悪い影響をあたえる。うんぬん、うんぬん……。

ピッピがなにかするたびに、町じゅう蜂の巣をつついたような大騒動になるが、これ以後アストリッド・リンドグレーンの書く本は、一作ごとになんらかの意味で論争をひきおこしている。やがては学校や子どもの図書館からリンドグレーンの本を全面的に締めだそうと考える人々すらあらわれた。スウェーデンの新聞『ダーゲンス・ニューヘーター』は、『はるかな国の兄弟』に関してつぎのような記事をのせている。

A・L(=アストリッド・リンドグレーン)は魔女なので、この本に警戒標識をつけておかなかった。したがって、魔女を手綱でしっかりおさえつけたうえで、クリスマス用コショウ入りケーキの家のとびらに、十字架か、あるいはハンマーと鎌(ソ連の国旗の印)を描いてやる必要がある。

(一九七三年十二月二十四日)

肉親たちの死

『ピッピ』以後の執筆活動や、ラベーン&シェーグレーン社での編集者としての仕事については大幅に省略する。

一九五二年に夫のステューレが亡くなり、子どもたちも成人したので、アストリッドはひとりでこもって読書や書きものに専念することが前よりも多くなった。夏は朝五時、冬でも六時には目をさまし、お茶とパンで簡単な朝食をすませたあと仕事にとりかかる。ベッドのうえや、フルスンドの別荘ではバルコニーの椅子に座って速記で作品を書いていく。ときには一つの文章をなんども書きなおし、「聞こえてくる」メロディーが物語とぴったり一致するまで添削しつづける。あとでタイプするときには、まったく変更しないとのこと。

一九六八年、妹のインゲゲルドの息子オーケが不慮の死をとげ、翌年にはアストリッドたちの敬愛する父サムエル・アウグスト・エリックソンが亡くなった。当時まだ四、五歳だったアストリッドの孫のニッセは、人が死んだらどうなるのか、宗教的な考えかたをまったくおしえられておらず、ただ暗い地面に埋められてしまうことを知って恐怖におびえていた。これをきっかけにアストリッドは『はるかな国の兄弟』を書くことを思いつき、物語を書きすすめながら、この孫に読んできかせたのである。

『はるかな国の兄弟』

すでに『ピッピ』や『さすらいの孤児ラスムス』、『山賊の娘ローニャ』などを読んだことがある人も、『はるかな国の兄弟』というまるで傾向のちがう作品にふれて、リンドグレーンの文学の間口のひろさだけでなく、むしろその深さに感動をおぼえるにちがいない。

ここでは病気で台所に寝たきりのカール・レヨンイェッタという小さな男の子が語り手になっている。カールは自分がもうじき死ぬ運命であることを、母親の立ち話から知ってしまい、兄のヨナタンにそのことを問いただす。ヨナタンは、人が死ぬと「ナンギヤラ」というところに飛んでいって、すばらしい冒険の日々をすごすのだと話してきかせた。すべてのお話はナンギヤラから出てきて、そこではすべてがお話のようになる。弟のカールはひ弱で、ぶかっこうで、泣き虫の



『はるかな国の兄弟』（岩波書店刊）
訳／大塚勇三　絵／イロン・ヴィークランド

男の子だが、兄のヨナタンはお話にでてくる王子のように美しく聡明で、勇気と思いやりがあり、誰からも好かれている。カールはそうした兄にあこがれ、自分のことを恥ずかしく思っていた。けれどもナンギヤラでは、そんな悩みからも解放され、誰でも力いっぱい本当の冒険ができるのだという。

　カールは自分が先にナンギヤラに行って兄を待つことになるとばかり思っていたのだが、予期せぬ出来事がおこる。火事の炎のなかから寝たきりの弟を救いだそうとして、ヨナタンは弟を背負って三階から飛びおり、自分は即死してしまう。ひとり取り残されて寝ているカールの窓辺に白い鳩がおとずれるようになり、ふと気がつくと、カールもナンギヤラのサクラ谷に来ていたのである。

　ナンギヤラで再会した兄と弟は、限りなくうつくしい自然のなかで、思うぞんぶん遊び、やがてテンギルという圧政者と戦うために数々の冒険に乗りだしていく。

　決戦において義勇軍は勝利をおさめたが、敵の飼っていたカトラという怪獣を、もう一度もとの洞穴に鎖でつないで餓死させなければならない。洞穴にむかう仕事の途中で、ヨナタンはカトラの吐きつける炎を浴びてしまい、もうじき自分の体がきかなくなることを知る。夜営の焚き火のそばで、兄のヨナタンは弟に、ナンギヤラで死ねば、そこよりさらに楽しい冒険の国「ナンギリマ」に行くのだと語り、自分で崖の上から飛びおりて、そこに行くことを願うのだが、もう体がうごかなくなっていた。弟はふたたび自分がひとりぼっちで取り残されることをおそれ、暗くなってから兄を背負って飛びおりる決心をする。

　そして、ぼくはヨナタンのわきにすわって、その手をにぎりしめ、そして、ヨナタンはまったく強くて、りっぱで、ヨナタンさえいればほんとに危険なことなんてありはしない、と感じていました。

（………）

　ぼくには、前にある深みは見えませんでした。でも、それがそこにあるのは、わかっていました。そしてぼくは、暗闇の中に一歩ふみだしさえすればいいのでした。それで、なにもかも終わるのです。ほんとにすぐすむのです。

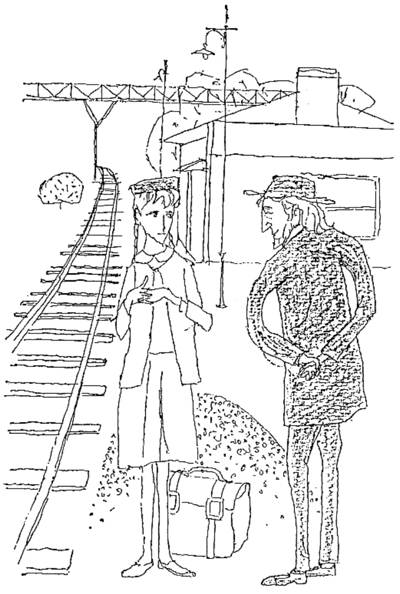
（『はるかな国の兄弟』大塚勇三訳）

　最後の場面にいたって、ほとんど児童文学のタブーにふれかねないような大胆なテーマをひめていたことがはっきりする。兄弟どうしの強い愛のきずなにむすばれて、弟は兄といっしょに死ぬことも辞さない覚悟である。人によっては、あまりにもあからさまに安楽死や心中が肯定されているのではないかという疑いをいだくかもしれない（事実、すでにその一例を挙げたように、一九七三年十二月のスウェーデンではこの本をめぐって大論争がもちあがったのである）。

　だがここで肯定されているのは自殺ではない。極限状況における想像は子どもの魂をゆさぶり、カールの決断にだれしも息をのむことであろう。全身全霊、いのちを賭して冒険の国に向かおうとするレヨンイェッタ兄弟のひたむきな姿が、わたしたちの生ぬるい生きかたを目覚めさせ、根底から清めてくれるのである。

　死を目前にひかえた子どもたちや、自分でからだを動かすことすらできない子どもたちにも、リンドグレーンは想像力の冒険のよろこびをあたえ、そのなかで真剣に道を拓いていくことをおしえてくれる。

　「自然」と「病床」――この一見相反するふたつのものがリンドグレーンの文学をつちかい、鍛えあげてきたのである。



◀鈴木義治／講談社刊
赤毛のアンシリーズ１より



◀鈴木義治／講談社刊
赤毛のアンシリーズ１より

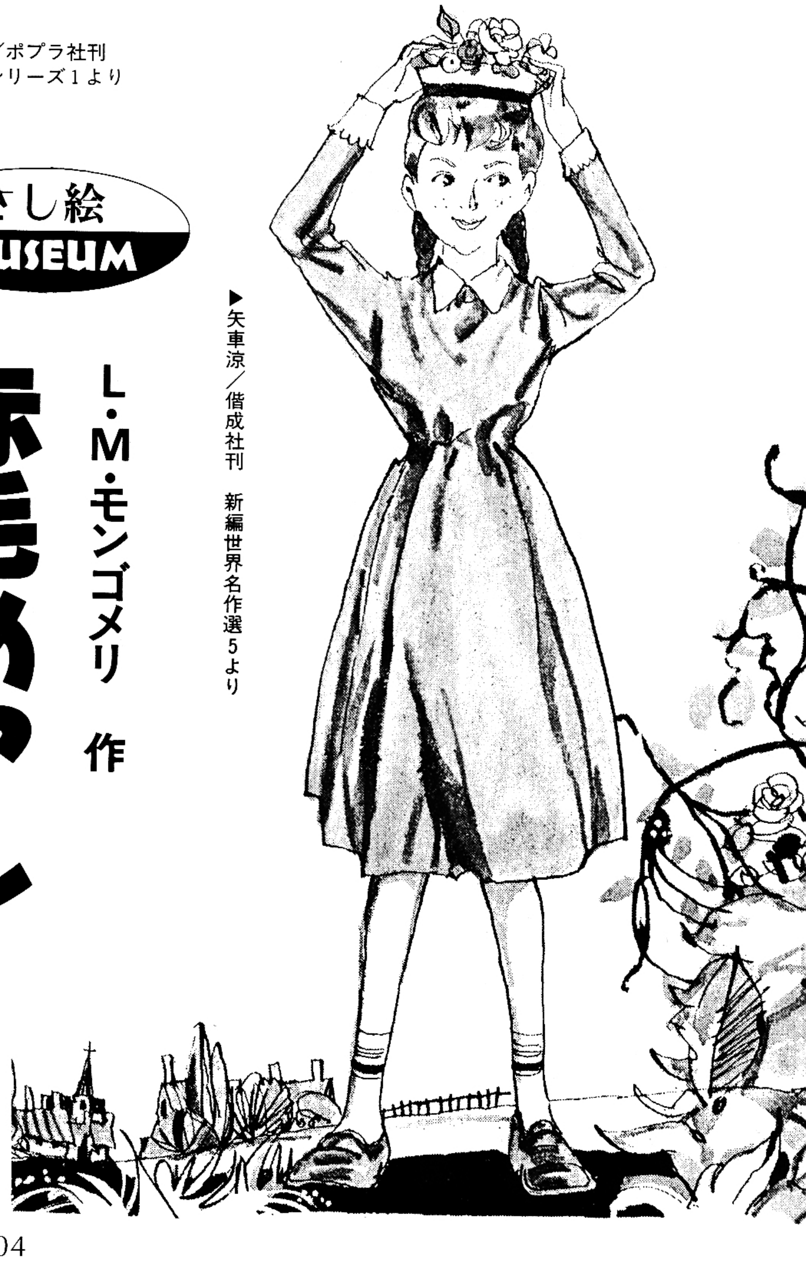


◀岡野謙二／ポプラ社刊
赤毛のアンシリーズ１より

さし絵
MUSEUM

赤毛のアン

L・M・モンゴメリ 作



▶矢車涼／偕成社刊　新編世界名作選５より

文／堤さくら

よく思うことですが……西洋人の主人公って、なんて想像しやすいんだろうって。特にこのアン・シャーリーなどは、その最たる人物のひとり。――おさげにした赤い髪、大きな口、そばかすだらけの顔、光によって色が変わって見える瞳――。えらくたくさんの情報。これよこれ！　西洋人の特徴は〝色つき〟が多いから、イメージが膨らみやすいんだな。〝色〟って観点からいくと、東洋人の主人公はちょっと不利かもしれない。う〜ん……。

そんなことは置いといて、今やブームになっている感もある「赤毛のアン」の登場です。驚くほどたくさんあったアンのさし絵を見ていて感じたこと。もしかしたら、具体的な情報が多ければ多いほど、絵描きさんは自分の〝絵〟にするのに苦労するのかも……なんてね。



◀谷俊彦／小学館刊
少年少女世界の名作アメリカ編8より



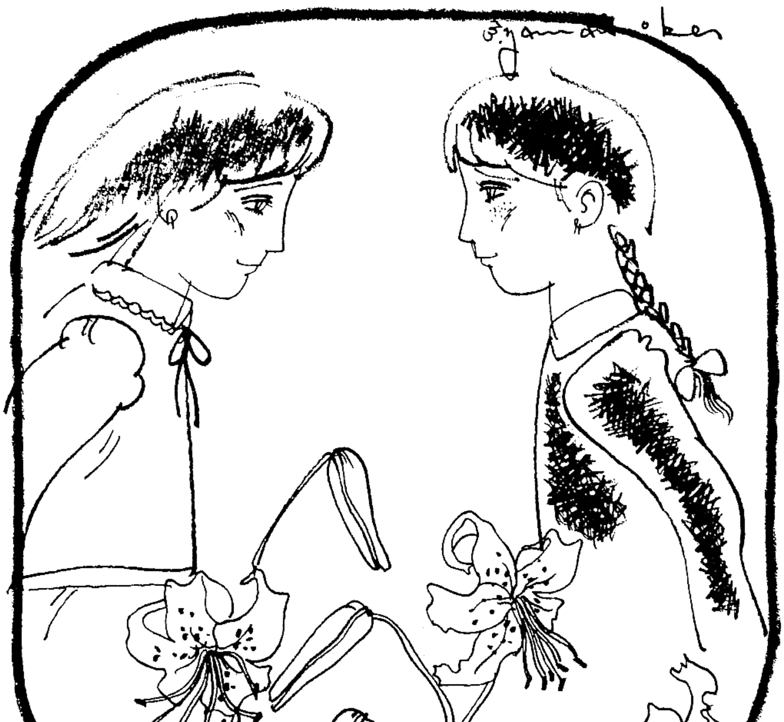
▲ひらいたかこ／東京図書刊



▶霜野二一彦／小学館刊
少年少女世界の名作文学アメリカ6より



▲田中槇子／講談社刊
少年少女文学館14より



▲山野辺進／集英社刊
子どものための世界名作文学9より



◀ひらいたかこ／東京図書刊

D・a・t・a・L・i・s・t

Data:2

◀子ども向け科学読み物▶

月のウサギの話じゃないけれど、科学の進歩は、子どもたちの夢をどんどんなくしてしまうものと思われがち。でも、そう決めつけてしまうのは、ちょっと悲しい気がしませんか。だって、科学はいつだって センス オブ ワンダー、未来の住人である子どもたちの想像力のつばさなのだから……。

今回のデータリストは、そんな、忘れてしまいがちな、科学のファンタジックな面を思い出させてくれる良質の子ども向け科学読み物を、またまた編集部の独断でピックアップしてみました。

子ども向けと言ってあなどるべからず、乞う御一読。

＊このリストは、価格、内容等を考慮して作製されたものです。

● カラー版 自然と科学 岩崎書店

雲のいろいろ 湯山生 著
根室原野—春から夏へ 高田勝 著
野菜の花 埴沙萠 著
春・夏の星座 藤井旭 著
秋・冬の星座 藤井旭 著
雪の日記帳 高田勝 著

● 子ども科学図書館 大日本図書

虫をたおすキノコ 吉田昭一 文と写真
2本のリンゴの木 おくやまひさし 文と写真

● 科学はともだち 童心社

アリジゴクはトマトがすきか 久松賢一 著

● フォトライブラリー 偕成社

ぼくの観察日記 アストリッド・スックスドルフ 作・写真 木村由利子 訳

● 文研科学の読物 文研出版

太陽のひみつ 日下実男 著 武部本一郎 絵
たおされたカシの木 キノコのちから 吉見昭一 著 石部虎二 絵
地球のなぞをさぐる 小森長生 著 早川博唯 絵
カヤ原の空中建築家 カヤネズミの四季 白石哲 著 白石久美子 絵

● 新版みつばちぶっくす 国土社

⑮石をしらべよう 佐々木操 著

● 科学シリーズ 福音館書店

立体で見る〔星の本〕 杉浦康平 北村正利 共著
地球 加古里子 文・画
日本の恐竜 長谷川善和 文 薮内正幸 絵

● やさしい科学 さ・え・ら書房

国立科学博物館物語 諸澤正道 監修
おーい雲！—四季のお天気観察 塚本治弘 著
台所昆虫記 佐藤有恒 著
ヤドカリの殻交換 今福道夫 著
人類の長い旅—ビッグ・バンからあなたまで— キム・マーシャル 著 藤田千枝 訳

● 科学のアルバム　あかね書房

①**月をみよう**　藤井旭 著
④**星の一生**　藤井旭 著
⑥**きょうりゅう**　小畠郁生 著
⑩**アカトンボの一生**　佐藤有恒 著
⑭**カエルのたんじょう**　種村ひろし 著
⑲**食虫植物のひみつ**　清水清 著
㉑**タンチョウの四季**　林田恒夫 著
㊺**たまごのひみつ**　清水清 著
㊽**雪の一生**　片平孝 著
53**火山は生きている**　青木章 著
57**キノコの世界**　伊沢正名 著
62**たねのゆくえ**　埴沙萠 著
87**砂漠の世界**　片平孝 著
100**花の色のふしぎ**　佐藤有恒 著

● 学研の写真図鑑　学習研究社

太陽・月・わく星　村山定男　監修

● **名前といわれ　昆虫図鑑**　偕成社

栗林慧　写真　大谷剛　文

● おもしろミニ知識　誠文堂新光社

動物おもしろミニ知識　宇田川龍男 著

● 安野光雅の絵本　福音館書店

天動説の絵本　安野光雅 作

● 新日本動物植物えほん　新日本出版社

とびたておおたか　室伏三喜男　ぶん・え

● 絵本のおくりもの　金の星社

きょうりゅう1　清水勝 絵
千地万造 監修・解説

● 生きものばんざい　金の星社

⑥**4億年のなぞカブトガニ**：知られざる海のドラマ　太田次郎 監修　吉原順平 文
⑪**巣をつくる魚たち**：魚たち子育ての不思議　太田次郎 監修　吉原順平 文

● 科学の質問箱・第Ⅰ期　誠文堂新光社
子供の科学 編

①**シマウマの毛を切ってもシマ模様？**
⑥**海の魚は塩分のとりすぎってないの？**

● 科学の質問箱・第Ⅱ期　誠文堂新光社
子供の科学 編

⑪**ネコがネコ舌なのはどうしてなの？**
⑫**人間は燃えているっていうけどホント？**
⑲**土星が水に浮くっていうのはホント？**

● 科学しかけ絵本・自然の世界　大日本図書
イメルダとロバート・アップダグラフ 作
中川宏 訳

海
地震と火山
山と谷

● **からだのふしぎじてん**　岩崎書店

ディビス 編　毛利子来 監修　毛利ミドリ 訳

● **地球ってこんなもの**　誠文堂新光社

小林長生 著

● しらべてみよう　筑摩書房

⑤**台風の目はまるくない**　三宅直人 著
飯田由紀 絵

★今回のＤａｔａＬｉｓｔは、個々の本をピックアップしたもので、シリーズとして見たものではありません。
シリーズもので、書名の前についている番号は、その本がシリーズ第何巻にあたるかを示したものです。

文章は、人に伝える手段のひとつで、本はそれを包装した品物です。本自体のたたずまいや重量感を味わうことが楽しくたって、やっぱり楽しむべきはその本の伝えんとするところをうまいこと受けとめること。絵や写真や文章を理解する幸福な私たちなのだから、もっと本を楽しみましょ。

KI　NO　KO

木の子

アルマジロ編集部推薦児童書〈木の子〉では、子どものころに読んだらきっといい本、子どもを考える、児童書を考えるおとなが読んだらきっといい本を紹介していきます。読んでみて下さい。

小惑星美術館

作／寮美千子　絵／小林敏也
発行　パロル舎
定価　一三〇〇円



「時空」という言葉を聞いて、どんなことを思い浮かべますか？　何か難しそうだなー、と肩をすぼめる人、ＳＦの世界を連想する人、そんな言葉知らない！　と逆上する人、いろいろいると思います。

しかし多くの人は、そこにある種の神秘的なイメージを持つのではないでしょうか。時間と空間がからみあい、重なりあって、溶けあうような、人智を越えた神秘のイメージ。

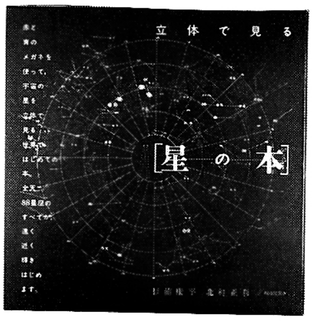
この本の中で築かれている世界は、そのような時空の中にあります。

今はやりの環境問題に中心テーマが置かれていて、その辺が説教くさいと感じる人もいるかもしれませんが、ちょっと待っていただきたい。この本の真のテーマはそんなところにあるのではありません。地球という星を魂の深いところで感じ、それに対する愛情とも言うべきものがうたわれているのです。

からまりあう時間と空間の中で展開されるスピリチュアル・ファンタジーです。（山口明）

立体で見る［星の本］

作／杉浦康平　北村正利
発行　福音館書店
定価　二〇六〇円



立体メガネがおまけについて、これでのぞくと、星の遠近が感じられるという画期的な［星の本］。シンプルな本のタイトル同様に、全ページ星図だけの中味もまた心地よい。

しかし、その構成は、左ページが天球の中の位置や星座の形がわかるガイドつきの星図、右ページが同じ星域の夜空の星そのまま、という芸の細かい親切設計。

左ページで星座を確認したあと、右ページの星々の中に星座を見つけるのは、星座の本片手に夜空を眺める感覚で楽しい。メガネのセロファンを通して見る世界は、夜の闇につつまれた錯覚さえ生み出し、星の不思議をさぐる作業に熱中させてしまう。

こうして考えると、この本は、絵本や科学読み物というより、おもちゃに近いように思えてくる。「読むプラネタリウム」と言ったほうがぴったりだろう。でも、このプラネタリウムでは、終了時間の心配なんていらない。

（長沢国雄）

トムは真夜中の庭で

作／フィリパ・ピアス　訳／高杉一郎
発行　岩波書店
定価　六七〇円



細胞を顕微鏡で見たりすると、細かいところまですごくよくできていて、感動することがある。ほうれんそうを食べるって、すごいことだなあってしみじみしてしまったりする。

このお話は人間が作ったものだけれど、似たような感動をしてしまった。

トムはせっかく楽しみにしていた夏休みを、やむを得ない理由によってぶちこわしにされてしまう。子どもってのは割と簡単に目の前まっくら、絶望のどん底にはまるものだ。その状況で、トムは一日からはみ出た不思議な時間にであう。

不思議な話なはずなのだけど、正確で写実的な描写、しっかりした話のすじなど、作りもののお話とは思えない。本当にあったお話みたい。

こんなことが本当にあったら、そりゃあ素敵なことだと思う。でもこの話が人間が作ったものだってのも、とっても素敵なことだと思う。

（渦巻純子）

とべバッタ

作／田島征三
発行　偕成社
定価　一四四二円



…歳をとるにつれて、知らぬ間に〝事なかれ主義〟に陥ってきているみたいな気がする。あんなに嫌っていたはずなのに……。「とべバッタ」この強烈な個性に満ちあふれた絵本を黙って読んでいたら、そんな想いがこみあげてきました。

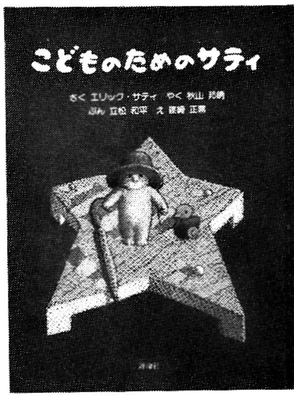
人に限らず、命あるものには弱いところが必ずあります。そしてそれと同時に、誰にも負けない強いところもあるのだと、この絵本は語っているような気がします。誰だって、明るい日の下でまっすぐに生きてみたいのです。上目づかいをしたり、媚びを売ったりすることなく。けれど、正直に生きるには莫大なエネルギーを要するのがこの世の中。「とべバッタ」からは、くじけそうな者たちへの〝自分らしく嘘をつかずに生きるんだ！〟というメッセージが聞こえてくるようです。

ストレートにこころに訴えかけてくるこの絵本、まるで絵本のパンク・ロックだ！　なんてね。

（堤さくら）

こどものためのサティ

作／エリック・サティ　訳／秋山邦晴
文／立松和平　絵／篠崎正喜
発行　評論社
定価　一〇三〇円



エリック・サティのうたのタイトルというのは、どうしてこんなに素敵なのかしら。「輪まわし遊びの輪をこっちのものとするためにかれの足のうおのめを利用する」

こんなこと言われたらどうしますか？　私なら、困っちまいます。何なんでしょうね。でもこれ、うたのタイトルなのです。

この本は、そんなサティの世界を目と耳の両方で楽しんでしまおうというもので、ＣＤとカップリングになっています。

とにかく絵がよいのです。どういうふうによいのかというと、イメージもさることながら、バックにしきつめられた色がよいのです。

サティの音楽は「白い音楽」といわれます。白というのはどんな色にでも染まります。どうせなら、これっくらい鮮やかに、景気よく染めちまいましょう。だから、まず音でもって心をまっ白にしたあとで、絵でもって心を鮮やかにしましょう。それからぐっすり眠りましょう。きっと幸せになります。（山口明）

ふしぎなやどや

文／はせがわせつこ　画／いのうえようすけ
発行　福音館書店
定価　一二〇〇円



絵で見せる本が絵本だとすると、これぞ絵本と推薦できる名著。絵本を選ぶ時、つい絵の魅力につられて衝動的に買ってしまい、読んでみると、「あ〜あ」と溜め息をもらしてしまうことが多い。

それは文、つまり作品として構成されている文がとんでもなくお粗末であったり、絵とマッチしなかったりするからだが、そんな裏切りを微塵も見せないのがこれだ。

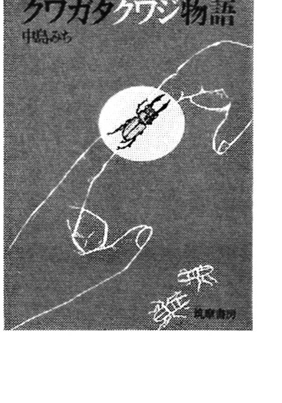
題材が中国からという関係もあるが、はせがわせつこの見事に消化されきった平易な文章に、いのうえようすけのピッタリフィットした絵がなんともいえずよい。

子供時代に『ふしぎなやどや』を読んだ子供は、きっとこの作品の不思議な印象を一生持ち続けるだろう。それは、人間にとって大切な心の底の財産になる。財産を多く心に持つ人は幸せだと思う。この絵本を読んだ子供は、将来の小さな心の栄養をもらったということ……？

（ハネエ）

クワガタクワジ物語

作／中島みち
発行　筑摩書房
定価　一二四〇円



クワガタクワジ物語　この本はほんとーに良い本です。

なぜならば、

①　少年の日のウキウキした気持ちが、いっぱい詰まっている。

②　森の木々や草花の匂い、夏の夜のすずやかな匂いに満ちている。

③　主人公の太郎くんの心の動きが、とっても共感できるように描かれている。

④　こどもが興味をもつことに、上から見守るという感じではなく、一緒に楽しんじゃうお母さんが素敵。

⑤　「生き物の死」ということを理解し始める年頃のこどもの、漠然とした心のゆらめきを、虫たちとの関わりと、お母さんの病気という〝事件〟を通して、見事に表現している。

等々……、挙げればいくらだって挙げられるんですから…。

納得したなら、一度は読んでみなさい。

（凧　卑狗）

同人誌レポート

創刊号に引き続いて、多数の同人誌をお送りいただき本当にありがとうございました。

今回も、前回と同様、それらの同人誌を、児童文学系、コミック系、その他の三つのジャンルに分けて紹介していきたいと思います。

◆児童文学系

『Ｐａｐｅｒ Ｍｏｏｎ』

（関西大学児童文学研究会 Ｐａｐｅｒ Ｍｏｏｎ）

やはり、大学のサークルだけあって、感覚的に若さを感じます。

今回が創刊号とのことですが、その若さが、良い面でも悪い面でも、目にとまりました。

印象に残ったものとしては、「半蔵町へ行く」（山下智大）が、その語り口や、ストーリー展開も含めて、楽しんで読むことができました。

学内のサークルというメンバーの入れ替わりの多い環境で、一定の活動を続けていく難しさ、というものがあるでしょうが、これからも頑張って、コンスタントに活動していってください。

連絡先 〒564 大阪府大阪市東淀川区下新庄5―2―19―402 関西大学児童文学研究会Ｐａｐｅｒ Ｍｏｏｎまでハガキ、あるいは封書で。

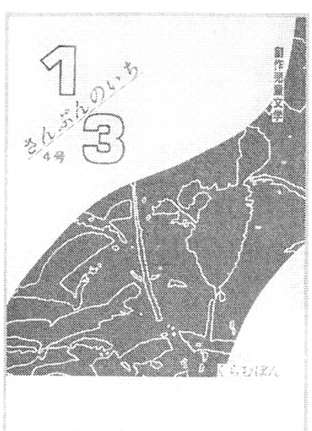
『1/3さんぷんのいち』 創刊号～4号

（くらむぼんの会）

詩人佐藤春夫の…人生の1/3は少年期である…という言葉を、誌名に取ったということですが、その姿勢が作品にもあらわれていて、よい印象を受けました。

なかでも、2号からずっと連載されている「ラチエン通りのとりかえ屋」（風森スウ）のシリーズは、それぞれ楽しめました。

連絡先 〒253 神奈川県茅ヶ崎市浜見平8―2―404 山本洋子



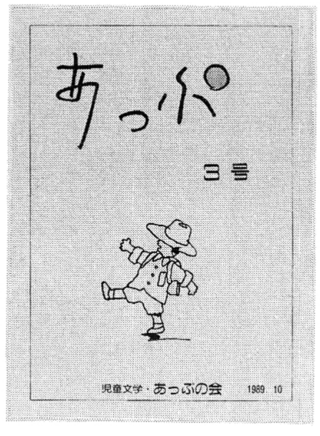
『あっぷ』 3号

（あっぷの会）

創作、詩、エッセイ、それぞれの作品に、読者を作品の中に引き込む力があって、一気に読めてしまいます。

その中でも「消えた小ネズミ」（浅見美穂子）は、何気なく読んでいくうちに、いつしか主人公の草太といっしょになって、小ネズミの一挙手一投足に、ハラハラしてしまいました。

連絡先 〒251 神奈川県藤沢市辻堂東海岸3―9―36 浅見美穂子



『とうげの旗』 76号

（信州児童文学会）

児童文学の同人誌、と一口に言い切ってしまうのがためらわれてしまうほど、作品の質、誌面の構成ともに高いレベルにあります。

創刊は1956年で、現在のような少年少女の雑誌という形になったのは、1971年だとのことですが、このように長く続けていられる背景には作り手側の熱意とともに、読者をふくめた地域の方々のあたたかい支援の輪があ

ることが誌面を通してよくわかります。

連絡先 〒381—22 長野県長野市下氷鉋一丁目1102—5 とうげの旗編集室

入手方法 右記住所までハガキで定期講読を申しこむ。



（枝の会）

『枝』

上品な装丁で、こんな本に自分の作品が載ったら嬉しくなってしまいそうです。

内容も、それに負けず劣らず、粒ぞろいの作品がそろっています。

その中でも、「16番線の特別列車」（貝賀美智子）は、元気なお母さん、まりもさんが主人公で、読んでいるこちらまで、元気になってしまいそうなお話で、楽しんで読めました。

連絡先 〒231 神奈川県横浜市中区滝の上129 山田あおい方 枝の会

『宇宙部落』 No.78、79

創作と詩、童謡で構成されています。どの作品も、作者の丁寧な姿勢に好感が持てます。

なかでも、連載作品である「阿里山が呼んでいる」（恒川幸雄）は、かなり読みごたえのある作品で、ひとまとめにしたものを、通して読んでみたいという気になりました。

また、同会では若いかき手を募っているとのこと、興味のある方は左記の連絡先まで。

連絡先 （事務局）〒133 東京都江戸川区上篠崎2丁目9番6号 猪野卓二

入手方法 事務局（右記住所）まで申し込みの上、誌代700円を郵便振替で（東京3—1009 猪野卓二）



『きつねの窓』 秋7号

（くれよん）

童話と詩で構成された本。書き手がやりたいことを、のびのびやっていて、既存の型にはまっていないのは、良いことだと思います。しかし、ワープロと手書き、縦書きと横書きが混ざった、編集は、見づらく、せっかくの内容を、読ませる妨げになっています。

今のままのスタイルで続けるのならば、横書きは横書き、縦書きは縦書き、といった形でまとめて、両開きにするとか、文字の大きさを揃えるとか、一人の人間が清書をする、などの読み手の側を想定した工夫が必要でしょう。

連絡先 〒436 静岡県掛川市杉谷1—9—7 メゾンビューラ203 松井勇 500円分の切手を同封のこと。

（たんぽぽの会）

『たんぽぽ』 No.13

児童の作品を含む、詩、小説、童話、手記から構成されています。

誌面は、作風も、内容も、かなり異なったバリエーションの作品で構成されているにも関わらず、全体として見たときに受ける印象は、バランスの取れたものになっています。

中でも「セミたちの歌」（木村哲也）は、小学校時代に一緒にセミを食べた、三人の少年の、七年の間に生じた変化を描いた秀作。ただ、主人公ケンタの、出口の見えない不安を暗喩した、アスファルトと砂利の下のセミの幼虫は、さっと読んだだけでは伝わらないかも知れません。

連絡先 〒156 東京都世田谷区松原2—38—1401 右近方 たんぽぽの会



『青い地球』 6号

前回も取り上げた同誌の最新号。コンスタントな季刊ペースで、流されずに、自分たちのやりたいことを、コツコツとやっている姿勢に、好感が持てます。

今回の6号の作品の中では、「街の中の風景」（わらびさぶろう）が、印

象に残りました。とくに主人公、忠君の内面描写、些細なきっかけで、自信を持つこどもの心理に、説得力がありました。ただ、プッチャ君という南の国から来た青年の登場は、作品にアクセントをつけてはいますが、この作品の枚数では未消化なのが残念です。

連絡先 〒782 高知県香美郡土佐山田町仁井田 江部方「青い地球」社

入手方法 右記住所へ連絡の上、誌代600円を郵便振替で（徳島0―30749）



『赤い実』No.1、No.2

（赤い実の会）

主婦が主体の公民館活動の成果ということです。そのせいか、自分の書きたい作品であると同時に、こどもに、読ませたい、あるいは読んで聞かせたい作品を載せているような気がします。

そういった作品の中で、特に印象に残ったのは「星空のガードマン」（村上純子）です。夜の校舎で動き出す、二宮金次郎の石像と、骨格見本のチャーリーと仲良くなってしまう、ガードマンの大竹さんのお話は、本当なら、突拍子もないことなのに、素直に話に入っていけました。

連絡先 〒661 兵庫県尼崎市若王寺3丁目 1―20 盆子原まゆみ まで500円分の切手を同封の上。

『桑の実』5号

（創作童話サークル桑の実）

作品のひとつひとつから、作り手側のあたたかさがつたわってくるような作品が集まっています。

そういった作品の中でも、「ロムさんの薬」（白石華子）は、コミック的なシチュエーションを日常的な空気をただよわせて描いていて、素直に楽しんで読めました。

連絡先 〒228 神奈川県相模原市相模大野6―23―23―3 村松昭子方 桑の実

◆コミック系

『Dr・Gigi』

亀谷英明個人誌。左開きの欧米タイプのコミック〝Dr・Gigi〟が収録されています。

絵柄はまだ不安定なものの、欧米風のライトタッチコメディーという作者の狙いは成功して、独特の雰囲気のある作品に仕上がっています。

これからも、この独特の雰囲気を大事に、自分の世界を構築していってほしいものです。

連絡先 〒573―01 大阪府枚方市春日元町2―17―20 亀谷英明



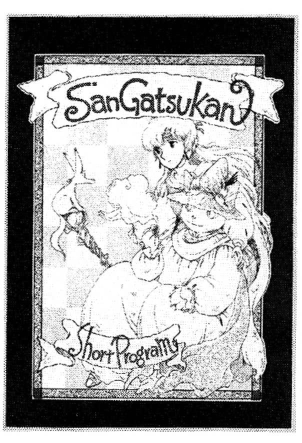
『三月館』Vol・21、22

コバルト文庫の挿絵などで、プロとしても活躍している、さえぐさじゅんの個人誌。

ファンタジー童話に通じるような、あたたかでやわらかい世界が描かれています。

また、マンガとマンガの間に、書かれた作者のエッセイがおもしろく、親しみを持たせてくれます。

連絡先 〒154 東京都世田谷区三軒茶屋1―36―22―404 「三月館」事務局まで、700円分の郵便小為替と10円分の切手を同封して。



『RARARU』

谷山浩子の詩やイメージをもとに描かれた作品を集めた奥山に猫又（P・

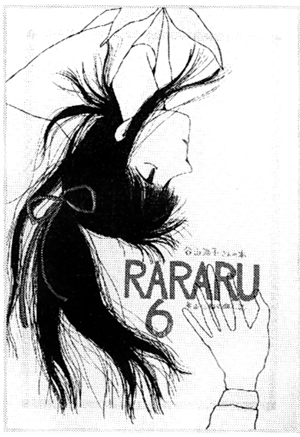
N(ネーム)です）の個人誌。

誌面の構成感覚や、描こうとしている情景の要素などにセンスが感じられますが、今ひとつその感性に画力がおいついていってないような気がします。

人物のプロポーションなど、もの全体としての〝かたち〟というものに、もう少しこだわってみてはどうでしょうか。

連絡先 〒500 岐阜県岐阜市加納本町7—7 松波浩子まで

入手方法 誌代300円分の無記名定額小為替と送料210円分の切手を同封の上、右記の住所まで。



◆その他

『河馬』5号 （河馬の会）

童話を含む総合文芸。読みでのある作品がそろっています。

特に、巻頭の「三姉妹」（松原澄子）は、まるで、テレビの連続ドラマの原作のようで、実在の人物の言動を記したような、存在感と重みがあります。

これは、やはり若い人間には、ちょっと書くことのできない話です。

また、童話の「ハルばあさんのたのしい毎日」（松原澄子）は、全体に重厚な作品群の中で、ほっと一息つける優しい作品です。

連絡先 〒636 奈良県北葛城郡王寺町葛下1—5—11 松原澄子方 河馬の会

『花の影』 （楽浪社）

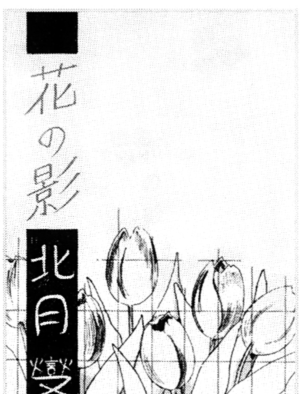
北月燮(たつきしょう)個人誌。オリジナルの創作と、「シンデレラ」「白雪姫」からそれぞれ題材を得たショート・ストーリー、詩から構成されています。

小説の端々から、感性がみうけられる、〝今〟しか書けない文章だと思います。

ただ、装丁や、イラストの入り方にまだ不慣れな所がみられるのは、これが初めての個人誌だというせいもあるのでしょうが、少し残念な気がします。

連絡先 〒190—12 東京都武蔵村山市学園1—79—8 稲森洋子

入手方法 誌代300円分の無記名小為替を同封の上、右記の住所まで。



※各同人誌へのお問い合わせは、往復ハガキを使うか、切手貼付ずみの返信用封筒を同封して下さい。

◆総評

今回取り上げた同人誌だけではありませんが、「好きだからやっている」という段階にとどまって、より上の段階を目指す姿勢が、あまり見られないのは、残念なことです。

確かに、趣味として同人誌活動を行うのも、それはそれで良いことだとは思いますが、創作活動に行き詰まった時に、そのまま挫折してしまう危険性が高いと思われます。

行き詰まって悩んでいる時にまた立ち上がって走りだす力になるものが、そういった、上を目指そうとする意志なのではないでしょうか。

アルマジロ編集部では、児童文学・コミック等のジャンルを問わず、同人誌を広く募集しております。

誌名・サークル名・代表者名・連絡先（できれば電話番号も）・販売を行う場合は、その入手方法、以上の項目を明記した紙を、必ず添えて、どしどしご応募下さい。 （担当…五十嵐）

斎藤英治の映画今昔

眠れない夜のために



『エルム街の悪夢』より

前にも一度書いたことがあるのだけれど、子供の頃、僕は夜なかなか寝つけなかったものだ。朝ちゃんと目が覚めるだろうか、一度眠ると二度と目覚めないんじゃないだろうか、と考え始めると怖くて怖くて仕方なく、なかなか眠れなかったのである。ときには、今夜は絶対に眠らないぞ！とベッドの中で悲壮に決意したりしたものだ（まあ、たいていはすぐに睡魔に負けて眠ってしまったものだけれど）。

もちろん、今では眠ることはちっとも怖くなくなった。むしろ、暇さえあれば年中寝ているなまけ者の大人になってしまった。しかし、そんな今になっても、子供の頃のあの恐怖はハッキリと思いだすことができる。眠りに対する恐怖とは、子供の頃に誰もが味わう恐怖ではないだろうか？ 読者の中にも、眠るのが怖くて眠れぬ夜を過ごした覚えのある人がいるのではないだろうか？

ところで、どうして僕は子供の頃に眠るのがそんなに怖かったのか？ 今から考えてみると、あれは自分が消滅してしまうことに対する恐怖だったと思う。起きている間、僕たちは自分を意識している。でも、いったん眠ってしまうと、意識の活動が停止する。「私」という主体がどこかに消えてしまう。それがすごく不安だったと思うのだ。

もう一つには、自分を制御できなくなるという恐怖もあっただろう。起きている間、僕らは自分を意識的にコントロールしている。でも、眠ってしまうともはや自分をコントロールできなくなる。フロイトが言うように、無意識に支配されるからだ。そこでは、普段は自分が知らなかったような自分が出現するかもしれない。どんな狂気が明らかになるとも限らないのだ。

要するに、眠ることの恐怖とは、一に自分が消滅してしまうことに対する恐怖であり、二に自分を制御できなくな

る恐怖と言えるだろう。

このような無意識に潜む恐怖を、これまでにさまざまな芸術作品が描いてきた。たとえば、ロバート・スティーヴンソンの名作『ジキルとハイド』がそうだ。あの小説の善良なジキル博士は、僕らが覚醒しているときの状態（意識）であり、ハイドは寝ているときの状態（無意識）と言えるだろう。あの小説が怖いのは、善良な人間が別人に豹変することで、我々の意識下にどんな人間が隠れているかわからないという恐怖を描いているからなのだ。

これは二重人格を扱った作品だが、それ以外にも、ゴシック・ロマンには、夢遊病患者やドッペルゲンガーなどを登場させて、人間の無意識に潜む不安を描いた作品が多い。

また絵画では、フューゼリの有名な『悪夢』がある。これは、ベッドで眠っている美しい乙女の上に、ゴブリンを思わせるような怪物が座っている姿を描いた不気味な絵だ。これも明らかに、清純な乙女の意識下に潜む、エロチックな悪夢を描いた作品と言えるだろう。ちなみに、滝本誠の『映画の乳首、映画の腓』（すごい題名の本だ）という本によると、かのジグムント・フロイトはこの絵を愛し、自分の部屋に飾っていたという。

とにかく、僕らの意識下にはどんな自分が隠れているか誰にもわからない。どんなグロテスクな怪物が潜んでいるとも限らない。それらがむっくり起き上がるのが、眠って夢を見ているときなのである。だからこそ、子供は眠るのを恐れると思うのだ。

さて、映画にもそのような恐怖が描かれてきた。まず代表作として挙げたいのが、ウェス・クレイヴン監督の『エルム街の悪夢』である。この映画は、低予算で作られたのと、残虐な暴力シーンが多いために、『13日の金曜日』のようなスプラッタ・ホラーの一つとして片付けられがちなのだが、実はこれが、お伽話のような魅力を持った作品なのだ。

ヒロインは、アメリカの平凡な女子高生で、彼女の夢の中に、フレディという名の奇怪な殺人鬼が現われ始める。この殺人鬼が夢の中で人間を殺すと、その夢の出来事が、ことごとく現実になってしまう！——というわけで彼女は眠ることができなくなる。眠ると殺されてしまうからだ。ここには、眠ると自分が消滅してしまうかもしれない、という睡眠に付きものの恐怖が、実に巧みに映画化されていたと思う。また、眠るのが怖くて必死で起きているヒロインの姿は、子供の頃の自分を思いださせたものだ。一見他愛ない映画なのだけれど、意外に子供心を持った映画なのである。また、この映画には、フューゼリの『悪夢』を明らかに意識したと思われるところがあった（もしかしたら、題名もフューゼリの絵を意識したのかもしれない）。



恐怖の殺人鬼・フレディ。帽子をかぶり、長い鉄の爪をつけて、なかなかダンディーではありませんか。『エルム街の悪夢』

また、ジョゼフ・ルーベンの『ドリームスケープ』も、悪夢を扱った作品として面白い。これは、ある大学の研究所が、原因不明の精神的な不安を治療するための画期的な方法を考案する物語。テレパシーを持つ超能力者を、患者の夢の中に忍び込ませて、彼らの心の葛藤を探り、それを解決しようというのである。そこでまず、ある少年の夢に入ってみると、グロテスクな怪物がいて、それに少年が怯えていたことがわかる。少年は超能力者に助けられてこの怪物を倒し、健康を取り戻すのである。荒唐無稽な話だけれど、人間の無意識の世界が、実に大胆かつユーモラスに描かれていたものだ。

さらには、眠ることに対する恐怖そのものを描いたSF作品もある。その代表作が、SF映画の古典として知られているドン・シーゲル監督の『ボディ・スナッチャー／恐怖の街』だ。これは、宇宙からやってきた繭状の生物が、地球上でしだいに大きくなり、やがて人間そっくりの形になって人間に成り代わってしまうという物語。五〇年代に流行したいわゆる「地球侵略もの」の一本である。しかし、面白いのは、この映画の宇宙生物が、人間が眠っている際

に彼らの体を乗っ取ってしまうという点だ。そのため、ここでも、宇宙人の侵略に気づいた主人公たちは、眠ることができなくなる。主人公とその恋人が、お互いを励まし合いながら、起きていようとする場面を見ていると、やはり少年時代の睡眠に対する恐怖が思いだされたものだ。

この映画では、眠った人間は決して死ぬわけではない。ただし、まったく個性のない人間になってしまう。つまり、



主人公が眠りに落ちるや、花のようなモノの中から彼の複製が生まれ、彼の生命力を奪っていく……恐怖のシーン。
『SFボディ・スナッチャー』

姿形はそっくりの別人になってしまうのである。この映画が描いているのもまた睡眠に付きものの不安——自分が消滅してしまうという恐怖——と言えるだろう。（ちなみに、この映画は、七〇年代の後半に、『存在の耐えられない軽さ』のフィリップ・カウフマン監督の手で再映画化された。『SFボディ・スナッチャー』がそれで、このリメイクもまたなかなか面白かったものだ。）

最近の映画では、ポール・バーホーベン監督の大ヒット作『トータル・リコール』が面白い。物語は、擬似体験装置（一種のドリーム・マシーン）によって火星旅行をしていた主人公が、その夢の中で、何が現実で何が夢なのか、何が本物の自分の記憶で、何が自分の偽物の記憶なのか、わからなくなってしまうというもの。すごく複雑な話なので簡単には紹介できないが、要するに、自分が別人になってしまう恐怖を描いた作品なのである。そして肝心なのは、ここでも、主人公がドリーム・マシーンで眠ったのをきっかけに自我の危機に晒（さら）されるということだ。やはり、眠ると何が起こるかわからないのである。

このように、映画は眠ることの恐怖を、無意識に潜む悪夢を、さまざまな形で描いてきた。残酷で怖い作品が多いので、中にはこれらの作品を毛嫌いする人もいるかもしれない。でも、僕の知るかぎり、お伽話にも怖いものや残酷なものが多いものである。アンデルセンやグリムの童話やお伽話にも、残酷なものが沢山ある。これらの恐怖映画は、眠ることの恐怖を描いた現代のお伽話と言ってもいいだろう。本当に、僕らの無意識に何が潜んでいるのかは誰にもわからない。大人の読者もたまにはこれらの映画を見て、かつての子供時代の眠れない夜のことを思いだしてはどうだろうか？

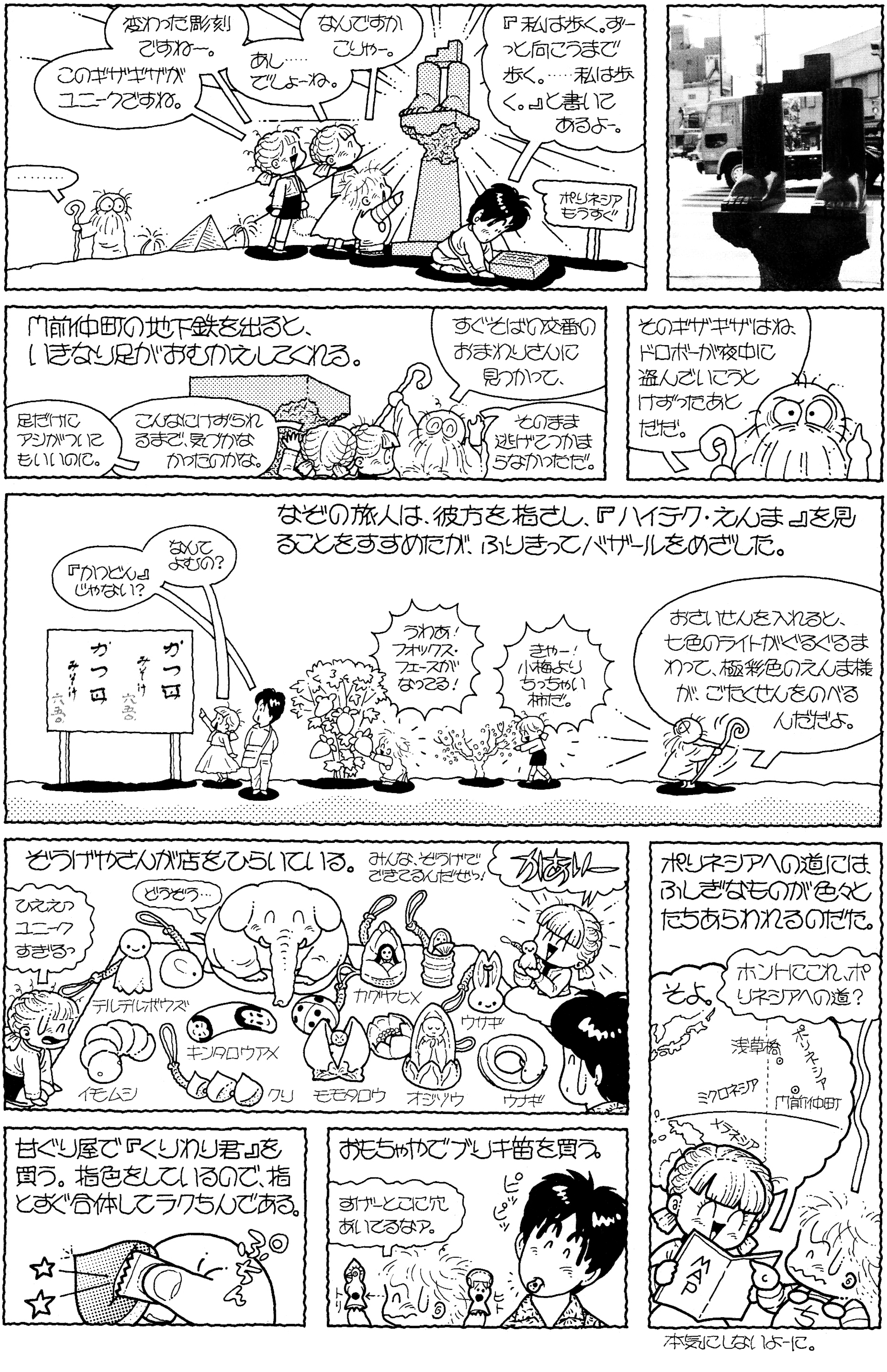


原作者フィリップ・K・ディックは、本物と複製、現実と虚構という現代的なテーマを扱った作家として知られている。
『トータル・リコール』

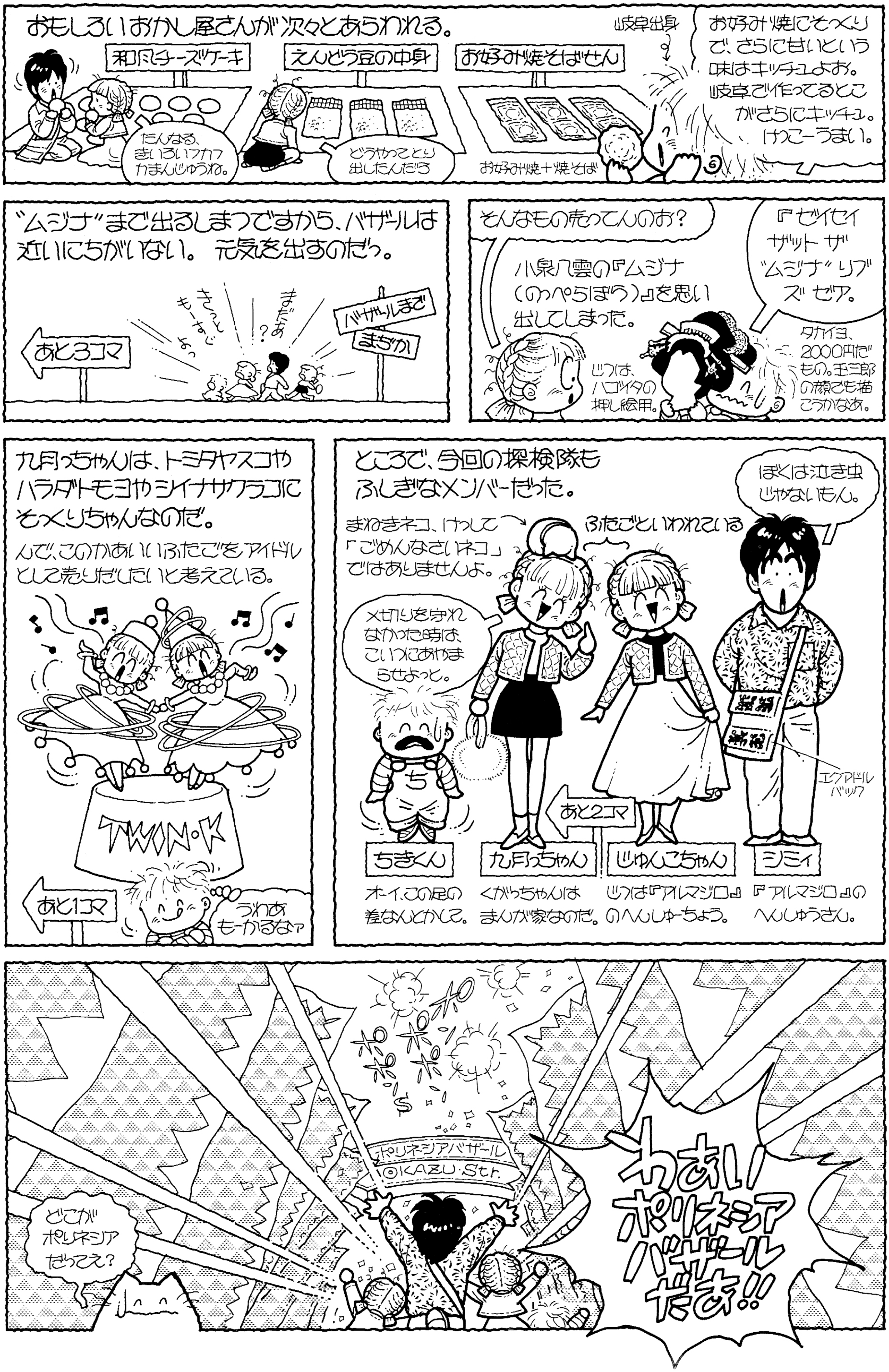
写真提供・川喜多記念映画文化財団
東宝東和


なんでもみませう・かんでもみませう
あるまじろ見てある記
そのに あるまぱくぱく食べある記
九月っちゃん
ちきくん
おおやちき
じゅんこちゃん
ジミィ
きょうもきょうとて、ある・じろ探検隊は、どこへ行こうかと考えていた。
『ぶい茶』のぶいっ!!で、2回ですよ。
3回じゃないの。
これ、ふちを2回まわすんだよー。
ごおり ごおり
きゃーっ、おもしろい。
ごおり ごおり ごおり ごおり
それにしてもなんで回すんでしょーね？
遠心力の奇跡で、速くたくさん回した方がおいしいよっ。
お茶が目をまわしてぐりぐりの味になっちゃうじゃんっ。
5回まわしちゃった。
だめっ
ポリネシアに行くのっ!!
水きりどす
あっあっ あたしも『バリ』ネシア
あっあっ あたし『パリ』ネシアがいいわ！
あっ!! 先号で、ポリネシアに行こうて言いましたよね。
タヒチ……
いく！いく！
えっ、バザール!?
今日、ちょーど月に3度のバザール(市)ですからっ！
このきゅうす、気に入りました。

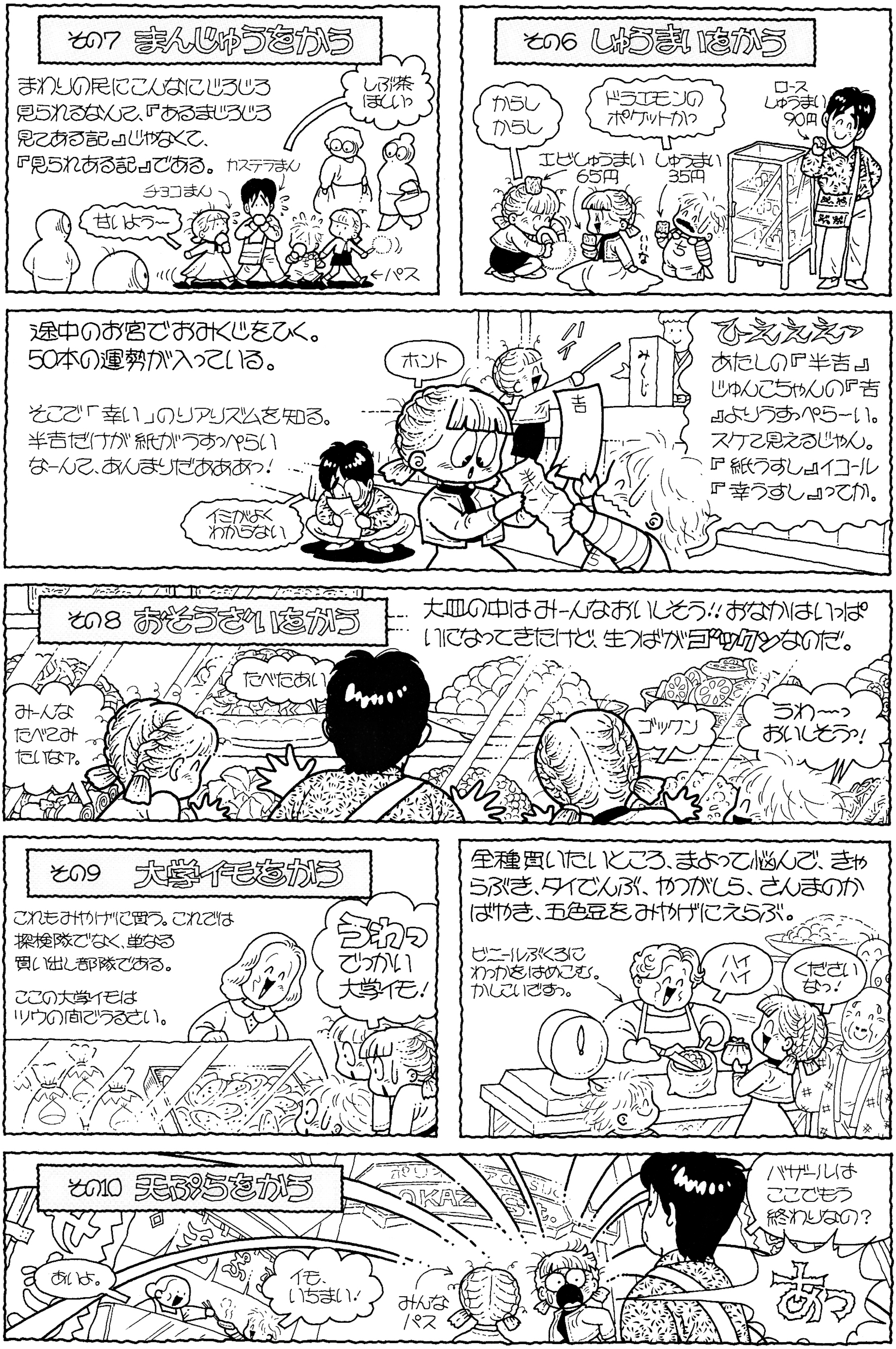
ネシア＝島


変わった彫刻ですねー。
このギザギザがユニークですね。
なんですかこりゃー。
あし……でしょーね。
『私は歩く。ずーっと向こうまで歩く。……私は歩く。』と書いてあるよー。
……
ポリネシアもうすぐ
門前仲町の地下鉄を出ると、いきなり足がおむかえしてくれる。
すぐそばの交番のおまわりさんに見つかって、
足だけにアシがついてもいいのに。
こんなにけずられるまで、気づかなかったのかな。
そのまま逃げてつかまらなかっただ。
そのギザギザはね、ドロボーが夜中に盗んでいこうとけずったあとだだ。
なぞの旅人は、彼方を指さし、『ハイテク・えんま』を見ることをすすめたが、ふりきってバザールをめざした。
なんてよむの？
『かつどん』じゃない？
うわあ！フォックス・フェースがなってる！
きゃー！小梅よりちっちゃい柿だ。
おさいせんを入れると、七色のライトがぐるぐるまわって、極彩色のえんま様が、ごたくせんをのべるんだだよ。
ぞうげやさんが店をひらいている。
みんな、ぞうげでできてるんだぜっ！
かあいいー
ひえぇっユニークすぎるっ
どうぞう…
テルテルボウズ
カグヤヒメ
ウサギ
キンタロウアメ
イモムシ
クリ
モモタロウ
オジゾウ
ウナギ
ポリネシアへの道にはふしぎなものが色々とたちあらわれるのだた。
ホントにこれ、ポリネシアへの道？
そよ。
浅草橋
ポリネシア
ミクロネシア
門前仲町
メラネシア
MAP
甘ぐり屋で『くりわり君』を買う。指色をしているので、指とすぐ合体してラクちんである。
おもちゃやでブリキ笛を買う。
すげーとこに穴あいてるなァ。
ピ
ピッ
トリ
ヒト

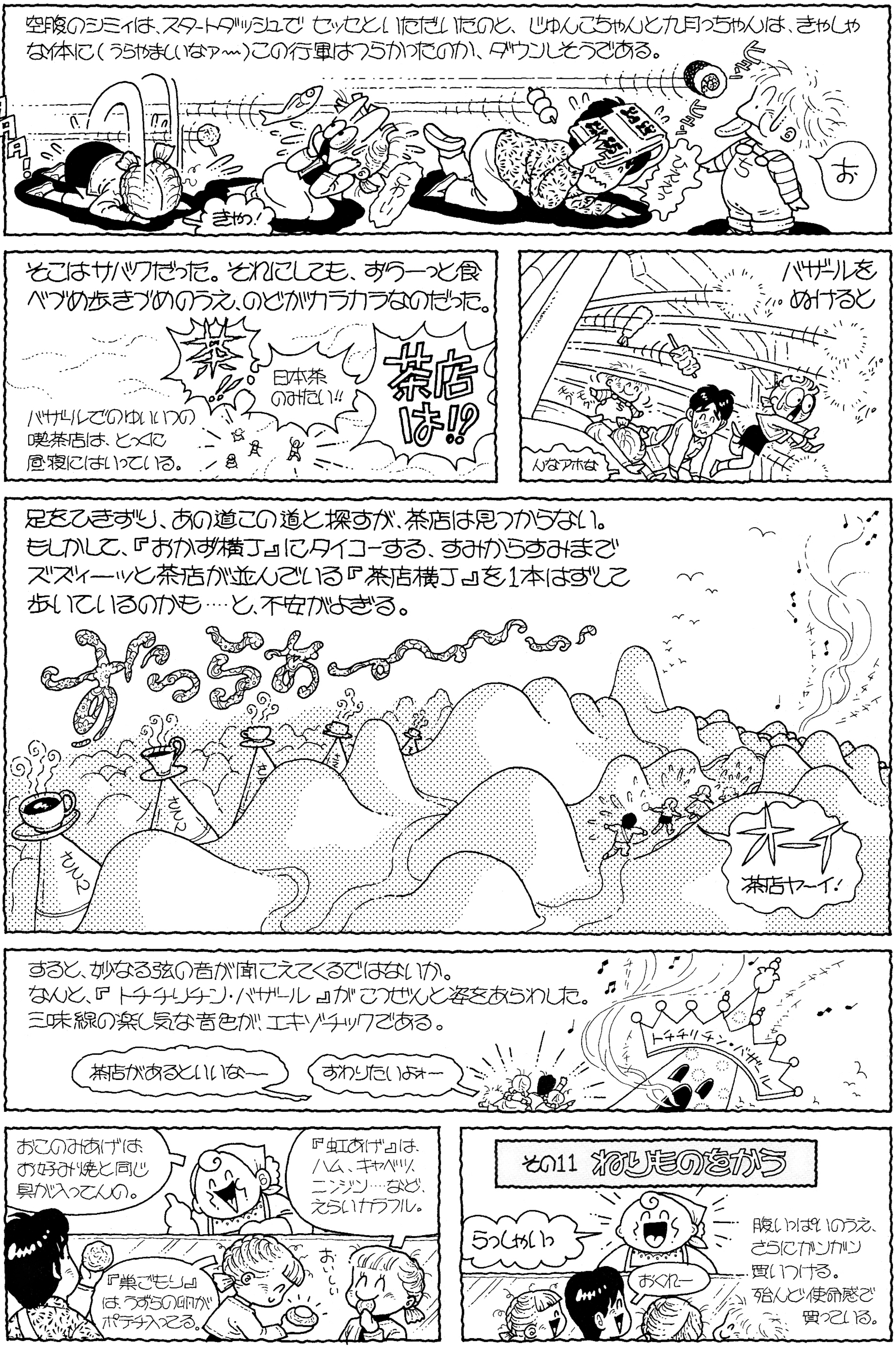
本気にしないよーに。


おもしろいおかし屋さんが次々とあらわれる。
和風チーズケーキ
たんなる、きいろいフカフカまんじゅうね。
えんどう豆の中身
どうやってとり出したんだろ
お好み焼そばせん
お好み焼＋焼そば
岐阜出身
お好み焼にそっくりで、さらに甘いという味はキッチュよぉ。岐阜で作ってるとこがさらにキッチュ。けっこーうまい。
"ムジナ"まで出るしまつですから、バザールは近いにちがいない。元気を出すのだっ。
きっともーすぐよっ
?
まだあ
バザールまで
まぢか
あと3コマ
そんなもの売ってんのお?
小泉八雲の『ムジナ(のっぺらぼう)』を思い出してしまった。
『ゼイセイ ザット ザ "ムジナ" リブズ ゼア。
じつは、ハゴイタの押し絵用。
タカイヨ、2000円だもの。玉三郎の顔でも描こうかなあ。
九月っちゃんは、トミタヤスコやハラダトモヨやシイナサクラコにそっくりちゃんなのだ。
んで、このかあいいふたごをアイドルとして売りだしたいと考えている。
TWIN・K
あと1コマ
うわあ もーかるなァ
ところで、今回の探検隊もふしぎなメンバーだった。
ぼくは泣き虫じゃないもん。
まねきネコ、けっして「ごめんなさいネコ」ではありませんよ。
ふたごといわれている
〆切りを守れなかった時は、こいつにあやまらせよっと。
エクアドルバック
あと2コマ
ちきくん
オーイ、この足の差なんとかしろ。
九月っちゃん
くがっちゃんはまんが家なのだ。
じゅんこちゃん
じつは『アルマジロ』のへんしゅーちょう。
ジミィ
『アルマジロ』のへんしゅうさん。
ポ
ポ
ポ
ポ
ポ
ポリネシアバザール
©KAZU・Str.
どこがポリネシアだってえ?
わあい!ポリネシアバザールだあ!!


『おかず横丁』と名のついたバザールだけに、食べもの屋がのきを並べている。よい匂いが、みっちゃん みちみち みちいっぱいあふれている。探検隊のおなかの虫は、うはうはヨロコンでいる。
うはうは
うはうはうはうは
かたっぱしからたべましょっ!!
うまい話
返事はあとで
まず相談
蔵前警察署
蔵前防犯協会
『うまい味、返事はあとに まずひとくち』
その1 ヤキトリをかう
ハイッ
だって「カワ」は美人になるもとだってマダム・ヤンがゆってたもん。
ミートボール
ヤキトリ
ローソク
カワ
そく、食べる。
このチキクラ(チキンクラゲ)へんてこりんな組み合わせだけど おいしい。
トウガラシ トウガラシ
冷やし中華みたい
やなぎ
その2 ねりものをかう
なーる
『すえひろ』は扇のことでしょ。エビのしっぽににてるでしょ。
しゅうまいあげ
さつまあげ
エビ入りすえひろあげ
カレーあげ
げそまき
うずら卵あげ
ひとくち食べては、切りくちを見せあってよろこぶ探検隊。犬がじろじろ見る。
ほらあ
このカレー味はおでんに入れてよいものでしょーか。
その3 コロッケをかう
玉ネギが多いのが『玉ネギにキズ』よ。
あげたてはおいしいっ。
しょーゆ しょーゆ
某ビルの大鏡の前で食べてみると、2ケ食べたよーな気がしてうれしかった。イソップの、肉をくわえた犬の話を思い出し、急いでのみこむのだった。
がまの油をとってるみたいね。
地元の民もじろじろ見る。
その4 キャベツをかう
油っこいものばかり食べて、ねひょねひょになり、バザールの入り口にもどり、肉屋でキャベツのセン切を買ってくる(30円)
ポロポロ
こぼす
しゃりしゃり
ソース ソース
その5 みそづけをかう
みょうがのみそづけと「のむ梅」を買った。
のむ
おみそはきらいよっ

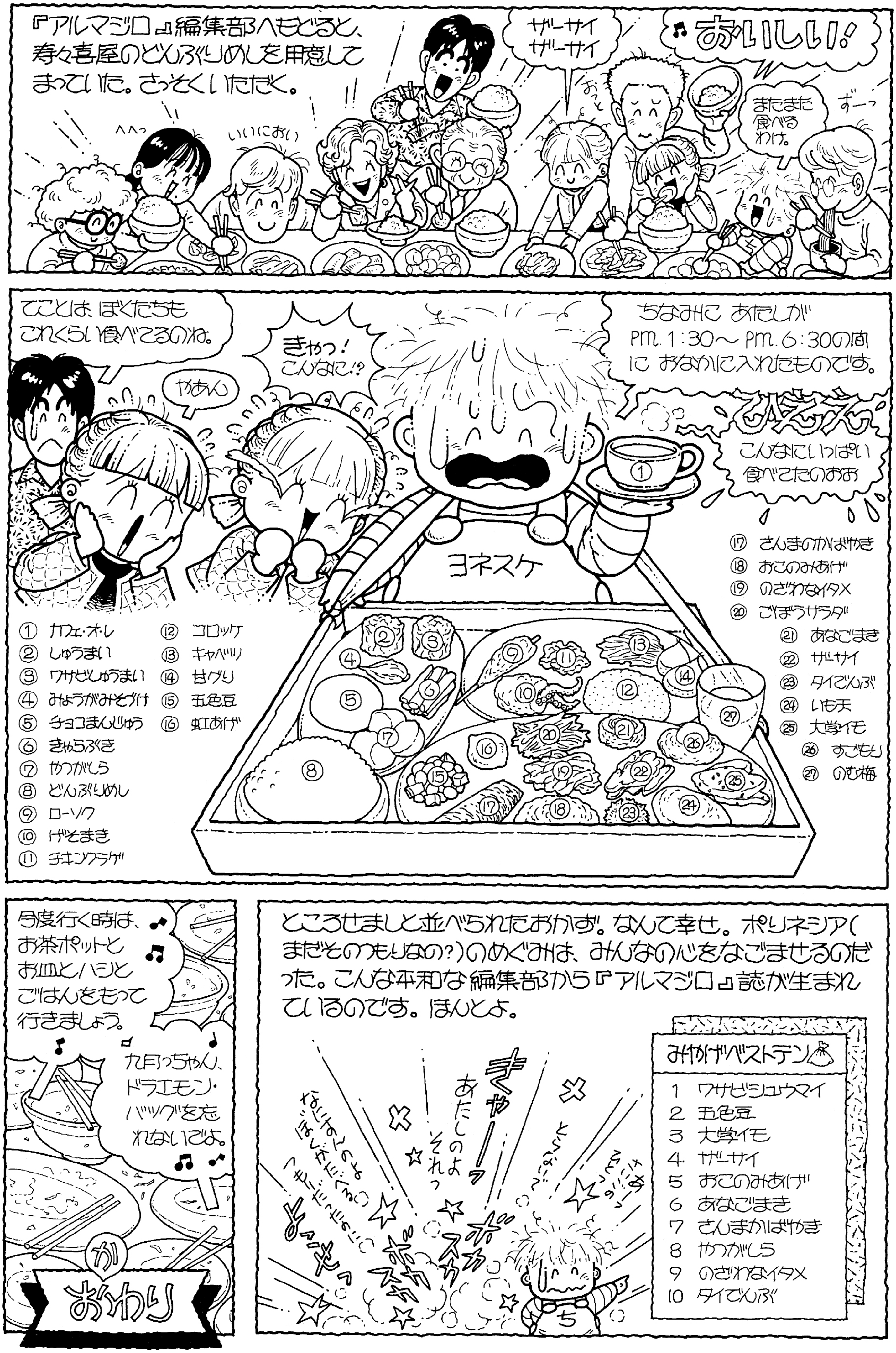


その6 しゅうまいをかう
ドラエモンのポケットかっ
からし からし
ロース しゅうまい 90円
エビしゅうまい 65円
しゅうまい 35円
いいな
その7 まんじゅうをかう
まわりの民にこんなにじろじろ見られるなんて、『あるまじろじろ見てある記』じゃなくて、『見られある記』である。
しぶ茶 ほしいャ
カステラまん
チョコまん
甘いよう～
←パス
ひえええ～ッ
あたしの『半吉』じゅんこちゃんの『吉』よりうすっぺらーい。スケて見えるじゃん。『紙うすし』イコール『幸うすし』ってか。
みくじ
吉
ホント
途中のお宮でおみくじをひく。50本の運勢が入っている。
そこで「幸い」のリアリズムを知る。半吉だけが紙がうすっぺらいなーんて、あんまりだあああっ！
イミがよくわからない
その8 おそうざいをかう
大皿の中はみーんなおいしそう!! おなかはいっぱいになってきたけど、生つばがゴックンなのだ。
うわ～っ おいしそうッ！
ゴックン
たべたあい
みーんな たべてみたいなァ。
全種買いたいところ、まよって悩んで、きゃらぶき、タイでんぶ、かつがしら、さんまのかばやき、五色豆をみやげにえらぶ。
くださいなっ！
ハイハイ
ビニールぶくろにわっかをはめこむ。かしこいですっ。
その9 大学イモをかう
これもみやげに買う。これでは探検隊でなく、単なる買い出し部隊である。
ここの大学イモはツウの间でうるさい。
うわっ でっかい 大学イモ！
その10 天ぷらをかう
バザールはここでもう終わりなの？
あつ
みんな パス
イモ、いちまい！
あいよ。
OKAZ


空腹のシミィは、スタートダッシュで セッセといただいたのと、じゅんこちゃんと九月っちゃんは、きゃしゃな体に(うらやましいなァ～)この行軍はつらかったのか、ダウンしそうである。
きゃっ!
お
そこはサバクだった。それにしても、おう～っと食べづめ歩きづめのうえ、のどがカラカラなのだった。
茶!!
日本茶のみたい!!
茶店は!?
バザールでのゆいいつの喫茶店は、とっくに昼寝にはいっている。
バザールをぬけると
モグモグ
んなアホな
足をひきずり、あの道この道と探すが、茶店は見つからない。もしかして、『おかず横丁』にタイコーする、すみからすみまでズズィーッと茶店が並んでいる『茶店横丁』を1本はずして歩いているのかも…と、不安がよぎる。
さてん
オーイ 茶店ヤーイ!
すると、妙なる弦の音が聞こえてくるではないか。
なんと、『トチチリチン・バザール』がこつぜんと姿をあらわした。
三味線の楽し気な音色が、エキゾチックである。
トチチリチン・バザール
茶店があるといいな～～
すわりたいよォ～
おこのみあげは、お好み焼と同じ具が入ってんの。
『虹あげ』は、ハム、キャベツ、ニンジン…など、えらいカラフル。
『巣ごもり』は、うずらの卵がポテチ入ってる。
おいしい
その11 ねりものをかう
らっしゃいっ
おくれー
腹いっぱいのうえ、さらにガンガン買いつける。殆んど使命感で買っている。



その12 おそうざいをかう
あれもこれもうまそう!! 野沢菜イタメ、あなごまき、緑のシューマイ、ごぼうサラダ、ザーサイを買った。
きゃあ ザーサイだ
ザーサイ
金平
『いかコン』って、いかと大根ねっ。
この緑色のしゅうまいはなあに?
わさびでいっ。うまいでいっ。
しゅうまい
いかコン
九月っちゃんはザーサイが大好き!! ザーサイを見ると顔がうにゃっとなってしまう。
らんらんらん
プハーッ
地獄でホットケーキ。
足がイタイですぅー。
ネコにマタタビ 九月っちゃんにザーサイ
できれば、食後のメロンかダイコンおろしが食べたいなあ…。
おお——っ。ポリネシアの夕焼はスゴイ。
おともだちによると、近くで『めんだけのラーメン』を食べてきたという。めちゃくちゃうまくて、なんと300円!!
和風スパゲティは、サツマイモやカボチャとか、具が17種類もはいってんのよ。
うわあ
いいなあ
次は、ぜひここに探検に行きたいっ!!
なんとこんなところでおともだちに会った。
あっ
あっ かえる
さあかえるか
これって、カエルのツラからション便ってとこか。
カエルコールしなきゃ。
カエルの好きな町内か? この公園のフェンスも水のみ場も、あっぱれである。
きゃーっ!! このカエル、なんてとこから お水を出してんの!
九月っちゃんはけっこうあわて者なのだった。よーく見れば大ボケね。



『アルマジロ』編集部へもどると、寿々喜屋のどんぶりめしを用意してまっていた。さっそくいただく。
ザーサイ ザーサイ
おいしい!
へへっ
いいにおい
おっと
またまた食べるわけ。
ずーっ
てことは、ぼくたちもこれくらい食べてるのね。
きゃっ! こんなに!?
やあん
ちなみに あたしが PM.1:30〜PM.6:30の間に おなかに入れたものです。
ひえええ
こんなにいっぱい食べてたのおお
ヨネスケ
① カフェ・オ・レ
② しゅうまい
③ ワサビしゅうまい
④ みょうがみそづけ
⑤ チョコまんじゅう
⑥ きゃらぶき
⑦ やつがしら
⑧ どんぶりめし
⑨ ローソク
⑩ げそまき
⑪ チキンフラゲ
⑫ コロッケ
⑬ キャベツ
⑭ 甘グリ
⑮ 五色豆
⑯ 虹あげ
⑰ さんまのかばやき
⑱ おこのみあげ
⑲ のざわなイタメ
⑳ ごぼうサラダ
㉑ あなごまき
㉒ ザーサイ
㉓ タイでんぶ
㉔ いも天
㉕ 大学イモ
㉖ すごもり
㉗ のむ梅
今度行く時は、お茶ポットとお皿とハシとごはんをもって行きましょう。
九月っちゃん、ドラエモン・バッグを忘れないでよ。
か
おわり
ところせましと並べられたおかず。なんて幸せ。ポリネシア(まだそのつもりなの?)のめぐみは、みんなの心をなごませるのだった。こんな平和な編集部から『アルマジロ』誌が生まれているのです。ほんとよ。
みやげベストテン
1 ワサビシュウマイ
2 五色豆
3 大学イモ
4 ザーサイ
5 おこのみあげ
6 あなごまき
7 さんまかばやき
8 やつがしら
9 のざわなイタメ
10 タイでんぶ
きゃーっ
あたしのよ それっ
なにすんのよ ぼくがたべるのにー
よーこせっ
とらないで
ボカ スカ ボカ スカ



早いもので、アルマジロ創刊号が発売されて、三か月が過ぎ、多くの読者の方より、愛読者カードをお送りいただきました。

そこで、今回の“あるまぐろ臨時増刊号”では、そういった、読者のみなさんの声を、取り上げてみたいと思います。

なお、前回の愛読者カードで、「人物特集で取り上げて欲しい作家」、「描きおろし絵本を描いて欲しい作家」の二項目について、特に多かった作家、それぞれ十二人を、表にまとめてみました。

「何で、あの人がいないの一？」と、思ったあなた。今号についている愛読者カードに、その作家の名前を書いて、今すぐ、ポストへ!

アルマジロは、そんなあなたに支えられている雑誌なのですから。

人物特集で取り上げて欲しい作家

(50音順・敬称略)

*安房直子
*おおた慶文
*銀色夏生
*佐藤さとる
*シルヴァスタイン
*舟崎克彦
*牧野鈴子
*松谷みよ子
*宮崎照代
*宮沢賢治
*モンゴメリ
*ルイス・キャロル

描きおろし絵本を描いて欲しい作家

(50音順・敬称略)

*いもとようこ
*おおた慶文
*川端誠
*黒井健
*五味太郎
*佐野洋子
*立原えりか
*長新太
*なかえよしを
*永田萠
*東君平
*村上勉

愛読者カードから

装幀や内容はとてもよかったと思います。東逸子さんの特集がすきでした。

創刊号だというせいか、どういう読者を対象にするかしぼりきってない気がしました。こちらの反応を見るような…。

私はマンガが好きなので、オリジナル系の作品をもっとのせていただければ楽しいですが、マンガ雑誌ではないからそういうわけにいかないとは思っています。日本の絵本をあまり読まず、トールキンや「大きな森の小さな家」から入った私としては、絵本やお話が少し物足りない気がしました。

愛知県 Y・A

全体的に暗い感じがする。

もっとさし絵やカラーのページをふやして、もう少しわかりやすいというか読みやすく書いて欲しい。

滋賀県 H・S

お！ 新人を発掘するだと!!

これは絶対に「私」を使ってもらうしかないな、将来性もあるし、やる気もバツグンだ！

というわけで作品送りますから、思いっきり安心してTELしなさい。

うん よしよし!!

東京都 N・K

等々、賛否両論、様々なご意見を、いただきました。今後の編集方針の参考にさせていただきます。ありがとうございました。

読者のページ

あるまぐろは、読者の皆様のおたよりで成り立つコーナーです。ふと思い浮かんだこと、いつも思っていたことを、ハガキ、または封書で、下記の住所までお送り下さい。

〒101 東京都千代田区神田神保町１-15
内山ビル ㈱ナート
アルマジロ編集部「あるまぐろ」係まで。

読者のおたより あるまぐろ

がんばれ なくなっちゃだめだ

「貧乏人」

せちがらいこの世の中、右を向いても左を見てもお金お金、お金でございます。金満ニッポンといわれるこのご時世、右を向いても左を見ても、金持ち金持ち、金持ちでございます。ヒュルルルル〜〜〜。

しかし、全国の貧乏人よ、立ち上がれ！　今こそ我々の時代が来たのだ。拝金主義よ、君に我々の心からの惜別の弥栄（いやさか）を贈ろう！　さらば。パッパカパッパッパッパ——。

貧乏は愛です。

愛知県　青木馬太郎

ないものどんどん

「雨よけ装置」

私はカサが嫌いだ！　混みあった駅前で、他人にかまわずカサさしてる連中を見るとゾッとする。自分の上から降ってきた水を、他人のいるところへ流してしまうだけの道具なんて、愚の骨頂。スペースシャトルが空を飛びかい爆発四散している昨今、なんでこんな単純に物理的で原始的な道具がまかり通っているんだろう。こんな道具を一掃してしまう画期的な発明を私は切に望む。

埼玉県春日部市　春日三三夫

子供の頃のタカラモノ

「ガラスの破片」

すりガラスではなくて、透き通ったピカリと光るガラスの破片。

ぼくはどういうわけか、地面に穴を掘るのがたまらなく好きで、夢中になると自分がすっぽりはまってしまうほど、深い穴を掘っていたりした。（どこか変だったのかな…？）

そこで、その土に開けた穴なんだけど、もっと小さな、スコップで二、三回掘った程度の穴に、その—ガラスの破片—でふたをするのだ。

そしてその穴の中には、アリやオケラがはいっている。ちょっと虫が嫌いな人には嫌な趣味かもしれないけれど、そのガラスを通してみえる世界がたまらなく素敵だった。

オケラは穴をつくって消えてしまうし、アリは溝をほっていたりして……。ああ、よかったなあの頃。

東京都　土方小僧

「スコップ」

幼稚園にかよっていたころだろうか、初めて本格的なスコップを買ってもらった。（のちにそれはスコップではなく移植ゴテと呼ぶものだと、小学校の先生に教えられた）

それまでおもちゃの砂遊びセットのシャベルを使っていた私は、重くて刃物に近い存在感のあるそれを大切な宝物にした。

深い穴もたちまち掘れて、ビーズを隠すのに無くてはならない宝物だった。

海の近くに住んでいた私は、日課のように連れていかれる海水浴にも持参した。スコップでクラゲをきざみ、さらさらの砂をまぶした「わらびもち」をジリジリ焼けつく太陽の下で弟にごちそうした夏も遠くなってしまった。

大阪府堺市　笠原まりこ



私の地球対策

昔、某国営放送局で気配りにうるさいアナウンサーがやっていた番組がありました。何という番組だったかタイトルは忘れてしまったけれど、テーマ音楽だけちょろっと憶えています。…青い地球は誰のもの　青い地球は誰のもの……少年少女合唱団が唄っているようなその歌は、幼な心にもなにか大切なことを言っているような気がしたものです。今にして思えば、おおげさかもしれませんが、地球と呼ばれるこの青い星が、我々命あるものにとってかけがえのないものだということを本能的に感じとっていたのかもしれません。

なんだか硬いことを書いてしまいましたが、要するにあえて言うまでもなく地球って本当に大切なものだってこと。最近はマスコミなんかでも地球環境についていろいろ取りあげられていて、それをただの流行だなんて言う人もいるけれど、私はいい傾向だと思います。だって、なんにもしないで手をこまねいているよりはずっといいことですもの。ほら、よく自分ひとりぐらいが騒いでも変わらない……って平気で地球に優しくないことする人がいますよね。それはおかしいなって思うんです。小市民には小市民なりの地球対策ができるはず。月並だけど、合成洗剤を使わないとか油は拭き取るとか……。それから、せっかくマスコミが膨大な情報を流してくれてるわけだから、その中から正しい知識を得るとかね。自分にもできそうな身の回りの小さなことから気をつけてみる……これが私なりの地球対策です。アルマジロ読者の皆さんならわかってくれるでしょ？

東京都武蔵野市　吉野祥子

―短歌―

カラ鑵を　蹴りつつ子らは　声を出さず
　塾の時間が　目の前にある

父と子の
　往くさきざきが見えてしまった
　そう思いこんでた　中三の秋

埼玉県　鈴木福次

あるまぐろ　投稿案内

★短歌&俳句&川柳……感じたままをうたにして下さい

★最近見つけたいいもの……最近、うれしかった発見（人、音楽、絵、もの、なんでも）を教えて下さい。なるべく図解で。

★口先三寸でたらめ一発……実は本当はこうだったと、説得力ある説明をつけて下さい。200字程度。
「人にしっぽのないわけ」
「夜になると眠くなるわけ」

★こんな家に住みたいな……自分の住みたい夢のある家を図解説明して下さい。

★私の地球対策……自分で地球のためによいと思ってやっていることを書いて下さい。

★がんばれ　なくなっちゃだめだ……機能優先の中で切り捨てられていくものたちにエールをおくってあげてください。

★ないもんどんどん……ほしいもの、こんなのがあったらうれしいだろうなとおもうものを200字程度で説明して下さい。

★私のしごと……いまやっている仕事、いつかやってみたい仕事について200字程度で。

★子どもの頃のタカラモノ……昔、大事にしていたタカラモノを200字程度で。

次号の締切は2月末日です。

アルマジロ原稿募集のご案内

第3号締切は2月15日です。

アルマジロでは、絵本をつくりたい方、お話をつくりたい方、絵をかきたい方、ノンフィクションを書きたい方など、新人作家を探しています。

あなたが、これは子どもが楽しめる、子どものためのすごくいいものだと思うのなら、どんなジャンルのものでもいいと思います。自分のあとから来るものに伝えたい自分のいいものを、作品にして送って下さい。

それを形にして外に出す、「新人作家がんばれ登竜門」になりたいと考えています。

1．**創作お話**	400字詰め原稿用紙１枚から50枚程度
2．**絵本**	サイズ、画材自由。ページ数はなるべく４の倍数で
3．**詩**	スタイル自由。
4．**さしえ**	サンプル（Ｂ４以内。画材、紙自由）をまず見せて下さい。お話の挿絵として採用します。
5．**カット**	同上
6．**コミック**	サンプル（標準マンガサイズ天地270×左右180ミリ）を見せて下さい。採用時に改めて依頼をいたします。
7．**写真**	サイズ自由。紙焼きのこと。本誌に登場していただきます。
8．**同人誌**	コミック、絵、お話……なんでも。誌上で紹介します。下の応募用紙を添付して下さい。
9．**展覧会**	展覧会を開くときには御一報下さい。（４月から６月開催予定のもの）

＊未発表のものに限ります。（プロ・アマは問いません）
＊１、３、７の原稿の返却はいたしません。事前にコピーをおとり下さい。
＊イラストの原稿は、作品が痛まないような梱包をしておくってください。返送を希望される方は、住所、氏名、電話番号を明記して、切手をはった返信用の封筒を同封して下さい。
＊１—７の掲載分には規定の原稿料をお支払いいたします。
＊いい作品は単行本化されます。

応募先
〒101東京都千代田区神田神保町１の15内山ビル
TEL 03(3295)6110 アルマジロ編集部

左のハガキにご感想を書いて送ってください。誌面づくりに役立てさせていただきます。

同人誌名 ________　サークル名 ________

代表者名 ________　ジャンル ________

代表者住所 ________

入手方法 ________

販売価格（販売を行う場合）　　円（送料　込・別　　）

送金方法（同上） ________

その他（ＰＲ等ございましたら） ________

愛読者カード

◇今後の出版企画の参考にいたしたく存じます。ご記入のうえご投函くださいますようお願いいたします。

本書についてのご意見、ご感想

表紙についてどう思いますか。

1.たいへんよい　2.よい　3.ふつう　4.あまりよくない

値段についてはどう思いますか。

1.高い　2.ふつう　3.安い

定期購読なさっている新聞、雑誌名をお書き下さい。

最近お読みになった本で良かったものの書名をお書き下さい。

人物特集でとりあげてほしい作家をお書き下さい。

描きおろし絵本でとりあげてほしい作家をお書き下さい。

次号が4月7日に発売されますがお買い上げになる予定ですか。

1.買う　2.内容を見てきめる　3.買わない

郵便はがき

料金受取人払

神田局承認

6490

差出有効期間
平成３年７月
７日まで
(切手不要)

101-00
011

千代田区神田神保町
一の一五　内山ビル

株式会社　ナート
アルマジロ第2号
愛読者カード係　行き

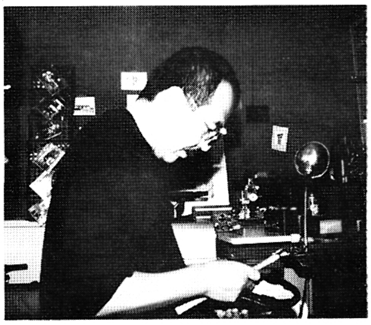
郵便番号 □□□-□□

☆難読地名及びお名前には必ずふりがなをおふり下さい。

ふりがな ご住所		
電話番号　(　　　)	性別　男・女	
ふりがな お名前	年齢 歳	職業

本書をどこでお知りになりましたか。
1 新聞広告　2 雑誌広告　3 書評　4 書店で実物を見て　5 人にすすめられて
6 その他（　　　）

お買上げ書店名　　都道府県　　市町　　書店

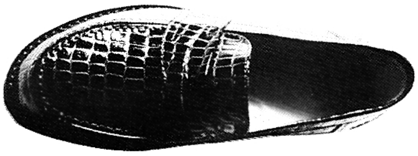


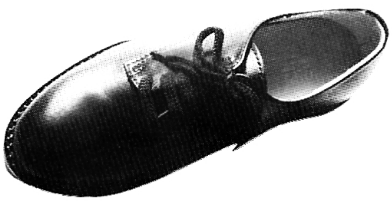
「もっと生活の中で手作業をしよう。手はものを作るためのもの。身近な生活具は自分で作りたい。」
モゲさんは靴を作ります。歩きやすく男女の区別のないシンプルなデザイン、サイズも色も、材料もはく人に合わせて。
自分で靴を作りたい人には、靴づくりの手ほどきもしています。

美しきモノと暮らしたい

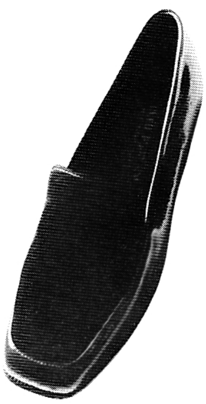
毎日はたいへん。忙しかったり、難しかったり。でも、いいこと考えるといいと思う。なるべく具体的に考えるといいと思う。〝こうなってこうなるといい〟とか、〝こんなこんなのがほしい〟とかね。そうすると向こうから飛びこんでくることもあるし、作り出せちゃうこともある。



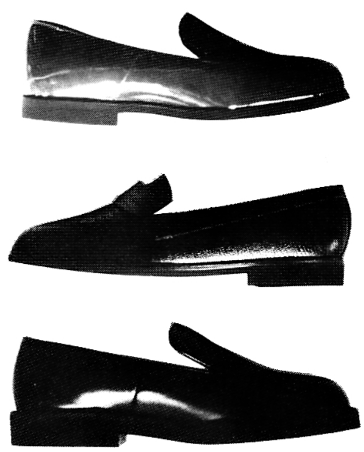












〒150東京都渋谷区神宮前6-28-5宮崎ビル102
TEL03(3498)6365　モゲ・ワークショップ

おいしいひととき

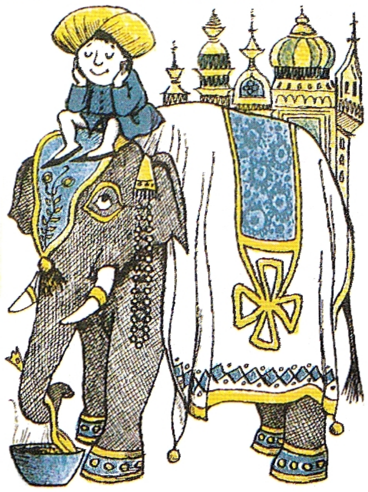
料理　新見典子

本屋さんの片すみで、おいしいにおいをかぎつけました。読んでるだけじゃあ物足りない。こんなスープなら、すぐに食べてみたい。そう思ったら、ほら、すぐに、リズムにのってキッチンに立とう！

APRIL　は　4がつ。
たびに　いいんだ、このつきは。
スペインへ　いって、
ボンベイへ　いって、
あさから　ばんまで　うっとりと、
スープのことを　かんがえる。
ああ　たべたいと　1かい
ああ　たべたいと　2かい
ためいきが　でるぞ、
チキンスープ・ライスいり。

MAY　は　5がつ。
ことりに　なろう、このつきは。
くろうたどりに　なって、
すてきな　すの　なかに、
スープを　つくる。
1かい　とろーり
2かい　とろーり
かきまぜて　つくる、
チキンスープ・ライスいり。

JUNE　は　6がつ。
あつく　なるんだ、このつきは。
にわさきの　バラが、
ぐったり　あたまを　たれる。
げんきづけには　もちろん
チキンスープ・ライスいり！
1かい　さらさら
2かい　さらさら
さらさらと　かけよう、
チキンスープ・ライスいり。



JULY　は　7がつ。
みずに　はいろう、このつきは。
さかなが　およぐ
すずしい　かわを、
のぞいてごらん。
チキンスープ・ライスいりの
おおやすうりを　してる。
1かい　いらっしゃい
2かい　いらっしゃい
さあさあ　やすいよ、
チキンスープ・ライスいり。

AUGUST　は　8がつ。
かんかんでりだね、このつきは。
ぼくらは　みんな、
まるで　おなべさ　あつくって、
なんの　おなべって
そりゃ　もちろん、
チキンスープ・ライスいり。
1かい　ぐつぐつ
2かい　ぐつぐつ
ぐつぐつと　によう、
チキンスープ・ライスいり。



SEPTEMBER　は　9がつ。
すずしくなるよ、このつきは。
だから　ナイルの　ワニに　のり、
チキンスープに　そっくりの、
ナイルの　かわを
くだって　いこう。
1かき　すーい
2かき　すーい
かいて　すすもう、
チキンスープ・ライスいり。

OCTOBER　は　10がつ。
おきゃくを　よぶんだ、このつきは。
まじょと　こおにと　ゆうれいが、
おきゃくに　なって　やってくる。
チキンスープ・ライスいりに、
トースト　ひたして
ごちそうしよう。
1かい　ほ、ほ、ほーう
2かい　ほ、ほ、ほーう
こわい　こえして　よろこぶぞ、
チキンスープ・ライスいり。

NOVEMBER　は　11がつ。
こがらしが　ふく　つきだ。
ぼくは　おびれで　みずを　かき、
ぷーっと　スープを　ふきあげる。
くじらなんだ、ぼくは！
1かい　ぷーっ
2かい　ぷーっ
ぷーっぷーっと　ふきあげる、
チキンスープ・ライスいり。

JANUARY は１がつ。
すてきなんだ、このつきは。
スケート　はいて、
こおりの　うえを　すべって、
チキンスープ・ライスいりの
ほっかほかの　やつを、
１くち　ススス
２くち　ススス
すすって　すべる、
チキンスープ・ライスいり。

FEBRUARY は　２がつ。
ゆかいなんだ、このつきは。
きょねん　つくった　ゆきだるま、
１つに　なって　たんじょうび。
ゆきだるまには　ケーキ、
ぼくには　もちろん　スープ。
おめでとう　１くち
おめでとう　２くち
おめでとうと　たのしむ、
チキンスープ・ライスいり。

MARCH は　３がつ。
かぜが　つよいね、このつきは。
かぜが　ドアを　こわして、
スープを　ゆかに　こぼして、
それを　すっかり　なめて、
もっと　くれと　うなる。
１かい　ふふう
２かい　ふふう
ふふうと　かぜがふく、
チキンスープ・ライスいり。





モーリス・センダック 作
神宮輝夫　訳
冨山房（ふざんぼう）刊

チキンスープ・ライスいり

レシピ（４～５人分）

材料 (1)鶏ガラ１羽分　(2)鶏もも肉400ｇ　(3)玉葱½個　(4)人参１本　(5)米カップ１

(2)(3)(4)を大きめに切る。(1)と一緒に、水から強火にかける。30分ほど煮込み、白濁してきたらザルでこして、スープと具を分ける。具の中の鶏肉だけをサイの目に切り、スープに戻す。これに米を加えてから再び煮込み、全体的にとろみが出て米の形がくずれてきたらできあがり。クルトンとパセリを浮かべて召しあがれ。
（※　取り除いた野菜は、そのままでも手を加えてもおいしく食べられます）

DECEMBER は　12がつ。
クリスマスの　つきさ。
クリスマス・ツリーに　なって、
デコレーションを　つけて、
スープざらを　ぶらさげて、
１かい　メリー・クリスマス
２かい　メリー・クリスマス
メリー・
チキンスープ・
ライスいり。

協力　冨山房

手作り絵本
あまおとてれび
作・絵　田村冨紀子



雨の日に　であった　ふしぎな　おじいさん。

ふしぎな　ふねに　のって　ついた

ふしぎな　きしべの　ふしぎな　いえの　なかに

ふしぎな　てれびが　………

雨の日の　ふしぎな　ふしぎな　おはなし。

■絵本の作り方■

この絵本は左開きなので、物語の進行が本誌の他の部分とは逆になっています。組み立てないで読むときには、右ページ上段の左側、右側、下段の左側、右側　左ページ上段の左側……というふうに読んでいってください。（ただし、表紙部分は左右逆です）

また、切りとって折ったりはったりすれば、アルマジロ特製豆絵本「あまおとてれび」のできあがりです。

そのまま読んでもいいのですが、「あまおとてれび」のふしぎな世界を、小さな絵本にしてみませんか？

①まず、ページののど（とじてある方）から、絵本の部分を切りとる。いったん切りとってしまったら裏のページは読めなくなるので、先に読んでおいてくださいね。

②それぞれの絵柄の四隅にある線にそって、周りの色アミ部分を切り落とす。完成したときに絵本のフチに色がついていたらかっこ悪いから、きれいに、慎重に。ハサミよりもカッターと定規の方がよいですね。

③切りとった絵を、真ん中から、絵柄が内側になるように折り曲げる。組み合わせたときにズレると悲しいから、気合を入れて、きっちりと。なお、表紙は真ん中に4ミリほど背の部分がとってあるので、2回折り曲げること。

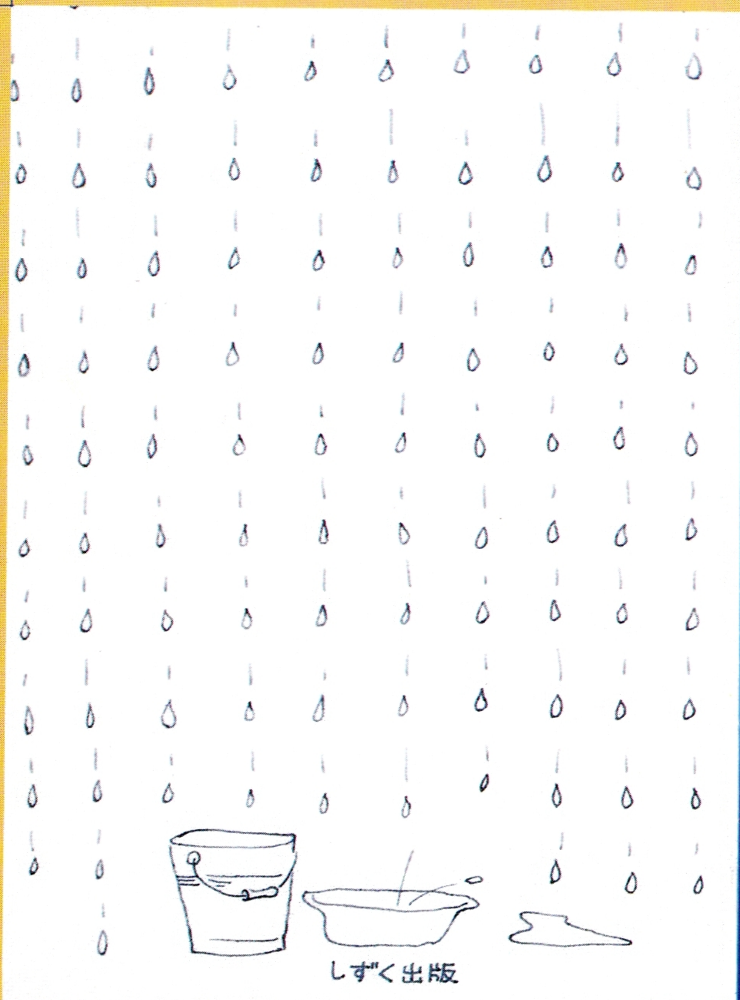
④表紙以外の絵柄をページ順にならべて、裏同士をくっつける。例えば、P1の裏とP2の裏、P3の裏とP4の裏、というように。のりのようなもので十分ですが、その場合は、のりの水分で紙が曲がってしまわないように注意。

⑤全部くっついたら次は表紙です。ページをすべて覆うように、外側からはりましょう。上下・前後を間違えるなんて人は、まさかいませんよね。

⑥これで一応完成ですが、さらにきちょうめんな人は、本の縁をきれいに削るともっときれいになります。業界用語で「化粧裁ち」といいます。

⑦あーら失敗しちゃった！　という人は、アルマジロをもう一冊買う。

このページで紹介する絵本を募集しています。詳しくはp.128をご覧ください。



あまおとてれび



裏表紙

表紙

見返し

P.1

雨おとてれび

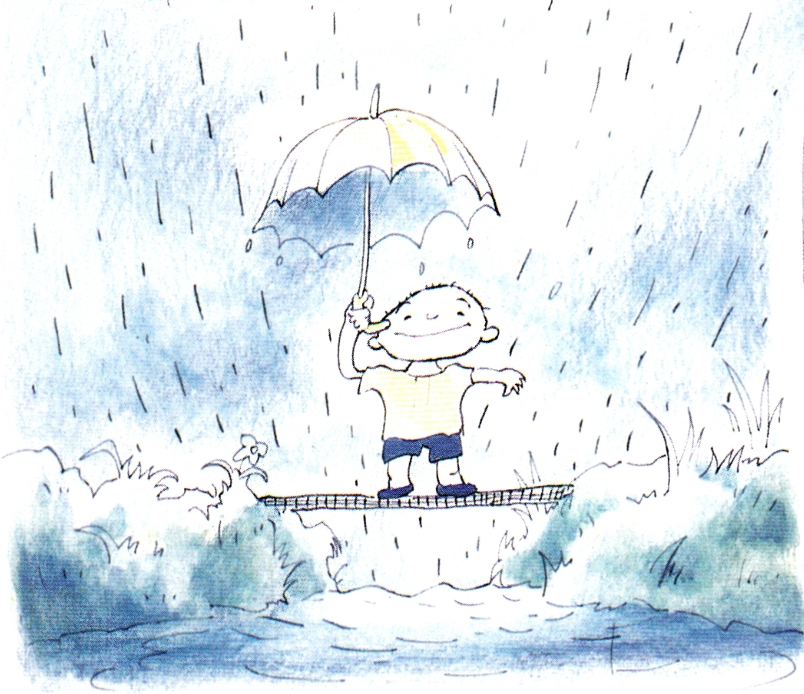
あま



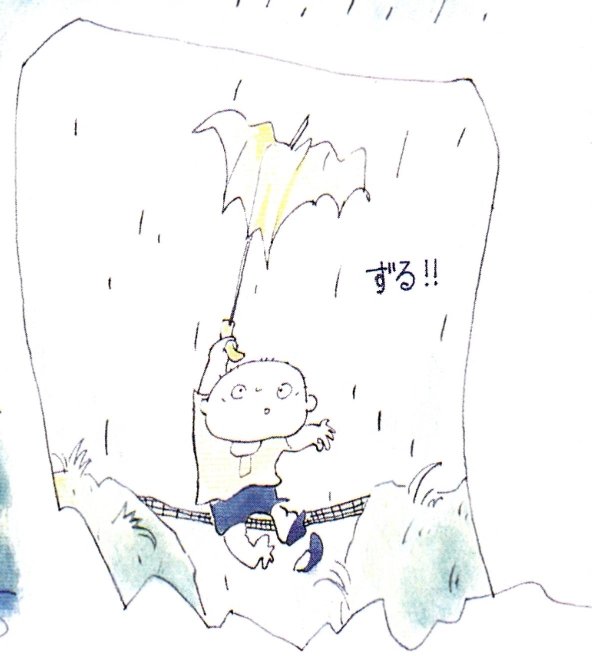
さく・え

たむら　ふきこ

あるひ ぼくは さんぽに でかけて



まわりは あめで いっぱい。



ずる!!

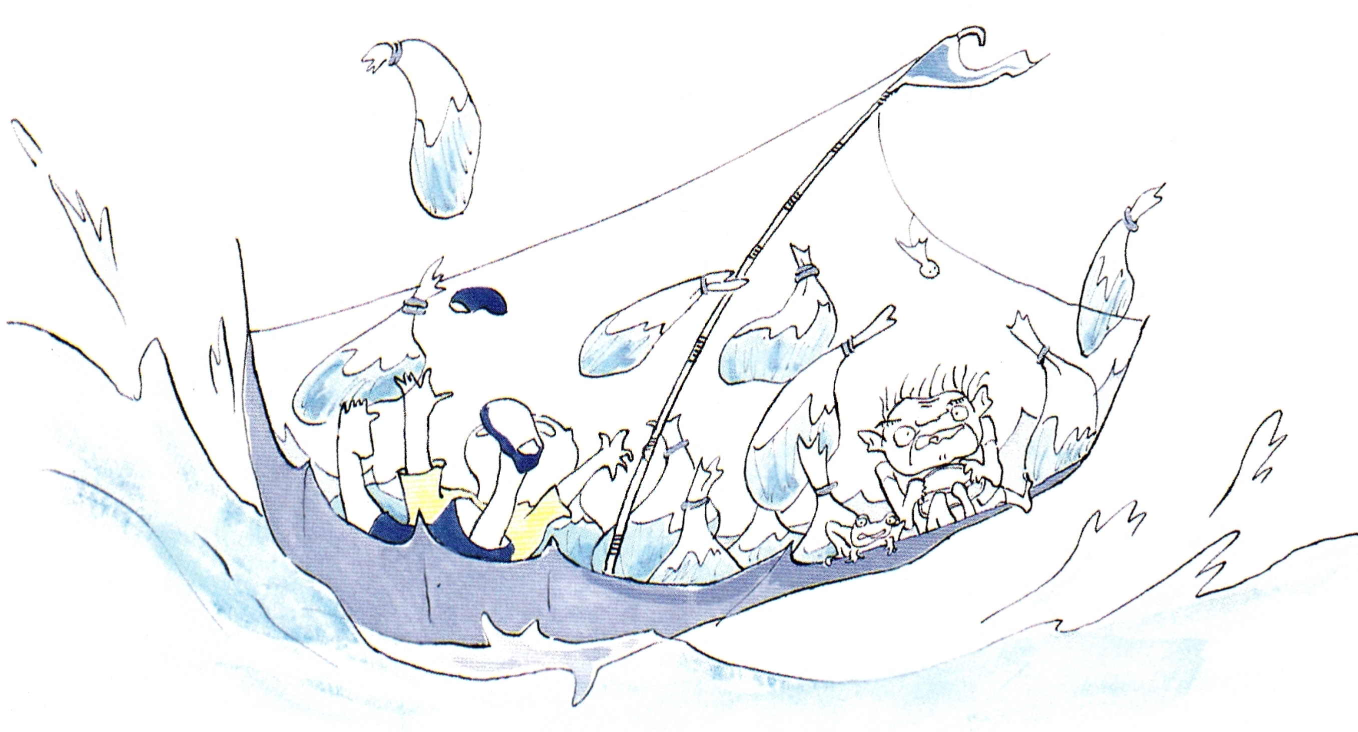
P.2 P.3

P.4 P.5

どっちゃーん.

ぴっちゃん。

おちた ところは へんな ふねの なかで
へんな おじいさんが ひとり。



INFORMATION

～公募案内からビデオ紹介まで～

その1

Jan	● ● ● ● ● ● 7 8 9 10 11 12 ⑬ 14 ⑮ 16 17 18 19 ⑳ 21 22 23 24 25 26 ㉗ 28 29 30 31
Feb	1 2 ③ 4 5 6 7 8 9 ⑩ ⑪ 12 13 14 15 16 ⑰ 18 19 20 21 22 23 ㉔ 25 26 27 28 ● ● ●
Mar	1 2 ③ 4 5 6 7 8 9 ⑩ 11 12 13 14 15 16 ⑰ 18 19 20 ㉑ 22 23 ㉔ 25 26 27 28 29 30 ㉛
Apr	1 2 3 4 5 6 ⑦ ●

第2回坊ちゃん文学賞

▼応募先　〒790　愛媛県松山市二番町4の7の2　松山市企画管理部企画課　松山市「第2回坊ちゃん文学賞」実行委員会事務局宛

☎0899（48）6341

▼作品内容　斬新な作風の青春小説。未発表で筆者自身のオリジナルな作品に限る。

▼応募規定　400字詰原稿用紙100枚前後。同2枚程度のあらすじを添付。ワープロ原稿可。（但し400字詰で）表紙に題名、氏名、年齢、性別、職業、住所、電話番号を明記。筆名を使用する場合は本名も記入。原則として作品の返却は不可。

▼応募資格　不問

▼賞　大賞1編……200万円
佳作2編……50万円

▼主催　松山市「坊ちゃん文学賞」実行委員会

▼締切　'91年6月30日（当日消印有効）

▼発表　'91年10月、入賞者に直接通知

▼審査員　椎名誠　高橋源一郎
早坂暁　中沢新一

▼大賞および佳作受賞作品の著作権は松山市に帰属し、大賞受賞作品はブルータス誌上にて掲載。

リブラン
第3回「創作童話」募集

▼応募先及び問い合わせ

〒173　東京都板橋区大山町17の4　㈱リブラン企画部「創作童話」係

☎03（3972）0072

▼応募対象　中学生以上の方（但しプロは除きます）東京都・埼玉県に在住・在学・在勤の方

▼応募内容　幼児・小学生低学年が読める内容の童話。構成・時代・テーマなどは自由。未発表作品に限る。

▼応募方法　枚数は400字詰原稿用紙10枚以内。黒い鉛筆かインクなど濃い筆記用具を使用。ワープロ原稿も可。作品には表紙をつけ、郵便番号・住所・氏名（名前にはふりがなをつけ、未成年の方は保護者の氏名も併記ください）・年齢・性別・職業または学校名（学年）・電話番号を明記。以上をお書き添えの上、ご郵送ください。

▼賞および賞金

最優秀賞（1編）賞状・20万円・記念品

優秀賞（2編）賞状・8万円・記念品

佳作（5編）賞状・3万円・記念品

▼締切　'91年1月10日（当日消印有効）

▼発表　'91年3月上旬、応募者に直接通知

▼審査委員　筒井敬介　峠兵太
香山美子　リブラン創作童話選考委員会

▼入賞者の著作権・出版権は、㈱リブランに帰属。尚、応募作品はお返し致しません。

第12回月刊MOE童話大賞

▼応募先　〒162新宿区市ヶ谷砂土原町3の5　偕成社ビルMOE出版

▼作品内容　応募者の創作に限る（同人誌に発表した作品でも可）

▼読者対象　A……小学2年以下
B……小学3年以下

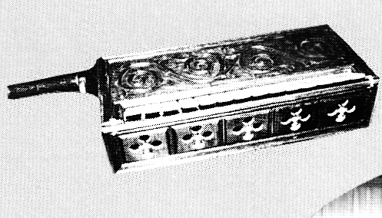
▼枚数　400字詰原稿用紙で。
A……30枚以内
B……100枚以内
（原稿の1枚目にA、Bの別を必ず記入すること。必ず縦書きのこと。ワープロ可）2編以上の応募可。
▼締切　'91年3月末日（当日消印有効）
▼賞　MOE童話大賞1編
30万円
MOE童話賞2編
10万円
他に選外佳作を選定することがある。
▼発表　月刊MOE'91年10月号誌上
▼応募資格　特に制限なし
▼出版化について　入賞作は、積極的に単行本化をはかる。尚、入賞作は、賞発表後3年間、MOE出版が出版の優先権を持つ。
▼応募方法　郵送。原稿の1枚目に以下のことをもれなく記入して下さい。住所・氏名・電話番号・年齢・勤務先（電話）・学生は学校名・学年・ABの区別。作品返却には応じられません。
▼選考委員　寺村輝夫　末吉暁子
西本鶏介　山下明生

古楽器を使ったファンタジックな音楽劇。音の夢と不思議を運びます。

「ロバの音楽座」公演スケジュール

1/20……東京都児童会館ホール（東京・渋谷）
2/14・2/15……会場未定（東京・調布）
2/20・2/21……小出郷福祉センターホール（新潟・小出）
2/22……新潟市公会堂（新潟市）
2/23……水原町公民館（新潟・水原）
2/24……会場未定（新潟市）
3/3……諏訪市駅前市民会館（長野・諏訪）
3/7〜3/10……会場未定（岐阜）
3/16……群馬県民会館（群馬・前橋）
3/17……中原市民会館（神奈川・川崎）
3/19〜3/26……会場未定（広島）
3/27……会場未定（愛媛・松山）
3/28……阿南市民会館（徳島・阿南）
3/29……会場未定（徳島・小松島）





◀中世の楽器、シンフォニア



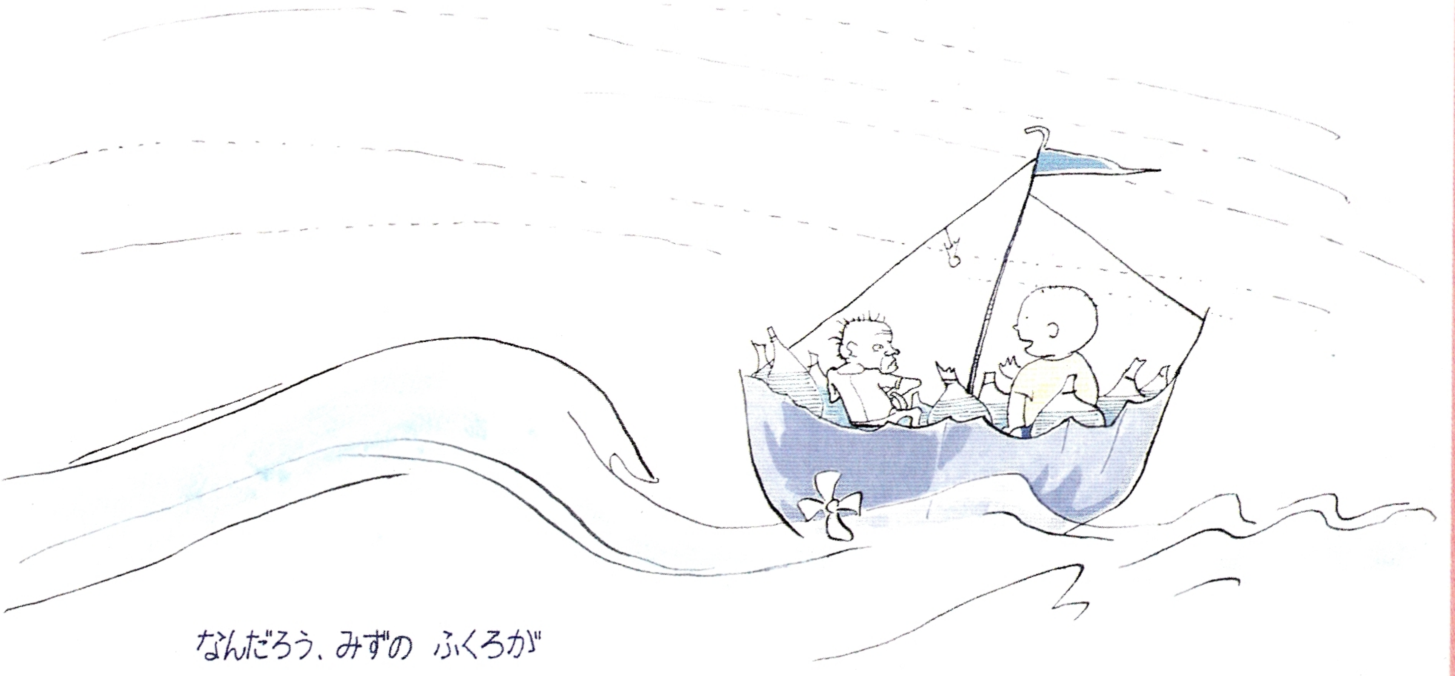
▶思わず、顔がほころぶ、ユニークなステージ。

詳しいことのお問い合わせは
〒190東京都立川市上砂町1の9の19　ニューノースNo.10
☎0425（36）7266
「ロバの音楽座」まで

元気のでる青春小説大募集
（長編エンターテイメント小説）

▼応募先　〒162新宿区市ヶ谷砂土原町3の5　偕成社ビルMOE出版長編小説係
▼作品内容　ティーンの女の子に読んでほしい、素敵な作品を。SF・ミステリー・ファンタジー・学園物などジャンルは問わない。ロマンスを織り込んだ「青春の起爆剤」という感じのもの。
▼応募資格　プロ・アマ問わず
▼締切　'91年1月末日（当日消印有効）
▼発表　締切日の4か月後に直接通知。入選作は単行本化し、規定の印税を支払う。原稿返却は不可。
▼選考　MOE出版編集部

◀140ページにつづきます。



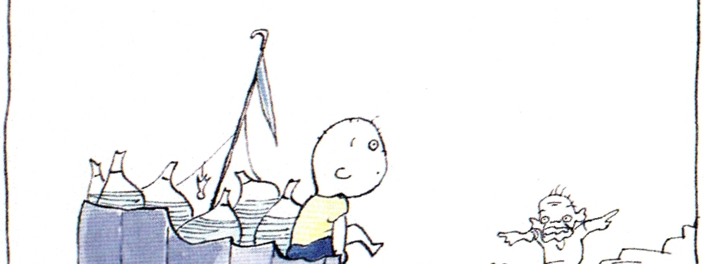
なんだろう、みずの　ふくろが
たくさん。

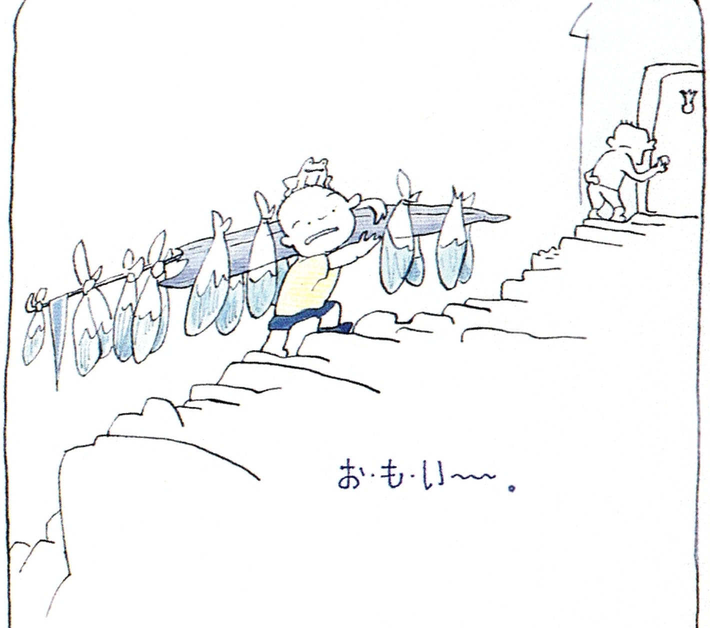
あのー、この　みず、どうするんですか。
みずじゃない、あめじゃわい。
おじいさんは　ぷんぷん。

P.6　　P.7

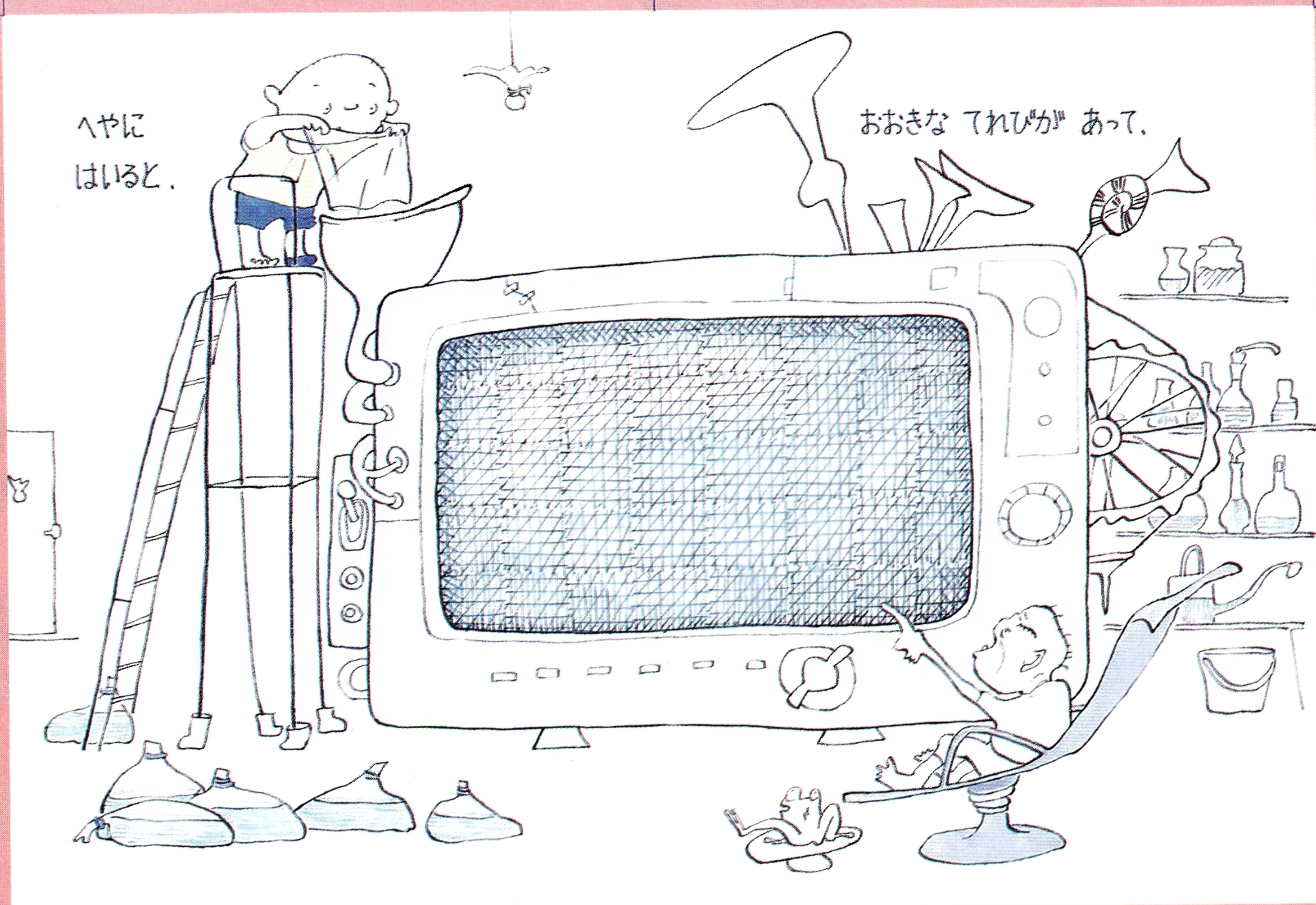
P.8　　P.9

しらない　きしべに　ついて



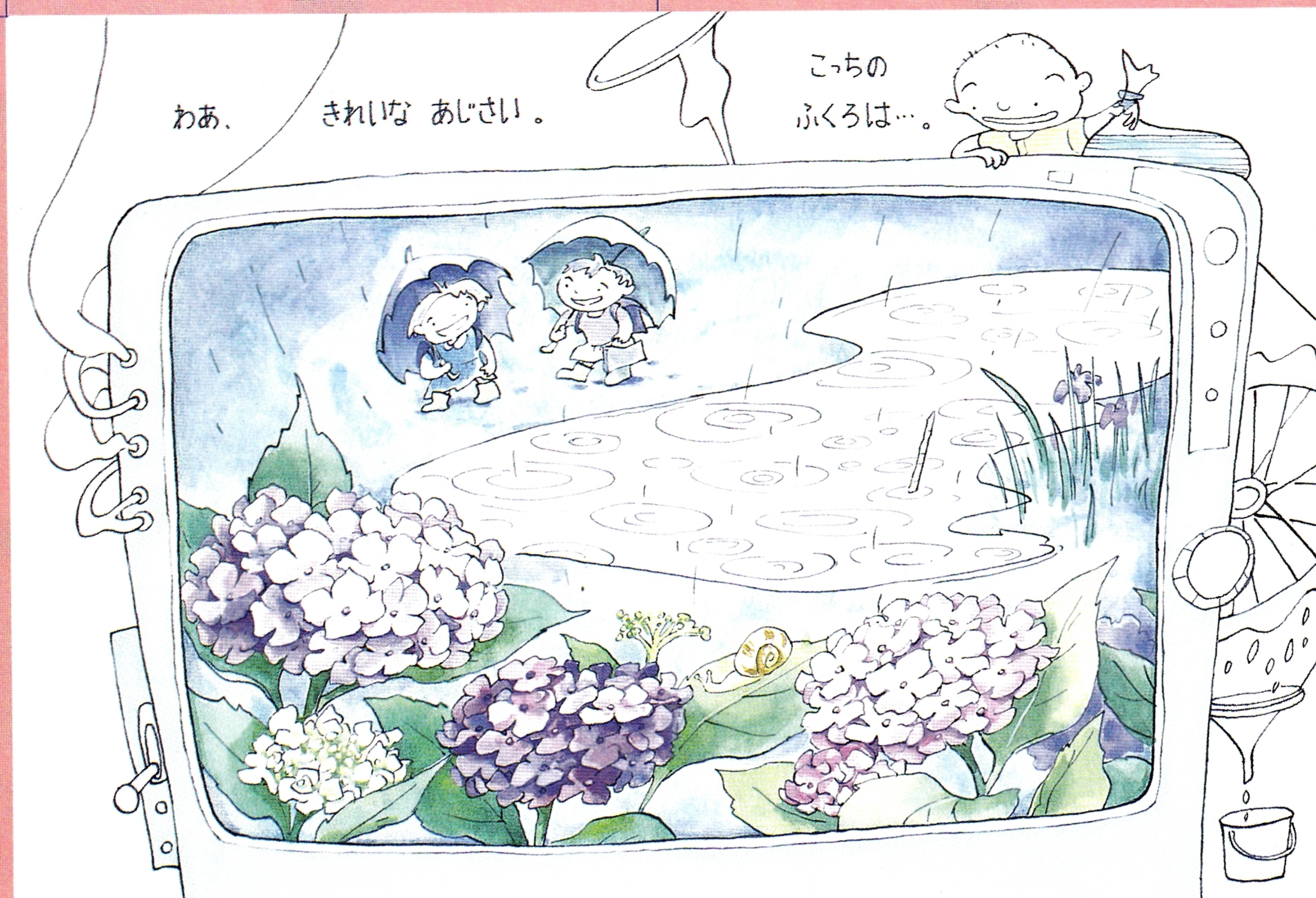


お・も・い〜〜。



P.10 P.11

P.12 P.13



INFORMATION その2

第2回コニカプラザ奨励賞

▼応募先　〒160東京都新宿区新宿3の24の2コニカプラザ内　コニカプラザ奨励賞事務局
☎03（3225）5001

▼応募内容　コニカプラザ奨励賞の応募者を募集。ジャンルは自由。

　コニカプラザ奨励賞は従来の写真コンクールではなく、新人写真家の新しい創作意欲を奨励。技術・表現の優れた写真家を援助し、写真文化の育成を目的として開催。

▼応募規定　①所定の応募用紙
②1000字以内の新しい創作意図を書いたもの（A4判縦書き）
③2年以内に制作した四ツ切以下のプリントまたはカラースライド作品30点。
①～③を郵送または持参。

▼応募用紙　電話または葉書で事務局に請求（コニカプラザでも配布）

▼応募資格　個人の写真家。応募したテーマにより、全紙サイズ以上の写真100点以上を制作し、'92年5月中にコニカプラザ（東京）で発表写真展（個展）を開催できる人。

▼賞　奨励賞1点……500万円

▼主催　コニカ

▼締切　'91年2月28日

▼発表　5月中旬、入賞者に直接通知

▼発表写真展の開催に関するプリントの作製・案内葉書・会場の設営等運営費用はコニカプラザが負担します。



イラスト／川瀬裕子

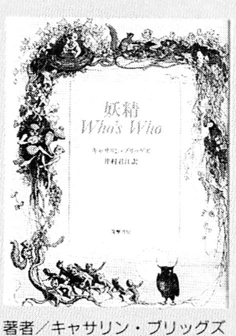
ちょこっと気になるBOOKたち

「妖精」

〝妖精〟という言葉からは、ふわふわと現実離れした物語の世界を思い浮かべる人が少なくないでしょう。しかし、この本は、民俗学に基づいた、なんと〝妖精学〟なるものによって書かれました。

著者であるキャサリン・ブリッグズ女史は、英国の民俗学者。妖精について細かく述べているだけでなく、長く語り継がれてきた妖精にまつわる物語も豊富に集めています。

主にブリテン島の妖精たちが中心になっており、その種類は驚くことに一〇一種類にものぼります。モノクロのさし絵も非常に美しく、さながら〝妖精の図説〟といったところ。ページをめくりながら、実は自分のそばに存在するかもしれない妖精たちに思いをはせてみてはいかがですか？



著者／キャサリン・ブリッグズ
挿画／イヴォンヌ・ギルバート
訳者／井村君江
発行／筑摩書房　定価／2880円

「かぼちゃごよみ」

かぼちゃをテーマに油絵や銅版画を制作している川原田徹さんの、初の詩画集。12か月を、それぞれのかぼちゃで表現している絵は、いずれも不思議な雰囲気に満ち溢れています。そして、12の絵に谷川俊太郎さんがつけた詩は、そんな絵の印象をことさら強いものにしています。何度でもくり返して眺め、読むことのできる一冊。

子どもの絵本コーナーで見つけたこの本。ずっと気になっていたんですが、何を基準に○才向けの本……とかって決めるんでしょうねぇ。ちなみにこの本には〝小学校中級から〟と書いてありました。



絵／川原田 徹
詩／谷川俊太郎
発行／福音館書店
定価／1300円

第5回浜松市美術館版画大賞展

▼応募先　〒430静岡県浜松市松白町100の1　浜松美術館

☎0534（54）6801

▼作品内容　版画。2年以内に制作した未発表作品に限る。公募は、創作活動の一層の向上普及をはかるとともに県民の版画への関心を高めるために実施。

▼応募規定　大きさは自由。額装等陳列に必要な準備をすること。所定の応募票等（応募要項に付属）に必要事項を明記。応募点数1人2点以内。出品料無料。

▼応募要項　62円切手を同封の上応募先に請求

▼応募資格　静岡県内在住、出身者、静岡県内の小・中・高・大学を卒業した人も可。

▼賞　大賞1点……30万円

静岡新聞社賞1点…20万円

SBS静岡放送賞1点…20万円

奨励賞……2万円

大賞、静岡新聞社賞、SBS静岡放送賞受賞作品は買上とする。

▼主催　浜松美術館　ほか

▼搬入　'91年1月13日　10時〜18時

▼発表　1月中旬入賞者に直接通知

▼会期　2月8日〜27日

浜松美術館

✣

―展覧会のごあんない―

鹿児島市立美術館

1/25〜3/10…郷土作家にみる

水彩・素描展

1/4〜1/20…――愛と詩情を刻む――

中村晋也展

この他、各種展覧会を順次開催。尚、常設展も常時展示中。詳しいことのお問い合わせは

〒892鹿児島市城山町4の36

☎0992（24）3400　まで

（注：予定ですので中止・変更がある場合もあります）

ちょこっと気になるビデオたち

「やかまし村の子どもたち」「やかまし村の春・夏・秋・冬」

ご存じ、アストリッド・リンドグレーンの原作・脚本による、楽しい2本。あの、リサ、アンナ、ブリッタ、ラッセ、ボッセ、オッレの6人が、にぎやかにとびまわります。監督は「マイライフ・アズ・ア・ドッグ」で一躍脚光を浴び、アカデミー監督賞にもノミネートされたラッセ・ハルストレム。ストーリーの面白さはもちろんのこと、北欧の自然の美しさがこころにしみこんできます。アルマジロの読者なら、原作を読んでいるって人もきっとたくさんいるでしょう。だからあえて詳しい説明をのせるのはさけておこうと思います。

とにかく美しさと楽しさを兼ねそなえた本当に嬉しくなってしまうような作品です。もちろん家族みんなで楽しめます。



いずれも'86スウェーデン映画
監督／ラッセ・ハルストレム
定価／VHS、βともに各14,800円
株式会社アスミック

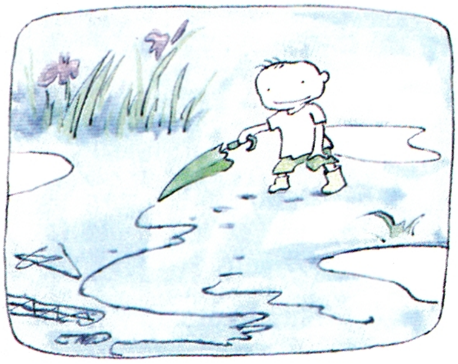
「フランスの思い出」

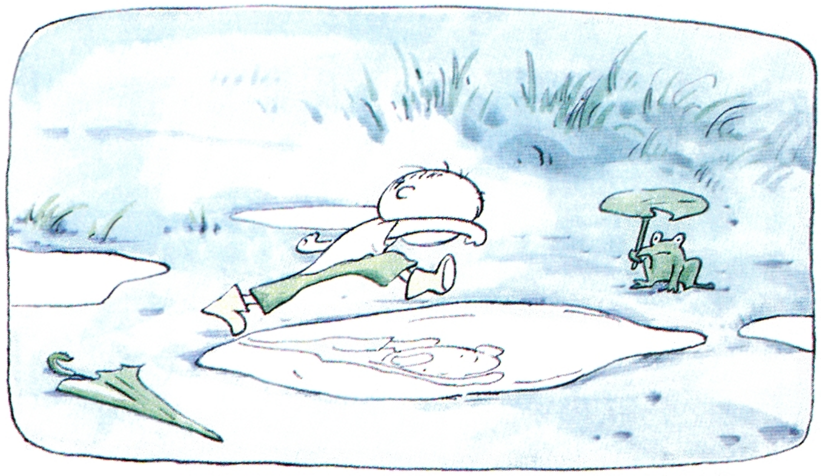
その名の通り、1950年代フランスの片田舎が舞台。不本意ながらも夏休みをそこで過ごすことになった都会育ちの少年ルイが、さまざまな人々との交流の中で成長してゆく……詳しいことは抜きにして、ざっとストーリーを紹介するとこんな感じ。美しい田園風景の中でいとなまれるどこにでもありそうな人間の生活や、それにともなう様々な感情に、あらためて人生とは何か、自分はどうやって大人になってきたのか、などと考えてみたりして……。

子ども向けと言うよりは、昔、あるいは少し前まで子どもだったという人におすすめしたい作品です。

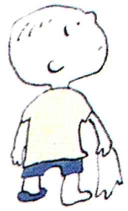


'87フランス映画
監督／ジャン・ルイ・ユベール
定価／VHS、βともに14,307円
東芝映像ソフト株式会社

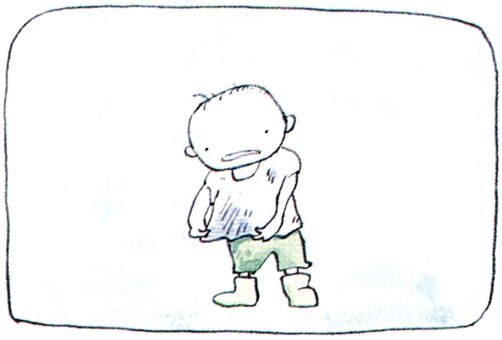




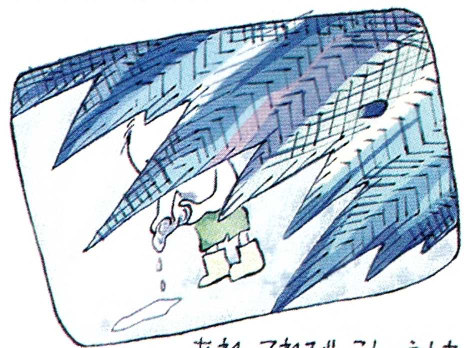
となりの
てっちゃんだ。



よーし、えいっ。



あーあ、よごしちゃって。



あれ、てれび こしょうしたかな。

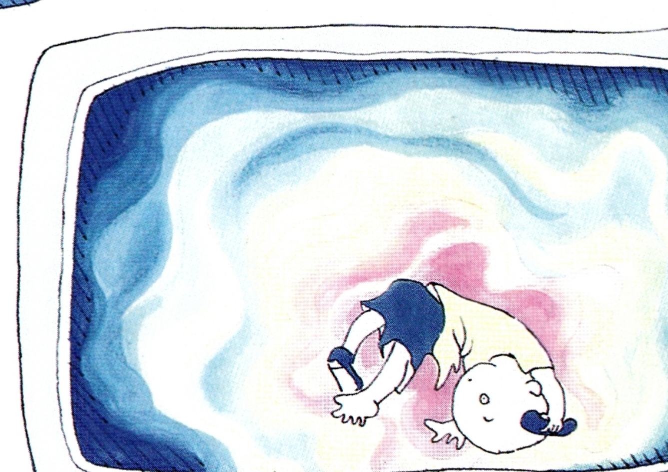
P.14　P.15

P.16　P.17



あ、ぼくのくつ。こんなとこに はいりこんでた。

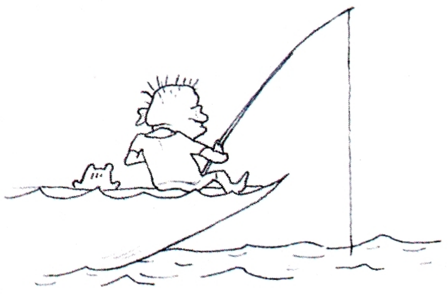
!???





P.18　P.19

P.20　P.21



あまおとてれび

1989年７月12日発行
著者　田村冨紀子
発行　しずく出版
〒101東京都千代田区神田神保町
１—15 内山ビル ㈱ナート
アルマジロ編集部内
電話　03(3295)6110

著者紹介

長野県出身、横浜市戸塚区在住。1989年夏、区主催の絵本教室で古川日出夫先生の指導のもと、この本を作ったのが絵本初体験。当時お腹の中にいた長男・悟君も今や１歳２か月、早くもわんぱく坊主の才能を発揮し始めて可愛いかぎりです。



中国の民話

中国東北部、満族に伝わるおはなし

訳・西田嘉(よみ)子
絵・伊藤かおり

天の池

大むかしのことです。中国吉林省にある長白山は、決まって毎年七月十五日になると、むくむくと噴煙を噴き出しはじめます。天を突く火柱が立ち、噴火が始まると八十一日の間それが続くのです。やがて噴火が次第に下火になり、噴煙も流れる雲のように消え去ってしまっても、木も花も草も山は残らず焼けはててしまい、鳥も野生の動物もことごとく死に絶えるのです。麓(ふもと)に住んでいる村人も、仕方がないので他の場所に引っ越して行きました。

長白山はなぜ毎年噴火したのでしょう。また、それがどうして消滅したのでしょうか、それを知るためには「天の池」の物語をお話しなければなりません。

あるところに、火だけを専門に食べる妖怪がいました。この妖怪、火悪魔は、あちこち歩きまわっては、いろんな火を食べていました。

この年、火悪魔は長白山にやって来て、天の稲妻を食べたので空から一雫(ひとしずく)の雨も降らなくなりました。そして野原や山の野火を食べてしまったので、急に寒くなりました。また、火悪魔が民家の火の気を食べてしまったので、煮炊きして食べることができなくなった多くの農民は、飢えと寒さで凍え死んでしまいました。

生き残った農民たちは火悪魔をたいへん恨み、みんなで決起して火悪魔の最も恐れている、雪と氷の球でやっつけることにしました。村人総出で火悪魔を追いつめ、死に物狂いで逃げようとする火悪

魔を鍬（くわ）やツルハシを持っておさえつけ、長白山に数百メートルもの深い穴を掘って埋めてしまいました。

　しかし、火悪魔は死にませんでした。深い穴に埋められた火悪魔は、地下にあるたくさんの地中の火をたべました。そして村人への仕返しに、毎年地下に埋められた日、即ち七月十五日に山の峰に大きな口をあけて、一年間に食べた地下の火を全部吐き出すのです。

　それは当然大火となります。大火は山林、草花、鳥、野獣、そして牛も羊も田畑も、村人の家も八十一日間に焼き尽くしてしまいます。そして、すっかり火も煙も吐き出してしまうとやがて収まるのですが、翌年も、そのまた翌年も同じことを繰り返すのです。

　そのうち、長白山はすっかり禿（はげ）山になり、かつては山にあふれていた生き物も、すべて絶滅して死の山となってしまいました。麓の村の人々もみんな、遠い所に移り住みました。

　ある年の春、領主は部族全員を集めて、なんとか長白山を元のようにできないものかと、相談しました。すると杜鵑花（トケンカ）と言う娘が名乗り出て、

「私たちの宝の山を取り返すために、神様に火悪魔を消してくれるようにお願いしましょう」

と言って、神様にお願いするために一人で旅立とうとしました。

　みんなは彼女の考えには賛成しましたが、若い娘である杜鵑花の身を心配して、たいそうすぐれた馬を彼女に与え、つつじの花をおくりました。杜鵑花は美しいつつじの花を受けとり、駿馬（しゅんめ）にまたがって旅立ちました。

　彼女は幾日も駆け続けて、風の神様が住んでいる高い山の頂上にきました。

　そこで風の神を伏し拝み

「どうぞ私たちをお助けください。長白山の大火を吹き消してください」

と、お願いしました。風神は彼女の願いを快く引き受けてくれました。風の神様は火悪魔が火を吐き出す日になると、長白山の上で山も地も揺れ動く大風を吹かせました。しかし、燃え盛った火は風で吹き消すことはできません。かえって火はますます大きく燃え盛りました。

　風神は疲れ切ってあえぎながら言いました。

「だめ！　だめ！　娘さん、雨神にお願いしなさい」

　杜鵑花はこれでくじけたりしませんでした。彼女はまた駿馬にまたがり大海に向かって駆け続け、雨の神様に会いました。

　杜鵑花は、

「私たちを救ってください。長白山の火を水で消してください。」

と懇願しました。雨神は彼女の願いに応えて、翌年の火悪魔の噴火の日に、ざあざあと空からあふれるような大雨を降らせました。しかし、その雨も、火にとどくと霧になって飛び去ってしまい、火はやはりますます盛んに燃え広がりました。

　雨神は言いました。

「だめだ！　だめだ！　娘さん。雪神のところへ行って助けてもらいなさい」

　杜鵑花はこれでやめる訳にはいきません。翌年の春になると、彼女はまた駿馬に鞭打ち、西北にある大氷山に向かって駆けました。

　そこで彼女は雪神に会い、額（ひたい）を地につけて

「どうぞ私たちをお助けください。雪で長白山の大火を凍らせて消



してください」

と、お願いしました。雪神も快く二つ返事で引き受けてくれました。

そして、その年の噴火の日、長白山に大雪を降らせてくれました。

しかし、その大雪も長白山に降るはしから溶けてしまい、消すことができず、火はますます燃え盛るのでした。

「娘さんだめです。別の神に助けてもらいなさい」

と、雪神は言いました。

力を尽くして走りまわったのに、火悪魔をやっつけることができず、さすがに気丈な杜鵑花も悲しくて胸が痛みました。領主や彼女の村の人々、そしてお父さんお母さんに、なんと説明したらよいかと思うと涙が流れました。

それでも杜鵑花は諦（あきら）めず、また、あちこち、火を消し、火悪魔を滅ぼしてくれる神様をさがしてまわりました。

そんなある日、彼女は湖のほとりで一羽の大白鳥に会いました。

杜鵑花は馬からおりて言いました。

「白鳥さん、あなたのそのりっぱな羽を貸していただけませんか。私は空を翔んで天庭に行き、天帝に長白山の火悪魔を退治してくださるようにお願いしたいのです」

大白鳥はすぐに自分の羽を杜鵑花に貸してくれました。彼女はその羽で、急ぎ天庭に向かって翔び立ちました。昼も夜も、どれほど翔び続けたでしょうか、何層かの雲や霧を翔び越えて、ついに天庭に辿（たど）り着きました。そして天帝に会うことができました。杜鵑花が天帝の前にひざまづいて、

「天帝様、私たちをお救いください。なにとぞ長白山の火悪魔を退治してください」

と、伏して願いますと、天帝は

「お前には自分で火悪魔を退治できる腕があるはずだ」

と、言いました。

それを聞いて杜鵑花はたいへん喜び、生き生きとして言いました。

「もしも私に本当にそのようなことのできる腕があるのならば、ぜひ、その力を使いましょう」

「お前が自ら進んで命を捨てさえすれば、火悪魔を退治することが

できるのだ」

天帝の言葉に杜鵑花はためらわず、即座に答えました。

「私が命を捨てることなどなんでもありません。それで火悪魔を滅ぼせるのなら、心から願うことです」

「それは立派な心がけである。では、私はお前にこの世で最も冷たい氷の塊をあげよう。お前は火悪魔が大口を開けて火を噴く時を待って、咄嗟に火悪魔の腹の中に潜り込み、この氷の塊で火悪魔の心臓を凍えさせてしまうのだ。そうすれば火悪魔を退治できるし、恐るべき大火も消すことができるであろう」

と、天帝は火悪魔の退治方法をすべて杜鵑花に話してくれました。

杜鵑花は天帝に感謝の礼を言って氷の塊をしっかりと抱えると、天庭を後にしました。

杜鵑花が地上に近づくと、おりしも七月十五日、長白山の頂きから、火悪魔の出す煙がむくむくと噴き出ているところでした。続いて火悪魔が大きな口を開け、炎を高く高く天を突いて噴きだしたので、辺りはその炎で燃え盛りだしました。

杜鵑花は急いでその大口に向かって近づいていきました。けむたくて目は開けていられず、炎で彼女の髪はちりちりと焼けました。彼女はそんなことは物ともせず、「今だ！」と力いっぱい頭から火口にとび込み、火悪魔の腹の中に潜りました。と、同時に天は裂け地は崩れるばかりの轟音がしたかと思うと、火は消え、山は崩れ落ちました。

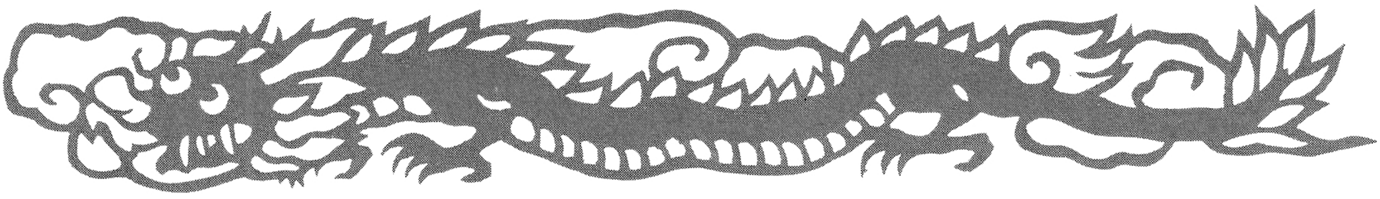
いつの間にか、風神が来て煙を吹き散らし、雨神が来て噴火口に大雨を降らせました。雪神もやって来て真っ赤に焼けた山肌を冷やしました。



こうして長白山はもとの姿になりましたが、山頂の火悪魔の口には水がたまって大きな池ができました。人々は杜鵑花を偲んで池の名を「天の池」としました。

さて、杜鵑花の運命はどうなったでしょう。彼女は死んではいませんでした。彼女は火悪魔を退治した後、再び天庭に翔び、天帝に感謝の言葉をのべました。天帝は彼女のおこないに感動し、王母と相談して、王母の娘として仙女にしました。その時、王母には娘である六人の仙女がいましたので、杜鵑花は七人目の仙女となったわけです。

しかし、彼女は天庭で暮らしてはいるものの、心はいつも下界に





ありました。毎年七月十五日の深夜になると、彼女は六人の仙女を連れて、雲や霧の駕籠に乗り長白山に降りて来て、あの天の池で水浴びをしていたということです。

ある年の七月十五日、七人の仙女が天の池で水浴びをしているのを、一人の狩人が見つけました。彼が木立の間からよくよく見ると、その仙女の中に確かに杜鵑花がいます。彼は大喜びで急いで山を下り、村人にそのことを話しました。そこで村では大騒ぎとなり、村中の老若男女、子供までがたいまつを山中に明々とかかげ天の池に急いで登りました。彼らは、別れて久しい杜鵑花に会って、昔のように長白山の村に住んでくれるように引き止めよう、と思っていたのでした。しかし、村人が天の池に着いた時そこに見たのは、池のさざ波に浮いている一束の美しい花と珍しい野草でした。

七人の仙女たちは山一面のたいまつの明りと人々の呼び声を聞いて、急いで身づくろいをして天庭に舞い上がってしまったのでした。

それから後、王母は天宮の秘密がもれることを恐れて、七人の仙女が再び天の池に行くことを許しませんでした。

杜鵑花は長白山と村人、親兄妹を懐かしんで、長白山一帯にたくさんの種を蒔きました。この種が芽を出し、育って、たいへん多くの珍しい薬草となり、千年も万年も人々を災害や病から守ったということです。

杜鵑花（トケンカ）＝さつき、中国産ツツジの一種。アザレア
天池＝吉林省長白山主峰付近白頭山の火口湖
王母＝伝説上の仙女

—おわり—

柳の物語

むかしむかし、ずーっとむかし、山の斜面に一本の大きな柳の木がありました。

この柳の根本には、涌き水による深い淵があって、お天気の良い晴れた日にはその柳を水面に映して絵のように美しく、その水でのどをうるおすと、なんとおいしいこと、甘露甘露と深く人の心の中までしみこんで、感動を与えるのです。空を飛ぶ鳥も、地上の動物たちも、よくここに集まってきます。そしてお互いにゆずり合って、たいそう仲良くお付き合いをするのです。

しかし、そんな平和を乱すと、どうなるでしょう。これは、そんないたずらをした柳の話です。

ある日、まだらの大虎が水を飲みにやって来ました。大きな柳の木は腰をかがめて

「虎のお兄さん、虎のお兄さん！　あなたは向かうところ敵なしで突進できるので、山に住んでいる鳥やけだものたちはみんな、虎さんは勇敢だって感服してますよ。そうですか？」

「その通り、かれらは、みんな、わしの言う通り服従し、わしに号令をまかせ、わしを山の王として推し立てるのだ」

「あなたの言うことを聞かないで服従しないとか、号令に従わないとか、そんなものはいないですか」

「そんな奴がいたら、ひとのみにしてしまうよ」

「大蛇ものめますか？」

「大蛇がなんだい、あの肉は白くてきれいで、やわらかくて上等。一口食べたらもう、うまくて、うまくてやめられないさ」

「そうおっしゃるなら、大蛇を相手にしても大丈夫ですね。それならなぜ大蛇を見るとすぐ隠れるのですか」

「えっ！　わしが大蛇を見るとかくれるって？　そ、そんなこと誰がいったのか」

虎は目をつり上げて、鼻息があらくなり、柳の木をにらみつけました。

「おや？　これは私に関係ないですよ。大蛇が自分で言ったんですから…。あんたが信じないならそれでいい。私はもうなにも言いません」

「大蛇が自分で言ったって、それはないだろう」

「私はこの耳で聞いたのです。誓いますよ、一言もうそは言ってません」

それを聞くやいなや、虎は大声でほえたので、山全体が三度震えました。

しばらくすると、大蛇が水を飲みに来ました。大きな柳の木は、今度は大蛇に話しかけました。

「蛇の姉さん、蛇の姉さん！　あなたの身体の花柄はたいへんきれいですね。あなたの口にある毒牙は、まるで二本の宝の弓矢のようですね。多くの鳥たち、そして山の動物もみんな、あなたに服従してますね。ほんとに立派、威厳がありますよ」

大蛇はそれを聞くと、にこにことうれしそうに言いました。

「そのとおりです。みんなは私のことを山の女王としてうらやみな



がら、誇りにし、また私をおそれています」
「みんなそうですか」
「もしそうでなかったら」
「私の毒牙ですぐかんでころしますよ」
「黒い虎でもあなたはかみますか」
「黒い虎がなんですか。あれの骨は、とても味が良いのです。あれを食べると節節の痛みがなおりますよ」
「だけどみんなはこういってますよ。あなたは虎を見ると、こっそり逃げるって…。どうしてですか」
「私が虎を見ると、こっそり逃げ出すですって？　誰ですか、そんなことを言ってるのは？」
大蛇はぷりぷり怒っています。
「虎が自分で言っていますよ」
「虎が自分で言っているって、私は信じない」
「これは本当です、私がもしあなたにうそを言ったら、腹が腐って穴があき、子々孫々不幸になります」
大蛇はそれを聞くと、いきなり毒牙の口を大きくあけ、黒いひげを動かしながら、ずるずるっと飲んだり吐いたり、なにやらいかにも毒汁を噴き出しているようでした。
そうしていく日がたったある日のこと、泉のほとりで蛇と虎が出会いました。虎は荒々しい太い尾を振り上げ、まっ赤な、耳まで裂けそうな大口をあけておどかしましたし、大蛇は鎌のように首筋を支え、丸い目をむいてじろりとにらみつけています。
「わしがいつお前を見て隠れたか」
虎が言うと、
「私がいつ、あんたを見てこそこそ逃げましたか」
と、大蛇も負けずに言いかえしました。
その言葉も聞きおわらぬうちに虎は、さっ！　と蛇にとびかかり、両方の前足の大きな爪を立てて、力いっぱい必死で大蛇の喉をおさえました。大蛇も負けてはいません、一瞬息を止めたかと思うと、長い太い身体を振りまわし、虎の腰にぐるぐるっとまきつけました。両者とも全力を出して苦闘すること七日七夜、ついに力を出しつくして、どちらも地面にばったり倒れました。
この時、一部始終を目の前で見ていた柳の木は、うれしくって、

がまんしきれず、大声で叫びました。
「あーあ！　ほんとにおもしろかった。とても楽しかった！」
　かすかに息をしていた虎と大蛇は、柳の木の声を聞いて、だまされたと気がつきましたがあとのまつり、もう間に合いません。
　このとき、一人の狩人が来て、虎と大蛇をしとめました。そして薪（たきぎ）を拾い集めて来ました。
　竜虎斗（ロオンフウトウ）（蛇と虎の肉の料理）を作って食べようというわけです。それで柳の木の下で火を燃やしはじめました。その火はどんどん燃え盛り、柳の木の皮が焦（こ）げはじめ、幹もあぶられ、柳は全身が痛くて今にも裂けそうです。柳はもう堪（こら）えきれなくなって叫びました。
「おねがい！　おねがい！　もう焼かないで！　焼かないで！　早く火を消して！　ああ…」
　柳の叫びにもかかわらず、狩人は火を燃やし続けました。
　そうです、狩人には柳の叫び声は聞こえませんからね。火がやっと消えたあと、大きな柳の木は頭をだらりと下げ、そして枝も葉も垂れ下がり、風に吹かれ、雨に打たれ、とうとう曲がった腰がくさって大きな穴があきました。
　これがいじわる柳の物語です。柳はうそを言って両方をひっかきまわし、おとしいれました。その結果、自分にも不幸がふりかかってきてしまいましたね。
　それからは柳の木は腰をまげて、枝も葉もだらりと垂れて背すじがのびなくなりましたが、優しく涼しい風をおくってくれるようになりました。

—おわり—



玉杯物語

むかしむかしの話ですが、一人の歳を取った母親がいました。この母親は、生涯にただ一人だけ、男の子をもうけました。その子は元気に成長しましたが、その顔はとても醜(みにく)くて、二度と見られないほどでした。とはいえ、醜いとは言うもののそれは顔のことにすぎず、この若者に歌を歌わせれば、どんな調子の歌であろうとお望み通り歌います。それで、この若者は歌を歌って母親を養って暮らしていました。つまり流しの芸人というわけです。

ある日、彼は家からあまり遠くない堡子(バオズ)の中で歌っていました。その堡子には、歌の好きな黄娥(オウガ)と言う名のお嬢さんがいました。黄娥は、窓の外から聞こえてくる歌声があまりにも良い声なので、召使の小娘を呼んで

「すぐにあの歌い手を呼んで来なさい。あの人の声はとても良い声ですよ」

と言いました。小娘は小走りに若者のところへ行って言いました。

「もしもし、お願いします。うちのお嬢さんがあなたをお呼びです。私どもの家へ来て、歌って頂きたいのですが」

若者は、小娘の声にふりむいて

「私をですか?」

と、言うと、呼ばれたうれしさに、心も浮き浮きと大またで小娘について行きました。

庭を通り抜けると、小娘が部屋の戸を開けました。

「あれーっ!」

ひと目、彼を見たお嬢さんが、とたんに悲鳴をあげました。

「早くその人を外に出しなさい! びっくりするじゃないの。早く早く!」

歌うたいの若者は、片足は戸の内、もう片方は戸の外側に出したまま、ぼーっとして動けなくなりました。彼は彼でおどろいたのです。

彼は村々を歩き、いたるところで歌って来ましたが、五万といる年頃の娘の中にも、こんな美しい娘さんは見たことがありません。彼は、もう一度娘さんを見たいと思いましたが、小娘が強引に追い出すのでやむなく出て行きました。



それからというもの、この醜い若者は朝から晩まで黄娥のことを想うようになりました。そんな日がつづいて、とうとう若者は病気になってしまいました。

彼の母親は、息子がぼーっとして気力のないのを見て、医者を呼んで診てもらわなくてはと、思いました。すると若者は母親の手を引きとめて言いました。

「母さん、おらの病気は、どんな医者に診てもらっても治りません。どんな薬も役に立ちません。おらはあの娘さんを見てからというもの、日も夜も想い焦がれ忘れることができません」

「えぇーっ！　お前は恋の病気なのか、自分たちより身分の高い人たちとつき合おうなんて、そんな無駄なことを考えて、なんということかい、この馬鹿息子！」

と、つばをとばして怒りました。

息子は、

「母さん、おらの目はもうすぐ見えなくなる。目の見えるうちにあの娘さんにもう一度会いたい。お願いだ、呼んで来てもらえまいか」

と、うっすらと目を開けて頼みました。

歳を取った母親は、これはとても恥ずかしいし、むずかしいことだと思いましたが、行かなければ息子は死ぬかもしれません。このままでは哀れだと思い、ためらいながら出かけました。

黄娥はその日、楽しいこともなく、一日中ふさぎこんで夕方になりました。そうしていると、ふいに門があいて、ぼろぼろの服を着たお婆さんが入って来ました。

「お婆さん、おまえさんはどこから来たの？」

歳を取った母親は（私の息子がお嬢さんのことを想い、死にぎわに一目会いたいと言ってますので…）と本当のことを話すつもりで来ましたが、どうしても言えません。

「はあー」

と言ったきり下を向いてたたずんでいると、黄娥はこの老婆は、なにか言いにくい話があるらしいと見て

「お婆さん、心配しなくていいから、言いたいことをかまわず言ってごらんなさい」と言いました。

母親は、そっと顔を上げ、この娘さんは物わかりのいい人だと思い、ほっとため息をついて言いました。

「お嬢さん、私には一人の息子がいます。」

「あなたの息子さんがどうしました」

「私の息子は、ほかのことはなにもできませんが、歌はとびきり上手です」

「歌がどうかしましたか？」

「先日、お嬢さんによばれて、お宅にうかがいました。お嬢さんが息子の歌を聞きたいとおっしゃって……」

ここまで話しても黄娥には、まだ、なんのことかわかりません。心の中でつぶやきました。まさか、私は彼の歌を聞かなかったが、他になにか落度があったのか、そしてこのお婆さんが私を訪ねて来たのはなんなのか？

「お嬢さん聞いてくださるかの、うちの息子は、あの日家に帰ってからずっとオンドルの上に臥せたまま、もう何日も水も飲まず、ご飯も食べません。このままだとおそらく良くはなりません。お願いです。この老婆に免じて一目会ってやってはもらえませんか」

黄娥は老婆の話を聞いて、しばらくためらいましたが、やがて考



えを決めました。そして小娘を連れてお婆さんについて若者の粗末な家にやってきました。

　息子はオンドルの上で、頭からふとんをかぶって寝ていました。母親は、ふとんをめくって目をつぶったままの息子に呼びかけました。

「せがれや！　目をさましなさい。あのお嬢さんが来ましたよ。早く早く目をあけなさい」

　しかし、どんなに呼びかけても若者はなにも答えません。母親はあせってオンドルの上にあがり、息子の体を持ち上げて、反対に上向きにしましたが、彼の目は閉じたまま動こうともしません。死んだ人と同じです。黄娥はしかたなく帰りました。それからいくらもたたない、黄娥がまだ家に着かない途中の頃、若者は気が付きました。

「母さん、あの人は来なかったの？」

　母親は目を醒ました息子を見て、せかせかと言いました。

「お前はさっき、どんなに呼んでも眠りこけて目を醒ましてくれないから、お嬢さんはただぽかんとして、しばらく待っていたけど今しがた帰りましたよ」

　若者は聞き終わると、深くため息をついて言いました。

「あーあ、おらはやっぱり彼女と縁がないのだ。おっ母さん、おらは目もつぶり、息もしなくなって、もうすぐ死ぬ。おらが死んだあと、一つおらの頼みを聞いてくれまいか」

「なんだね、言ってごらん」

「おらが死んだあと百日目、丁度、清明節の日におらの墓参りにいってください。そしておらの心臓を墓の中から取り出してください。これから先、必ず誰かがそれを買いに来ます。その人はかなりの代金を払うでしょう。母さんは、すぐにはそんなにたくさんのお金は要らないでしょうから、持っていて老後のお金に使ってください。母さん、けっして忘れないで覚えていてくださいよ」

　若者は、言ったかと思うと目を閉じて死んでしまいました。

　百日が過ぎ清明節の日が来ました。お婆さんは一人ぼっちで息子



のお墓参りに来ました。供え物をして手を合わせ、寂しくて、悲しくて、泣きました。泣いて泣いて、元気な頃の息子のことなど思いふけっていました。どれほどそうしていたでしょう、ふと気がつくと、お供え物をのせている石積が崩れているではありませんか。

「そうだった」と思って、両手で土をかき出して見ると、果たして本当にまっ赤な心臓がそこにありました。

お婆さんは、それをしっかり両手で抱えて家へ帰り、息子の心臓を見ては、またひとしきり泣きました。そして、さんざん泣いたあと、小さな布袋を縫い、その中に心臓を入れて軒下にかけておきました。

それからしばらくした、ある日のことです。その日もお婆さんは、部屋に一人ぽつんと座って、軒下の小さな袋を、見るともなしに見ながら、悲しみをかみしめていました。そこへ、表の門から二人の尋宝人が入ってくるなり、年かさの方の尋宝人が言いました。

「お婆さん。あの軒下の小袋を私に売るわけにいきませんか。私たちは、たとえどんな品物が入っていても、中身は問いません。売ってくれさえすればそれでよいのですが」

お婆さんは、その言葉を聞くと、一瞬気色ばんでどなりました。

「どんな物でもいいとは、なにを言うか！　あれは私の息子の心臓で他のものではありません！」

すると、先の尋宝人がまた言いまじた。

「あんたの息子さんの心臓でもなんでもいいから、あんた売るのか、売らないのかね」

お婆さんはそう言われて考えました。息子は私にお金がいるでしようと言った。そうだ、私はまだお金が必要だ。

そこで尋宝人にむかって言いました。

「あんた、銀二百両持って来なさい。それができないなら私はあそこにおいて眺めているよ」

老尋宝人は、なにも言わずに銭袋から銀二百両をつかみだしてお婆さんに渡すと、手を伸ばして軒下の小袋を取り、くるりと背を向けて行ってしまいました。

二人の尋宝人は、草ぼうぼうの人里はなれた野原に来ました。老尋宝人は、あたりを見まわして誰もいないのを確かめると、若い弟子に言いました。

「おい！　お前は山に行って薪を背負って来なさい」

若い弟子は腹立たしくてなりません。まず先生が二百両出して、小さな袋物を買った。今度は薪を拾いに行かせる。まったくおもしろくないのです。

そこで、少しむくれて言いました。

「先生、この暑いのに火に当たるのですか」





「行きなさいと言ったら行きなさい。私は使う用があるんだ」

若い弟子は、仕方なく山へ行きました。やがて、背にいっぱい薪を拾って来ました。

老尋宝人は、薪を、まるく囲むようにうまく並べ、あの小袋をつかんで真ん中におき、薪に火をつけました。火は風にのってどんどん燃え盛り、背負って来た薪は見る間に焼き尽くされました。

そのときです、「からん」と音がして火の中からなにかが飛び出しました。そして、ぽーんぽーんとあっちにとんだり、こっちにとんだり、とてもすばやいのです。老尋宝人はその跳んだり転がったりするものを追いかけて、やっとつかみました。手にして見ると、それはなんと一個の玉の杯でした。

あざやかな緑、すき通るように美しく光り輝いています。老尋宝人は妖しいまでに美しい玉杯を持って山を歩きました。そして、なだらかな山の斜面にテーブルのような平たい岩を見つけました。老尋宝人が、そっと玉杯を岩の上に置いて

「玉杯よ、玉杯よ。私は君の歌が聞きたい。一つ歌っておくれ」

と言うと、ああ、なんと言うことでしょう。この玉杯は人の言葉が分かるのです。岩のテーブルのまわりを歌いながらまわるのです。その歌のうまいこと、これ以上のものはありません。この時まで、しぶしぶ老先生のすることを見ていた弟子は、急に歓声をあげて

「わあ、これはなかなかよい。歌がとても上手だ。もっと聞きたい」

と、言いましたが、老尋宝人は、

「私たち二人で聞いていてはもったいない。また明日にしよう」

と言いきかせました。

翌日、二人はある街にやって来ました。老尋宝人はさっそくテーブルの上に玉杯を置いて言いました。

「玉杯よ、歌っておくれ」

すると、玉杯はすぐに歌い出しました。歌も歌声もよし、不思議な杯と、たちまち伝え広がり次つぎと人が集まって来て、たいへんな人だかりとなり、後の人は見えません。

二人の尋宝人は、玉杯を持って歌を歌わせては、お金を稼ぎました。あっと言う間に日がたって、稼いだのなんのって、ちょっと考えられないほどです。

そんなある日、二人は堡子の街に来ていました。

歌の好きなお嬢さん黄娥は、遠くからだんだん近づいて来る歌声を聞いて

「ねえや、流しの歌うたいを家に呼んできなさい」

「よろしいですよ。でもこの前のようなことでは私は嫌ですよ。お嬢さんは歌を聞くのでは無くて人を見るのでしょう。あとで悪いことをしたと心でわびて、お嬢さんと涙を流したくありませんよ」

「わかったわよ、早く行きなさい。私は今度は人を見ないで歌を聞きますよ」

小娘は、転がるように駆け出していき、二人の尋宝人を連れてきました。さっそくテーブルの上に玉杯を置き、歌をはじめました。

黄娥は、くるくるまわる玉杯の歌が素晴らしいので、たいへんな喜びようで

「お師匠さん、この玉杯を私に売りませんか、あなたは歌でお金を稼ぐのも、私に売ってお金にするのも、お金もうけになるでしょう。私は歌が大好きなので、暇な時にいつでも聞いて楽しみたいのです」

老尋宝人は、少しの間考えました。この玩具を手にしてから、かなり稼いだ。もう売っても損はないとそう考えました。

そこで老尋宝人はもったいぶって言いました。

「娘さん、本当にお入用でしたらお売りしましょう。銀二百両下さい」

黄娥はすぐに代金を払い玉杯を手にしました。黄娥は大切に玉杯を両手で持って、ためつすがめつ、つくづく眺め、充分見るとテーブルの上に置いて

「玉杯よ！　歌っておくれ、私は聞きます」

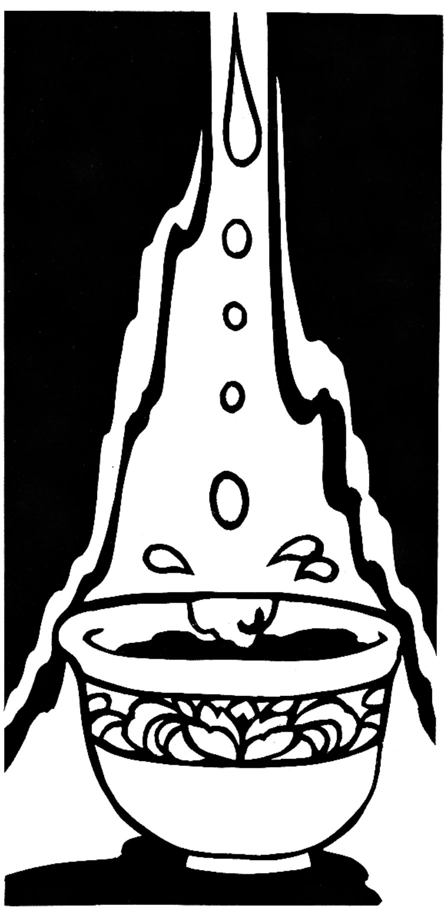
と声をかけると、おお！　玉杯はくるくるとまわりながら歌います。

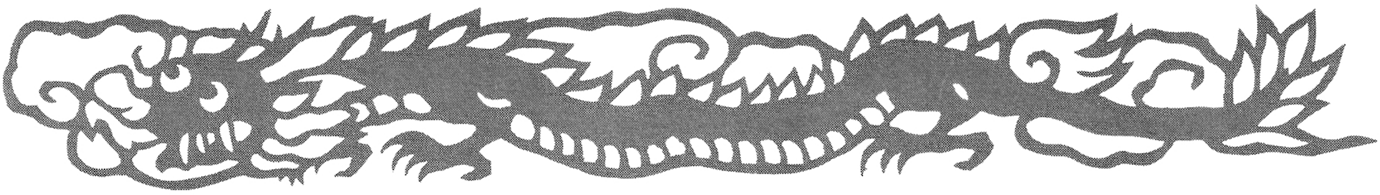
その歌声は、とてもはっきりしていてよく通るのです。黄娥は、オンドルの上に座ってテーブルにひじをついてあごをのせ、とろけるように聞き入っていました。

聞けば聞くほど、その歌声は、あの死んだ若者にそっくりな気がして、黄娥はだんだん悲しくなってきました。

あの若者の折角の愛情、若くして亡くした命、そして残された一人ぼっちのお婆さん。本当に胸の痛むことばかりと、心に深く思うのでした。そんなことを考えていると、声もなくいつしか涙が流れ落ちました。

玉杯は、くるくるまわりながら歌っていましたが、黄娥の前でつと止まりますと、止めどなく流れていた黄娥の涙が玉杯をぬらしま







した。
　ところがですよ、あなたは、この玉杯がどうなったと思いますか？玉杯は地面に転げ落ちたのです。
　と、思ったら一瞬ぴかっと光が走り、その光が消えると同時に一人の若者が飛び出て来ました。黒い服を着てカーキ色の帽子をかぶり、顔立ちのととのった立派な姿です。
　あっけにとられ見ている黄娥を、若者はやさしく見つめています。黄娥は尋ねました。
「あなたは誰ですか」
「あなたは私を誰だと思いますか。あなたは、今、誰のことを思っていましたか」
「あなたは歌の上手な……」
「そうです。あなたはあの時、私を見て、とても醜いと思いましたね。今度はどうですか」
　黄娥は上から下まで若者を眺めて、涙のまだ残る目でにっこり笑いました。彼女は、テーブルの上をもう一度見ましたが、玉杯はありませんでした。そののち二人は夫婦となり仲良く暮らしました。

堡子　城壁で囲まれた町
尋宝人　宝物がないか探して買い歩く人
玉　玉石

―おわり―

◆著者略歴

西田嘉子……一九二〇年八月二十五日　中国遼寧省撫順に生まれる。大連聖徳小学校、大連神明高女卒。
　一九八六～八七年の間、大連外国語学院国際漢語培訓センターに留学。現在、満族に伝わる民話をこつこつと、翻訳中。東京都在住。

伊藤かおり……一九六五年十一月六日生まれ。イラストレーター。園田学園女子短大国文科卒。講談社フェーマススクールズを経て、神戸中華街春節祭テレカデザイン、朝日新聞、学研等の刊行物の挿絵や、東芝ＣＤのイラスト等の仕事を手がける。
　切り絵の手法を中心に自分の持ち味を活かして、いきの長い活動の出来る作家になりたいと思っている。兵庫県在住。

アルマジロ 第3号は4月7日発売です

アートディレクター　清水寛　　編集スタッフ　五十嵐治彦＋小林純子＋清水寛＋竹村俊子
マーク・デザイン　おおやちき　　＋長沢国雄＋山口明＋横山文

編集後記

❖新年に発売の号を、師走に校了にしています。毎日来る愛読者カードと、投稿作品に目を通す時間が至福のひと時です。上手下手ではなく、〝創るエネルギー〟は、私達を圧倒しています。誌面にエネルギーは伝わっていますか？　（竹）

❖6時東京発の〝ひかり〟に乗るはずでした。初めての取材出張。まるで遠足の前の晩のごとく、いそいそと仕度をし、翌朝4時に目覚める予定であったわけです。しかし、予定は未定。思わぬアクシデントが私を待ちうけておりました。世にも恐しい〝時計は電池切れだよ事件〟発生。5時45分の朝日が目にしみました。　（文）

❖いやー、だうも、もう大変なんすから…。なんたって投稿は来るわ、原稿は出来ないわ、地震は来るわ、雷は鳴るわ、火事にはなるわ、親父は来るわ、道には迷うわ、暖かいわ、寒いわ、マンガンはふりこむわ、サルは通るわで、この本が完成したのは、すべて印刷所のおかげです。　（五）

❖いやあまいりましたよ。応募作品が殺到し、編集部は作品選考にチマナコ。これもひとえに皆様読者の方々の意欲のかたまりと、必死で作品に目を通させていただきました。
　予想を上回る良質の作品が多数集まりましたので、本雑誌の使命とも言える、〈新人発掘〉にアルマジロ編集部は邁進いたします。　（ハネエ）

❖第2号は、年末進行のため、たいへん慌しい作業となりました。しかし、創刊号では混沌としていた編集部も、だいぶ連携がよくなり、内容も充実してきたように思います。アンケートはがきも多数いただき、いろいろと参考にさせていただきました。これからも、アルマジロならではの企画をいろいろと考えていこうと思っておりますので、御期待ください。　（寛）

❖幼い頃から内気だったぼくにとって、人と会うことがこんなにも楽しいなんて。アルマジロの著者の方々は、ぼくの元気の素なのです。と言いつつも、小林聡美さんに会えて舞いあがり、九月っちゃんにサインをもらって小踊りしてる私は誰……？　それは〝あるじろ探険隊〟最後のページでざるそばを食ってるやつです。　（沢）

❖〝すっごくすきなもの〟が、最近たくさん出現してきてとてもうれしい。直角石の化石、ユッスー・ンドゥールのうた、スズキコージさんの新作のマンダラの絵、満月の夜の月の光の影、おいしいうなぎも。視界を夢みごこちにくもらせてしまったりすることもあるけれど、すきという感情は強力なエネルギー源です。もちろんすききらいの対象は各個人それぞれいろいろ。でも、自分がすきなものを他人に向かって「いいものだよ」と言えるだけの健康さを、持ち続けていたいと思います。そうやって雑誌を作っていくことが、そりゃあもう幸せなことだと思います。　（J）

❖「じっちゃん、山の向こうには何があるだ？」
「山があるだ。」
「その山の向こうには何があるだ？」
「山があるだ。」
「そのまた向こうには何があるだ？」
「山があるだ。」
——世にお仕事の種は尽きまじ。（A）

☆「アルマジロ」へのご投稿、ご意見、お問い合せ先
〒101東京都千代田区神田神保町1-15内山ビル(株)ナート
アルマジロ編集部　Tel. 03(3295)6110
☆「アルマジロ」では随時作品の投稿を募集しています。詳しくは128ページをご覧ください。

★万一、落丁・乱丁などがありましたら、「アルマジロ編集部」へお送りください。おとりかえいたします。
★「アルマジロ」は、品切れになることがあります。あらかじめ書店にご予約ください。ご購入のお問い合せは「アルマジロ編集部」まで。電話03(3295)6110

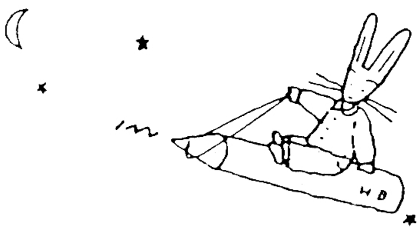
季刊
アルマジロ 第2号
第2巻第1号1991年1月7日発行
毎年4回1・4・7・10月発行

編集人　小林純子
発行人　竹村早雄
写植・版下　図書印刷株式会社
　有限会社双葉写植
印刷所　図書印刷株式会社

発行　株式会社 ナート
〒101東京都千代田区神田神保町1―15内山ビル
発売　丸善 株式会社
〒103東京都中央区日本橋3―9―2第二丸善ビル
定価　1000円(本体971円)

ERIKA'S FANTASY SCHOOL

「立原えりかの童話塾」の
くわしい資料をさしあげます。



▼下に必要事項をご記入のうえ至急ポストへ！

住所	〒□□□-□□ 都道府県 市郡(区) 区町村字 丁目 番地 号 アパート・マンション等、名称、部屋番号もお書き下さい (様方)		
氏名	フリガナ	電話	市外局番 (市内局番) 番号
		年齢	歳 1(男)・2(女)

F3	M937SA1107

✂(きりとり線)

✂（きりとり線）

郵便切手は、いりません。

料金受取人払

新宿北局承認

67

差出有効期間
平成４年10月
31日まで

（受取人）

東京都新宿北郵便局私書箱第2002号

（東京都新宿区百人町2-1-11）

日本文化スクール

「立原えりかの童話塾」

アルマジロ　S①係

案内資料無料進呈

立原えりかの童話塾

あなたの夢と個性をやさしく輝かせます。

ERIKA'S FANTASY SCHOOL

POST CARD

169-00

100

〝青い鳥〟は、あなたの中にいる。



わたしたちはみんな、幸福の青い鳥をもっています。
でも、たいていの人は、もっていることに気づきません。
空想のつばさを大きくひろげて、もうひとつの国を見つめるとき、
青い鳥は生き生きとうたいます。
あなたのもっている青い鳥を見つけるのが、童話を書くこと。
何かをゆめみているのなら、だれかを愛しているのなら、
どうかはばたいて、うたってください。



立原えりか

初めての本格的童話創作通信講座

童話作家・立原えりかさんが、素敵な童話づくりの秘けつを体験的に手ほどきしてくれる、我が国はじめての本格的童話創作講座が、今、大好評をよんでいます。固苦しい理屈はヌキにしてのゲーム感覚レッスンで、初めての人もやさしく創作のテクニックを身につけることができます。絵本風の楽しいテキスト、イメージトレーニング用のテープやイラストなど、教材にもユニークな工夫がいっぱい。まずは詳しい案内書をお取り寄せください。

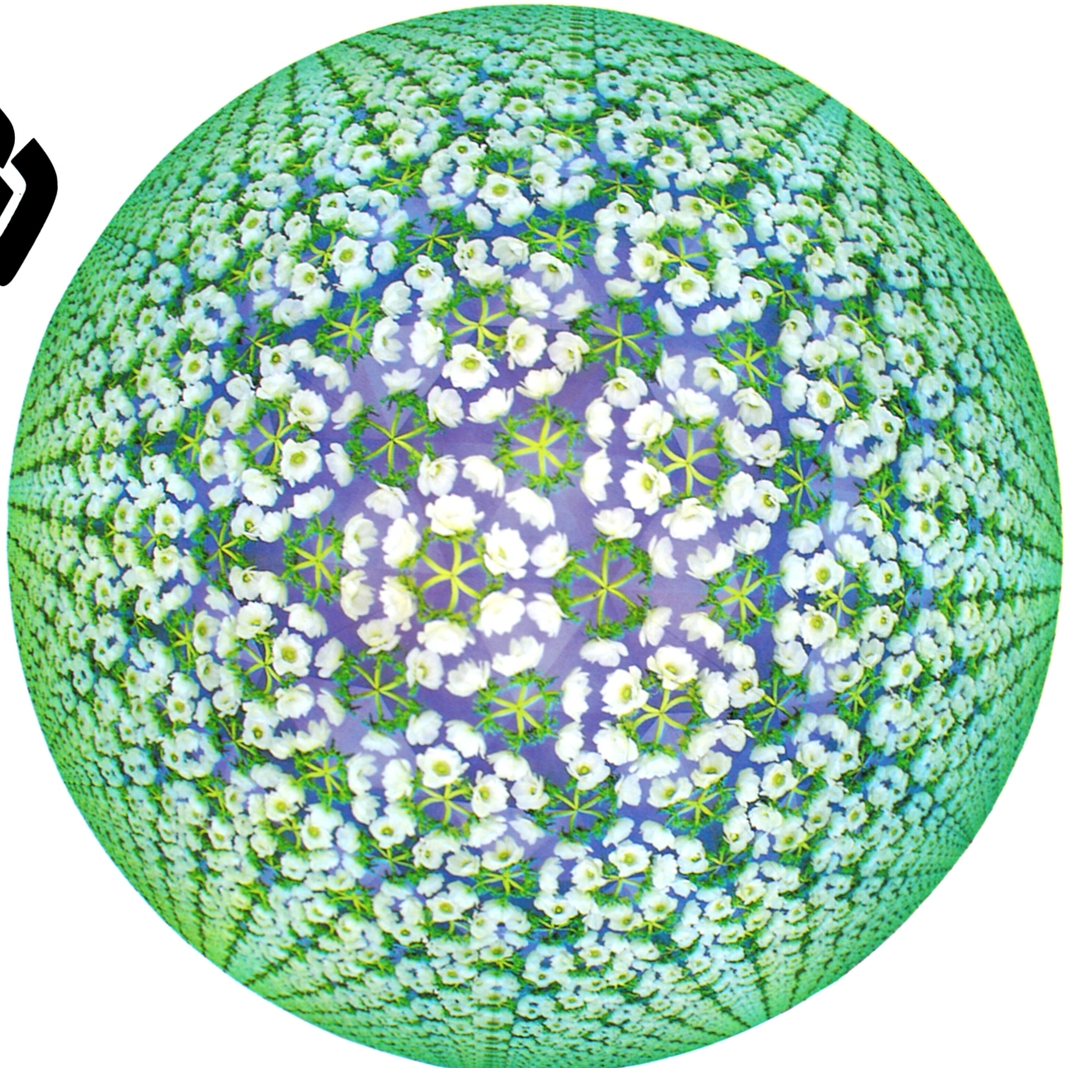
ERIKA'S FANTASY SCHOOL

資料を無料でさしあげます。
とじ込みのハガキか電話でお申し込みください。
☎03(3209)3422

お問合せ

日本文化スクール　東京都新宿区百人町2-1-11
☎03(3209)3422

地球を診る。

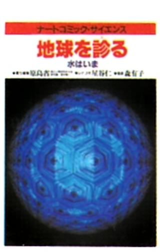


「地球のことをもっと知りたい」
「地球の痛みを分かちたい」そんな気持ちを受けとめた本をつくりました。
理屈で理解するよりも、感じとってほしい、そんな気持ちがこもっています。
コミックは、わたし達が選んだ豊かな表現形式です。「地球にやさしく」なるために、
たくさんのあなた達にぜひ読んでもらいたい3冊です。

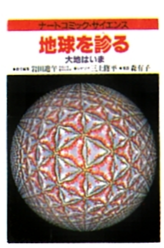
図とコミックスで
地球環境汚染を知る……。



第１巻
地球を診る
ー大気はいまー
定価1236円



第２巻
地球を診る
ー水はいまー
定価1200円



第３巻
地球を診る
ー大地はいまー
近刊予定

発行　株式会社ナート
〒101 東京都千代田区神田神保町1-15内山ビル
編集部　03(3295)6110(代)
発売　丸善株式会社
〒103 東京都中央区日本橋3-9-2 第二丸善ビル
営業部　03(3272)0391(代)

印刷　図書印刷株式会社

アルマジロ 1月冬2号 第2巻第1号 平成3年1月7日発行(季刊)
発行 株式会社ナート 〒101 東京都千代田区神田神保町1―15内山ビル 電話 東京〇三(三二九五)六一一〇(編集部) 発行人 竹村早雄
発売 丸善株式会社 〒103 東京都中央区日本橋3―9―2第2丸善ビル 電話 東京〇三(三二七二)〇三九一(営業部) 編集人 小林純子

雑誌 11565- 1

VOL2—NO1 定価1000円(本体971円)